THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

第廿九年第十三號　第三百二十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

近代文豪評傳

第二篇出來

ツルゲーニエフ

昇曙夢氏新著（忽ち再版）

△歐洲近代の思想を論じ、文學を談ずる時、何人も必ず口にするはツルゲーニエフの名なり。

△彼の文學は近代思想の基調に坐し、光明を熱愛し醜陋に憤激せる彼の生涯は、數奇變轉、深刻純潔、それ自身直ちに近代文明の矛盾を呪ふ反抗の雄叫びなりき。

△曙夢氏が長き研鑽玆に凝つてその全傳を玉成す。研鑽よく其靈に入り肉に徹し、敬虔の文と相俟つて紙上共鳴の諧音高し。普く江湖に薦めて憧憬と驚異の絶叫を促がす。

第一篇

ベルグソン

中澤臨川氏著

大哲人の大思想及び其生涯、廣汎なるベルグソン哲學の全體系を闡明して餘蘊なし。

定價各壹圓

郵税各冊金八錢

装幀の清新また—
—藝林の珍たらん

近代文豪評傳續刊豫告

△イブセン……中村春雨
△ジエームス……田中王堂
△ゴールキイ……相馬御風
△メーテルリンク……島村抱月
△オイツケン……安倍能成
△トルストイ……阿部次郎
△ハウプトマン……小山內薫
△ニイチエ……小宮豐隆
△ドストエフスキイ……森田草平
△モオパツサン……永井荷風 後藤末雄

實業之日本社出版部

東京京橋南紺屋町・振替東京三二六番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

▲實業之世界社編輯局長 青柳有美先生著

新刊

有美式

四六版五百頁
上製美本
定價九拾錢
郵稅六錢

非凡の直覺と異常の獨創—とに滿つる著者の文一百三十一篇を收む。著者卷頭に自讃して曰く——青柳有美とは何者耶、學位令にも無い『例の』といふ難有い稱號を世間樣から頂戴した妙な男である。——朝から晩まで女と色慾とにのみ沒頭し、眼中他に天地あるを知らざる色魔の如くに見せかけ乍ら、其實存外に志操が堅固で百般の學術に深い興味を持ち研究心に富んだ處のあるのが、是れ青柳有美である。——今の物識り顏する博士、學士たちが事珍らしげに唱道する處は、青柳有美が十年も十五年も前に既に〱唱へた處である。青柳有美が非常識の男であるかの如くに誤解せらるるのは、餘りに先見の明に富んで其常識が餘りに進歩してるからである。『有美式』とは最新の科學を基礎とした最も進歩せる常識判斷に對する別稱である。——斯の一書は處世法を說く事極めて詳しい。然し平凡な有り觸れた黴の生へた處世法ぢやア無い。非常識の常識を基礎とした突飛奇拔のやうに見えて、其實天理人理に合致した處世法である。人生觀、社會觀、宇宙觀をも網羅してあるが、有り觸れた人生觀、社會觀、宇宙觀とは全然其選を異にする。最近の科學に基礎を置いた先人未發の智見である。『有美式』は今の時勢よりも十年も十五年も進歩した思想を以て處世法を說き、人生と社會と宇宙とを見んとするものである——。

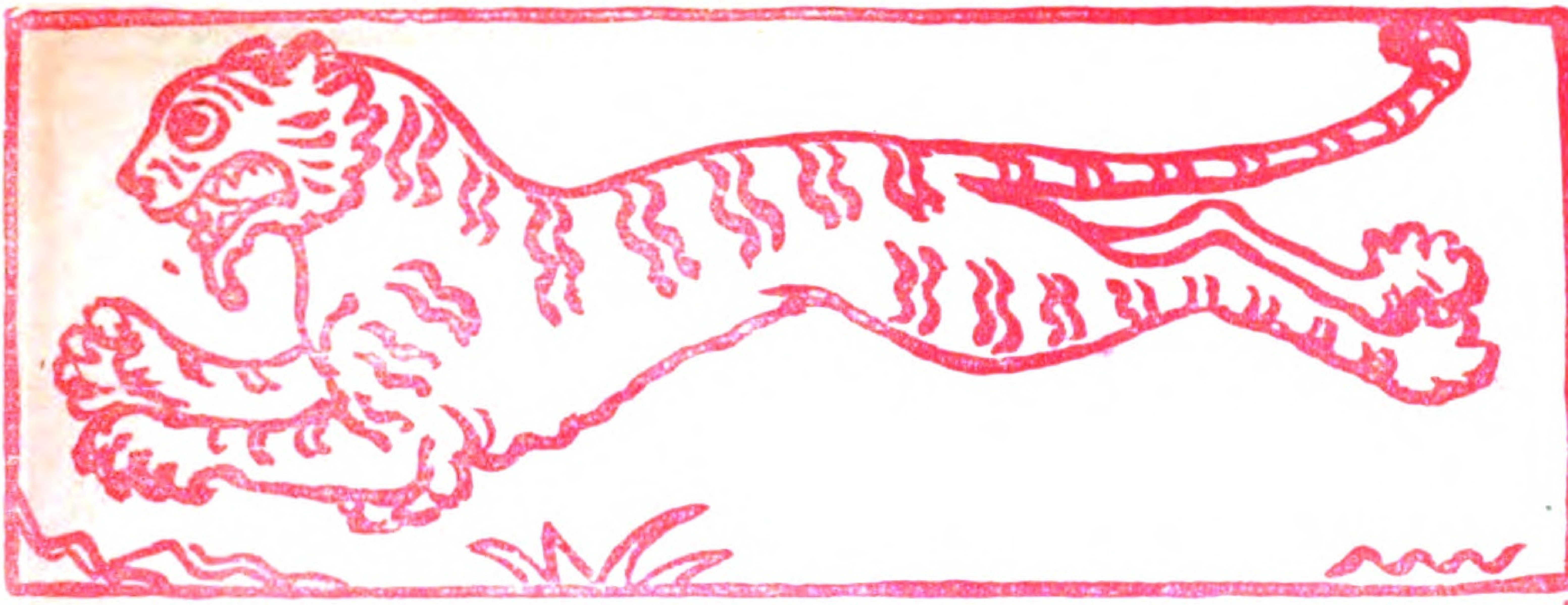
▲最新知識叢書第一篇

物質非不滅論

ルボン著
大杉榮譯

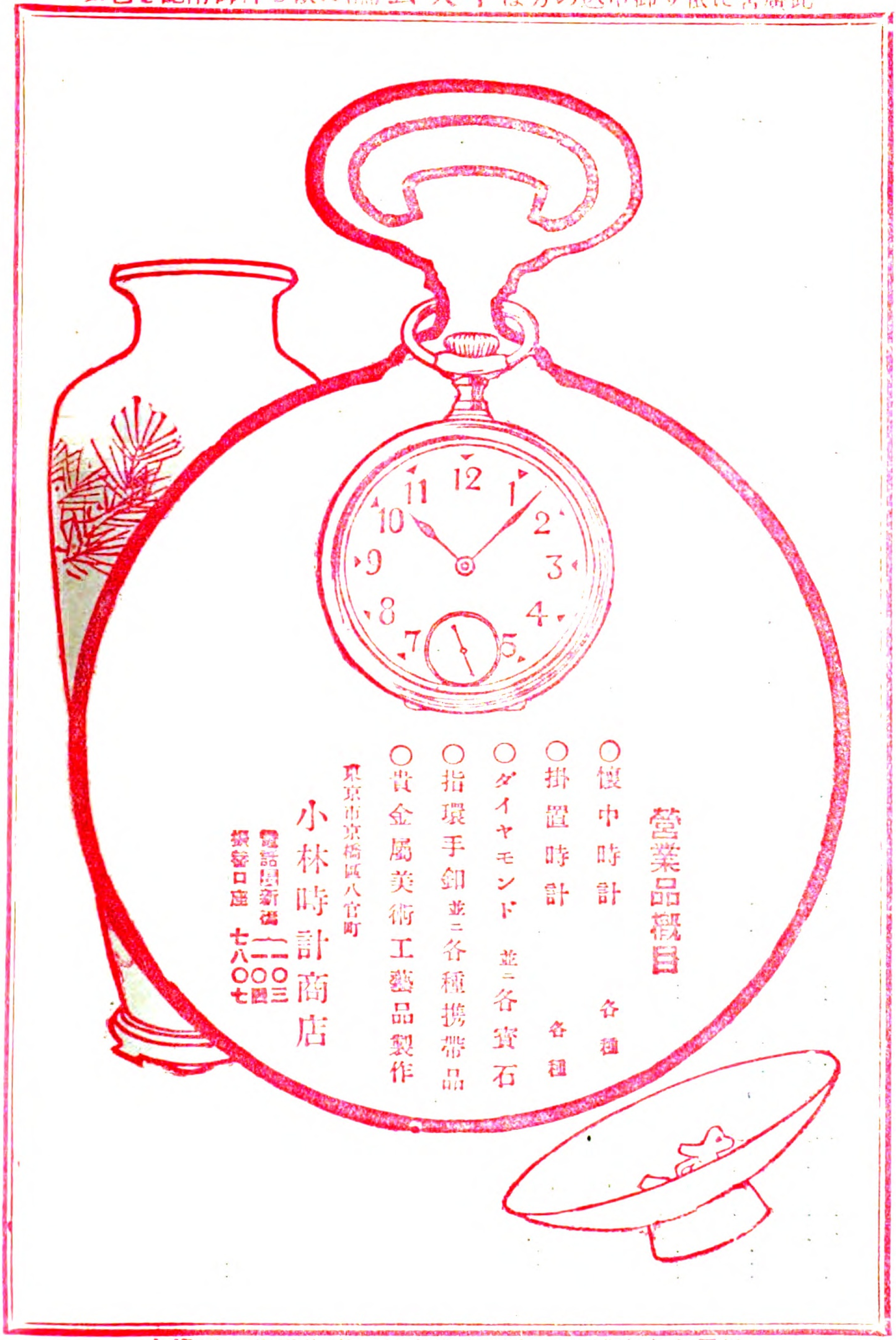
新案袖珍本
定價二十錢
郵稅金二錢

◀發行所 東京市麴町區有樂町 振替口座三四三三番 實業之世界社◀



中央公論第廿九年十二月號目次




營業品概目
○懐中時計 各種
○掛置時計 各種
○ダイヤモンド 並ニ各寶石
○指環手釦 並ニ各種携帯品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋 一一〇三 一一〇四
振替口座 七八〇〇七

ARTHUR HACKER, R. A.



The Little Mother

中央公論



十二月號
第二十九年第十三號
第三百四十二號

世界戰局の前途を論ず

(一) 青島の陷落

歐洲大戰爭の進展は遲々として牛歩的なり、人をして轉々望洋の歎なきを得ざらしむるに際し、我陸海の征討軍が能く英の友軍と協力して速に青島陷落の功を奏したるは、獨り帝國上下の歡喜惜かざる所なる耳ならず亦た世界の驚歎止まざる所なり、然れども吾人は青島陷落に由り帝國武勳の赫々たるを歡喜するの外、此擧により東洋平和の最大禍因たる獨逸の戰略的割據を掃蕩し得たるを大に祝するものなり。抑も獨逸が二宣敎師の橫死を强ゐて口實となし突如として膠洲灣を占領してより以來實に十有七年、其租借地の經營を初めとして山東省内の鐵道、鑛山等の爲め投資したる公私の資本は優に二億圓に

迹せんとし、其經濟的勢力は獨り山東省を壓する耳ならず、既に計畫中にありし濟南順德線、高密韓莊線及び兗州道口線の竣工を待ち滔々として河南北隷山西に漲らんとして、北支那の大官巨商は戰々兢々獨人の怒に觸んことを恐れ汲々乎として偏に其意を迎合するに努力せり、而して彼が保護に依賴するものに對しては恩遇至らざるなく、舊淸朝の皇族遺臣等多く生命財產を擧げて青島なる獨逸保護の下に置ける一事に於ても之を見るを得べきなり、獨逸は一方此等の不幸なる人々を十分に保護して之に滿足を與ふる耳ならず、他方袁總統に告げて曰く淸朝の皇族遺臣を日本の保護下に置くが如きは絕大の危險なり、須らく之を北京に留むべく、然らずんば青島に置くべし、獨逸は誓つて彼等を監視し北京政府の禍因たらしめざるべしと、斯くて民國政府も喜び、淸朝殘黨も喜び、獨り帝國の支那に對する好意は事毎に無視され誤解されたり、其光景宛も獨逸の土耳古に對する多年の畫策功を奏し英國の勢力を一掃して君須丹丁堡を以て伯林の出張所と化せしが如く、北京も亦事毎に伯林の頤使に服するの狀態を免れざりしなり、獨帝が西方亞細亞に於て土耳其の死命を制し得たる如く、東方亞細亞に於ても能く支那共和國の死命を制するの日は即ち彼れが世界政策の基礎成立の時なり、而して其基礎既でに殆んと成立するに際し我陸海軍の策戰宜しきを得て一擧に其根蔕を覆へすを得たるは天の命未だ全く我隣邦の上に盡きざるを示すものに非らずや

　支那保全は獨逸を除く外、列國の悉く中心より贊同する所にして、是れ實に帝國多年の對支國是なり、支那に於ける貿易の自由、實業の經營等に付ては列國は悉く機會均等の下に立つべく、歐米の資金が支

那富源の開發に向つて續々注入されんことは帝國の大に歡迎する所なり、但だ歐米列强中の或者が支那分割の野心を抱き事を極東に構へんとするに至りては帝國の到底寛容し能はざる所にして、吾人は一日も速かに支那共和制の基礎益鞏固となり其獨立自衛の力能く四圍蠶食の勢を防禦するに足るまでに達せんことを希望するものなり、而して支那に代り獨逸を膺懲するは帝國の本懷に非ざるも、支那が無力にして自衛に任ぜざる耳ならず、却て獨逸の恩威に壓せられ、甘んじて其頤使に服するの狀あるを觀るに於ては帝國たるもの東洋平和の爲め一臂の勞を惜むべきに非ざるなり、青島陷落以後北支那の人情も殆んと一變せんとし、漸く我公明正大の態度を理解せんとするに至れるは當然のことながら、吾人は彼等の見解の尙一層徹底するに至らんとを希望せざるを得ず、青島處分に關しては前號吾人が評論したるが如く、之を大義名分に照らして論じ、國是大本の上より觀、更に日支關係の利害上より打算するも、或條件及び保證の下に之を支那に返還するの外取るべきの道ある可らず、青島を還附する以上は山東鐵道に關して獨逸の租借利權を全然繼承せんとするは頗る不徹底の議論にして是亦た或條件の下に支那に還附すべきこと論を待たず、斯くて支那に對して帝國が毫も領土的野心なきことを明にするを得るに至らば、日支兩國の關係は必ずや從來に比し一層の親密を加ふるに至るべし、此際我當路の有司能く大局に着眼して機宜を謬らず大義を持して毫も異變なからんことを吾人は吳々も希望せずんばあらず、

(二) 戰局大觀

轉じて歐洲戰局の發展を觀るに前段云へる如く實に遲々として牛歩的なり、然れども戰局は頗る活潑にして聯合軍側に取りて多少の有利なる進展ありしは否む可らず、佛獨方面に於ては獨軍は依然として佛國境内に布陣するも之を前月に比すれば更に壓迫せられて國境線に退却し、フランドル方面に於ては獨軍ダンカーク占領を目的として試みし約一箇月に亘れる必死の大突破運動も竟に全然失敗に歸し、其破損の多大なる幾回か各軍を整理更新せざれば亦戰線に立つ能はざるに至りしもの丶如し、同時に英白佛の聯合軍は漸く陣地を白國内に進め、ニウポールよりイープル河の線を收め、オステンドを奪回する必ずしも遠からざるに似たり、然れども獨逸側に於ては容易に海峽制權の目的を抛擲せず陸上よりダンカーク占領を企て成らざる以上は巨砲をオステンド附近の海濱に備へて、英國軍艦を脅かし又は飛行船を利用して大に倫敦の人心を威嚇せんと試むべし、然れども軍隊と軍資金の殆んど無盡藏なるの一事は英國の最も自負する所、獨帝の傲岸不屈なる萬計を案出して最後まで戰ふべく、其威脅妙計時に意外の奇勝を博することあらんも遂に最後には屈伏せざるを得ざるべきなり、試みに現在戰線に立つ處の獨兵を以て二百五十萬人（佛白方面百五十萬人、露國方面一百萬人）を算すとせば、此外後方勤務に在るもの六百萬人、即ち戰線に立つもの丶二倍、を要すとせば既に九百萬人内外の兵は動員せられたる割合にして、獨逸が如何に人口に富むとは云へ更に今日以上の精兵を戰線に出すの餘裕とては餘り多からざるべきか、寧ろ今後豫期すべき多大の損失を補充するを得て現在の兵數を戰線に立たしむるを得ば是れ最善の努力を盡したるものと云はざるべからず、之に反し英國に於ては目下百五十萬人の義勇軍訓練中に屬

し、戰地に新兵を供給するの餘力に於ては英國は遙に獨逸に優れり。更に英獨の財力を比較せば最も驚くべきものあり、獨逸は一九一一年の摩洛哥事件に於ける財界の恐慌に懲りし爲めか、今次の開戰に際しては斷然、兌換制度を停止し盛んに不換紙幣を濫發し、其時價を强制して一時の急を救ふの窮策に出でしが、特に注意すべきは物件抵當に對する紙幣發行の一事にして、政府は特別の金融機關を設け株券證書に限らず如何なる物件にても自ら腐敗破損せざるものは之を抵當として貸金證書を發行し之を事實上紙幣同樣に通用せしめ居れり、斯の如き財政手段は獨逸が豫期せし如く速に大勝利を博して終局するを得ば何とか善後彌縫の道もあるべきも、其戰敗を以て結局する場合に於ては殆んど收集す可らざる大破綻を見るべきは智者を待たずして明かなり、之に反し英國の財政狀態は如何、各交戰國中にて、我邦は別として、兌換制度を維持し得たるもの唯だ英國あるのみ、而して其兌換準備額の如き、宣戰前に於て三千萬磅なりしが、開戰と共に一時は二千萬磅に減少せしに關はらず速かに回復して三千萬磅を超越し最近に在りては既に七千萬磅(我七億圓)の巨額に達せり、此れ英國が世界の各方面に投資せるものを盛んに回收せし結果にして、現に其準備金の一部は加奈太オッタワ市に他の一部は南阿トランスヴァールに保管し居れり、以て如何に其財力の豐富なるかを想ふべきなり。更にまた經濟上に付て兩國を比較せば、獨逸は假令食糧品の輸入杜絕するも一箇年を支ふるの餘裕ありとするも、製造業の大部分は原料品の輸入杜絕と製造品輸出の途なきとに由り全然廢業の狀態にあり、且つ多年非常の苦辛と努力を以て開拓し得たる海外の市場は多くは他の競爭國に奪はれんとするを以て、形式こそ異なれ工業の荒廢に付て

は獨逸は第二の白耳義となれりと言ふも不可なし、之に反し英國は其世界的市場に對し殆んと戰爭の影響を受けず其商船は地球上到る處に橫行し(獨の逃亡艦より受けたる多少の損害を別として)其製造業は獨逸の競爭を免れて却て大に利する處あるべし、然れば兵力、財力及び經濟力孰れの方面に付て見るも戰局の延長するに從ひ英國の利すること多きと同一の割合に於て獨逸は益々困憊せざるを得ざるべし、即ち英佛白聯合軍と獨逸軍の對戰に於て最後の優勝が必ず聯合軍に歸すべしと云ふ見込の根據は將來に向つて有する英獨實力の著るしき優劣に在ることを知らざるべからず、

轉じて露國方面の戰況を觀れば近來露軍は中央部たるポーランドに於て全然獨軍を國境外に驅逐し更にポーセン方面に進出してトルンに迫り、ガリシヤに於ては墺軍を中斷して其一部をカルパシヤン脈に壓到しクラコウを包圍せんとし、東普魯西方面に於ては東邊ウイルバーレンより獨軍を擊退しつゝ中部ゾルダウより突進して更に其背後を斷たんとするものに似たり、初め露國は獨逸が主力を佛白方面に傾倒するの虛に乘じ乍ら東普魯西の一半を略しガリシヤより墺軍を掃蕩し將にクラカウを包圍せんとするに至りしが、獨の大軍西邊より來援せしが爲め先つ東普魯西に破れて國內に退却しガリシア方面亦た利あらず、殊にポーランド方面に於ては獨の大軍に突出されて一旦はワルシヤウの陷落をさへ豫想せらるる程なりしと雖も、爾來露軍は多大の努力を以て優勢を挽回し現在の光景を見るに至れり、想ふに是れ露軍の兵力遂に豫定の額に達し遙かに超越し悠然其作戰を實行するを得るに至れるに由らずんばあらず、若しも東方の戰線に獨逸は一百萬人を擁し墺尙ほ敗殘の七十萬人ありとせば此一百七十萬人に對し

露國は二百五十萬の兵力を以て攻勢に立てりと見るを至當となさん、而して今後動員の益々完成するに從ひ更に五十萬人を加ふるは容易のことなるべく、此優勢を利して一方東普を略しトルンを陷れ、他の一方にはクラカウを拔きポウセンを屠り、一直伯林を指して猛進せば獨逸人心の恐慌蓋し想像意外のものあるべし、然れども獨逸輸送機關の完美せる東方危機に迫れば西方より援軍を之に移し、西方乘すべきの機會あらば東方より一部の兵を之に送ることあるべきを以て、猥りに普魯西方面を露軍の自由に放任するが如きことあるべからず、但し此兵力轉換たる一種の彌縫策にして偶々奇功を奏することなきに非ざるも、最終の勝を制する能はざるや論を待たず、即ち一時の奇計としては頗ろ妙ならんも永久常用の作戰とせば却て敵の乘ずる所となり、徒らに奔命に疲れて、獨逸は次第に聯合軍の優勢に壓到せらるの外あるべからず、之に加ふに獨逸國內の經濟上の困窮と人心の離反とはまた獨帝に取り多大の苦痛なるべし、要するに戰局の前途は依然として望洋の感なきを得ざるも、前月の形勢に比し幾分有利の進展を示せるは聊か人意を強ふするものなきに非ず。

(三)　日本の歐洲出兵說

世間說を爲すものあり曰く歐洲戰局の形勢は聯合軍に有利ならざるに非ざるも、未だ獨逸の境內に進入し一要塞を陷れしを聞かず、露軍のガリシヤ攻略は以て獨軍の白國攻略と相殺すべく、今日の狀態を以て前途を想像すれば聯合軍が伯林に殺到して城下の盟を爲すと云ふが如きは容易に望むべからず、寧

ろ大戰爭は双方勝負なしの引分けに終り、佛國は勞して得る所なく、英露は多少得る所あり、墺は多少の損失を見るも、獨逸は歐洲の領土に多く損失を見ずして平和克復に至るを見るべしと、前途の事素より想像に屬し、何人も透見すべからず、然れども今次開戰の由來を考へ戰局の現狀を觀て又た事實上聯合軍の盟主たる大英國の國情を察すれば、吾人は戰局の永びくと共に獨逸皇帝の屈服に終るより外に途なきを思ふ、抑も開戰の由來は吾人が本誌十月號に評論したるが如く、列國が獨逸の世界政策に反抗して奮起したるものなるが故に其目的を達せんには最後の絕對勝利を得るまで戰はざる可らず、而して刻下の戰局を觀れば聯合軍側の進展は牛步的にして遲々たりと雖も進展には相違なく、獨逸の兵力財力は日に縮迫するの一方にあれども、英露の如きは實力の餘裕尙ほ大に綽々たるものあり、今後露軍更に五十萬の精銳を加へ英佛方面また新銳七十萬人を加ふと假定せば流石の獨逸皇帝も遂に勢窮するに至ることなきを得んや、而して十一月八日倫敦ギルトホールに於ける首相アスクイス氏の演說に由るときは英國の決心牢乎として動すべからざるものあるは毫も疑ふべからず、曰く白耳義が十二分に其犧牲を恢復し、佛國が威迫に對し十分に安固となり、普魯西の武斷的覇權が遂に破壞せらるゝまでは吾人は劍を收めざるべし、此の大事業は大國民の爲すに相應しく而して之を成就せんが爲めには各人は其爲すべき所のものを爲し其爲し能ふ所のものを爲すを要すと。

日本出兵說の歐洲に起りしは一時戰局を悲觀するの結果なるに相違なきも、亦た列國が姑息の媾和を希望せず是非とも獨帝の世界政策を根底より覆さんとする決心の如何に鞏固なるかを示すに足れり、何

となれば聯合軍にして最後の勝を制する能はざるを自白するは彼等の恥辱にして、黄色人種の日本兵を遠く極東より聘して其聲援に依らんとするのは一種の謙抑に相違なし、然れども此恥辱謙抑をさへ忍ばんとするは以て其獨逸を破碎せんとする執念の强さを見るべければなり、抑も日本出兵説の首唱者は佛國の前外首ピション氏にして、露國ノヴオウレミヤ紙之に和し、最近コンテンポレリ雜誌にディロン氏之を論し又たフォトナイトリ雜誌に注意すべき匿名寄書家之を奬誘し、倫敦タイムス其他の諸新聞亦之に唱和せしものゝ如し、昨今聯合軍の形勢漸く有利なるに顧りみ、吾人は日本出兵説の實際問題となるなきを信ずと雖も、萬一にも形勢大に聯合軍に非なるにも至らば或は我政府は援兵出動の懇請に接することと必無なりと云ふべからず。然れども萬一斯の提議ありとするも輕々之に應諾するが如きは最も考慮を要す。我日本の三十萬乃至五十萬の精鋭が列强の懇請に依り歐洲の中原に出動すと云ふが如きは實に破天荒の出來事にして、我派遣軍が實際上列國の救濟者たる位地を占むべきは一種の名譽にして痛快事たらずとせず。然れども痛快事は必ずしも當然爲すべきことに非ず又た毎に國家の利害と相伴ふものにあらざるなり、素より聯合軍にして最終の勝を制する能はず一部人士の想像する如く戰局引分に終ることもあらんか、我日本は近き將來に於て獨逸の復讎に備ふるの必要あるべく迷惑至極のことなれども、此一事は未だ以て出兵の理由と爲すに足らず、出兵に由り受くべき生命財力の損失に對し利害得喪の比較果して如何、又た獨逸の武斷主義を撲滅するは世界の平和に資する所ありと云はんも、此れ必ずしも出兵の理由と爲すに足らず、昔者獨逸に於ける新舊兩教の爭亂に際し、瑞典王ゴスターウス・アドルホス

は新教一派の希望を納れ、數萬の精兵を帥ゐて波羅的海を渡り歐洲の中原に出動せり、王の高貴なる人格と絕倫なる材幹とは當初能く義軍の名を辱しむるに至らざるを得たりと雖も王戰沒し後戰亂三十年の久しきに亙り、獨逸人民に無限の苦痛損失を與へし耳ならず瑞典の財力を浪費し人口を減少し、以て國家永久の災厄を殘せり、之と我邦の歐洲出兵說とは自ら性質と事情を異にするが故に比較して評論すべからずと雖も義俠の美名の下に遠征を企つることの危險なる以て察すべし、若しも强ゐて出兵の理由を求めば吾人に一說あり、他なし英國其他の聯合諸國をして其領土及び屬領に於て一切我邦人に對する差別的待遇を撤廢せしむることにして、若しも加奈陀、濠洲、南阿等に於て各相當の政治機關を通して日本人種優遇の保證を與ふることあらんには、是れ實に世界人道の一大進步にして、我日本人たるもの亦た之に報ゆるに一大犧牲を以てするも可ならんと思ふ、何となれば人種問題は將來の最難問題にして、若しも今日の機會に之を解決するを得べくんは後世の爲め一大危害を除くを得ればなり、然れども加奈太濠洲等に於て斯の如き保證を爲すの至難事たるべき耳ならず、歐洲戰爭は今後益々我聯合軍に有利にして日本出兵說も自ら立消となるべし、吾人は切に其一時の興味ある問題として止まんことを希望す。

（四）土耳古開戰の影響

甚だしいかな獨逸皇帝の世界を咒ふや、既でに其本國を初め同盟の墺洪國をして國家破滅に瀕せしめ、今や更に土耳古を驅つて無謀の開戰を敢てし老朽帝國亡滅の時期を早からしむ。抑も獨帝は極東に

於ける膠州灣占領と相前後して、亞細亞土耳古の經營に着手し横貫鐵道の策を定めて其竣工を促進せり、巴爾幹戰爭に於ける土耳古軍の連戰連敗は必ず君府に於て獨逸勢力の失墜を見るべく思はれしも、案外にも獨逸は多數の將校を派遣し土國陸軍の實權を掌握し更にゲーベン、ブレスラウの國籍移轉と共に海軍の實權をも掌握せり、此二艦の英佛艦隊の監視を脫してダルダネールに遁竄するや頗る窮せるが如くなるも、其實は宛も是れ駱駝が人の哀を乞ふて頭首を天幕内に入れしが如し、軈て主人に代り自ら土國海軍を領有するの前提なりしなり。加ふるに獨逸は曩に巴爾幹諸國の中立を突破して數百の軍人と數十門の大砲を君府に輸送し、其後更に多大の軍費をさへ供給したれば、土耳古政府は全然行動の自由を失し、宛も日清戰爭の以前舊韓國が事毎に支那の指揮命令の下に立ちしと頗る相似たり、其の初め遲疑して開戰を敢てせざるが如きの觀ありしも是れ只だ形勢を觀望せしのみ素より初めより誠意中立を守らんとするに非ず、吾人は露英佛が遂に土國に宣戰を布告せしを觀て寧ろ其甚だ遲慢なるを怪しみ、諸國の忍辱耐久の程度に驚かざるを得ざるなり、宣戰已に布告せらる、露軍は直に高加索方面に進出し將にエルゼルムを根據としてアルメニヤ、メソポタミヤを徇ふべく、英國は一方埃及の防備に努むると共に波斯灣アラビヤの要害を占領すべく、佛國亦た機會を見てシリヤ方面に活動せん、此際阿弗肝の大軍が英領印度の西境を襲はんとすと報じ、獨帝は土耳古を通し埃及、アラビヤ、阿弗肝、印度に於ける回教徒を煽動して一大神聖戰爭を起さしめんとすと云ふものあり、是れ蓋し獨逸の想像を揣摩し得たりと云ふべきも、想像は必ずしも實行を意味せず、已にハイドラバットのニザムを初め印度の回教首長等は部下

の輕擧を儆戒し、埃及人亦た平生より土耳古の使役に服するを甘んぜず、殊に近年キチナー卿の施政宜しきを得てより殆んど不平怨嗟の聲を絕ちしを以て察すれば、土耳古の進入軍に對し蘇西運河を守るが如き決して難事に非ざるべし、阿弗肝の印度國境侵入說の如き恐らく虛說たらん、假令之ありとするも英軍が印度國境を守らんこと決して困難なりと云ふべからず、阿弗肝人慓悍ならずと云ふに非ずパサン人獰猛ならずと云ふにあらず、然れど彼等は大砲を有せず其武器は單に腰間の巨刀と肩に負ふ小銃とのみなるを以て到底機關砲其他巨砲を以て國境を守備する英印軍隊の敵に非ず、阿弗肝に大砲なきは英國の政策として其輸入を許可せざればなり、アラビヤ人に關しても亦同一の弱點あり、彼れベドウイン種族三百萬人と稱す、彼等にして神聖戰爭を起さば由々敷大事なるが如く思はるれども、之に對抗すべき埃及兵又は印度兵は近世式砲門の威力を以て能く敵の群衆を禽奔獸走せしむべきは察するに餘あり、此際獨り勃牙利と波斯の嚮背は一種の紛擾の懸念なきに非ず、勃は第二巴爾幹戰爭前後より頻りに獨墺に懷柔せられ、從て土廷と一種の密約を結べりと噂せらる、萬一にも中原の形勢終に獨墺に利あらんとするに於ては土國と力を協はせて塞維比の背後を衝くことあるべく、墺國に取り多大の援助たるべきも、獨墺の敗報頻々たる今日に際して勃牙利亦た容易に中立の態度を更めざるべし、波斯に至りては土耳古は開戰前頻りに交涉し、協力して露に當らんことを勸誘したるが如きも、目下テヘラン政府は全然露英指導の下に在りて、其露英に背く能はざるは宛も土廷が伯林の命に反する能はざるが如し、故に此方面に於ても亦た獨逸の計劃遂に水泡に歸したるは異しむに足らず。

然らば則ち土耳古は其周圍に一の與國をも有せず孤立して英露佛と對戰せんとするものにして、若し智あらば速に前過を陳謝して平和を乞ふべき筈なるも、獨逸の將校に威壓せらるゝ土廷は行動の自由なく、遂に獨逸の惡緣に繫がれて國家顚覆の隨伴者たるを免る可らず。而して戰後の問題を今日に論ずるは早きに失するの譏あらんも、大勢の歸する所露國はクルデスタン、アルメニヤ、メソポタミヤに其勢圏を擴大し、英國は南部波斯國境よりアラビヤ半島の北境を經てダマスカス、ベイルート線に由り地中海東岸に至るの以南の大地域に勢力を張り、以て多年の宿題たるカイロー＝カルカッタ鐵道の途を開き佛國は或は北部シリヤに根據を得べく、土耳古は歐洲より逐はれて小亞細亞に餘命を保ち、ダルタチール、ボスポロス海峽沿岸は列國共同保護の下に永久中立地帶に定めらるゝに至らん歟。斯くて獨逸の世界的經營は亞細亞大陸の東方に於ても西方に於ても同時に破滅に歸し亦た回復す可らざるに至るべし、獨り支那共和國は土耳古か獨逸に連累して覆滅せんとするに際して能く其國土を保つを得る耳ならず却て一時獨逸の毒牙に罹らんとせし災厄を脫出し青島をさへ還附されんとするは至大の幸福ならずや、同しく衰殘憫むべきの狀態にありながら一方は亡びんとし一方は遂に救はる、支那の當局必ずしも土耳古の當路よりも賢明なりと云ふべからず、支那が日本に於て有する如き同文同種の義俠なる良友を有せざるは土耳古の最大不幸に非ずや、吾人は我隣邦の人士が能く大局に着眼し親日の國是に基づき獨立自强の謀を成すに於て毫も遺算なからんことを勸告せずんばあらず。

印度出兵說

近來世間の一部に印度出兵說を唱ふるものあり。若しも印度方面に於て我同盟國たる英國の勢力を支持する爲めに我援軍を送るの必要ありとせば我國は決して出兵の勞を惜むものに非ず。吾人は我邦が同盟の誼を重んじ條約の規定を遵奉するに於て信義を益々宇內に發揚せんことを希望するものなり。既に狂暴なるエムデン其當然の報を得て亦た支那海印度洋を脅かすものなく、南米沿岸に出沒しつゝあるシヤンホルスト外四艦亦た日英聯合艦隊の追躡に遭ひ其擊沈せらるべき遠きに非ざるべし、即ち今後我數十の運送船の舳艫相銜んで印度方面に向ふことあるも何等の障碍あるべからず、水面一路平安無事に孟買港に上陸し其任務に就くを得べきや想像すべし。

且我兵の印度に行くは必ずしも他人の境に行くの思あらず、宛も支那に行くには孔子の鄕に行くの思ある如く、印度に行くは釋尊の國に行くを思ふ。其人民は支那に對する如く文字の共通なしと雖も風俗慣習の上幾多の類似あり、英國官民の歡迎は同盟國民の誠意を見るべく、印度人民の交際には親類緣者の懇情あるべし。

更に日印兩國の通商關係に付て之を觀るに、兩國間の貿易は近年長足の進步を爲し明治二十一年には輸出入合計僅かに一千六百三十六萬餘圓なりしが、同二十七年には三千二百二十二萬餘圓となり、同四十四年には進んで一億二千萬餘圓の多きに達せり、我對支那貿易の一億五千萬圓に比すれば未だ遙かに

及ばずと雖も、亦た是れ侮るべからざる巨額と云はざるべからず、但た斯の如き急激の進歩をなすも多く印度より輸入する綿花及米の增加に負ふ所多く、我邦より印度に輸出する物品に就ては年々歲々殆んど增加なく、其金額亦た僅に二千萬圓臺に止まるの一事は最も遺憾のことに屬す。我邦の印度出兵は必ず大に印度人民の我物貨に對する感興を惹起し輸出增加の一助ともなるべし。

斯の如く英國に對して同盟の義理を果たす上より見るも、日印經濟關係を密接する點より見るも、印度出兵に關しては何人も異議なき所なるべしと雖も、其果して必要あるべきや否やは自ら別問題なり、若しも英國が今日の場合印度方面に對し我出兵を希望する理由ありとせば要するに左の二箇の事情に因るものと假想するを得べし、一、阿弗肝人が大擧して西北國境に侵入せし場合、二、埃及方面防備の爲め多數の印度兵を國外に派遣したる場合、即ち土耳古の煽動に因り平生英國に釋然たらざる阿弗肝人は今を機會として印度侵入を計らんも知るべからずと雖も、吾人が前論中に云へる如く阿弗肝兵は巨砲、機關砲等を有せざれば到底西北印度の大平野に出で、印度兵と雌雄を決するの勇氣あるべからず、過日阿弗肝兵の印度侵入を獨逸側の外電に因り耳にせしことありしも其後更に續報なきを以て察すれば全然虛報なりしことと察するに難からず、次に埃及防備の爲め印度兵を多く派出したる場合を想像するに、印度の陸軍は英國兵土人兵を合して二十三萬五千人を算す、此内英國兵七萬六千人にして、此の分は必ず印度に留むるの方針なるが如くなれば既に歐洲に出陣中なるシイキ及グルカ兵五萬人の外、波斯灣、蘇西方面防備の爲め八萬人を派遣せりと假定するも、印度には尙ほ十餘萬人の遺るあり、印度國內の秩序を

保つに於て蓋し不足なかるべきなり、此際に於て印度國内に動亂を見るが如きこともあらば、自ら局面に異變を生ずべきも印度の回教徒は概して印度教徒より平生能く英政府に心服し居れるを以て容易に神聖戰爭に雷同せざるべく、若しも平素不平滿々たる一部の印度教徒にして爆發するが如きことあらんか、回教徒は必ず陸軍を助けて討伐に努力すべし、因て此際印度内亂の起るべき氣遣なしと思ふ、即ち何れの方面より觀察するも印度出兵の必要を生ずべき事情あるを知ること能はず、此れ印度出兵説を一箇の興味ある問題として論ずるに止め、其實行の必要なきを思ひ吾人は英國及び我邦自らの爲めに竊に祝するものなり。

學制統一の濫用

學制統一の名の下に區々に分立せる教育機關を文部省の管轄下に移し之を整理し其双互の關係を單簡明瞭ならしむるは主義に於て賛成すべきことなり。例せば舊工部大學を帝國大學に移し、札幌農學校を東北大學の一部として文部省の管轄に加へたるが如き其好例にして、此等の處分に對しては何人も異論なき處なり、然れども大凡物事には程度と云ふものあり、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し、統一を必要とすればとて總ての官立教育機關を悉く文部省の管轄に移すべしとせば殆んど其弊に堪ゆべからず、例せば陸海軍省に各兵學校あり、陸軍醫學校あり、遞信省には商船學校あり、宮内省に學習院あり此等も主

義として文部大臣の管轄に收めざるべからず、然れども吾人は大隈首相及び一木文相が此等各學校を文部省に移すべしと主張せるを聞かず、憶ふに此等の特種學校が各其特別の關係ある各省の下にあるは頗る適當なる耳ならず、傳染病研究所の內務省に屬し、水產講習所の農商務省に屬するも頗る妥當のことにして、或る意味に於て文部省の統一鐵網の外に立ち自由の發達を爲すは學問の進步又は普及の爲めに極めて必要のことなりと思ふ、大隈首相の如き多年民間にありて私立大學を起こし大に成功せる人なるが、其私立大學を必要とせしは蓋し文部省一流の劃一政策に反抗するの意味に由りしは疑ふ可らず、偶々政府部內に於て傳染病研究所、水產講習所の如き文部の劃線外に立つものあり、大隈伯は必ず其平生の主張に顧み大に之を保護すべき筈なるに、奇々怪々の手段方法の下に之を文部省に移管せり、吾人が奇々怪々と云ふは傳染病研究所を移さんとするに際し其事を內務次官又は衞生局長に謀らず、又た研究所と特別の關係ある北里所長に語らず隱秘の中に移管を決定し、水產講習所の移管に關しては其間問題の已に閣議に於て決定し居れるに關はらず首相は未だ決定せずと放言して憚らざりしが如き、吾人の甚だ理解に苦しむ所なり、吾人は北里博士を初め主なる所員全部の研究所を去り、又二百五十人の學生聯袂して水產講習所を去りしを毫も異とせず、却て學制統一の美名の下に專斷の非を遂げんとする老首相の心事を怪まざるを得ず。此二件は必ず來るべき帝國議會に於て一種紛議の因を作すべし。

敵國の戰時經濟及財政

神戸高等商業學校教授　津村秀松

一

今回の歐洲戰爭突發に際して、政治上及軍事上に於て最も敏捷なる行動に出てたるものは、敵ながらも、確に獨逸であつたと承認せねばなるまい。四十八時間に第一期の動員が濟んで、瞬く間に白耳義の國境を越えリエージュに迫つたなどは、正に迅雷耳を掩ふに暇あらざる的である。然し斯樣な迅速な行動は、獨り政治上又は軍事上のみでなかつた。財政上及び經濟上に於ても、亦然かるあるに驚く。何事も、平生から、用意なり、覺悟なり、設備なり、習練なりが、充分に行屆て居なければ、トテモ斯く一擧にあらゆる財政上及び經濟上の準備が出來るものでないと思はるゝ節々が數々あるのである。此內、戰前に於ける用意の一斑は、先月十六日來の大阪朝日新聞に「經濟上より觀たる獨逸の戰意及戰備」と題して、連載したから、今は此方を省き、專ら戰後に於ける獨逸の財政上及び經濟上の施設の大要を述べやう。

ト言つても、戰爭が始ると同時に、平生、獨逸から取つて居る一切の新聞も、雜誌も、一切七月末限りで、ハタと止つた。開戰後に於ける獨逸の經濟及び財政上の情報は全く之を英米の新聞雜誌に依らねばならぬところが、英米の新聞雜誌でも、例令ば、倫敦の「エコノミスト」や「タイムス」の伯林通信は、八月初旬に、通信員が同地を引き上げてからは、何等詳しい報道がない。ソコデ止を得ず、是等の新聞雜誌の最後の

伯林通信と、其後の零碎な報道を材料に、大要を述ぶることにする。何れ後日詳しい報道を得次第、增補訂正を試みることとしやう。

二

獨逸が露國に向て宣戰したのは、八月二日であつて英吉利から宣戰されたのは、八月四日の午後の十一時てあるが、其の八月四日に、獨逸は臨時議會を招集して、一擧に重要なる法律案だけでも、十七種といふものを、可決決定し、即日實施した。此内、先づ掲記せねばならぬのは、銀行條令及び貨幣條例の一部停止及び一部改正てある。

獨逸の中央銀行たる帝國銀行は、一九〇八年の銀行條例の改正て、保證準備發行額を、五億五千萬マルクに嵩めた。ソコデ五億五千萬マルクまでは、保證準備て、兌換券を發行し得るが、それ以上は、悉皆正貨準備を置かねばならぬし、又兌換券發行總額の三分の一以上に當る正貨準備を缺してはならぬといふ、二重の制限があつたのであるが、此正貨準備に關する二重の制限もろともに此際、全く撤廢されたのである。即ち帝國銀行は、今や何等の正貨準備なくとも、保證準備のみで、ドシ／＼兌換券を發行し得ることとなつた。然らば、保證準備發行額に就ての制限——五億五千萬マルク限りといふ制限——は如何に成行つたかといふと、此點に就ての報道は、明かでない。然し之もやはり銀行條例の一部改正で。制限外發行に對する五分稅上納の規定が撤廢されたとあるから、多分、戰時中、保證準備で無制限に兌換券を增發し得ることになつたものだと思はれる。

勿論、保證準備物に就ての制限は、撤廢されぬ。然し、是れまでは、三名以上又は特別の場合には、二名以上の有力な署名人ある手形又は小切手——此小切手の方は、一九〇八年の改正で追加——でなくてはならぬのであつたが、今度は此制限を擴張して、一名以上の有力なる署名人ある手形又は小切手と改つた上に、更に三箇月以内に支拂の政府發行の證券及び貸附金庫證券——此貸附金庫證券のことは、後に說明する——をも加へ得ることになつた。

然らば、正貨兌換の義務は、ドウなつたかといふと之に就ては、未だ充分確な報告がないが、帝國銀行の正貨準備の義務を、全然免除せること叙上の如くであるから、正貨兌換の義務も、當分免除若くば免除に近きものとなつたらしい。又紙幣兌換の義務は兎に角、補助貨引換の義務が、大に輕減されたのは確かである。即ち帝國銀行の伯林本店と、フランクフルト、ミユンヘン及びケニヒベルグの三支店とでは、二百マルク以上の銀貨、五十マルク以上の白銅貨及び銅貨の、無手數料金引換の義務を免除されたのである。

勿論、獨逸には、帝國銀行以外に、紙幣發行銀行がある。元は、之が三十二もあつたが、今ではダンく減じて、バイエルン銀行(一九一二年末發行高六千六百六十萬マルク餘)、ザクセン銀行(同四千九百九十二萬マルク餘)、ウヰテンベルグ銀行(同二千十四萬マルク餘)、バーデン銀行(同千八百二十五萬マルク餘)の四行に過ぎない。ソシテ此四行に對しても、今回の銀行條例の改正は、金貨兌換の義務を停止した。唯是等の銀行をして、其發行せる紙幣を、帝國銀行の紙幣と、兌換するの義務を負はしむるに止めた。之で結局、獨逸帝國内に於ける紙幣なるものは、時局と與に、總て兌換券でなくなつて、事實、不換券となつたものと見て、差支なからう。ソシテ以上掲記の改正事項の內、帝國銀行に對する正貨準備の制限撤廢の件と、四發行銀行に對する金貨兌換の義務停止の件との二つは、此改正條例實施の日からでなくて、七月三十一日といふ獨逸が戒嚴令を布いた日に遡つて、有效としたナドは理屈だけは獨逸で習て來ても、法の活用を知らぬ日本の法律家連の特に注目を値する要點であると思ふ。

三

以上掲記の臨機の處置で、獨逸は、一方に於て、豐富な保證準備により、盛に紙幣を發行し得る、ソシテそれで戰時內閣に於ける資金の需要に應じ得るのみならず、同時に他方に於て、巨額の正貨準備なりしものを、自由に、外國に對する支拂に轉用し得ることになつた。

一體、戰前、獨逸に於ける正貨在高なるものは、エコノミストの所報の如く、露佛に比して、非常に少額なものではないらしい。エコノミストは白耳義の「アンデパンダンス、ベルチ」や、佛蘭西の「タン」などの所報によつて、佛蘭西の正貨在高は、四十七億七千七百萬フラン即ち約一億八千九百七十六萬磅——其內、金貨一億六千十六萬磅——で、露西亞の正貨在高は、大藏大臣バークの所說によつて、帝國銀行に十七億ルブル、即ち約一億七千萬磅と、外に政府の所有五十萬磅と、合計約二億二千萬磅あるのに、獨逸の方は、發行銀行の手元に、金七千二十萬磅と、銀千六百七十六萬磅のある外に、豫て政府の手で蓄へ置ける金千二百萬磅と、銀六百萬磅の戰時準備金を合して、總計一億四百九十六萬磅に過ぎないから、獨逸の戰時財政の前途たる、甚だ心細きものであると述べて居るが（The Economist, Aug. 15. 1914. p. p. 316—317）事實、獨逸の正貨在高は、ソウ少くないやうである。

成程、獨逸帝國銀行を初め四發行銀行の正貨準備金と、政府の戰時準備金とだけを數へては、エコノミストの所報の如く、正貨二十一億マルク位の見當になるかも知れぬが、此外、獨逸には、民間に流通され、又は公私に貯藏されて居る正貨は、少くないと見えて、——勿論、之は何れの國にも、多少とも存する所であるが——戰爭前遙か前である一九〇九年末に、帝國銀行理事アルノルドが調査した所によると、當時、金貨在高二十七億五千萬マルク乃至二十八億五千萬マルクとある。又一九一〇年八月二十五日に、有名なるフランクフルト新聞の調査によると、それが二十八億マルク——ユリウス塔內の戰時準備金一億二千萬マルクを入れずに——とある。其後、一九一二年には、戰時準備金を增加したから、彼れ是れ、三十億マルク位に達して居つたであらうし、又此外に、元から、銀貨が三億マルク內外あつたし、尙ほ其上に、昨年から、本年にかけて、獨逸は猛烈に金貨吸收策を講じたから、爲に流入した高が、十億マルクにも達したといふ評判である。尤も此評判は少々割引を要するであらうが、そ

れにしても、戰前獨逸全國の正貨在高は、四十億マルク以上に達して居つたと思はれる。

それにしても、正貨保有高といふ點から見ては、佛蘭西銀行のみで一億八千六十六萬磅――其內、銀二千五百一萬磅――をも有する佛蘭西に比べて、獨逸は劣つて居る。露西亞に比べても、尙ほ幾分劣つて居るかも知れぬ。用意はあつても、戰局次第で、決して安心が出來ないと見えて、白耳義では、ブラッセルの八百萬磅、アントワープの二千萬磅を初めとして、今日までに、既に總計四千八百八十五萬二千磅、即ち約五億萬圓の正貨を强徵して居る。が然し、是れまでのところ、八月四日の議會で、第一回戰時公債五十億マルクの募集と、外に國庫から三億マルクの正貨支出――之は多分彼の戰時準備金の內からであらう――を可決決定したなどの意氣込を見ると、誠に素晴しい勢である。

四

尤も、此公債五十四億マルクは、未だ全部募集し得たのではない、近頃になつて、初て、此內、十億マルクだけは、五分利、發行價額九十七半、五箇年償還の國庫證券の發行と、同じく、五分利、發行價額九十七半で、一九二四年まで据置の公債を募集する旨を發表した。但し、此內、公債の方は、幾許募集するつもりであるか、其の募集金額の公示がない。多分、募集し得るだけ、募集するといふのであらう。此公債募集の今日までの結果に就ても、「タイムス」や、「エコノミスト」には、色々の風說を傳へ、批評を試みて居る。獨逸政府の所期の半分も、應募者がないとか、ソコデ貯金銀行などに應募を强制して居るとかいふ評判があるかと思ふと、又彼のクルップが、一手で、三千萬マルクの應募を申込んだといふやうな素晴しい勢だとの風說も傳はつて居る。一向、眞相が判明しないが、此際は、假令、外國で募集出來ないにしても、此位の公債募集で、行き悩む獨逸の財界とは、思はれない。

獨逸帝國としての戰時公債の募集は、只今までのところ、是れ丈けであるが、十月二十二日のルーター電報によると、同日、普魯亞議會では總計十五億マルクの臨時費支出として大藏省證券の發行を要求し、即時可決決定した。其の內四億マルクは、露軍侵入の爲め、東普魯亞地方の被れる損害の復舊費で、殘額は、時局の爲め增加せる失業者の救濟費及び食料供給費を支辨する爲めとある。之も早晩公債に切り換へらるゝことであらうが、シテ見ると、時局の爲め、獨逸國民の被むる負擔は、決して輕少でない。尙ほ今の調子で、戰爭が永引けば、此上、如何ほど負擔が增加するか、底知れぬ。ソコデ、我國の新聞などでは、專ら此點から、獨逸が降參するであらうと批評して居る。然し、萬事に注意深く何

事も科學的にやる獨逸從來の遣り口から考へても、是程の大戰爭を、自ら求めて開始したからには、開戰後三月や四月で、直ぐ財政的破產に陷る獨逸とは思はれぬ。ソレハ戰爭の經過次第にもよるが、今のところ、獨逸は、他の交戰國に比して、特に財政の困難著しいものとは、申されぬ。

尤も帝國銀行の紙幣發行額が、開戰と同時に、非常な膨脹であるのは驚く。同行の週報を見ると、七月二十三日には、十八億九千萬マルク餘であつたものが、三週間後なる八月十五日には、一躍、三十八億八千萬マルク餘に上つて居る。更に又十月七日には、四十六億四千五百萬マルクてふ大膨脹を示して居る。ソコデ獨逸の紙幣の價格が、昨今二割以上三割五分も下落して、和蘭では、獨逸紙幣は、二割引でも、通用しなくなつたといふ風說が、倫敦に傳はつて居る。之を聞いて、英吉利人などは、竊に快哉を叫んで居るといふ話だ。其眞僞は何れにしても、今のところ、獨逸は左迄金に困つては居るものでない。獨逸は未だ金に困らぬものと見る方が正當であらう。少くとも、英吉利の新聞や雜誌を通じて、日本て評判して居るほどに、獨逸はまだ金には苦しんて居ないものと見る方が正しいと思ふ。

五

金と與に、戰時、獨逸の重大問題となるのは、差し詰め、食物てある。國民並に軍隊の食糧問題てある。元と獨逸は純然たる農業國であつて、一八七〇年頃までは、英吉利あたりに盛に小麥などを輸出したものである。然るに獨逸統一後、殊に一八八〇年頃から、獨逸工業の勃興に連れて、農民は次第に田舍を後に、盛に都會に集中する勢となつた。ソコデ獨逸人口の內容が、茲三十年足らずの間に、激しい變動を見ること丶なつた。其大要を表示すると左の如くである。

職業	一八八二年	一八九五年	一九〇七年
農業	一九、二二五千人	一八、五〇一千人	一七、六八一千人
工業	一六、〇五八	二〇、二五三	二六、三八六
商業	四、五三一	五、九六六	八、二七八
其他	五、四〇六	七、〇四八	九、三七四

又之を百分率で示すと、次の如くてある。

職業	一八八二年	一八九五年	一九〇七年

農業	四二・五%	三五・八%	二八・六%
工業	三五・五	三九・一	四二・八
商業	一〇・〇	一一・五	一三・四
其他	一二・〇	一三・六	一五・二
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

食物を作る農民が、減少する一方で、食物を食ふのみである商工民其他が増す一方である。左なくとも、近年、獨逸の人口は、每年八九十萬人づゝの割合で增加して行くのであるから、此間、獨逸の農業は、決して退歩せず、又農作物も增加を示して居るが、それでも食物は漸次不足となつた。最近には、獨逸の國民の食料の約二割は、輸入に待つと稱せらるゝ程になつた。

　事情斯くの如くであるから、獨逸政府は、今回の戰爭に當つて、先づ第一に顧慮したのが、國民に對する食料供給の問題であつた。然し開戰當時、獨逸政府は全國に現在保有する食料の高を調査せしめたところ、向ふ一箇年を支ふるに足るものあるを確め得たとのことである。其後、更に精査すると、一箇年半を支ふることが出來るとの報道もあるが、此方は充分信用を措けぬ。何れにしても、本年、獨逸は、非常の豐作であるとのことであるから、普通の年ならば、殆んど輸入を仰がずと濟んだかも知れぬが、何分、戰局の如何によつては、如何やうの不足を告ぐるかも知れぬといふので、八月一日、緊急勅令で以て、此方に對する當面の處置を怠らなかつた。即ち先づ各種の食物——各種穀物、野菜、牧草、藁、家畜、肉類、牛乳、バター チーズ、卵、魚類、罐詰等——の輸出を全然禁止する一方に、各種食物に對する輸入税を撤廢し、又食物輸入に關し、從來關税法中に規定してあつた諸種の制限——例令ば、冷藏肉の輸入制限の如き——をも撤廢した。

六

　之と同時に、八月四日の臨時議會では、食物其他の農作物及び燈火薪炭等の日用品に就き、最高價格を定むる權、斯かる品物を、自家の生活に必要以上に貯へ又は之を賣惜むを抑制するの權、並に此他日常の小取

引を臨機調節するの權を、地方官憲に附與するの法律を制定した。其後、此法律に基て、各地に各種食物等の最高法定價格表を發表された。ソシテ其法定價格以上に賣り又は賣り惜む者、若くば紙幣にてこの代金支拂を拒む者には、即時營業停止を命じ、且つ其商品は悉く之を沒收して、後日之を政府の手に於て拂下ぐといふ恐しい達（たつし）が出た。

斯くまで嚴重な取締法が出ても、開戰後、通貨の大膨脹と、時局の大影響とによつて、一般に物價、殊に日用品の騰貴が、著しいやうである。が然し、獨逸では、未だ物資の供給に、不足を告ぐるといふ程ではないらしい。勿論、是迄、獨逸が、主として食物の供給を仰いだのは、露西亞、バルカン半島の諸國、それに海外では、米國、加奈陀、英領印度、濠洲、アルゼンチン等であつた。就中、主要食料たる小麥の供給は、左の如き割合で、是等諸國から、仰いで居つたのである。

供給國	一九一〇年	一九一一年	一九一二年
露西亞	一、五九〇、二三四	一、一八九、三二九	六三五、五二六
アルゼンチン	三三〇、四九六	五四六、一三二	五五四、八八八
北米合衆國	一八四、八五八	三四三、一二一	四五七、九五一
ルーマニア	二二二、三〇六	二八二、六七一	二九一、四一七
加奈陀	三二、七七四	一一五、八〇一	三三四、七四九
濠洲	一二九、〇〇〇	一一六、一八一	五九、六八八
英領印度	一一、五一〇	六八、三二八	七一、三四五
セルビア	一二、九九八	二一、二〇二	三七、一四五
總計	二、五三五、一三九	二、七〇一、四五〇	二、四八五、九三五

此内、露西亞、加奈陀、印度及び濠洲は、今や當面の敵國である。バルカン半島の諸國は、今や大抵大騷動で、他國に食物を供給し得る餘力は乏しい。英吉利海軍の爲めに、北海一帶を封鎖されて居る今日、米國を初め海外からの輸入は、之も先づ絶望である——近頃獨逸は、丁抹を通じて、米國を初め海外から食料等を輸入しつゝあるとの風説もあるが——斯様な次第であるから、戰爭が永引くほど、此方面の影響は著しくなる譯だが、只今のところ、專ら隣國から、不足を補はれて居るやうである。和蘭の方は、英吉利の抗議で、

近頃になつてから、獨逸に對する物資の供給を拒絶したといふが、ソレデモ、今の通り、バルチック海に於ける獨逸の海軍が、優勢で、確實に其海上權を制する間は、瑞典、那威、丁抹から、ドシ／＼食物の供給を仰ぎ得るやうである。

七

假日、戰が利あらずして、此方面からの融通が就かなくなつたとしても、主要食物たる小麥は、自國所要の七割を産する此國では、不足は三割内外に過ぎぬ。それ丈けは、毎年五百萬乃至二百萬ドッペルツエントナ位輸川する餘裕のある「ライ麥」を以て、補足することが出來るし、又それ丈けの不足は、一方に於て、過剩に産する馬鈴薯——平均年收穫五十萬噸——と砂糖とて、補充し得ない限りでもない。尙ほ又酒精及び麥酒の釀造を差し控へたら、平生よりも更に多量の馬鈴薯と大麥とを得ることが出來る。伯林の新聞「ロカル、アンツアイガー」の所報によると獨逸では、既に盛に、馬鈴薯を刻んで、乾して之を麥粉に混ぜて、麵包を造つて居る。其の工場だけでも、彼れ是れ、二百に達することである。成る可く、食物の貯蓄を裕にする劃辨なのであろう。

ソレに前にも云ふ通り、本年は、獨逸に取つて幸福にも、非常な豐年である。收穫どきに、動員令が下つた爲めに、一時は一大農事に差支を生ぜしめたが、最近の報道では、ソレモ大分片付いたとある。尤も、東普魯西シュレージエン、ポーゼン等露西亞に界せる方面は、氣候が大分寒い爲めに、此地方の主要作物たる「ライ麥」の取り入れ丈けは、未だに濟まぬから、此後、此方面に於ける戰が、獨逸に利あらずして、收穫前に、露國の大軍が殺到し來つて、野面を荒されたならば、獨逸の收穫には、大分違算が生ずるといふ懸念のみが、尙ほ殘つて居る。然し、近頃、獨逸は、此方面に、主力を傾注して居るやうであるから、今のところ、此懸念も、甚だ薄い。要するに、此度の戰爭が一年か、一年餘りで了るものとすると、獨逸は、左まで食料問題に苦しまぬ國だと、推定することが出來る。

八

食料に比しては、獨逸が、遙に苦痛を感ずるのは、原料である。獨逸國富の中心とも稱すべき工業の原料である。之は、羊毛にしても、棉花にしても、生絲にしても、國内に産せざるは勿論、隣國にも産せない。殆んど皆之を海外の供給に待たねばならぬ。石炭にしても、從來、獨逸の石炭の不足を補足したのは、白耳義及び英吉利を初め專ら海外である。昨今のやうに、英吉利海軍の爲めに、海岸を封鎖されては、獨逸の工業は、製品の販賣に就ては勿論、原料の供給に就て、

時々刻々、窮迫を告げざるを得ない。原油、銅、鉛、錫の如きも、既に業に著しき缺乏を告げて居る。又獨逸工業の一大要素ともいふべき鐵鑛の產地は、殆んど彼のアルサスの一州に限られて居ると云つても宜い位であるから、他日、佛軍が此地に押し寄せるやうのことがあつたならば、ソレコソ、獨逸の工業は、其基礎の上に、一大打擊を加へらるゝものである。更に進で、ライン、ウェストファーレン地方までも、侵されるやうなことでもあつたならば、獨逸の工業は、殆んど致命傷を受くるものであること、改て申すまでもないのである。

然し、工業の方は、假令、原料の供給が、豐富であつたにしても、今回のやうな大戰爭となつて、獨逸では、既に十八歲以上四十五歲までの男子が、大抵皆招集されたといふやうなことでは、軍用品の製造元の外は、大概の工業は、殆んど皆操業中止の狀態を免れぬ。「エコノミスト」に於ける八月四日附の伯林通信を見ると、「彼のシーメンス、シユッケルトの大工場さへ、動員令の下ると與に、忽ちにして、職工の四割を失つた。戰爭の第一期に於て、獨逸の工業は、恐く勞働者の五割乃至七割を失ふであらう」と言つて居る。

商業の方もまた同樣の逼塞である。獨逸政府は、開戰後、あらゆる手段方法を講じて、以て、中立國を通じて貿易の道を開かうと努めたが、大體皆失敗に終つて居る。今は唯だバルチック海の一面と、伊太利及び和蘭を通じて、僅に海外と幾分の脈絡を取つて居るに過ぎぬ。ソレモ、地中海では佛蘭西艦隊、北海では英吉利艦隊の監視が、次第に嚴重になつて來たやうだから、獨逸の外國貿易は、全く四面楚歌の聲となる日もあまり遠くはあるまい。

加之、獨逸の海運の被つた打擊は、非常なものである。英國海軍の公報によると、開戰以來、九月二十三日までに、同國海軍の爲めに抑留又は捕獲された獨逸商船の數は、二百八十七隻、其總噸數百十四萬噸で、又同日までに、獨逸海軍の爲めに、抑留又は捕獲された英吉利商船の數は、八十六隻、其の噸數二十二萬九千噸とある。シテ見ると、獨逸海運が是れまでに失ふた噸數は、差引九十一萬一千噸となるのであるが、此外に擊沈されたものもあり、又露佛海軍や、日本海軍の爲めに、捕獲、抑留、擊沈されたものも少くないから、開戰前、總計三百十五萬噸——其内、帆船約五十萬噸であつた獨逸の商船は、今や其三分の一以上を

失つたものと見ねばならぬ。他日、平和が克復しても、一寸と急には恢復出來ぬ打撃を負ふたものだ。其の上、北海に面したる港灣は、悉く封鎖されて居るから、昨今、ハンブルグ港だけにでも、千五百隻以上の商船が、遊んで居るとのことである。

十

斯く戰爭の爲めに、獨逸商工業の被つた打撃が夥しいから、獨逸政府は、夙に此方面に對しても、飽迄も助力を致して居るやうである。其一例までに、一つ紹介すべきことがある。それは今回新に制定された貸附金庫法なるものである。此法律も、八月四日の臨時議會に於て、急速に可決決定したものであるが、其大要は、新に『貸附金庫』Darlehenkasse と稱する官立の金融機關を設けて、資金は全部政府から供給し、事務は一切帝國銀行に委任して、主として小商工業者に對し、營業資金を融通するといふのである。依て政府は其資金として、總額十五億マルクの『貸附金庫證劵』Darlehenkassenscheine なるものを發行する。ソシテそれは額面五マルク、十マルク、二十マルク、五十マルクの四種であつて、何れも、法貨ではないが、帝國銀行の紙幣と略ぼ同一の資格を有する從てそれは租税の上納、其他の公の支拂にも、凡て差支なく使用し得るものであるが、其儘で用て不便の場合には、之を一旦帝國銀行に引受しむる。帝國銀行は、それを保證準備に供して、增發した紙幣を貸附金庫に交附するといふ仕組になつて居る。斯樣にして、調へ得たる資金を、ソレソレ營業資金として民間に貸附くるのであるが、相手は、成る可く、此際普通の銀行などで融通を得兼ぬる中流以下の商工業者を選ぶ。從て又貸附擔保品の制限も、至極寛大で、普通は、帝國銀行に於て擔保に取らないもの、爲に他の銀行でもあまり歡迎しない株劵社債の類でも、相當確實なるものなれば、それで結構であるし、又それもなければ、商店ならば商品、工場ならば製造品の類をも擔保に取る。ソシテ其擔保品が、斯樣な貨物なれば、其實價の二分の一乃至三分の二まで貸す。又それが株劵社債等有價證劵なれば、其時價の八九割まで貸す。尤も相場の變動激しい商品貸附に限り、別に保證人を附せしむる。利率は普通帝國銀行の割引步合の少し上で、期限は通常三箇月以內、但し此場合により、六箇月まで延長し得るとある。貸附金額には、別に制限はないが、何分、中流以下の商工業者救濟が、主たる目的だから、百マルク以上の貸附ならば、之に應ずるといふ遣方である。

尤も此種の計畫は、今回が初めてでない。嘗て一八七〇年、普佛戰爭のときも、臨時に、同じ制度を開いたが、其時は、獨逸の經濟界が、今日ほどでなかつた爲め、融通資金も僅に九千萬マルクに止つたが、それがナカ〳〵著しい功績を舉けたのである。それに鑑み、今回も亦同一の制度を布くことになつたのである。然し、今回は、如何やうの功績を齎すかは、實施後、日尙ほ淺くして分らぬ。が、最近の報道によると、中央政府のみならず、聯邦政府及び主なる地方の自治體でも、政府の此舉に倣ふて、小仕掛ながら、略ぼ同一の金融機關たる所謂『戰時信用銀行』なるものを、續々と設けつゝあるとのことである。例令ば、ザクセンに於

ては、近頃、資本金一千マルクを以て、此種の銀行を設立した。斯の如くして、今や、獨逸の上下、協力一致して、熱心に商工業の救濟に、努力奮闘して居る狀が、是れ丈けでも、略ぼ推測せらるる。

ソレニ帝國銀行の週報を見ると、開戰前、七月二十三日に、同行の手形割引高が、三億七千五百四十四萬圓であつたものが、僅か一箇月後たる八月二十三日には、二十三億八百萬圓——即ち六倍餘——に上つて居るし、又貸附金が、二千五百十萬圓であつたものが、之も八千百三十八萬圓——即ち三倍餘——に上つて居るところを見ると、帝國銀行も亦間接直接に、戰時、商工界に對する融通に、非常の盡力をなして居ることが分る。

十一

此外、尙ほ、獨逸政府は、戰時、商工業の困難を察して、種々樣々な施設を講じて居る。其內、主なるものは、部分的「モラトリア」Moratoria——手形支拂停止——の施行であるが、之は獨り獨逸だけのことでない交戰國は勿論、今や殆んど世界的となつて居るから、改て玆に說明せぬが、獨逸では、此他尙ほ商法の一部を改正して、手形の呈示及び手形不渡の場合遲滯なく處理すべき手續等に關する規定を、一時、手形法中から取り除くことにした。又今や獨逸の工業が、非常なる動員の爲め、勞働者の不足を感ずること甚しいのを察して、政府は、臨時に、工業取締法(Gewerbeordnung の一部を改正した。此改正に依て、勞働者雇用に關する重要なる制限及び各種工業の勞働時間に關する制限を撤廢したのである。

又獨逸政府は、一般勞働者の苦痛をも察して、在來の勞働保險法を戰時に適切なるやう、之に著しき改正を加ふると與に、多年、社會民主黨が熱心に主張した失職保險の制度をも、新に採用したやうである。此外主として勞働者であるところの出征兵士の家族扶助法を改正して、妻に對する扶助料の最低額を五月より十月までの半年間は、每月九マルク、其餘の月は、每月十二マルク、又子供に對する扶助料の最低額は、十五歲以下のもの、每月一人に付き六マルクに增額した。

それでも、昨今、獨逸に於ける工業の沈衰、從て生ずる勞働者の困窮は、非常なものであるらしい。「フォルヴエルツ」(社會民主黨の機關紙)によると、現今、獨逸に於ては、四十歲以上の健全なる男子悉く招集されて居るに拘らず、九月上旬の一週間に、伯林だけに約十萬の失職者を出したといふことである。又八月二十六日の伯林新聞「ターゲブラット」によると、伯林に於ける金工組合では、所屬勞働者の二割は出征、一割

二分は失職、木工組合では二萬七千人の所屬職工の内出征者を除き、一萬四千人の失職、石工組合では、所屬職工一萬二千人の内、二千人は出征、二千五百人は失職、製本職工組合では、平時ならば、先づ五百人位の失職であるべきに、三千三百人の失職、又伯林の織布職工は、殆んど其三分の一職業を失ふて居るとのことである。戰時の初期たる八月下旬乃至九月上旬に、既に業に、斯樣な有樣では、昨今は餘程の失職者であらう。伯林市では、此頃、急に、地下鐵道の延長工事を起して、失職勞働者を救ふて居る。又伯林を初め各市では、既に救濟會を起して、勞働者の家計を助けて居るとのことである。然し、それにも、自から限りがあるから、此先き、冬季に入つたならば、左なくも每年失職者の增加する季節であるから、非常な數に達するに相違ない。それが嵩じると、假令、社會黨が溫順で煽動しなくても、獨逸の內部に、非常な大騷動が持ち上りはしないであらうか。今や、獨逸の禍は、外に在るよりも、內に在りと申すことが出來る。

十二

以上、累々述べたやうな譯だから、今や、大戰の渦中に在る獨逸を、主として經濟上から觀察すると、早晩、三種の難問題に逢着すべき運命のものと申さねばならぬ。即ち、第一が金の問題で、第二が食物の問題で、ソシテ第三が原料の問題である。一寸と素人眼で見ると、獨逸戰時經濟の此三大問題が、其困難の程度に於て、正しく如上の順序にあると思はれるが、事實は其反對の順序にあるらしい。

此後の戰局の開展次第で、話も大分違つて來るだらうが、只今のところ、獨逸が、比較的に困難を感じて居ないのは、第一の金の問題で、其次ぎが、第二の食物の問題で、第三の原料の問題に於て、最も苦痛を感じて居るらしい。但し、原料の問題といつても、それは頗る廣い意味で、畢竟、戰爭の爲めに、獨逸の商工業が被りつゝある一大打擊を意味するのである。ソシテ又商工業の打擊は、自から勞働者を初め、一般下層社會の困窮を伴ふものだから、益々以て其重大の度が

加はる、結局、此點が、今や獨逸の最も苦痛とするところじやあるまいか。私は左樣に信ずるのである。尤も、昨今、我國に來る外國通信なるものは、戰報でも、其他の情報でも、何んでもかでも、大抵のことは獨逸に不利なるやうに、又不利なるもののみが、多く傳へらるゝやうである。敵國の事情を味方の國々から傳へらるゝのであるから、勢ひ此傾向は免れぬ。ソコデ之を信ずる方には、多少の斟酌加減を要する。戰局の發展に伴ふて、獨逸商工界なり、勞働社會なりが、受けつゝある打擊の如きも、或は幾分の割引を要することであらう。然し、何れの方面にも、やはり割引するとすれば、矢張り此問題が今のところ、差し當り、一番重大な問題であるらしい（大正三年十一月三日記す）

戰爭の二大焦點と日本出兵論

茅原華山

一　子を產むことゝ文を產むことゝ

昔し齋藤拙堂先生が詩を作り文を草するに方つて、沉吟苦心一方ならざる樣子であつた、細君が見るに見兼ねて『私が子を產むにも御身のやうに苦しみません』と言つた、すると拙堂先生『それは當然だ、御前のは有るものを出すので、己れのは無いものを出すのだ』と答へられた、私は既に『中央公論』の九月號と十月號とに於て、歐洲の戰局に關する二大論文を公にした、有つたものは既に出してしまつた、然るに『中央公論』から復た依賴を受けて無いものを出すことに爲つた、

然しながら私の哲學で言へば、無即有で有即有だ、有といつても實は無であるが、無と言つても實は有である、私に苟も生命力があつて、常に營養を外界から攝取して之を消化しつゝある限りは無即有ではないか。

二　活劇の大團圓

獨逸は仕舞ひには負けると極めて仕舞へば最早議論する必要がない、必要がないばかりではない、議論する餘地がないが、シエクスピーヤの言つた如く、世界は一つの舞臺であるとすれば、英佛露が戰爭と外交とを以て最後の勝利を獲んと努力してゐるに相異ないが如くに、獨逸も亦戰爭と外交とを以て最後の勝利を獲んと努力してゐるに相異ない、其處に人生の活劇がある、喜劇もある悲劇もある、喜悲交も至る喜的悲劇もある、悲的喜劇もある、動劇もあれば靜劇もある、この活劇を寫し出す處に文章がある、觀察がある、議論がある。

夫れにしても私は仕舞には終局には大團圓には獨逸の負けであるといふより外はない、何故負ける、何故と問ふ必要は決して無い、解り切つたことだ、露國の人口が一億五千萬、佛國のが四千萬、英國のが四千萬(白耳義を數へないで)と見れば、合計二億三千萬ではないか、然るに獨逸の人口は六千萬、勿論別に墺匈二元帝國の四千萬はあるが、これは或は獨逸の手足纒ひかも知れない、現に獨逸が曩きに俄かに佛國側から八箇軍團の兵を割いて露國側に移したのは、二元帝國がガリシヤ方面に於て容易に恢復すべからざる打擊を受けたからだと傳へらるゝではないか、二億三千萬と六千萬では弱ではあるが獨逸の一人に對して聯合軍の四人になるから、獨逸は一人を以て四人に對抗せねばならない次第ではないか、若し『數は力なり』とすれば結局獨逸の敗に歸するは、千里眼を待たずして既に明に透視されるではないか、殊に現代の戰鬪に於ては、兵家の能く言ふが如く、飛行機の時代であり飛行船の時代であり無線電信の時代であり無線電話の時代であり獨探英探露探佛探の縱橫する時代であり自動車の時

代であり汽車汽船の時代であつて、戰鬪も亦科學的精密を以て行はれ、英雄が其傳奇的天才を縱にし、一を以て十に當り百に當り千に當り、日本外史にあるが如く、縱横衝撃一以て千に當らざるはなしといふことが多くの場合に於て不可能と爲つたとすれば、數は力なりとする格言は愈々力強く現代の戰鬪に當て箝まる譯なのである、獨逸の敗を豫言する位容易いことはない

獨逸は近ごろ露國を相手にする東普魯亞、波蘭方面に於て屢々利を失ひ、コザック騎兵は既に獨逸の土に其馬蹄を印するに至つたといふ、參謀本部の調べを待つまでもなく、露軍が獨逸に對して優勢であるは言ふまでもない、顧ふに露國は戰鬪の總ての準備に於て至らざる所あれば、今でも未だ其全力を擧ぐるまでに至らぬかも知れない、北方の熊は熊のやうに强いかも知れないが、熊のやうにノロイ、ノロイのは戰鬪の始めに於ては其弱點であるかも知れないが、戰鬪の終りに於ては反て其强點となる、殊に其長引ける戰鬪に於て最も然りである、況や其數の夐に獨逸に優れるに於て長引ける戰鬪に於ては必ずしも其ノロキを嫌はない。

獨逸は東と西とに於て戰ひつゝある、即ち力を分ちつゝ戰ひつゝある、日本人は獨逸はエライ、東西兩方面に於て、一歩も敵を其國境内に入れない、實にエライと感嘆しつゝあるが、一歩も敵を其國境内に入れないだけで、果して獨逸としての戰鬪の目的を達し得らるゝであらうか、戰鬪の目的は敵の主力を壞滅するに在りとすれば、獨逸は如何にして敵の主力を壞滅するのであらうか、成程白耳義は都をブラッセルからアントワルプに遷し、アントワルプからヲステンドに遷しオステンドから更に都を佛國のアーブルに遷した、獨立の國が都を他の獨立の國に遷して、都の拜借をしたといふことは、古往今來、曾て聞いたことがない、獨逸は確に白耳義を一時なりとも亡したと言へるが、佛軍の主力は今だに壞滅されてゐないやうだ、英軍はキッチエナー元帥の説に依るも、是れから兵隊の粗製品を更に精製品として大陸に送出すと言つてゐる位であるから、英軍の主力も亦固より壞滅してはゐない、私

は曾て歐洲に於て或外交家の説を聞いた、若し露獨相戰ふとせよ、大局に於て、若し露が深く獨に入れば露の敗、之に反して若し獨が深く露に入れば獨の敗なりと、獨逸が單獨に露と戰ふに於て然りとすれば、英佛を連ねて露が獨を擊つに方つて、獨逸は如何にして露軍の主力を打破壞滅せんとする乎。

大に東、露に敗るれば、西の兵を割いて之を救はざるを得ない、西の兵を割けば、更に復た西、英佛の敗る所と爲るを免れない、是れ敗局を轉じて勝局と爲すのではない、勝局を轉じて敗局と爲すの途である、獨逸から言へば、獨逸は大に勝たねばならないが、これでは大に勝つ所ではない大に敗れる所以である、大團圓は獨逸の敗局、此位明白なることはない。

獨逸は此の如く戰爭に敗るゝのみならず、竟には戰鬪にも敗れねばならない、然しながらこれは專ら戰爭に就いて言つたので、戰時と雖も外交のないことはない、或は戰時こそ外交が反つて活潑に飛躍する一時ではあるまいか。

三ムム

米國のヒラデルヒヤで發行するイヴニング、ブレチンが獨逸外務省の顧問ムム男の談論を紹介した、男は一九〇〇年から一九〇六年まで支那公使、一九〇六年から一九一一年まで日本の大使であつた、獨逸側の意見を聞くことの容易でない今日、私は好奇心に唆られて之を讀んだ、これで見ても獨逸が外交で大失敗をしたことは掩ふべからざる事實である

彼れの曰く「獨逸は始め墺匈國を制して露國と戰はざらしめんとした第二には獨露戰爭に際し佛國を中立せしめんとした、第三には獨逸對露佛戰爭に際しては英國を中立せしめんとした、且つ我々は日本が乘じて以て膠州灣を攻擊せざらんことを希望した、若し世界が獨逸は一時に世界を引受けて戰ふ積りであつたといふならば、それは我々を狂人扱にするのだ。

「露國が獨逸と戰ふは獨逸は西の東に對する前哨で露國は東の西に對する前哨であるからだ、宛も太平洋に於て米國が西の前哨で日本が東の前哨なるが如し（其言に刺あるを見よ）露國は塞耳比亞に於けるスラヴの兄弟を援助し、獨逸は墺國に於ける兄弟を援助す、民族對民族、西方對東方、文明對半野蠻」男の露國を憎む此の如くなるも、一語も佛國に及ばないのは、最も注目に價する。

「我々は平和の技術及び科學に於て英國を凌駕しつゝあり、英國は（といひながら、嘲罵しつゝ言語を撰擇し）其海軍を以て獨逸の商業を破壞

せんと決心した、商船を以て我商船を破る能はざるを以て、ドレッドノートを以て我商船を破らんと決心した、英國は他の國民が大洋に於ける商業的成功を怨み、常に戰を以て之を破壞するに力めた、米國が其大洋商業を失ふたのは、南北戰爭に乘し、英國が之を奪ふたからであつた、同じ方法を以て英國は最初に西班牙の海軍を破り其商業を奪つた、和蘭の海軍と商業との發展するや、英國は復た之を破つた、佛國が路易十四世及び十五世の時代に殖民地を擴張するや、更に佛國の海軍を破ぶり、其商業を奪つた、此度は獨逸の番に爲つたのだ。

『獨逸が白耳義の中立を破つたから英國は開戰したのだとよ、最も多く小國を併呑したのも英國ではないか、一千一百萬方哩の帝國は小國を併呑した證據ではないか、英國は其資本家がダイヤモンドを要すといふを以てトランスヴアールとオレンジ自由國に行つた、我々は死活の戰爭に於ける軍事上の必要から白耳義に入つたまでだ。

ムム男は最後に繰返へして曰く『英國は路易十四世及び十五世に對しナポレオンに對し、クリミヤ戰爭に於て露國に對し、歐洲を聯合した、誰れであれ、其第一の競爭者に對して、英國は常に歐洲を聯合して、其力を削弱せんとす』ムム男の口氣に徴するに、男は露國を憎む、然れども最も多く英國を憎む、和蘭の一新聞は伯林に於ける感情を報じて『伯林人は齊しく我々は餘儀なく先づ佛國を攻めた、實に佛國は氣の毒である、若し可能るならば佛國の滿足すべき條件を以て早く講和し、專ら獨逸の進路に立塞がる英國と雌雄を決せん』といふに在りと言つた、又和蘭の一新聞は『獨逸人はスラヴを憎む、然れども伯林政府は唯此感情を利用して、獨逸國民の戰熱を鼓舞激發せんとするに過ぎない、其目指す敵の英國に在るは、恐も疑ふの餘地がない』。

佛國は敵視せぬ敵國、露國は敵視する敵國、英國は最も敵視せる最も大なる敵國、獨逸國民の心理を診察して見れば、何うしても斯ういふ斷案を下すの外はない。

そは兎も角、獨逸は英國首相アスクイスが言つた如く、其極度まで整頓せる動員機能を利用して、一氣に佛國を破ぶり、更に轉じて露國を破るの最初の作戰計畫は全く畫餅に歸した、開戰の當初米國士官で伯林に駐剳するロングホーン少佐が陸軍大臣フォン、フォルケンハインを訪ねて、其忙はしき軍國の事務を妨げたことを謝するや、陸軍大臣は『イヤ私は別に何も用事はない、何事も戰前に整へられてゐたから、戰鬪自働機械のボタンを押したゞけだ、私は寧ろ手持無沙汰である』と言つたが、私は試みに新にモルトケ將軍に代りて參謀總長に爲つたと傳へらるゝホルケンハイン將

軍に問はん「果して今も手持無沙汰であるか、閑散に苦しんでゐるか」と。

要するに歐洲戰爭の推移を察するに、獨逸は片手では聯合軍と戰ひつゝ、他の片手では聯合軍の聯合を疎隔し離間し破壞せんと企てつゝあり、聯合國は益々其聯合軍の聯合を鞏固にせんとするに努力しつゝあるのではあるまい乎、何處にか證據と爲るべきものがある乎、有る、大に有る、曰く土耳格の戰爭割込。

四　土耳格亡びずんば日本亡びん

カイゼルの怪腕は實に物凄い、怪腕といへば何だか新聞の雜報然たる嫌ひはあるが、事實カイゼルの怪腕の物凄い次第は是から述べやう。

土耳格即ちオットマン帝國と日本とは兩立しないと言へる、オットマン帝國亡びずんば日本亡びん、日本亡びずんばオットマン帝國亡びん（日本に於ては亡の字は聊か誇大に失するの嫌はあるも）と明言することが可能る、土耳格人にも此自覺がないやうだが、日本人にもない、露國若し遂に南、土耳格を亡ぼして其水に出づるの目的を達する能はずんば、結局露國は獨逸及び英國の爲めに其南進の目的を阻止せられて、東の方蒙古、滿洲に還るより外はない、露國から言へば日本と土耳格とはバランスに掛けられてある、故に露國が土耳格と戰ふは即ち日本安全の保證であるではないか。

オットマン帝國は露國にして氷河の如き勢を以て動き出したとすれば、戰ふも亡び戰はざるも亦亡びざるを得ざる運命に陷るかも知れない、宛も平將門のやうな位置に居るのだ『一州を取るも誅せられ、八州を取るも誅せらる、誅は一のみ、寧ろ八州を取るに若かんや』戰ふも亡び戰はざるも亦亡ぶ、寧ろ戰ふて亡ぶるに若かんや、これが土耳格の開戰した理由なのかも知れない。

コンスタンチノープルは既に露國人に依つてツアルグラードと改稱された、私は日本人として露國が土耳格を亡ぼすに毫末も異議がないから、私は露人に從ひ

これからコンスタンチノープルをツアルグラードと言ふ積りである、このツアルグラードに主戰派と非戰派との二者があつたといふ英國側の報導は事實である。主戰派は陸軍大臣エンバー、パシャとタラートペー等が代表し、非戰派は前きにグランド、ヴイシャ(首相)たりしキャミル、パシャが代表してゐる、主戰派即ち獨逸派は卽ち軍人派で、非戰派卽ち英佛派は財政派である、これ兩派の格鬪に於て主戰派の勝つた所以である、腕力は此場合にも最後の勝利者であつた。

偖て然らば土耳格の起つたのは戰局の上に如何なる影響があるかといふに、之を喜ぶものは露國であるが、之に苦しむものは英佛兩國である、聯合三國が土耳格に對して利害を異にすることが直ぐに看取される、土耳格は何ういふ戰略を取るかといへば、無論獨逸の都合に任かせる、進んで巴爾幹戰爭で失つた土地を恢復せんとすれば、勃牙利、希臘と開戰せねばならぬ、場合に依りて羅馬尼亞、伊太利をも敵に廻はさねばならない、これ第一に獨逸の敵を增加する結果と爲る、第二に土耳格に勝算がない、故に土耳格が戰局に割込んでも、私は巴爾幹戰爭が起るものとは考へない、土耳格は最少抵抗線に向ふに相異ない、最少抵抗線とは參宮鐵道(メッカに至る)に由りて南下して蘇士運河を破壞し更に埃及に侵入し、その故地を恢復することである。(中央公論十一月號に詳なり)是れ英國を東南から牽制する所以である。

蘇士運河にして破壞せられ、若くは閉塞せらるれば、大英帝國は亞細亞と歐洲とに兩斷せられる、歐洲からいへば、蘇士は東洋に赴く第一の關門で、新嘉坡が第二の關門。

英國は土耳格を平げるに果して露國の力を藉りるであらう乎、英國は若し土耳格にして眞面目に戰へば、强弩の末なりとも、大なる艱難を感ぜぬことはあるまい、故に土耳格の起つたのは英國の苦痛に相異ない、去れど若し露國をして土耳格を擊たしめば、露國は能く平定の効を奏するであらうが、土耳格を平定しての後の露國は果して歐亞に跨れる土耳格の領土から引上げるであらう乎、英國にして一たび土耳格を敵とし、露國をして之を擊たしめておいて、今更土耳格の領土保全でもあるまい、去らば英國は當然露國に與ふるに土耳格を以てせねばならない、果して然らば英國に取りては弱き敵なる土耳格を平げて、更に他日最も强き敵たらずとは斷言することの可能ない露國を地中海と波斯の海岸に迎へるといふことに爲るではないか、英國が土耳格をして起たざらしめんが爲めに苦心慘憺を極めた理由はこれで立派に讀める。

土耳格は、或は寧ろ獨逸は土耳格をして、黑海から高加索から露國を攻擊せしめつゝあるが、露國が若し全力を擧げて土耳格を擊たんと爲らば、獨逸を學んで內線作戰を遣らねばならない、先づ大に獨墺兩軍を敗りて而る後に南して土耳格を擊つか、或は先づ土耳格を敗つて後に獨墺

を敗るか、去れど今は先づ獨墺を敗らねばならない、若し露國が獨墺側から兵を減ずれば、それ獨逸が佛國側から八箇軍團を割いて之を東に廻はした轍を踏まねばならない、獨墺は直ちに盛返へして來る。

露國が獨逸を撃つのは何も獨逸の痩土に垂涎するのではない、墺國に於けるスラヴを獨立せしめ、更に南進するの路を自由にしたいのであるのは言ふ迄もない、土耳格が起つたとすれば、露國に取つて鰻の匂ひがプン／＼するやうなものだ、猫に小判だ、露國の食指頻りに動くは目に見えるやうだ、コンスタンチノープルをツアールグラードと呼ぶのでも解るではないか、そして露國では土耳格の起つたのは、寧ろ英國を目的としてゐるから露國は守勢を取るといつたのは、戰略上の理由もあらうが、實は英國に對する切ない遠慮である。

獨逸には勝ちたし、土耳格は取りたし、これが若し露人の自然に勃發する感情だとすれば、獨逸にして愈々窮すれば、露人の此感情に乘じて露國を誘ふて專ら南土耳格を撃たしめて、以て一條の活路を開かんとするに相異ないではないか、若し露人がウッカリ此手に乘れば、此戰爭は露獨の衝突に始まつて、露英の衝突に終るではないか。

若しスラヴが大兵を以て南進して來れば、此に民族の大移動が行はれる、土耳格人は疑ひもなく露國の爲めに敗れる、敗れて逃げるとすれば眞逆に露國の中には逃げられない、波斯もさうなれば軈がて露國のものに爲るから、依然歴史の示すが如く、土耳格民族は南進して古のパレスタイン即ち聖書に名高い迦南（カナアン）の地に移住するであらう、若し夫れでもスラヴの壓迫に堪へずんば、更にモーセスが埃及から其ヘブリユー人の羊群を率ゐて歸る途すがら、上帝から十誡を受けたといふシナイ山を繞つて埃及に移住するであらう、そして新なる土耳格帝國を建造するであらう、土耳格の愛國者の心事も或は此に在るのであらう。

神聖戰爭が布告される、モロッコ、アルジエリヤ、チユニスを有する佛國、トリポリを有する伊國及び英國が難儀するは今では誰れも知つてゐる筈だが、英國の埃及と印度とを一つに視ては間違ひである、私は倫敦に於て屢々埃及人に交つたことがある、埃及では回教徒と基督教徒とが二と一との割合である、多數の回教徒は少數の基督教徒を壓迫する、『分離して統治せよ』（チヴヘイド、アンド、ルール）とは羅馬以來英國に至るまで屬國を統治する政策であつた、英國は二教徒の乖離葛藤するを奇貨とし、少數なる基督教徒を懷柔して多數なる回教徒を制してゐる、故に埃及人に會つた場合には先づ其れが基督教であるか、將た回教であるかを知らねばならない、彼れにして基督教徒ならば、埃及が自由なる英國の保護の下に在るは、寧ろ其得策であるといふ風に口を開かねばならない、彼れにして回教徒ならば、埃及も遂には英國の羈絆を脱して其國民性を主張する時が來るであらうといふ風に談緒を作らねばならない、私は常に此外交手段を以て各國の情誼を學んだものだ、之に反して印度では印度教（ヒンヅイズム）徒が一億二千萬、回教徒が八千萬で、基督教徒は埃及に於て弱者であるが、回教徒は印度に於て弱者である、從つて印度教徒の爲めに壓迫せられる、是に於て乎英國は印度に於ては回教徒を懷柔して印度教徒を制してゐる、故に回教

徒は埃及に於ては英國の敵であつて、印度に於ては英國の味方である、總印度回教徒同盟の會長アカ汗が印度の回教徒は英國に忠實なるべしと宣言したからとて、總ての回教徒が英國に忠實なりと取るのは、全く此事情を解せぬからである、アカ汗は英國政府から勳章まで貰つてゐる人だ、

回敎徒が果して土耳格、獨逸の爲めに起つや否やは別問題であるが、其關係は實に此の如きものである、私はカイゼルの怜腕を述べやうとして述へなかつたが、これだけで聰明なる讀者はカイゼルの怜腕のいかに怜腕なるかゞ合點せらるゝと信ずる。

私には南阿のブーアが早くも征定されたとは信ぜられない、ボタ將軍は英國派でデウエツト、スマツツ等は獨逸派だといふが、英國派と獨逸派と異る所は一は漸進派で一は急進派であるに過ぎない、漸進派とは大英帝國の滅亡するまで辛抱して獨立の國と爲らうといふので、急進派は此戰爭に乘じ、直ちに英國の支配を脫して獨立の共和國を建てやうといふのだ、又事なき日にも動もすれば爆彈を投ずる印度敎徒の靑年が此際沈默してゐるとは常識でも判斷されない、佛國印度即ち安南、交趾支那の士人も此戰局の推移如何に依りては動搖して來ないとも言へない（既に東京に於けるマン族蜂起の報があつた）唯私は同盟國の爲めに協約國の爲めに此事のないのを祈るまでゝある。

五　獨逸能く英國に侵入し得る乎

獨逸の最も憎むものは英國である、そして英獨の利害は根本に衝突してゐる、故に若し獨逸が露國に讓るか英國に讓るかといふ羽目に陷れば、露に讓るとも英には讓るまい、是に於て乎、獨逸能く英國に侵入し得る乎といふ問題に到着する、此解決が可能なければ歐洲戰爭の觀察は全く盲目的觀察に過ぎない。

私は日本の識者に遺憾がある、日本の新聞雜誌に遺憾がある『獨逸は能く英國に侵入し得る乎』といふ問題は既に疾く英國に於て論議せられた問題である、既に理論上には解決された問題である、然るに日本では一人として冷靜に之を研究したものがない、若し全く研究すべく氣が附かないとすれば、歐洲戰爭を論ずる資格がないと言へる、若し英國に遠慮して言はないとすれば、日本人の英國と同盟してゐるのは、對等の同盟ではない、臣を以て君に使へ、奴婢を以て主人に仕へる心だと言はれても辯解するに辭があるまい。

理論上英獨海戰の大局に於ては、英國は守るもの丶位置に立ち、獨逸は攻むるもの丶位置に立つ、守るも

のは一城の中に蹙まり攻むるものは千里の外に伸ぶ、英國は不利であつた獨逸は有利である。

獨逸の海岸の特色はその港灣を砲撃する能はざらしむるのにある、フホン、ストッシュ提督は一八八八年に於て「北海の港灣は自然に防禦せらる、海流の關係からして無限の砂堤(ヤンドベンクス)が不斷に變化す、故に若し之を標識する浮標を除去すれば最も熟練せる水先案内者も波荒き水道に一船をだも誘ふの勇がないことであらう」と言つた、又ホルマン提督は「獨逸は海岸防禦の爲めには全く海軍を要せず、我海岸は自ら防禦す」と言つてゐる、故に英國の次位に居る獨逸の海軍は全く英國に對して殖民と商業との競爭を試みんが爲めに造られたのだ。

獨逸は海島國ではない、故に良港灣の多からざるは已むを得ない、其海軍根據地は唯二箇あるばかりだ婆羅的海に於けるキール、北海に於けるウイルヘルムスハーフエン、そしてキールは獨逸に於ける最良の港灣で以て世界の總船舶を容るゝに足るが、ヴイルヘルムスハーフエンは人工を加へて纔に港灣の形を爲してゐるに過ぎない、其上冬期は氷結するのみならず、落潮の際には巨船大艦の出入に便ならず、而も獨逸はキールではなくウイルヘルムスハーフエンを獨逸の主要海軍根據地としてゐるのは、キールよりも西に進撃するに便利であるからだ、ウイルヘルムスハーフエンから英國へは海路一直三十時間、和蘭からは八時間、若し夫れ獨逸が全力を擧げて英佛軍の手から奪はんとしつゝあるダンカルク、カレー、ブローンニに至つては、兩岸の靑山呼べば應(こた)へんと欲す、獨逸の潜航艇は既にドーウア海峽に出沒して英の軍艦を轟沈してゐる、若しダンカルク、カレー。ブロンニを取られたならば、英國は或は其陸軍を大陸から引上ぐるか、然らずんば其上陸地點を更に西南の或地點に移さねばなるまい、斯うなれば英軍は佛國で戰ふよりも本國を守るに專らならざるを得まい。

英國は獨逸との海戰に於ては勞を以て逸を待つものである、故に之を反對からいへば、獨逸は逸を以て勞

を攻むるものである、獨逸は自己に都合の善い時に突出する、都合が惡いならば、艦隊を安全に其軍港に收容して置かれる、英國は其海岸を防禦するが爲めに一刹那も油斷しては居られぬ、その超弩級ヲーダシャスが愛蘭の北海岸で水雷に觸接して轟沈したといふからには、獨りイングランドのみならず、スコットランドもアイルランドも防禦せねばならない、海國は海を以て天塹と爲すが故に防禦し易しといふは、最早過去のドクマに過ぎない、大陸國民は海國民に比して海の本能を缺いてゐるといふ缺點はあるが、若し此歐洲戰爭が唯英獨兩國の交戰なりとせよ、英國は隨處敵艦の砲擊を免れないが、獨逸は唯北海に面する一部分に過ぎない、故に大陸國にして相當なる海軍力を有して海國と交戰するに方つては、利は大陸國に在る。

英人でも日本人でも英國が嘗てナポレオンをしてドーヴァー海峽を渡らしめず、彼れが我れにして若しドウヴァーの主人たらしめば能く世界の主人たらんと嘆息したといふことを記憶して、大陸國は到底英國に侵入することが可能ないといふ傳説を信じてゐるらしいが、ナポレオンは當時全く海軍を有つてゐなかつた、ネルソン始め英國海上の猛將勇卒が佛國の艦隊を殲滅して之を海底の藻屑として了つた、去れば流石のナポレオンもドーヴァーを飛んで渡ることが出來なかつた去れども獨逸はナポレオンの佛國ではない、兎に角英國に次ぐ世界の最大海軍國であつて、その砲後の人に至つては、百年後の英國海軍は百年前の英國海軍でないかも知れない、そして獨逸國民の敵愾心は爭はれぬものがある、勝敗の數俄に測り易からずといふことが可能るではないか。

或は西班牙のインヴインシブル、アーマダさへ英國の水師には敵し得なかつたではないかといふが、或英人が英國民に警告した如くに、英獨戰爭に於てインヴインシブル、アーマダに當るものは英國の海軍で、問題は獨逸能く英國のインヴインシブル、アーマダを擊破し得るや否やといふことになるから、此歷史上の事實は英が獨逸の侵入に對して安全なりとする證據には爲

らない。

英國の歴史は征服の歴史である、大陸から侵入されてそして征服された歴史である、アングルス、ザキソンス、ジユーウ等は今の北獨逸の邊から英國に侵入して、原住人種たるブリトンを征服して大英帝國の基を開いたのではないか、シーザーの羅馬は英國を征服したのではないか、私はスコットランドに於て昔し羅馬人の造つた羅馬道（ローマンロード）を逍遙したことがあつた、又羅馬橋（ローマンブリッジ）を渡つたことがあつた、羅馬はイングランドを經てスコットランドまでも征服した、ノルマン人が英國に侵入して之を征服したことは、歴史上比較的に新しい事實で、多くの讀者は明に之を記臆して居られるであらう、現に今日の英國貴族はノルマンの血系に屬するものが少くはないといふ、此以外、大陸の諸民族が、英蘇愛三國の海岸に上陸した前例は一にして足らず。

故に問題は獨逸能く英國に侵入し得る乎といふのではなく、英が能く獨逸の侵入を防ぎ得る乎といふに歸着する。

私は嘗て新聞記者として英國の觀艦式を觀た、日の夕、六々三十六の山影が次第に闇の中に沒するやうに、先頭の戰闘艦が次第に東の水平線に沒し去るにも拘らず、後殿の戰闘艦は次第に西の水平線から現れて來て、何時盡くるか解らない而もそれが一列ではない第二列の巡洋艦も第三列の驅逐艦も、第四列の水雷艇、潜航艇も其通りである、其光景のマジエスチックなる壯絶なる殆と言語に絶してゐた、我同盟國たる英國は既に此の絶大の海軍あり、獨逸にして若し英國に侵入し來らば、英國能く之を防禦し粉碎し得るに相異あるまいが、海中には潜航艇あり空中には飛行船、飛行機あり、英國は決して獨逸を侮れない、其勝負が如何に決すべきかは、明日の御樂みとして置くより外はない。

六　實は英對獨、露對獨の戰爭

私は獨逸が遂に財に苦しんで自ら斃れるであらう、食に苦しんで降を請ふであらう、或は人民が商工業の沈滯破滅に堪へず人民自ら、和を要求するに至るであらうといふやうな豫言を爲すを好まない、獨逸は宜しく腕力（マイト）を以て聯合軍を破るべし、聯合軍も亦斯かることを頼まないで、宜しく腕力を以て獨逸を屈すべしと言ひたい、倫敦で發行する經濟雜誌の一權威たるスタチストは『獨逸は能く二年の間戰ひ得る乎』といふ問を發した、私は獨逸は決して二年戰ひ得るものとは思はない、然しながら英國の如きは其富源の窮りなきものあれば、或場合には二年以上戰へないとはいはない私は或場合と制限を附したのは、蘇士運河破壞され、埃及は土耳格に歸し、印度は動搖して定らず、南阿亦

獨立を企てるといふやうな場合に果して二年以上戰へぬ乎は英國に取つても一大問題であるからである、佛國の如きは既に和意があるのではあるまいか、この厭き易い國民性からいつても斯かる疑念がある、白耳義の如きは勇敢に戰ひつゝあるが、其一般の人民は他國に流浪してゐる、一日も早く兵氣の銷して日月の光りと爲らんことを祈つてゐるのではあるまいか。

且つ二年戰へるかと問ふのは、一年は戰へる、半年は戰へるといふことに爲る、二年を否定したのは、一年半年を肯定したのだ、此戰爭の時間如何は此戰爭の勝敗如何と共に私には解らない、何人にも解るまい、未來の事は唯神之を知るといふも、神樣でさへ之を知つてゐるかは問題ではないか、然しながら獨逸の戰爭は七に緣があるといふ、フレデリッキ大王の戰が七年墺國との戰爭が七週間、佛國との戰爭が七箇月だといふ、此戰爭は何んなことがあつても七年は續くまい、米國の陸海軍士官は九箇月から一年だと豫言してゐる私は到底七箇月から一年位の間ではあるまいかと思ふ

此戰爭に於ける二大焦點は一は土耳格であつて一は英獨の海上戰である、獨逸は土耳格を犧牲にして、露國と情意投合し肝膽相照し得れば、專ら力を西に用ゐられる、專ら力を西に用ゆれば佛國を蹂躙し、英の陸軍を大陸から其海嶋に驅逐するは容易である、そして更に飛んで英國に渡るの計を爲すか、然らずんば、獨逸は東に於て一時防禦を主とし、西に於ても佛國に向つては寧しく防禦を主とし、和を露國に求めずして反つて露國に對して攻勢を取り得る形勢を造出し、而して專ら英國に向つて攻勢を取るの策に出る乎、獨逸今尙窮せずんば第二策を取り、若し窮すれば第一策に出づるかも計られない、カイゼルが東に於ける獨軍に對して、カレー、ブロンニを略取するまで努力以て露を防禦せよと言ふたといふ說が事實なれば、獨逸は第二策を取つてゐるやうだ、それ英軍を大陸から驅逐すれば佛國は孤立し、多く意とするに足らぬ、是に於て乎、海軍を以て英國に當り、陸軍を東に集中して露國に當り、海陸共に勝を占めやうとしてゐるのだ、事實、西

の戰は最早英國が佛國を援けて戰ふのではなく、佛國が白耳義恢復の爲め、英國の爲めにダンカルク、カレー、ブーロンニの守りを失はざらんとするの戰で、從ふて佛國は戰略上不利な戰を戰ひつゝあるのだと傳へられる、兎に角、歐洲戰爭は推移して漸く英對獨、露對獨の戰に爲りつゝあるは爭はれないやうだ。

私は繰返へして露西亞をして獨逸に勝たせたいと祈る、そして英獨の海戰に就いても、勿論英國を勝たしめたいと祈るものであるが、私は此に或友人の說を紹介して置く、若し英國が能くゲルマニヤの海軍を全滅し得たならば、米國は對日本の關係上、最早英國に賴るの外なく、英國は又加奈陀、濠洲等の關係上米國の心を繫ぐの必要があるから、獨逸亡びて英米の接近始めて成り、所謂總括的英米仲裁條約即ち英米同盟が實現し、英國は日米戰爭に際して、日本と共同戰鬪を爲すの義務を免れる、若し此場合に日米が藉りに開戰すとすれば、支那は無論米國に加擔するに相異ない、そして支那は腕力を以て日本に勝つことが可能ないから

日本の商品に對して一般的杯葛を始めるであらう、日本は共世界に於ける二大得意場の一たる米國に於て生絲を失ひ、更に他の一たる支那に於て紡績絲及び雜貨を失ふ、そして若し此戰爭が移民問題から起つたものとすれば、英國の利害は直ちに米國と一致する、勢、日本は英國艦隊の壓迫を受けねばならなくなる、英國が獨逸の海軍を全滅し得たならば、英國からいへば日英同盟の必要は無くなり、其艦隊を復び世界の海面に散布することが可能るやうに爲るから、日本に壓迫を加へるに遠慮はあるまい、之に反して若し獨逸が能くブリタニヤの海軍を一掃し得たならば何しやう、依然同一の結果を生ずる、獨米支は直ちに聯合するであらう、そして日本に向つて壓迫を加へることに爲る、故に英獨の海戰に於ては、英國が負けるなら獨逸も負けろ、英國が勝つなら獨逸も勝て、兩方が勝つか兩方が負けるかすれば、獨逸の海軍が五分英國のも五分と爲る、五と五と相對すれば零、十と十と相對すれば同じい零と爲る、去らば日本にして英國に與みすれば、英

國は優勢、獨逸に與みすれば獨逸優勢で、日本の海軍小なりと雖も、御山の大將己れ一人と爲りて、自由に太平洋で芝居が打たれるといふのだ。

七　日本出兵論

日本は固より日英同盟條約の規定を守らねばならない、如何に腕力是れ權力の時代でも國信なくんば立たずと謂はざるを得ない、日本は既に條約の規定に順應し、英國政府と往復交涉を重ねた上、獨逸に向つて宣戰し、既に青嶋を陷れ、又艦隊を太平洋に派して世界の通商航海の安全を擁護しつゝある以上、日本が英國に對する義務は此に盡きたといへぬことはあるまい。

正直にいへば日本國民は獨逸と開戰する用意がなかつた、日清戰爭は前からの覺悟であつた、日露戰爭も亦前からの覺悟であつたのは、所謂嘗膽臥薪の唱へられたことでも解るではないか、日米戰爭說は屢々傳へられたが、日獨戰爭といふことは專門家の假想論以外實際誰も用意はしてゐなかつた、日英同盟も其始めは對露同盟であつた、其內容が何時か對獨と變化したことは一般國民は知らなかつた、故に或意味からいへば日獨戰爭は全く寢耳に水であつた。

その上に政府は日英同盟の必要と言ふので唐突獨逸と開戰したが、日清日露の兩戰役に於ては國民の輿論が先づ沸騰し、戰熱が極度まで膨脹した、故に伊藤公には戰意がなかつたが、輿論に餘儀なくされて開戰したのだといはれた、桂公は何故に開戰せぬかといふ脅迫狀が續々と舞ひ込んでから始めて開戰したさうだ、然しながら公平に評つて、伊藤公は全く支那と戰ふ心がなかつたとはいへない、公が明治十八年に朝鮮問題に關し、李鴻章と天津に條約を結ぶや、或外字新聞は當時『これ日本と支那とが他日朝鮮に於て戰ふべし』といふ豫約なりと評した、桂公が露國と戰ふの心が有つたか無かつたかは、固より問ふまでもない、然るに日獨戰爭は國民は歐洲の大火に驚き、一意に歐洲を睨んでゐる間際に突爾として政府が決斷したものであつたから、現に地方人などは何時日獨戰爭が始まつたかを知らないものさへあつた、そして何となく自分の戰爭でないやうな心地がするといふのがある、去れども日本は青島陷落に依りて獨逸が三國干涉に於ける勘定を濟ましたのだ、私は青島陷落を悔ゆる必要はない、艦隊を太平洋に派し英國提督の指揮の下に活動するを悔ゆる必要はない、唯問題は日本は歐洲に出兵するの必要ありや、又其義戰ありや、及び出兵し得るやといふのだ。

日獨戰爭は日本國家と獨逸國家との戰ひである、何も戰局を青島及び

太平洋に限局する必要はないといふ、理論としては私に於ても異議はないが、同時に何處まで戰ふかを決するは國家の自由であつて、若し其必要がないと見たなら、必ずしも遙々歐洲三界まで出兵しなければならないといふものではあるまい。

私は内的生活即外活生活なりと主張するものである、内に充實しないで、外に光りの溢れる譯はないと信ずるものである、劍は富がなくんば揮はれず、富は國民の深い自覺なくんば作られすと言ふものである、國民自覺の問題は今は觸れないが、日本の內容は果して充實してゐるといはれやうか、日本の富は能く自由自在に其劍を揮ふことが可能やうが、私は日本國民は此際日獨戰爭は畢竟するに歐洲戰爭の傍生物（サイドイッシュ）である、歐洲戰爭に對しては最も嚴肅、最も莊重なる觀照態度を以て觀察し批判し、そして新なる教訓を得て、國民自ら新にし、以て世界的帝國を造るの思想的基礎を創造せねばならぬとするものである。

歐洲出兵論は之に反して外的生活即內的生活であるとする舊式の信條ではないか舊式の帝國主義ではないか、舊式の國威國權主義ではないか察するに歐洲出兵論にも自ら二個の意味があるやうだ、一は此機に乘じて日本兵の勇武を歐洲に輝かし、且つ日本兵の訓練あり紀律あり節制あり所謂王者の師たる實を示して、東方この文明の國あるを野蠻の歐洲に明にせんとするのに在る、一は日本にして青島陷落のみを以て滿足すれば、來るべき平和會議に於ける日本の位置は、猶伯林會議に於ける希臘、土耳格の如く、全局に關しては容喙する能はず、唯極東一局の問題に關してのみ發言權あるに過ぎざるは、如何にも殘念の次第なれば、此際形式的なりとも歐洲に出兵して以て世界的發言權を得たいといふに在る、二者其間に多少色彩の差異はあるが歸する所は共に舊式帝國主義の虛榮に過ぎない、薔薇の在る處、土自ら香し、桂園の花吹く處風なきも自ら人を薫するといつて、私は歐洲出兵などいふ無理をしないでも、そして重ねて日本は好戰國なりとする世界人の印象を深くしないでも、日本にして其內的生活が充實し其內容が豐富に偽れば、自然に世界を感化し萬邦をして國風を仰がしむることが可能るのではあるまいか。

大なる日本人の上に建てられた大なる日本帝國でなければ、決して石の上に立てられた家ではない。

知らず論者は歐洲の何處に出兵する積りなのであらう乎、日英同盟條約は日本が歐洲に出兵するの義務を認めては居らぬ、故に日本が條約上出兵の義務のないのは言ふまでもない、私は日本が波斯に出兵することさへ考へものだと思ふ、最つと露骨にいへば、私はアフガニスタンなり露國なりが印度に侵入した場合には出兵するに異議はない、何んとなればこれは條約上の義務だから致方がない、然しながら私は日英同盟を極東に限局せず、更に印度に擴張したのが果して日本のウイズドムであつたかを疑ふ一人なのだ、土耳格に對して波斯を守るのなら未だ無事だが歐洲戰爭は固より他日それが轉化して英露の衝突と偽らぬとは限らない日本は現在の條約でさへ印度に於て露國と戰はねばならないのに、若し同盟を假りに波斯にまで延長したとすれば、波斯に於ても亦露國と戰は

ねばならなくなるではないか、日本の利益は露國と戰はないことである縱し同盟はしないまでも、露國と親密を重ねることである、然るに若し他日英露が衝突するとせば、それは土耳格、波斯、印度方面に於てするは言ふにや及ぶであるとすれは、人は二人の主に使ふる能はずで、英に使へん乎露に使へん乎（使の字語弊あるも）といふ進退兩難に陷るであらう、英に與みせん乎、露と戰はざるを得ず、露に與みせん乎、英と戰はざるを得ず、忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛の進退維れ谷まる、日本は眞成に進退に窮らざるを得ない、知らず日本は歐洲の何處に出兵する積りなのであらう乎。

露西亞に出兵するは比較的に容易である、一線の西伯利亞鐵道直ちに大兵を浦鹽斯德からペトログラードに送られる、私は英國が日本の露國に出兵するに反對すとはいはない、私は或者の言ふが如くに、英國は露國が東歐西亞の大强國と爲つて現はるゝを喜ぶものではない、露獨共に最後の一人まで戰ふて、龍疲れ虎亦苦しむを望むものだとは言はないが英佛兩國の日本に要求するは佛國に出兵するに在るは、ピションの說でもヂロンの論でも明に讀める、日本の出兵論者の意味する所も亦此に在るやうだ。

何うして佛國に出兵する積りだ、私は英國のサウスアンプトンから馬耳塞を經て日本に歸つたのだが、客船が一隻で航海するにも四十八日を要した、勿論出兵するには一々途中の港に入る必要はないかも知れないが、多數の運送船で二十萬にせよ五十萬にせよ、斯かる大兵を送るには必ず更に多くの日子が費かる、蘇士運河は果して終始無事であるといふ保障があるであらうか、若し蘇士運河が破壞され閉塞された場合は喜望峯を迂回せねばならない、喜望峯を迂回すれば、客船で日本から英國に達するに三月費かる、そして斯かる大兵を送るには數百萬噸の船舶を要する、日本の船舶全體を徵發しても足らない、各國の船舶を徵發せねばならない、日本の通商貿易を何うする積りなのか。

或は加奈陀を經て送兵するかも知れないが、さうなれば晚香坡まで太平洋を船、晚香坡からハリハックスまで米大陸を汽車、更にハリハックスから英國又は佛國まで太平洋を船に由らねばならない、米國が之を傍觀し默認してゐるか否やも問題だが、何にしろゲンジスカンもチムールもシーザーも跣足で逃げ出す古今未曾有の大遠征である、そして傷病兵を後送し、更に兵士を補充し軍需品を前送するが爲めには、斷えず無數の船舶の往來旁午たるを見ねばならない。

夫れからマア金を何うする考へなのだ、日本にして苟も歐洲に出兵すとすれば、それは國防の必要上歐洲に出兵するといふ理由でなければならないが、それならば日本國民が租稅と內債と外債とを以て其費用を負擔する覺悟がなければならない、英佛兩國は苦しいから或は外債の募集に應ずるかも知れないが、日本は今や戰爭は財政的に不可能なる位置に居るは、各財政家の盡く一致する所だ、日本國民は今尙日露戰爭の戰時稅に苦しんでゐる、更に重稅を課せられやうか、戰時公債の募集が滿足に可能やうか、苟も何十億といふ戰費を要す、縱ひ戰費は出來るとするも

國民が戰爭を要求するのでなければ、政治家たるものは妄りに戰爭に闖入すべきものではない、況や財政上戰爭の不可能なるに於てをや。

若し夫れ戰費は英佛をして支出せしめんといふに至つては、私は絕對之に反對せねばならない、抵死反對するより外はない、是れ日本兵を以て英佛の雇兵と爲すものだ、說明するまでもない、徵兵制度を以て好むも好まざるも兵役に就かねばならない日本國民は絕對、抵死、之に反對するより外はあるまい、英佛の新聞紙には日本兵を雇入れると書いてある、雇はれて堪まるものか。

獨逸は深刻なる復讐心を有つてゐる、日本は之に備へねばならないといふ、私は青島陷落て差引きだ帳消しだと思ふが、日本が獨逸に備へねばならないといふことは合點が行ける夫れには我海陸軍を擴張し(然かし私は二箇師團增加には贊成しない)充實し整理し改善するが絕好の手段である、そして先づ大に財政の改革を行ひ、國民の內的生活を充實するのが更に最好の手段である。

君主主義は徹底すれば、民本主義に到着せねばならない、民本主義を徹底すれば、君主主義に到着せねばならない、自治主義と合一する專制主義は即ち新專制主義、專制主義と合一する自治主義が新自治主義、國家經濟を世界經濟(保護主義と自由貿易)の上に立てて世界經濟を國家經濟の上に立てるのが、第三經濟主義エルウバッハー氏曰く「國家主義と個人主義とは合一し得るものなり、而して能く此二者を合一し得た國家こそ世界の競爭に於ける優者たり得るものなり」と、先づ日本國民を大ならしめよ、先づ日本國內を充實せよ、個人の發展を主としたる新しき國家を造れ、これあつて始めて新帝國主義の實現が可能るのだ、先づ劍と肉と靈、軍備と富と思想とを合一合流せしめよ、國威國權は自ら八表に光被せん、皇威は自ら宇內に遍ねからん。

昔し宋の蘇軾は書を神宗皇帝に奉りて曰く「臣願ふに方今の憂は外にあらずして內に在り」と、私は此世界の大戰の時に於ても、兵塵天地に滿てる日に於ても日本の憂は外に在らずして內に在りと言はんとするものである。

華山曰く、私は「中央公論」の一月號に「新しき世界將に生れんとす」と

題する論文を書く積りではあつたが、十二月に執筆する用意は少しも無かつた、然るに突然の要求で何を書いたらと苦しんだが、筆を執つて見れば、思ふよりは産むが易しで、水の流るゝが如く、スラ〳〵と書けて了つた、私は此度一時閑散の身に爲つたから、伊豆の修善寺方面に湯治に出掛け、新年號の筆を試みようとしてゐる、最早戰爭論ではない、思想論である、人生問題である、去れども時節柄鮮血の紅を帶びてゐる思想論人生問題である、政治的經濟的哲學である、私は夫れでなければ、活ける思想論ではないと思ふ、唯書物を生呑活剝し來つた思想論は死せる思想論、人生から遊離した人生論に過ぎないのではありますまいか、讀者諸君。

大正三年十一月十六日夜

大正三年 文壇概觀

相馬御風

今年の文學界で最も著しく耳目に觸れた現象は、矢張りヨーロッパ近代文學の名著傑作の梗概を、馬鹿げて安い値段で賣る叢書類のうるさいほど多く出版されて、それがいづれもがなりの賣高を占め得て、出版界の新流行を成した事である。之れは一面一般讀書界の現狀が經濟的に不景氣である事を示す事實であると同時に、他面に於てヨーロッパ新文藝の趣味が、わが國の青年男女間にいろ〳〵通俗化しようとする傾向を示す事實であるとも、見做す事が出來る。かくの如き皮相的な歐洲近代文藝の輸入が、わが國の讀書界なり精神界なりに對して、結局如何なる影響を與へるものてあるかは、今俄かに明言する事が出來ないけれども、兎にも角にもわが國の青年男女間に、從來の趣味的要求以外の一種の新要求の起りつゝある事を此の現象が暗示して居る事だけは疑ふ事が出來ないと思ふ。それは以上のやうな西洋文藝の梗概なり飜譯なりの叢書類

が、可成に賣れ行きが好いのに比べて、日本特産の文學的創作の出版物があまり其の賣れ行きの少なくなつた事實に徵してもわかる。無論さう云ふ現象を呈するに至つたのには、安い物が多く賣れると云ふ經濟的な原因が一方にあるにちがひないが、併し單にそればかりが唯一の理由であると云つて見くびつて居るわけには行かない。もつと立ち入つて內容的に現時のわが創作物の賣れなくなつた理由を反省して見る必要が充分にあると思ふ。

かう云ふ賣れるとか賣れないとか云ふ外面的な現象を外にして考へて見ても、近頃のわが國の小說や戲曲が、其の魅力に於て甚だしく稀薄である事は、僕等みづからの切に感じつゝある事實である。たゞに讀者たる僕等にとりて近頃の多くの作品が魅力が乏しいと云ふだけでなく、それらの作品を產出する多くの作家それみづからが、果してどれだけの緊張し充實した心持で創作をして居るかゞ甚だしく疑はしい事である。自分自身の生活が藝術を生み出すと云ふよりも、藝術が作者を引きずつて强ひて製作をさせて居るらしい樣子が、多くの先進作家の上にあり〱と見えるやうな氣がしてならない。

ある一人の作家は最近公にしたその作品集の序文で「私はたゞ生きてをるから生きてをる、と云ふやうな曖昧な態度で過ごして來た過去を呪はずにはゐられなくなつた。生活の記錄とか人類の證書とかを作る事その事に偉大な價値を置いた過去の私が厭になつた」——かくの如くして一の大なる破產を經驗し、更に新らしき建設の熱意を把持して來たのが今の自分であり、その所謂「建設の熱意を持つて生活の表現」が自分の今の藝術でありたいと云ふやうな告白をして居た。

それを讀んだ時僕は思はず自らかう獨ごつた。「さうだ。建設の熱意！その建設の熱意を自分自身の生活に向つて持つものでなければ、到底他人を動かすほどの作物を生む事が出來ないのだ……だが僕等は今のわが創作界で幾人さう云ふ作家を見出す事が出來るだらうか。

かう云ふ疑問を先き立てゝ今のわが創作界の誰彼を思ひ浮べると、僕は謂ふところのグレートネームズを以て目されて居る殆んど凡ての作家が、人として既にある程度までの諦めらしい滿足と安心とを得て居る。そして今はたゞ一種の惰力と職業的必要とによつてのみ動いて居る人達である事を思はないでは居られぬのである。彼等は今なほ謂ふところの人生の觀察玩味を止めない。けれどもそれは切られた蛇の尻尾の動くが如き惰力的運動にしか過ぎない。これまでに得て來た

尺度と習慣と熟練とによつて動いて居る以上何等積極的な要求があるのではない。外迫的な誇榮心と物質的生活の必要とが最も主なる彼等の製作動機なのである。隨て嘗てはそれが彼等自身の生活であつた事を忘れて少しでも熱烈な要求によつて動かしつゝある者を見れば、それがまるで不自然なうそ事のやうに言ふ事をすら敢てしつゝあるのである。かくの如き作家から僕等は何ものをか得られようぞ。何ものをか期待されようぞ。

底に「建設の熱意」を持つた作品でさへあるならば、その表現が官能的であらうが、主情的であらうか、主智的であらうが、陰鬱であらうが、光明的であらうが凡て積極的に僕等の生活に何等かの影響を與へずには置かないであらう。しかし生活そのものゝ沈滯狀態からは、決して〳〵力ある藝術は生れないのである。

かくの如き見地から最近のわが創作界を見渡して、僕はかの『底の社會へ』の著者小川未明氏と、『女のなか』の著者中村星湖氏と及び相馬泰三、豊島志雄、村山勇三の三新作家以外に、これと云ふ熱意ある作家を見出す事の出來ないのを悲しむものである。『毒藥を飲む女』等の作に於て著しく力強い客觀的現實描寫の技能を發揮した岩野泡鳴氏の如きもあるが、僕にとりては岩野氏の作品はその評論に於けると同じく、作者の生活の底に裏付けられた自滿自足の冷たさ固さの反撥性を思はせる點に於て、兎角藝術的魅力の乏しさを思はせるのである。岩野氏は要するに藝術そのものを造る人でなくして、藝術の材料を供給する人である。岩野氏の評論には多くの思想の材料がある。岩野氏の小說には多くの小說の材料がある。此の點に於て氏も亦今の文學界にはなくてはならぬ人である。『天滿宮』『鱧の皮』等の作に於て讀み心地の好い文章とライト、ペーソスを持つた好個のライト、リテラチユアを提供した上司小劍氏も或る種の讀者にとりては大切がられる作者であらうと同時に、今の文壇の沈滯傾向をうまい工合に利用し得た作者である。

それにしても嘗てはわが文學界に未曾有のショックを與へた正宗白鳥、谷崎潤一郎二氏の作風が、漸くその

各自本來の根强い要求から游離しつゝある傾の著しくなつて來た事はかへす〳〵も殘念である。わけても正宗氏の嘗て表現しつゝあつた深い〳〵生活要求の行方に向て、僕等は今なほ多大の愛着を感ずるのである。

評論界に於て所謂「結論よりも過程」を重大視して、現實生活の改造乃至更新の道程に力强い歩みを運ばうとする一派の傾向の著しくなつて來た事は、最近の文學界に於て僕等の最も大なる歡びとする現象である。此の意味て僕等は大杉榮、長谷川天溪、田中王堂、三井甲之、生田長江、岩野泡鳴諸氏の努力に向つて多くの共鳴を感じ、ヨーロッパ近代思想の熱心なる解説者としての中澤臨川氏に向つて厚い感謝の念を禁じ得ないのである。更に四五の新進評論家の間に暗默の間、新しき論理的批評とも云ふべき態度の一致を見るに至つた事も、少なからぬ歡びとする所である。阿部次郎吉江孤雁、片上伸等の諸氏が、上記の人々とは全くかけ離れて、自家獨特の觀照的統一境を求めわびて居る事も、時代思潮の半面として注目すべきである。

* * * * * *

から云ふ風に述べて來りつゝも、僕は矢張り最近に於て最も深く、最も强く、僕自身の生活の根柢を動かした問題の提供者として、最近に於ける島村抱月氏の生活そのものを擧げないでは居られないのである。百の作品、千の評論以上に、島村抱月と云ふ一個の人の生活が、僕自身にはさま〴〵の痛切な問題を考へさせてくれた。その事については他の雜誌にやゝくはしく論じて置いたから、こゝにはそれを繰り返さないが、兎にも角にも島村抱月氏の最近に於ける生活は、わが文學界が容易に得る事の出來ない悲壯な活戯曲であると云ふ事だけを明言して置きたい。現實の問題に深く苦みつゝある人の生活に對する興味は何ものゝ興味にもまさる。(十一月十七日)

亡國的教育を排して興國的教育を奬む

慶應義塾教授　向　軍　治

總論—國民教育の本旨

教育には絕對的のものと相對的のものとあり得る。人間と云ふものは斯くの如くに敎育すべきものと云つて、時と處とに拘らず抽象的に見た人間を目的として敎育論を立てると云ふ事も無論出來るのであるが、時と場合とを參酌して限られる區域にある人を目的とする敎育、即ち相對的の敎育が、實際上の議論としては吾人に取つて最も興味ある問題で、又我國の現狀から云へは最も急を要する事柄であると思ふ。

人間の腦は智、情、意の三つの働きを兼ねて居つて此働をなす精神が身體の中に宿つて居るが故に、智を目的とする智育、情と意とを目的とする德育及び體育を平等に施さなければならないと云へば、之は抽象的の議論で、如何なる場合にも當て箝まるのであるが、それと同時に斯くの如き空漠なる議論は我國目下の狀態から云ふと、餘り効能はないのである。

世間では動もすれば忠孝と云ふ德は日本人獨得の長所であるが故に、此寶を保有すると云ふの目的から特に忠孝の敎に力を入れなければならないと云ふのである。成程已に有つて居る寶を保存したいと云ふ上から之を失はないと云ふ事に十分注意すると云ふ事は必要な事であるが、國民敎育と云ふものは必ずしも已に有つて居る寶を保存する事を目的としなければならないと云ふものではない。何れの國家と雖も其國家を偉大なる民族に作り上げたいと思はないものはないであらう。個人の敎育でも千遍一律に施すべき普遍的の部分があるが如くに、國民の敎育も何れの國民にも備はらざるべからざる敎育を與ふると云ふ意味の敎育が無くてはならぬ即ち國民敎育は先づ人間としての敎育を最も大切なるものとし、次に各々の國民の特有となるべき性質の敎育に力を向けると云ふ順序でなくてはならぬ。

一體國民敎育と云ふものは、國民全體を一大團體と見做して與ふる敎育で、國民間各個人に共通なる性質を養成すると云ふ事が主もなる目的でなくてはならぬ國民全體が常に共同一致して何事に於ても同じ主義を

以て同じ方向に進むやうに仕上げやうと云ふ事が國民教育の大眼目である。故に國民教育は或意味に於て平凡教育で、各個人特殊の發達を許さない。特殊教育に於て何かの專門に熟達する事を目的とするに反して國民教育に於ては成るべく異を去て同を求め、圓滿なる人間を作り上げると云ふ事を主にするのである。此意味から云へば或民族が獨得として持つて居る性質は國民教育に於ては、尊重する必要はあるが、全力を之に注ぐと云ふ必要はなくなる。何となれば自ら有して居るものは力を用ひなくても獨りでに發達するからである。故に我國民が忠孝の德に於て特に世界に冠たりと云ふ事が事實であるとすれば、忠孝を尊重するとは無論であるが、力を用ふる事は忠孝以外の方面に最も多きを要すべきで、忠孝の方面は消極的に其亡びるのを防ぎさへすればよいのである。例へば身體(からだ)の姿勢について云つても右の肩の體裁が非常によいが左の肩の具合のわるいと云ふ人であつたならば、國民教育に於ては其右の肩の秀てゝ居るのを大いに發揮せしむべしと云ふよりも、左の肩の足らざる所にウンウンと力を入れて、右の肩と平均せしむるやうにすると云ふ事の方が最も大切な事でなくてはならぬ。何れの德を進める上に於ても決して落度はないが、殊に此種の道德には力を盡すと云ふ意味であるならば必ずしも不都合はないかも知れないのであるが、外の道德は悉く野蠻時代其儘である、只忠孝のみが世界に冠たる有樣であるから國民教育に於て忠孝のみのみに大いに力を入れると云ふたならば誰か其愚を笑はないものがあらうか。

總ての德が比較的圓滿に備つたと云ふ曉なら、外の事は捨てゝ忠孝丈けに力を盡すと云ふ事が多少意味のある事になる。外の點に於て後れて居ると云ふ事が我國民の發達の大妨害である以上、其發達の妨害となるものを先づ除いて、之を變じて發達の助けとなるまでに大いに力を盡さなければならない。我國家の位置が平々坦々たる有樣で、別に國民の教育を急ぐ必要のないと云ふ場合なら、缺點を除く事に力を用ふることも必ずしも慌てゝ騷ぐに及ばないかも知れない。已に缺

點があつてそれが國民の發達の大妨害となり、而かも國家の位置がなか〳〵安心が出來ないと云ふ場合にありとすると、第一に着手すべきものは、よい方の發達に力を入れるよりも、わるい方を矯めて之をよいものにする方に力を入れなければならぬ。生活は戰鬪なりと云ふのであるが、個人の生活でも、國民の生活でも皆敵に對する覺悟でなくてはならぬ。軍隊に取つて最も憂ふべきことは全體の兵力が弱いと云ふ事よりも一方面に大いなる弱點があると云ふ事である。中堅は非常に強いが左右翼が弱いと云ふ軍隊であれば、敵は先づ弱い左右翼に乘じて來るのであるから、強い中堅も挾撃になることになつて用をなさない。個人でも國民でもいくら一方に長所があつても片一方に短所があれば、敗れるのは短所の方から初まつて來るのである。千丈の堤も蟻の穴から崩れると云ふのであるから、缺點を除くことに注意すると云ふ事は教育上個人に關しても國民に關しても最も大切な事である。

故に興國的の教育を論じようとすれば勢として先づ我國民に如何なる缺點があるかと云ふ事から研究してかからねばならない。今左に之を列擧して見やうと思ふ。

第一　文字の教育

人間の禽獸に長じて居る所以は比較的完全な言語文字を持つて居るからである。言語文字がなかつたならば、同じ時代に於て横に發達することも出來なければ時を前後にして縱に發達することも出來ない。現在我等の見て居る禽獸が何年經つても左程著しい變化をなさないのであるが、若し人間に意思を通ずる手段が缺けて居つたとすれば人間社會の發達も今日の禽獸社會の有樣と大した違ひはあるまいと思ふ。思想傳播の具を備へて居ると云ふ事は啻に甲の智識を乙が學び得ると云ふ利益があるのみではなくて、乙は學んだ智識を基礎として更に之に己れの發明を加へ、之を丙に傳へると云ふ利益があるのである。人間に發明工夫する力が無いものであるなら、意思を傳へる手段を持つて居つた所で大した發達は出來ないのであるが、發明工夫

の力を持つて居るのであるが故に、之に傳授の手段を加ふれば其兩つのもの丶相合した所のものは偉大なる力となつて人類社會を開發するのである。言語は思想を傳へる爲めの手段であるが、現在の人類社會に於ては言語は只傳へる働をなすのみでなくて、言語の助けを籍らなければ思想が立てられないと云ふ位にまで思想と言語の關係が密接になつて居るのである。從つて發達したる思想のある所には發達したる言語のあると同時に、發達したら言語のある所には發達したる思想が又必らず伴ふ者である。之に反して言語が不明瞭て、思想傳播の用も十分に足すことが出來ないと云ふ場合に於ては其不明瞭なる言語は又思想をして不明瞭ならしめる虞があるのである。我國に於ても東北地方の人は言語が甚しく不明瞭なのであるが、東北人の頭腦を解刻して見ると、言語が不明瞭な丈けてはなくて、其不明瞭の言語の裏面には不明瞭なる思想が潛んで居るのてある。之は明瞭なる言語によつて頭腦が啓發を受けないので、發達すべき頭腦も發達しないで濟むと云ふ事から生じて來る現象である。此點から云へば言語の發達して居ない國は言語の發達して居る國に比べると文明の程度が低いと云ふ事が立派に云はれるのである。

發達しない言語と云ふ言葉の中に種々の意味があり得る。未開の民の有つて居るやうな、言葉數の少い、思想の組立ても不完全で、言ひあはした方が甚しく幼稚であると云ふ意味の發達しない言語と云ふ事もあり得る。又我國の如くに元來發達し得べき言語であるのが等閑に附せられた結果として丸で發達しないで居ると云ふ事もある。我國の言語には二大潮流があるやうに思はるゝ。一は南方から持つて來つた言語で、今のアリアン語即ち印度歐羅巴語の系統に屬するものである。今一つは朝鮮方面から輸入された言語でアリアン語系統の言葉に比べると著しく廻り遠い、弱い、從つて優美の外觀を備へて居る語である。普通日本人の話す俗語は朝鮮系統の語ではなくて今の印度の俗語と最も緣の近い言葉である以上、サンスクリツトに緣を引いて居るに違ひない。朝鮮語系の言語は上つ方の言葉に殘つて居るのと、所謂大和文學に保存されて居る外は消滅したものと見た方が正しいやうである。其代り南方から入つて來たアリアン語系の言葉は日常生活に用ひらるゝ丈けで古來文學の方面には發達しなかつたやうである。僅かに德川時代に於て俗文學に此言葉が用ひられて居るのである。若し我國の文明が朝鮮を經て來た佛敎によつて開發せられ、殊に德川時代になつて漢學が勃興したと云ふ事がなかつたならば、我等の日常用ふる俗語も、社會の文明の進むにつれて發達

した筈であるのであるが、日常生活の外は悉く佛教語又は漢語を用ひた結果としてアリアン語系の言葉は僅かに日常生活にのみ存して居ると云ふ有樣であるらしい。今日の精確な思想をあらはす言葉としては我國の未熟な漢字よりも、廻り遠い大和言葉よりも、我等の日頃用ふる俗語が最も發達し得べき傾向を備へて居るのであるが言葉の言ひ廻はしに於ては上述何れの語系たも劣らない辨に言葉の數が少いと云ふ缺點があつて事實上用の足りない事が多い。此俗語の研究が十分に出來ない、否過去に於て全く拋棄してあつたと云ふ事が今日我國の言葉を紊す上に於て非常に力があるのである。全く語脈の違つて居る言葉なる俗語と、大和言葉と漢語及び佛語とをゴッチャ混ぜに用ふる結果として、現在の青年の用ふる言葉は著しく明瞭を缺いて居る。思想の筋道が十分に立たない。言ひ廻しの極めて拙い、誤解を起し易い、不完全な言葉が、新聞にも雜誌にも書かれるのみでない。舞臺の上で役者の口にまで上ぼされる。言葉を斯くの如く不完全な有樣の儘て置けば、之が思想の發達の妨害となること夥しい。故に言葉の整理をすると云ふ事は一日も忽かせにすべからざる事であるが、無學なる文部省は實際上有効なる方法に於て言葉の整理に着手する事を知らない。言葉の教育は小學校から始めるのであるが、小學に於ける言語の教育法が丸で間違つて居る。

兒童が小學に入るや否や直ぐに文字を教ふると云ふ事が大間違である。最初は先づ言語を教ふべきてある。方言の差異があり、發音の間違があり、不精確な言ひあらはし方があり、いろ〳〵な缺點を兒童等は家庭から學校へ持つて來るのである。學校に於ては第一に生徒の言葉遣ひの統一を計らなければならないのである。不精確な間違つた言葉遣を改めさせなければならないのである。精確な言葉を比較的よく覺えた後に其言葉を基礎として文字を敎ふるのでなくてはならぬ。然るに言語の教育の事を丸で知らない文部省の下に働く敎員等は、ハタと讀むべき言葉をハー、ターと兒童等に讀まして見たり、又ハを強く云ふのかタを強く云ふのか其區別には少しも注意をせず、二つの音を平坦に並べて發音するのであるか、或は二つの音が急に相迫つて發せられるのであるか、さう云ふ發音の區別などには今日の小學は丸で注意してはゐない。其結果「お父さんアメが降ります」と云つてメを強く云ふ兒童もあれば「クモが空に出ました」とクの字を強く云ふ兒童もある。現在の小學生徒の中には小學校風の言葉と云ふものが出來て居る。之を改良しようと云ふには先づ敎師の言葉から改めねばならぬのである。即

ち師範學校の教課の中に日本語科を設けて未來の教師となる學生に日本語の研究をやらせ、教員となる資格の中に言葉遣を入れると云ふ必要がある。

我國の言語の發達しない所以は主もに文字にある。文字が六づかしい故に學問のないものは他人の思想を學ぶと云ふ機會が少い結果として思想が發達しない。是に於て自分の用ふる言葉は日常生活の言葉の外に出ない。教育のあるものは六づかしい文字を用ひて其文字によつて作り上げられた思想の中に生息して居るが故に日頃用ふる言葉は只挨拶と用を辨ずるとに止めて置いて、少し込み入つた事は皆六づかしい文字にあらはすと云ふ事になつて居る。文字を容易くすると云ふ事は思想の懸隔をなくすると云ふ事に非常に助けになるのである。學問と云ふものは只學者が理屈を云ふ爲めにすべきものではなくて、結局は人生の實用を目的とすべきてある。故に學問の貴き所以は少數の學者が秀てた智識を持つて居ると云ふ所よりも其學問に於て認められた眞理が社會に普遍的に行はれると云ふ所にあらねばならぬ。即ち思想平等主義である。此目的を達せんが爲めには文字を容易くして何人でも容易に高尚な思想を窺ひ得るやうにしなければならぬ。今日は文字が思想傳播の妨げをして居るのである。之れ現今の文字を排せざるべからざる第一の理由である。

漢字はもと象形文字であるが、現在の漢字の多數は音標文字になつて居る。之は支那のやうに總ての字を音で讀む國に於て現今の漢字の多數は音標文字であるといはれるので、我國の如くに訓譯して讀む事になると、字々悉く象形文字であると云はねばならぬ。從つて文字と發音との間に連絡が無くなる。文字と發音との間に連絡がないと云ふ事は文字を覺える上に於て非常な妨害になるものである。元來文字は只言葉をあらはす符號に過ぎないのであるから言葉の音の儘をあらはす文字であれば容易く之を覺える事も出來、又一旦覺えたものは決して忘れるとは出來ないのであるが我國に於ける漢字のやうに文字と音とに連絡が無くなると覺えるとも六つかしければ又覺えても忘れ易いと云ふ損がある。人間は習慣に囚はれるもので從來何十年の間か漢字のみを實として居つたものが、俄かに羅馬字綴を見ると羅馬字は不便利で困ると云ふのであるが何が不便利なのだか少し考へて貰ひたいものである。羅馬字にすれば二十六字さへ覺えればどんな文字でも讀めもすれば綴れもする。然るに漢字は先づ音と形とを習つた後でなければ何と讀むべきか、如何に綴るべきか、たより所はないのである。此位不便な文字はあるまいではないか。

不便であるの何のと云つて見た所で外國語をやつて居る人なら羅馬字綴りは即座に讀める。若し我國が從來羅馬字を用ひて居る國であつたとして、新たに漢字の運動が起つて漢字で綴つてあるものを見たら一人も即座に讀み得るものはあるまい。便利とか不便利とか云ふ問題ではない。羅馬字であれば便利とか不便利とか云はれるのである。我國の文字の中でも假名の外は遣はないと云ふ事にしさへすれば小學の兒童がどんなものでも讀む事も出來れば書く事も出來るやうにある。羅馬字を入れるのが嫌とならば假名を用ふる事にしてもよいではないか。今の老人は已等が其漢字を不完全ながら今日の程度に覺える爲めに若い時からどれ程心血を濺いだかと云ふ事は棚に擧げて置いて、今の學ぶ事の多い青年に向て漢字の智識が何うの斯うのと生意氣な事を云ふ。理屈を推して考ふれば兒童の時からあれ程久しくやつて居る癖に今の老人などの漢字の智識淺薄な事驚くべきではないか。漢字を本當に精確に遣ひ得る人間が今の老人の中に幾人あるのであるか。

兒童の發達が妨げらるゝと云ふ事は一國の文明の進歩が妨げらるゝと云ふ事である。今日の我學の中學卒業生の頭腦の幼稚なのは文字の教育の不完全な結果である。思想は文字によつて傳へらるゝので、文字を知ることが少ければ思想も同時に貧しい。況んや文部省が漢字を恐れて小中學に於て敎ふる漢字の數が少い結果として今の學生は一層不完全な言語を持つて居る。此敎ふる漢字の數の少い理由は何處にあるかと云へば誤解したる教育學にあるのである。西洋の音標文字の國で、語り分け聞き分けする事の出來る字は讀み分け又書き分けする事が出來なければならないと云ふ言語文字の授業法がある所から、之を音標文字でもない漢字にまで誤つて適用したのである。音標文字であればこそ語り分け、聞き分けする事の出來る字は又容易く綴り分けが出來るのである。音と何等の緣のない文字は假令口に語られても紙に寫される筈はない。故に漢字を用ふる以上彼の授業法は全く採用せられないので、多數の文字は只讀むに止めて置く。見て讀めさへすればよろしい、書くのは其中の幾分かて澤山てあると云ふ事にしなければならないのてある。西洋流の授業法が實行したいとならば文字を音標文字に改めるか、文字が象形文字てある以上は西洋の善美を盡した授業法も採用しないと云ふ事か、何れかにしなければならないのてある。明治十八年に日本へ渡つて來た獨逸人

が人力車を見て人間を馬の代りに使ふのは殘酷である、野蠻であると云つて罵つて、自分は馬車に乘つて飛び廻つた。すると其頃の道路であるから今日のやうに巾が廣くない。直きに馬車の一方の車が往來の泥溝に簇まり込んで今少しして大怪我をすると云ふ目に逢つた事がある。翌日其獨逸人の云つた事が面白い。成程日本では人力に限ると。いくら文明の授業法でも之を用ふるに適當しない野蠻の文字が採用してある以上適用の場所が無いのであるから、馬車を人間に率かせると云ふ馬鹿げた事が出來て、其結果は兒童の智識が發達しないと云ふ事になる。

小學校では先づ假名から覺えて行く。然る後漸然漢字を覺える。一寸聞くと大變に旨く出來て居るやうである。が、其實之れ位間違つた馬鹿げた敎育法が無いのである。先年支那の敎育當局者が日本の普通敎育の發達を見て羨ましがつて、お國では假名があるから普通敎育が十分にやれるが、小さい兒童の時から漢字を敎へなければならない我國では普通敎育が普及させられないと云つて零した事がある。支那人は假名が無いが故に漢字全廢の必要を感ずることが切である。我國ではなまなかある故容易に人が漢字の不都合を語らない。歐羅巴や亞米利加の兒童は小學校に入つて第一日から學んだ言葉といひ文字といひ生涯之を用ふる言葉及び文字である。例へば犬と云ふ字をdogと學んだとすれば、年を取つても矢張りdogと綴るである。然るに日本の兒童は小學校に入つた最初には之をイヌと假名で綴る、年を取ると犬とか狗とか云ふ字に代へる。小學校は間渡し言葉、間渡し文字を用ふる所である。こんな馬鹿な仕組をして居る所は文明國では世界中僅かに日本より外にはない。貴重な時間と力とを二重に用ふるのである。年を取つて遣はない程なら初めから學ぶ必要がないではないか。小學校では間渡しの言葉丈け敎へて呉れる事を承諾して居る。父兄である以上は兒童の文字に關する智識がいくら淺薄であつても之に對して不平を訴ふる權利はない。間渡し言葉、間渡し文字と云ふ馬鹿げた事をやめて見さへすれば直ぐに

我國の文字の改良の必要が感ぜられるのである。

文明の世の中には文字其儘がタイプライターにも、リノタイプにも載り、又電信にも應用せられると云ふ事でなければ本來の用はなさないのである。此等の用を辨ぜない文字を持つて居るが爲めに商工業に於て我國は日にどれ程損をしつゝあるか知れないのである。漢字と云ふ不便利な文字を持つて居る結果として帳簿の整理が出來ない。無益の骨折の多い結果として事務が捗らない。役人が餘計に要る。あらゆる種類の弊害が之に伴ふのであるが、封建時代の餘習を未だ全く脱せざる、勘定を知らない我國民は日々國民全體のなしつゝある損害には氣が附かないで、之が重い税となり、輸入超過となり、物價騰貴となつた段によつて初めて不平を云ふのである。

日本の學者の研究した事の中にも随分世界に傳へる丈けの價値のあるものが澤山あるのであるが、不幸にして何事を書くにも鎖國的の漢字を用ふる事になつて居るので折角發明した事も廻り遠い方法を取つて上でなければ世界に發表せられないと云ふ事になつて居る。いくらエライ[illegible]を持つた人でも外國語の不十分な人であつたら自分の思想を世界[illegible]すると云ふ事は全く出來ない事になつて居る。折角讀むに足る丈けの著述があつても、又其中に書いてある事が世界の人の注目を惹くに足るものであつても、文字が鎖國文字であるが故に其書物は海外に賣れないと云ふ結果を生じて來る。日本内地丈けで購買力が少い上は賣捌の方に於て一冊の値を高くしなければ勘定が合はないと云ふ事になる。高いが故に買手が少い。賣れないが故に本が出ない。獨逸や英吉利や亞米利加や佛蘭西の本は世界中に賣れるのであるから安く賣ることが出來る。自國の言葉で書いた書物は自國内にしか賣れないと云ふ馬鹿げた有樣で滿足して居ると云ふ文明國は日本の外に何處にあるだらう。日本が世界に發展することの出來ない大いなる原因の一つは文字にある。海外に居る日本人が日本の言葉を忘れ、海外で生れた日本人が日本の言語を學ぶことが出來ず又日本の本や雜誌を讀むことが出來ない結果として、本國の事情に暗いと云ふ事になる。世界到る處に自國語を擴げたいと焦せつて居る獨逸人、英人又は佛人の遣口に照らして考へて見ると我國は鎖國主義を取つて居るものと外は思はれない。口には大和民族を世界に發展させる積りであるといひながら、其爲す所は徹頭徹尾鎖國的である。頭が鈍いのか、人間が馬鹿なのか、到底文明世界の一等國と云ふ價値は無いのである。

世界の文明國の中で、日本語ほど言ひあらはし方に富んだ國語は殆んどないのであるが、其國語が不便利なる文字の爲めに妨げられて發達しない[illegible]。此點のみから云つても文字の改良は必要なのである。況ん[illegible]いに世界的に發展せんことを希ふ以上、一日も早く言語文

學の教育を改めなければならないのである。

第二、道德教育

道德の教育は必ず宗教を根抵に置かなければならぬ。但し其宗教と云ふのは只アーメンや南無阿彌陀佛を唱へ、バイブルを提げて教會に出入し、珠數を持つてお寺に詣でると云ふ事を云ふのではない。哲學的宗教的の思想を根本とした道德教育でなければならぬと云ふのである。小學兒童に哲學上の六つかしい理屈を說いた所で分る筈はない、哲學思想を根據に置くと云ふのは哲學思想を頭から吹き込むと云ふ意味でなくて、習慣によつて之を養成させると云ふ意味である、兒童の母の胎內にある時から哲學的宗教的の感化を與へて生れ落ちて後の家庭の教育に於て、宗教的生活の空氣の中に發育せしめ、學校の教育に於て其思想を一層發達せしめ、社會教育に於て更に其足らざるを補ひ、其結果が獨を愼み、人を愛し、天を畏れ、忠恕の教を守り、入つては孝、出でゝは悌、君に忠にして國を愛す[illegible]どする事に心を用ひるのである。孝行とか忠義とか正直とか克己とか云ふ德は皆心の底に潜んで居る誠を愛する念から來て居るのでなくてはならぬ。兒童の時からの周圍の境遇が悉く統一的系統的の宗教的生活でなくてはならぬ。親が不眞面目な事をして置いて、子供丈け眞面目になれと云つた所で出來る話ではない。昔にも忠臣は孝子の門に出づと云つたものであるが、小なる家庭に於て眞面目な人間になれる人は大いなる國家に對しても又眞面目な人間であるのである。君に對するとか親に對するとか云ふ事は部分的の道德である。根本の原理は人たるの道でなければならぬ。人たるの道は禽獸草木と違つて心を備へて居ると云ふ所に萠して居る。眞心を僞らないと云ふ事が何より先に大切な事である。子供に向つて君に忠をせよと云つて見た處で何が君だか何が忠だか分りはしない。けれども心を欺くことがわるいと云ふ事は數才の兒童でも分る。無暗に念佛を唱へる稽古をさして見た所で宗教的の人間が出來る譯ではない。常に油斷しないで眞心

を専らとして居ると云ふ習慣を兒童の時から養成させさへすればわるい人間になれと云つても先づ出來ない方である。形式と云ふものは精神が亡びて了へば却つて禍をなすものであるが、精神が確固と立て居る所には之に形式が伴ふ方が啻に其精神の爲めに大いなる助けとなる計りではなく、外から見える體裁もよく、心の底の容易に見えない人間同志の交際の中には形式の必要は大變にあるのである。祈らずとても神や守らんと云ふ事は固より間違ないのであるが祈らずとても守る神なら祈れば更によく守ると見て差支ないのである。是に於て禮儀作法の必要がある。宗教の儀式の必要がある。儀式に囚はれる事が弊害であるからと云つて、儀式を全く無視するのは一方の極端から他の極端に飛ぶのである。下手な新教の信仰よりも舊教の信仰の方が遙かに正鵠を得て居る事がある。

我國の今日の教育に於ては、家庭に於ても學校に於ても眞心に復ると云ふ事は誠に少ない。道德の教を頭で學ぶ事と心得て居るのは生徒限りではない。教師も道德の教が耳から吹き込まれると考へて居る人が多い。さればとて今俄かに宗教的儀式を學校で行へと云ふのではない。宗派にもいろ〳〵あつて弊害の生ずる處がある。要するに常に自ら省ると云ふ習慣を兒童の時から養成させるのが必要なのである。自ら省みることは對照物がなくては出來ない。其對照物を兒童の時から早く捉へさすと云ふのが必要なのである。今の日本の青年の多數は此點に於て腦裏が空虛である。故に其生活がスラリと成行いて別に岐路に迷ひ込まない兒童には大した害はないやうであるが、少し迷ふと大抵の兒童は皆不良少年になる。一旦足を不良少年の方面に進めると容易に悔悟は出來ない。是れ皆腦裏が空虛だからである。今回の戰爭で獨逸人の強い事がよく分つたのであるが、獨逸人は戰爭のみに強いのではない商工業に於ても世界中獨逸人に勝るものは亞米利加がある丈けである。斯くの如くに獨逸人の人物のシッカリして居る原因は何處にあるかと云へば、此民族が數千年來養ひ來つた、充實せる頭腦にあるので己る。獨

逸民族は歴史にあらはれて以來二千年になるのであるが、二千年の昔に持つて居つた美質を今日も其儘保存して居る。寧ろ二千年前の單純な頭腦が二十世紀的に厚さに於ても深さに於ても高さに於ても十分に充實せられたのである。獨逸民族の强い所以は其北方に於て成長して外界の感化の爲めに一面には哲學的思索的の人間となると同時に、今一面には天地自然に對する敬虔的宗教的の人間となつた所にあるのである。心が十分に充實して居るのであるから其あらはれた行が悉くシッカリした働となるのである。商工業に向けても、學問に向けても、軍事に向けても、殆んど世界に冠たる有樣である。日本民族も印度の文明を輸入しては之を同化し、又支那の文明を輸入しては之を同化し得たのであるから、何物か確固たる力を民族の腦裏に蓄へて居ることは疑ない。現在の靑年の著しく思想の雜駁なのは惡教育の結果で決して民族先天的の缺點ではない。故に現今の注入的敎育を全廢して感化的薫育に改めて了はない以上、意思の鞏固な、忍耐力の强い、克巳心のある事業に成功すると云ふ國民は到底も出來ない。

廣い意味に於て道德的敎育の區域に屬すべきものは人生觀を改めさすことである。いま茲て人生觀と云ふのは極く卑近な人生觀の事で例へば勞働を卑しむと云ふ如き惡風俗を一掃する如きを云ふのである。日本人は南洋的の要素を日常の生活の上に餘程多く含んで居るのであるが、往古に於て勢力を占めた神武天皇の系統の人種が南洋から渡來したと云ふ結果であるか、今日では未だ確固たる說が無いのであるが兎に角其淺薄なる樂天主義を以て其日暮らしの生活を營む有樣、海濱にありさうな建築の家を鴨綠江の寒い處までも持ち運んで平氣て居ると云ふ此人種は、餘程積極的の敎育を與へなくては其思想の根本から改革すると云ふ事は出來ない事てあらうと思ふ。軍人にすれば强いのてあるが、此强いのも實は其日暮らしの生活と根據を同じくして居るので、外國人の義務を重んずる人が勇ましく生命を犧牲にすると云ふ事とは餘程趣が異つて、武士と櫻花と云ふ考が根本に潜んで居るのである。此心

は國民の經濟的に發達する上に於て大いなる妨げとなる。殊に過去に於ける封建制度が此心を一層增長せしめて或意味に於て日本國民は怠惰な民族となつて居る。必ずしも働く力がないのではない。けれども怠ける。いざと云ふ場合に一生懸命になればなか〱仕事は出來るのである。此人種が封建制度の餘習を脫しない結果として廿世紀の商工業の世の中に生存しながら尙勞働を卑んで下等な腰辨に有り附くことを、確固たる獨立經營の基礎となるべき職業に有り附くことよりもエライ事と考へて居る。此怠惰の風を一掃して了はない以上、我國の如き貧弱な國は武器を執る戰爭には勝つても平和の戰には負ける。此教育は子供の時から埃の多い學校の教場を除掃さしたからと云つて出來る話ではないのである。斯くの如き不養生な事はやらせても害がある丈けて益がない。それよりも大切な事は常に自分の本分を守らせると云ふ事に注意して克己の精神を强からしめるのと、自己の價値を自覺して瞬時も自ら苟くもしないと云ふ獨立不羈の精神を養はじめることから始めねばならない。今日の德育は服從の事ばかりを教へて少しも不羈獨立の自由の精神を養成しようとはしない。自由の精神を養成させれば直ちに謀叛人になるものと考へて居る。斯の如き誤つた思想の下に生育する人間は、壓迫せらるれば一も二もなく服從するのであるが、壓迫が少し緩むと忽ち謀叛人に代ると云ふ虞がある。主義を執つて立つ人間に養成せられたものは外から來る影響には頓着しないで常に自ら持して居るものであるから妄りに屈服しない代りには妄りに謀叛心も起しはしない。今日の我國の德育は全く心理現象を無視した教育法である、若い教師で自ら經驗を積むと淺く、人生を十分に諒解して居らないものが教へるのであるから害の方が多くて益が少い。授業法であるの、教育學であるのと云つて見た所で形式に囚はれた遣り口は利よりも害の方が多い。寧ろ天然自然と云ふか、人間社會と云ふかの教育法授業法に鍛へ上げられた、社會の辛酸を嘗めた老人の方が少くとも小學教育には適當するのである。智識の教育に於て

も學校卒業其儘の若手よりも老人の方が適當であるが、況んや德育の點より考ふる時は今日の小學教員の多數は不適當のものと云はねばならぬ。一日も早く此方面に於ける改良を施したいものである。

金錢を卑しむと云ふ事は封建時代には貴い寶であつたのであるが、商工業を以て國是としなければならないと云ふ世の中では斯くの如き思想は害をなすのみで益はない。健全なる人道心を養成させさへして置けば、いくら生命を尊重する事を學んでもそれが爲めに卑劣な人間となる虞はない。要するに金錢は働きに對する代價であるが故に働かずして金錢を得ると云ふわるい習慣を養成させさへしなければ、働に對する代價ならば多々益々辨ずると云ふ方向に進ました方が安全である。只金錢のみに迷はされない爲めに確固たる信仰を心裡に植え附けると云ふ必要があるのみである。

第三、體育

我國の體育は殆んど無意味である。智識を注入するにも兒童に嫌氣を感じさして無理に詰め込んでも兒童の方で覺えらるゝものではない。食物を喰べるにも旨味を感ずればこそ消化もよくなるのである。まづいまづいと思つて喰べれば折角の滋養物も其効力を半減する。體育も面白い中に運動をすればこそ精神までも或は慰め或は昂奮さして身體の衛生に適するのであるが、體育が一種の課業となつて子供がイヤ〳〵に之を行ふと云ふ事になると、其結果は殆んどゼロになる。故に手足を自由に動かす稽古、或は啞鈴球竿を扱ふ練習をさせると云ふ事は固よりわるい事ではないが、子供等が樂んで面白半分にやると云ふ遊戯が盛んに發達しなければならないのである。然るに我國では火鉢の側で、火にでもあたつて居る兒童は大人しいと云つて褒められる。少し活潑に跳ね廻る子供は亂暴だと云つて叱られる。家庭に於ける斯くの如き教育の中に育つた子供は學校に於て器械的に體育を強ひられるのであるから、體育に對して子供の趣味は全く發達しない。其結果ベースボールとか短艇競爭とか云ふ事は特殊の人の專賣運動になつて多數のものは袖手傍觀すると云ふ有樣である。盛んに運動する人の事は運動屋だといつて寧ろわるく云ふ。グジリ〳〵して學校の課業に齷齪して居る學生を善良な學生と云つて、學校でも斯う云ふ種類の人に優等賞を與ふると云ふ事になつて居る。斯くの如き教育の下には子供は萎靡する丈けである。田舍では土地が廣いのであるから學校外に於ても勞働をしながらいくらも運動することが出來る。都會の設備は不完全であるが故に子供の運動の場所がない。昔は盛んに往來で運動したものであるが、今は自動車や自轉車で危險である

ので法律上許されてもないし、又事實に於て出來もしない。體軀は日に月に虚弱になる。

運動と衞生とは相待つもので之こそ所謂車の兩輪の如きものである。いくら滋養物を喰べても運動してよく之を消化しなければ滋養物は不消化のまゝ皆汚穢の中に入つて了ふ。いくら運動を盛んにやつても運動時間外の生活法が不衞生的であれば運動の効は皆それが爲めに殺がれて了ふ。例へば人力車夫の如きは運動の點に於ては殆んど過度に失する嫌がある。若し彼等が十分衞生的の生活をなして酒色の慾を恣まゝにしさへしなければ米國の運動家にも劣らざる程の健全なる身體が出來るであらうと思はるゝのであるが、無學無智の結果衞生法を丸で知らないので、折角好結果を來たすべき勞働は却て身體を痛める助となるのみである。今日の學生の生活も之と似て居る點が多い。運動はよくやるが其代りに無暗に宴會を催す、或は菓子を盛んに食ふ。或は睡眠不足を平氣でやると云ふやうな、あらゆる種類の不養生が之に伴ふ結果として折角の運動が却て身體の害となる事がある。現今の我國の家庭も學校も衞生の點に於ては餘程缺點が多い。小學校では夏休時分には刷物を家庭に配つて氷を飲ませるなとか、何々すべからず的の敎は澤山出すやうであるが、斯くの如くすべしと云ふ方面に於ては醫學上衞生上根據のある敎は至つて少いやうである。此點に於て大改良を施して市内に澤山運動場を設け大いに運動を奬勵して國民の體軀を根本的に改めて來ると云ふ仕組を立てない以上今後軍隊が腐敗するのみならず、人間も墮落した人間で用をなさないと云ふ處がある。

既に狹い意味に於ける道德、色慾に關した敎育は殆んど絶無である。其結果として青年男女が自ら自殺的の行爲をなしながら之を怪まないと云ふ事が事實に於て見られるのである。其害が學生の多數をして神經衰弱に陥らしめて居る。之は國家の一大事である。是非性慾敎育を學校に布くことにしなければならぬ。又社會敎育を盛んにして現在の無學な父兄を敎育する必要がある。父兄から敎育してかゝらなければ子弟の敎育が効果を奏しない。

結論

要するに今日の敎育は、智育に於ても、德育に於ても、體育に於ても、過去傳來の習慣に囚はれてゐて少しも現在の日本國の位置に適合する敎育法に從つて居ない。縱に日本民族の發達の歴史を明かにし、又世界民族の發達の跡を繹ねて日本國民の嚮ふべき所を定むると同時に、横に現在の世界の趨勢に鑑みて國是から割り出した敎育法を採用しなければならないのであるが、今の當局者は之をなすの能力を持てゐない。敎育を根本的に改めなければ民族の改良が計られない。民族を改良しなければ智、德、體の三育に於て歐米人に

劣る事甚しい國民が未來に進歩し得る望がない。今回の戰爭によつても明かなる如く强兵と云ふ一點のみから見ても頭腦の發達した、意思の堅固な、身體の壯健な國民を作る必要がある。殊に今の戰は武器の戰であるが故に、商工業を盛んにして完全な武器を備へ得る用意をする必要がある。砲臺を築くにしても、飛行機飛行船を備へるにしても軍艦大砲は申すに及ばず、悉く金が先に立つ。先づ國を富ますことからかゝらなければ强い兵隊は養へないのである。佛蘭西兵の弱い所以は一面には風俗頽廢の結果國民の大多數が結核にかゝり兵卒まで健全な人間は少いと云ふ有様であるのと一方には商工業が發達しないで、國力の萎靡した結果兵隊の給養のわるいと云ふ事が佛兵の弱い大いなる原因となつて居る。風俗の頽廢は道德敎育によつてゞなければ防がれない。國を富ませるには克己心の强い、勞働に堪へる忍耐力のある國民を養成するより外にはない。我國の今後の位置は東洋の先覺者たる責任を盡す上に於ても容易なものではない。支那に對する關係印度に對する關係、南洋諸嶋に對する關係丈けでも我國家は一日も安閑として居ることは出來ないのである。况んや少しでも外交の機を失すれば列强と雌雄を爭はなければならぬと云ふ境遇に陷るかも知れない。日清戰爭や日露戰爭の如きは今後の日本の地位より生ずる可能的の戰爭に比ぶれば小學兒童の遊戲にも値しない程のつまらないものである。此大いなる運命を十分に我國に有利なる方向に向けようと云ふには國民は少くとも獨逸國民に劣らざる丈けの根據を持て居らなければならぬ。獨逸國民の今日ある所以は元を正せば國民敎育を刷新したと云ふ所にある。三十年戰爭に貧弱な境遇に陷り、那翁時代に蹂躙せられた獨逸國民が廿世紀に於ては殆んど世界を相手にして戰ひ得るまでに進歩した跡を見ると、我國の學ぶべき所决して少くあるまいと思ふ。如何に强き獨逸國民もカイゼルの拙劣なる政策の爲めに今回の如き不幸な地位に陷られては、恐らく滅亡するより外はないであらうと思ふのであるが、獨逸國民ほどの根氣のない、薄弱な國民である癖に、動もすればカイゼルに劣らざる輕擧妄動を夢みる政治家もあり、外交家もあり、學者もあり、軍人もあると云ふに至ては長大息せざるを得ないのである。大いに伸びんと欲するものは先づ届する必要がある。花見て花を美むな、幹無き枝に花はなしと云ふ言葉があるが大いに味ふべきであらうと思ふ。

(中付一の一)

故 長谷川二葉亭譯

縮刷 **血笑記** 第五版

定價金貳拾錢

珍袖 二五〇頁

日露戰役に於ける露軍敗走の物狂はしき光景を描寫したる、アンドレーエフの血笑記は、同戰役が生みたる文藝上の作品中、最大の榮譽と不朽の生命とを附與せられたる世界的名著にして、今や何人もその名を知らざるものなし。本譯はわが國に於ける露西亞文學のオーソリテイにして、先年露國に客死したる長谷川二葉亭氏晩年の譯筆に成る。

俳書堂 籾山書店

第拾卷 **藏版時報** 第參號 出來

無代贈呈

どなたもモミヤムの「藏版時報」を見落したまふな。毎號の「藏版時報」は皆様にいろ／＼の興味を感ぜしめ、又いろ／＼の利益を思はしめるのでございます。

今度「藏版時報」の第十卷第三號が新らたに出來たのでございます。

どうぞいつものやうに鳥渡ハガキを御遣はし下さいまし、直様郵送致します。

永井荷風著 **歡樂** 非賣品

同好の諸君に頒つ

弊店此度右書籍を同好の士に頒つべく御依頼を受け候ところ、どなたを同好の士と見做すべきやの標準に苦しみ、左記の書籍の孰づれかを愛讀せらるゝ方々へ本書を添附して配本することゝ致候

尙ほ此の配本は大正三年十一月一日より初め申候

永井荷風著 散柳窓夕榮（ちるやなぎまどのゆふばへ） 別名「戯作者の死」 定價金壹圓 郵税不要

永井荷風著 珊瑚集 定價金壹圓 郵税不要

森鷗外著 走馬燈 定價金壹圓廿錢 郵税不要

森鷗外著 かのやうに 定價金五拾錢 郵税不要

森鷗外著 意地 定價金五拾錢 郵税不要

籾山庭後著 遲日 定價金壹圓 郵税不要

戸川秋骨著 そのまゝの記 定價金七拾錢 郵税不要

田中榮三著 森鷗外補 近代劇精通 定價金貳圓 郵税不要

◎如何に御懇望ありとも歡樂のみ單獨には差上かね候事

東京丸の內三菱二十一號館內 籾山書店 振替東京二四一七番 電話本局二一三二番

（中付一の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

出廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■平塚明氏新著

反響叢書第二編出づ!!

評論集 現代と婦人の生活

□四六判三百頁

□定價八十五錢

□郵税八錢

●本書は氏が「圓窓より」以後の感想を輯録せるもの社會問題並に思想問題として多年世界文明の懸案たる婦人解放の自由を絶叫せるものなり氏が深遠なる思索と強烈なる主張とは我國婦人生活の現狀に鑑みて味讀すべく傾聽すべし

婦人評論界の權威

生活改造の根本自覺

□ヂヂーとその母
□職業的婦人
□婦人問題の現狀
□エレン・ケイ女史
□「婦人解放論」
□民衆と政府と
□森田草平氏に
□赤城より
□兩親に
□「生活」記者に
□旅の七日間
□光を思ふ

大好評

小宮豐隆氏著

演劇評論

第一編

四六版四百頁

定價壹圓

郵税八錢

東京本郷元町

日月社

振替東京二八九一四

（中付一の四）

信用ある店舗及び卑猥なる賣藥の廣告掲載は謝絶す



田岡嶺雲、幸德秋水、奧宮健之追懷錄

田中貢太郎

一

明治四十四年から大正元年にかけて、私は懷かしい三人の先輩を失つた。皆世家の同じい高知縣の出身で生前には、夫れ夫れ世話になつた恩人である。

田岡嶺雲、奧宮健之、幸德秋水の三先生が、その先輩であるが、不幸にして、幸德奧宮の二先生は、所謂倶に天を戴かざるの逆徒となつて刑死したので、何をするにも國家に對して遠慮せねばならなかつたが、嶺雲先生のみは骨まで拾つて、心ゆくばかり哀を致す事を得たのは、せめてもの事であつた。

三人の中で、私の最初に知つたのは、嶺雲先生であつた。明治四十年の夏の頃と記憶してゐる。私はその時、二度目に東京に出て來た時で、西大久保の大町桂月先生の玄關に轉がりながら、仕事の口を探してゐると、笹川潔白河鯉洋などいふ人々が、東亞新報といふ新聞を出しはじめた。嶺雲先生もその編輯にゐた。桂月先生も同人として寄書した。私もその新聞社に入れて貰ふ積りで、桂月先生の紹介を持つて、東亞新報社に行つて、先づ嶺雲先生に面會した。身體は小さいが、何處となく精悍な所のある人で、直ぐ隣りの編輯室か

ら、スリッパをつッかけるやうにして應接室に這入つて來た姿は、今に私の眼に殘つてゐる。

編輯局の方は、人が一杯になつてゐるので、その中缺員が出來たら、何とかして遣るといふ事で、私は歸つて來たが、賴み放しにしてゐては、兎ても成功しないと思つたし、桂月先生も時々行つてみる方が好いと云ふので、それから一週間ばかりして、夕方、本鄕森川町の空橋際であつた嶺雲先生の下宿へ出かけて行つた。

その日は、朝から雲行が怪しかつたが、急に降りさうな空合でもなかつたので、傘の用意をせずに行つた。行つて見ると、嶺雲先生は未だ新聞社から歸つてゐなかつた。餘り遲ければ歸る積りで、一寸玄關口に腰をかけて待つてゐると、とうとう大雨になつて、飛沫が庭の內にも這入つて來た。女中は廊下を駈け歩いて、其所此所の雨戶を繰りはじめた。

もう傘無しでは歸れない。嶺雲先生を待ちつけて、傘を借りる事にした。其所へ亭主も顏を出して、兎に角、上つて待つてゐるが宜からうと云ふので、嶺雲先生の室へ通つて待つてゐると、二時間ばかりして、漸ッと歸つて來たが、這入つて來た顏を見ると、何か不快な事でもあるやうな顏だ。夫れは私が、主人の許しを得ずして、勝手に室に通つてゐたのを不快に思つたのであつた。「僕は同縣人だからと云つて、特別に世話なんかするのは嫌ひだ。」と云ひ出したので、むかッ腹立ちの私も、聞き捨てにはしない。「僕も先生が、同縣人だからといふので、お願ひした譯ではないんです。」

二人はその儘默つて顏を見合はしたが、もう二人の交はすべき言葉は無い。私は直ぐ歸つたが、傘を借せとも云へないので、濡れて玄關口を出やうとすると、後から送つて出て來た嶺雲先生が見付けて、「傘が無いかね、」と云つて、女中に命じて蝙蝠傘を借してくれた。借るのは厭であつたが、餘り小膽な男と思はれるのが口惜しかつたので、借る事は借りて來たが、癪にさはつてゐるので、返しにも行かずに、打ッちやらかして置くと、嶺雲先生から、桂月先生に宛てゝ端書が

來た。「君の所の長鋏君が一本しかない蝙蝠傘を持つて行つて返してくれないので困つてゐる。」といふやうな意味の事を書いてあつた。私は桂月先生にさんざ小言を喫つて返しに行つたが、逢ふのは厭であつたから、嶺雲先生が新聞社に行つてゐる留守を見計らつて、下宿へ行つて返して來た。

夫れつきり、私と嶺雲先生との間は、四十二年まで絶えてゐた。

二

次に逢つたのは、奧宮先生で、夫れは四十一年であつた。自由黨の少壯名士として、名古屋事件に座して、樺戸の監獄に十餘年を送つた人で、その當時、森隆介、山口彈正、石塚三五郎などいふ舊自由黨の人々と共に、「達觀」といふ雜誌を發行してゐたが、私の知人の岡上といふ者が、その經營を引受ける事となつたので、その關係で、私は主筆石塚をたすけて、「達觀」を編輯する事になつた。

その時は九月頃であつた。もと「達觀」の編輯所は、本郷二丁目の大通りにあつたが、岡上の經營すると共に、神田三河町に移つた。奧宮先生に逢つたのは、その三河町の編輯室であつた。肥滿つて背の高い、顴の寛い、顴の肉付の豐かな、見るからいかつい顔であつたが、心持ち眼尻の下つた茶色の眼は、非常に優しかつた。右か左かの頸筋に、瘰癧の痕らしい傷痕があつた。古いセルの袴をつけてゐる時もあれば、赤茶けたフロックを着てゐる時もあつた。

聲も優しかつた。演說は非常に旨かつたが、座談の口は滑かでなかつた。手眞似を交へてボツ〳〵話すと、厚い唇に微笑が漂つた。熱して來ると演說口調になつた。得意なのは、煽動的の話で、聞いてゐるものは、何時の間にかその話に引入れられた。「天下の形勢は、もう我黨のものである。」こんな事をよく云つたが、私には少しも興味がなかつた。

その時分の奧宮先生の住居は、小石川の小日向水道町であつた。五六軒の借家が一廓をなして、その入口になつた門構が、馬鹿に堂々としてゐて、一軒の大きな住居のやうに思はれる所であつた。門の左右の塀はトタンであつた。その借家の奧の行詰りの一つ手前になつたのが、その家で、中は無論狹かつたが、借家と借家との間を杉の生垣にした瀟洒な住居であつた。

私はその時、飯田町の素人下宿にゐたので、雜誌の暇な時には、遊びに行つた。細君は、奧宮先生とは反對に、瘦ぎすな、小柄な女で、もとは何でも藝者であつたと云ふものがあつた。江戸子で、ハキ〳〵して、話すにも氣持がよかつた。

其所には、小さな三疊ばかりの離屋があつて、書齋になつてゐた。貧しい浪人の生活はしてゐたが、それでも可成り大きなガラス戸入の書棚には、洋書がギツシリ詰めてあつた。何時であつたか、春の頃、上野の

精養軒の庭内で、普通選擧同盟會の發會式のあつた時、私も小山六之助君に誘はれて、一所に上野の山に行つたが、例のフロックコートを著て前の方を歩いてゐた奧宮先生を小山君が見て、直ぐ前にゐた池田といふ老人に、「奧宮も髮つみ賃がないなア、」と云つて笑つた事があつたが、實際散髮賃にも困つてゐたらしかつた。その中でも書物は集めて、よく勉强してゐた。

書棚には、洋書の外に、平民新聞の綴ぢたのや、過激な論文の載つてゐた小册子などゝ澤山あつたやうに思はれる。ダイナマイトの製造法を譯したノートも、その中に交つてゐた。椽側にはカナリヤが飼つてあつた。金網を張つた鳥籠の中には、五六羽の可愛らしい小鳥が、チヽと鳴いてゐた。私と奧宮先生とが書齋で話してゐると、細君が形ばかりの庭で、紙屑を拾つたり、垣根の草を引いたり、夫れが濟むとカナリヤの水をかへたりした。垣根の外では、豆腐屋が時折鈴を鳴らした。

その年の暮になつて、私は岡上と衝突して雜誌の方は止したが、奧宮先生の所へは、相變らず出かけて行つた。一つは何か仕事を見付けて貰ふ積りもあつたが、外に何か雜誌でも出すやうな奧宮先生の口振であつたから、夫れが成り立つなら、夫れを手傳はして貰ふ積りであつた。

ある時行つてみると、前客があつた。眼の鋭い、頭のすつこけた老人で、烟草入から刻み烟草を出して、悠然として呑んでゐた。煙管は銀であつた。自由黨の名士で、大阪事件で有名な大井憲太郎であると紹介せられた。

「下谷にゐる、それ、江間とか何とか云ふ、壯士のやうな奴さ、あれに話して出さして下さい。少し君の車賃にしても好いから、」と大井老人が云つた。私は傍にゐて何の事やら分らなかつたが、その當時、大井老人や奧宮先生などで、浪人會といふやうなものを拵へて、演說會などを遣つてゐたので、その費用の相談かとも思つた。

その日は、春雨がしと〳〵と降つて、むせ〳〵する日であつた。

三

名古屋事件は、奧宮先生が前半生に於ける一大戲曲であつた。

高知縣土佐郡布師田村の人で、安政三年の生れであつた。代々學者の家で、その父慥齋先生は、佐藤一齋の高弟で、當時海南第一の陽明學者として、藩主山內容堂の侍講となつてゐた。二三人の兄弟があつて、奧宮先生は一番季の弟であつたらしい。長兄正治君は、日比谷事件で檢事として有名な人である。立志社の同窓としては、大石正巳、尾崎行雄、犬養毅、元田肇、栗原亮一などがあつた。

はじめ明治十四年、奧宮先生は、加藤高明、小川鉎吉等と共に、三菱に這入つたが、開拓使官有物拂下問題が起ると共に、斷然三菱を退いて自由黨に加盟し、馬場辰猪、大石正巳、西村玄道、佐伯剛平等と共と國友會を組織して、盛に自由民權の思想を鼓吹した。夫れが爲めに政府の迫害が激しくなつて來たので、鹿兒島の三洲社に行く積りで、明治十七年、東京を出發した。

これより先奧宮先生は、「其方儀自今東京府下に於て政治に關する事項

を講談論議するを禁ず。」と云ふ告知書を以て、政談演説を禁止せられ、僅に講釈師となつて、その鬱勃の氣を吐いてゐたので、その時も、緬國美談や、佛蘭西革命の話などを種にして、東海道を話し話して、やがて名古屋に這入つた。

當時愛知縣下は、頗る自由民權熱の旺盛を極めた所で、名古屋市長者町にあつた公道協會といふのが、その倶樂部で、三河方面の黨員には、内藤魯一、澁谷良平、福岡精一、村雨案山子、後藤主一郎、相馬改則、遊佐發などが在り、渥美半島の田原方面には、村松愛藏、神谷磯吉、川澄德次、八木重次、鈴木滋などが在り、名古屋方面には、岡田利勝、久野幸太郎、祖父江道雄、塚原九輪吉、近藤薪太郎、大島卯吉、加藤豐成、荘林一正、荒川定英、岡島博などがあつた。

奥宮先生は、塚原九輪吉、祖父江道雄の二人と舊知があるので、愛知縣下の同志の消息を聞く積りで、名古屋に這入ると、その足で二人を訪うた。二人は喜んで、奥宮先生を迎へ、公道協會の生徒の爲めに、英語を教授してくれと請ふた。別に急ぐ旅ではないので、奥宮先生はその請をいれて、暫く名古屋に足をとめることにした。

その時、愛知縣下の自由黨員は、既に藩閥政府顚覆の陰謀を策してゐた。奥宮先生の來遊は、恰も薪に油を注いだやうなものだ。何時の間にか奥宮先生も、その陰謀の巨魁の一人となつた。

陰謀は擧兵主義を取つてゐた。先づ名古屋鎭臺の兵士を手なづけて、内外呼應して鎭臺を乘取ると共に、一方監獄を破つて、囚人を引出し、夫れを兵卒にして、信州下伊奈の天險を扼し、堂々と天下に義を唱へるといふ事になつたが、夫れには莫大な軍用金が入るといふので、先づ紙幣僞造と、金錢の掠奪を遣る事になつた。

其所で、久野幸太郎が印刷業であるといふ所から、これに紙幣僞造係を命じ、大島渚、鈴木松五郎、富田勘兵衛などが、土地の事情に明るいといふ所から、これに掠奪係を命じた。奥宮先生も、時に掠奪隊に加はつた事がある。掠奪隊の主任は、大金のあるらしい家々を物色して、遠慮なく強賊となつて侵入した。愛知郡大草村役場に國税が集つてゐると聞いては、白晝、刀を揮つて闖入して、金庫を引ずり出した。岐阜街道に沿うた豪家をねらつた時には、その歸りを平田橋といふ橋のもとで警官に誰何せられたので、その三人を殺した。平田橋事件には、奥宮先生も關係してゐた。ある時奥宮先生は、その時の光景を精しく話した事があつた。

その時は夏で、八月十一日であつたらしい。朝から雨が降つてゐた。岐阜街道の豪家は、用心の好い家であるから、白晝は勿論、夜も遅くは這入れない。で、薄暮、未だ小門の締らない中に、行暮れて宿を探してゐる旅人の風をして、小人數で、不意に押込まうと云ふ事にして、委員の一人は、短刀、短銃の類を菰包にし、早くから行つて、目指す豪家の傍の森の中に隱れて、一行を待ち合はした。

名古屋から三里ばかりも離れてゐた。十一人の掠奪隊は、一人一人になつて、その森の中へ行つた。雨は降つてゐる。その雨を蝙蝠傘に凌いで、時刻の來るのを待つてゐると、やがて、日は雨の中に暮れて、森の

木立の隙から見えてゐた城砦のやうに引遶らした豪家の白壁の色も、佗しい黄昏の底に沈みかけた。時刻は來た。一行は手に手に得物を取出して、豪家に近付いてみると、小門は早や締つてゐた。詮方がないので、翌晩を期して、再び森の中に引かへし、夜の更けるのを待つて、歸りかけた。雨はます／＼降り頻つた。一里ばかりも歸つて、平田橋に差しかゝつた頃には、夜はもう十二時に近かゝつた。橋の袂の人家の軒下には、名古屋警察の警官の一群が、蓑笠に身を包んで、邏を張つてゐた。一行はやむなく、その三人を斬つた。

夫れ以來、警察の方では、自由黨員に目をつけはじめた。その中に九月となつた。九月二十二日には、加波山の暴動があつた。十月には、大阪で自由黨大會があるといふので、奥宮先生は、塚原と一所に、大阪に向つたが、その留守で、田原方面の陰謀が發覺して、名古屋方面の黨員二十餘名も、同時に捕縛せられた。大阪會議が濟んで一足先に歸つた塚原も又捕縛せられたが、奥宮先生はこれを知らない。後から名古屋に歸つて、道傳手に祖父江の實兄近藤壽太郎を訪ふと、右の始末と分つたので、夜に紛れて大阪に引返し、名古屋の事變を告げた後に、山陽地方の遊説に出かけたが、警察の物色が嚴しいので、海路東京に歸つた。その日は、明治十七年の大晦日で、市中は賑つてゐた。

その時、池の端に長兄正治君がゐた。奥宮先生は其所に旅裝を解く間もなく、翌日即ち明治十八年の正月元旦、起て若水に口すゝがうとする所を拘引せられて、直ぐ名古屋に護送せられた。

未決は長かつた。三年間もその儘にせられた。その當時、政府は、罪の輕重を問はずに、自由黨員は皆死刑に處するといふ風評が盛であつた。で、どうせ殺されるなら、暴れるだけ暴れた方が好いと思つたので、奥宮先生は、遂に破獄を企てた。

破獄。奥宮先生は一心になつて破獄の事を考へてゐると、ある日、ふとした事から破獄に關する智識を得た。その時、奥宮先生は、一人別監に收容せられてゐたが、看守の老人と心安くなつてゐたので、自分のゐる監房の檻の柱の一本新らしくなつてゐるのを見て、「この柱は、何故一本特別に新らしいかね、」と聞くと、老人も退屈してゐるので、「夫れには、大變な話がある。」と云つて、長々とその譯を話した。

その別監には、奥宮先生の前に、一人の犯人がゐた。强盗殺人の犯人で、それが破獄を企て、一本の針を以て、夜、看守の寐るのを待つて、先づ柱の一面に四角な切取線をつけ、夫れを薄紙の如く、そろ／＼と引剝がして、晝は飯粒で貼付け、夜はその下を鑿つた。

夕方、看守が柱を叩いて廻る時には、夫れに背を凭せて畏まつてゐるので、穴が出來てゐても、柱の音は違はない。その中に、さしもの柱も、大半剔られたが、運好く一人の看守が、ある日、退屈の餘り、檻の前を行つたり來たりして、指先で、柱を押してゐると、不思議に窪んだ柱がある。檢べてみると右の始末だ。

針一本あれば破獄は出來る。奧宮先生は破獄の光明に接したわけである。然し、檻の外には、瓶の中のやうな、中くぼみになつた赤煉瓦の壁が聳えてゐるので一人では、假令檻は破つても、監獄の外に逃げ出す內に慘殺せられる事は分つてゐる。で、時機を待つて、同志を募つて、破獄する事にした。

その中に普通の監房に移されて、數人の囚人と一所に置かれたので、機到れりとなし、いよ〳〵破獄に取りかゝつた。恰もよし、ある日、手紙を書く爲めに、別室に引出されて行つてみると、その入口の戶に、半ば拔けかゝつた古釘があつた、破獄の道具が見付かつたのである。奧宮先生は、夫れを窃に拔いて、手の廱物に塗つた黑い膏藥の下に隱くして、監房に歸り、箸の片端へ、その釘を結付けて、雪隱の糞壺の緣にある小石を拾つて、それを砥にして、尖端を鑿のやうにした。

道具も整つた。其所で、破獄の同志を募つた。强盜犯の農夫と、貨幣僞造の小商人の二人が贊成した。監內の取締りをしてゐる官文書僞造の、もと村長の老人も誘つてみたが、夫れは應じなかつた。

一室のものが睡るのを待つて、隅の方の柱を切りはじめた。切屑は雪隱の中に捨てた。七日ばかりの中に柱も大半切れて、今晩はいよ〳〵破獄ときめた日は、看守に抵抗する積りで、夕飯を乘せて來た板を返さないで、靜に夜の更けるのを待つた。丁度夏で、監房の中には、一つの大きな蚊屋を釣して、一室のものがゴタ〳〵と寢てゐる。奧宮先生は、時刻を計つて、二人の共謀者に注意し、今しも見廻つて來た看守の足音の遠ざかるのを待つて、逃げ出さうと思つてゐると、小商人の方が變心した。雪隱に這入つて、窓の下を靴を

引ずつて通る看守を呼んで密告した。小商人の聲は小さかつたが、反問した看守の聲が大きかつたので、忽ち奥宮先生の耳に入つた。萬事休す。奥宮先生の怒りは思ふべしである。「己れッ」と云ひさま、雪隱の中へ飛込んで行つて、小商人を引摑んで、力をきはめて投げ飛ばした。小商人は蚊屋の上を越して、土間の上へ落ちた。「破獄だッ、」「破獄だッ、」と小商人は血迷つて叫んだ。看守は拔劍して四方から集まつた。

奥宮先生の破獄は見事に失敗した。その内に明治二十年五月となつて、名古屋重罪裁判所で公判があつた。富田、大島、鈴木等は、巡査故殺强盜犯を以て死刑となり、奥宮先生及び、久野、塚原等は、兵を擧げ國事を改良するを名として紙幣贋造及び巡査殺害强盜教唆罪を犯せりとあつて、久野、塚原は、重懲役各十五年奥宮先生は無期徒刑、その他の者は、八年九年、乃至十一二年の處刑になつた。

かくて奥宮先生は、小菅集治監、宮城監獄、夫れから北海道の樺戸の監獄に移されて苦役に服してゐたが、明治二十九年七月になつて、漸く六七人の同志と共に特赦せられた。これが奥宮先生の前半生である。

四

私が「達觀」の編輯を止して間もなく、奥宮先生はじめ、創立者側の者も皆手を引いて、四十二年から、雜誌は岡上一人のものとなつたが、間もなく改題して、「黑白」となつた。夫れと同時に、嶺雲先生が主筆となつた。

嶺雲先生は、何時の間にか激烈な脊髓病に罹つて、病勢は靜まつてゐたが、もう歩行の不自由な不具者となつて、麴町三番町の岡上の家に、何處かの温泉から歸つて來たばかりの身を横たへてゐた。

雜誌からの收入がなくなつた私は、風呂錢にも事を缺くやうになつたので、衝突はしても、時折往來してゐた岡上の所へ、貰ひ殘してある俸給の幾何(いくら)かを取りに行つてみると、嶺雲先生が、籐の長椅子の上に横になつてゐた。瘦せに瘦せて、顏色も惡く、非常に年が寄つたやうに見受けられた。病氣の見舞を云つたりしてゐる内に、森川町の下宿の話が出て、果は大笑となつた。

その日から、私は嶺雲先生が懷かしくなつた。不具の身に同情したことも、その原因の一つであつた。夫れから私は、暇があると岡上に出かけて行つて、嶺雲先生に逢つた。白河鯉洋、小杉未醒などいふ人々が見えてゐる時もあつた。ある時、嶺雲先生の誕生日であつたといふ日の翌日行つてみると、誕生日に招いた人々の寄せ書があつた。嶺雲先生の筆

て、「文の又文」と書いてあつた。嶺雲先生を圍んで飯を喫つてゐる人々の姿を書いた小杉未醒の畫は、俳畫風の飄逸なものであつた。その畫は「飯くひ涅槃」と題してあつた。

その中に、三四十圓になる私の仕事が見付かつたが、もはや原稿紙を買ふ資力がないので、岡上の所へ原稿紙を貰ひに行つてみると、岡上は留守だ。嶺雲先生に話すと、「黒白」の原稿紙にと新に刷らした、黄ろな厚紙の原稿紙五百枚ばかりと、五十錢銀貨一枚くれたので、夫れを持つて下宿を引拂ひ、一ケ月ばかり桂月先生の所へ歸つて行つて、その仕事をしあげ、その金子で、神田錦町の下宿に移つた。もう春の末で輝かしい日が照つたり砂埃を吹きまくる激しい風が吹いたりした。雨もよく降つた。嶺雲先生は、谷中天王寺町に移つて、「黒白」を編輯してゐた。生垣のある平家で、夏の夕暮は、軒に蚊柱が立つた。

その時分、湯島の坂下に日高有倫堂といふ書肆があつて、その前年のこと、「むら雲」といふ大部な文集を出版してゐた。夫れは嶺雲先生の友人側が發起して、文壇知名の士から原稿を集めて、嶺雲先生の病床慰問にしたものであつた。所が、その時集まつた原稿が澤山あつて、「むら雲」一册に載せきれないで殘つてゐるので、第二集を作る事になつた。夫れには編輯員が入用である。桂月先生は書肆の主人から依賴を受けて、私を推薦してくれた。私は日々書肆に通つて、「千波萬波」といふ文集を編輯したが、未だ夫れでも原稿が殘るので、他に「寄る波」といふ小册子も作つた。

そんな事で、嶺雲先生と私との間は、非常に接近した。一家の私事に渡る事も、チョク〱嶺雲先生の口から聞くやうになつた。

嶺雲先生には、實業家の兄が二人あつて、物質上の面倒を見てくれてゐたので、本來ならば、陋巷に窮死すべき筈のものが、女中の二人も置いて、心のまゝに病を養ふ事の出來たのは、寧ろ幸福な身の上のやうにも思はれたが、何をいふにも、雇人の手を待たねばならぬ境遇では、妻子の介抱を受けるやうな事はない。其所になると、嶺雲先生は、氣の毒な人であつた。過分な心付けはしても、雇人は他人である。夫れに病氣の爲めに日一日と氣むつかしくなつて、火の燃え立つやうになつて女中を叱る事があるので、女中は逃げて行くものもあつた。何時かも行つてみると、身動きの出來ない病人を捨てゝ置いて、二人とも女中が逃げてゐた事があつた。「女中にストライキを喫つてゐる。」と云つて、嶺雲先生は晝飯も喫はずにゐた事があつた。「まア、飯よりも手をかしてくれたまへ、」人手を借らなければ便所にも行けない嶺雲先生は、私の顏を見るな

り、私の肩に縋つて便所へ行つた。かゝる場合には二兄の富も何の役にも立たなかつた。

こんな日には、私はシャツ一枚になつて、臺所ではたらいた。便所に行くに手を引いてやつたり、スリッパを履かしてやつたりするのは、何時ものやうであつた。嶺雲先生は、氣の毒な人であつた。

五

その時分、嶺雲先生は、(黒白)に「明治叛臣傳」といふものを書きはじめた。河野廣中か何んかの短い傳記も乘つてゐた。私も奧宮先生から、藩閥政府に對する自由黨員の種々な陰謀の話を聞いてゐて、非常に興味を持つてゐたので、歸つて書肆の主人に、「出版してはどうです。」と話してみると、主人も乘氣になつた。

で、嶺雲先生に相談すると、「君が關係者を訪問して、書いてくれるなら、引受けても好い。」と云つた。私も小使に不自由をしてゐたから、傳記の方を受け持つ事にした。

其所で私は、暇々に、福島事件の河野廣中、加波山事件の河野廣體、飯田事件の河澄德夫、靜岡事件の中野次郎三郎などを訪問して原稿をつくると、嶺雲先生が夫れに眼を通して、書肆の方へ送つて來た。奧宮先生の名古屋事件の記事は、一番に出來上つた。

少し原稿が出來かけた所で、嶺雲先生は、日光へ避暑をした。何でも小杉未醒の方で、借家を探してくれたとの事であつた。

書肆の方では、原稿が出來るに從つて、印刷屋に廻はしてゐたが、私が怠けたり、嶺雲先生の方で校閲が遲くなつたりして、原稿がとぎれた。主人は、私が嶺雲先生に頼まれて、關係者を訪問して、事實を確めに行つてゐる位で、豈夫、原稿を作つてゐると思はなかつたであらう、嶺雲先生に向つて催促の手紙を書かした。私は何だか、くすぐつたいやうな氣がした。夫れに卷頭に別頁に入れる嶺雲先生の論文が出來ないので、主人は夫れを急いでゐた。

この中に、原稿料の殘額を渡す時が來た。嶺雲先生の手に這入れば、私もその半額が貰へるのであつた。私は日光に行つた。書肆を出る時、「金は渡しても好いが、先づ持つてゐないと云つて、論文が出來てゐるかゐないかを確めた上で、出來てゐるなら渡すが好い。」と主人が云つた。

嶺雲先生は、日光稻荷町の唯ある家の一方を借りてゐた。一方には、其所の家族が住んでゐた。奧の緣側から見ると、荒凉とした大谷川の河原が見下される、急勾配の崖畑には、胡瓜などが植えてあつた。

座に通ると、嶺雲先生は、「金を持つて來たかね、」と

聞いた。事實を話さうと思つてゐる中に、うつかり、主人の云つたやうな馬鹿げた事を云つた。嶺雲先生は別に疑はないで、「夫れぢや論文を持つて行きたまへ、」と云つた。私は甚だ都合が惡いが、詮方なしに、「實は金は持つてゐる。」と云つて事實を打ち明けた。

嶺雲先生は顏色を變へて怒つた。「嶺雲は犬ぢやない、論文は置いて、歸つて主人にさう云つてくれたまへ。」馬鹿々々しいが詮方がない。私はこの儘、東京に引返した。これは主人も驚いて、嶺雲先生にあやまつて、金を渡した上で、論文を貰つて來いと云ふので、二三日して、又日光に行つたが、この時は一泊した。

その翌日の事である。朝飯が濟んで、玄關口の涼しい所に蹲んでゐると、嶺雲先生は若い女中に手を引かれて、玄關口に出て來て、裸足のまゝで庭に下りた。庭の隅には小さな百日紅の木があつて、花をつけてゐた。地べたには、所々青苔が生へたのに、朝日が射してゐた。嶺雲先生は女中から杖を受取ると、女中の手を離れて、この杖に縋つて、鼠地のフランネルを着た小さな身體を圓めて、覺束ない足取りで、トボ〳〵と庭先を歩きはじめた。これがその頃の日課の一つであつた。朝起きて、鹽で齒を磨いて、あとで梅干をたべて湯を飮むことも、暑い日の光に肌を曝して、日光浴をやることも、その當時の日課になつてゐた。

「明治叛臣傳」は十月になつて本になつた。

六

九月になつて嶺雲先生は、日光から歸つて來た。私は又毎日のやうに遊びに行つた。

ある時行つてみると、門口に麥藁帽を着た男が二人立つてゐた。這入つてみると、一人の客が來てゐる。小柄な、口髭の薄い、顏色の蒼白な、熱病をやつたあげくのやうな血色をした、薄い唇にも光澤（つや）の無い中年の男であつた。これが幸德秋水先生である。門口の男は、尾行の刑事であるといふ事が直ぐ分つた。

私が秋水先生に會つたのは、その時が二度目であつた。最初に會つた所は、山手線の巣鴨停留場に近いその住居であつた、夫れはその前年の暮であつたと思ふ

が、故郷の者で、政治に趣味を持つてゐる友人に誘はれて、何だか河豚を喫つてみるやうな心地で訪問したのであつた。丁度雪のあげくで、泥溝には、消え殘りの雪が白く斑にあつた。秋水先生の許には、一人の書生がゐた。夫れが坂本淸馬で、私の友人とは、海南學校時代の同窓であつたらしい。秋水先生は褞袍を著て奥の室で火燵に當つてゐたが、二人が行くと出て來た。坂本が火鉢に火を入れたり、茶をくんだりした。其所は書齋を兼ねた座敷で、床にかけた小さな軸には、中江兆民の筆で、「文草は經國の大業」と書いてあつた。秋水先生は二人の爲めに、いろ／＼話をしてくれた。おもに政治上の問題であつたが、私には何の興味も無かつた。私が秋水先生を訪問する氣になつたのは同縣出身の文士で、中江兆民の高弟で、一年有半の編輯者で夫れで日露開戰當時の非戰論者であるといふ所から、豪傑的風格の人物を想像して、何となしに會ひたかつたに過ぎなかつた。そして會つてみると、豫期に反して、みすぼらしい讀書子であつたので、何だかがつかりした。その上、歸りに氣が付いてみると、秋水先生の住居と小さな路を距て丶向合つた小家の、ガラス透し障子の中から、四つの眼玉がギヨロりと光つてゐたのに怖ぢ氣が付いて、二度訪問する氣にならなかつた。

所が、その日、ゆくりなく會つたのである。私は「いつかは上りまして、」と挨拶した。秋水先生はもう千駄ケ谷に移つてゐた。親しい間柄の嶺雲先生と秋水先生とは、夫れから夫れと話題を移して行つた。秋水先生の唇には、支切りなしに嘲笑が浮んで、消えた。私は傍で聞いてゐた。

私が書肆の編輯にゐることも自然と秋水先生に分つた。「僕の所に、兆民先生の書いたものがあるが、出版したらどうだね、」と秋水先生が云ひ出した。私は耳を傾けた。「他の門人は、兆民先生の紀念碑を龜戶へ拵へたが、僕はそんな事は下らん事だと思つてゐる。そんな事よりは、一錢でも未亡人の小使のたしにでもしたいからね、」と云つたあとで、「これが兆民先生の志だ。」

私は主人に相談した上で、都合がよければ、あらためて伺ふからと云つて、歸つて主人に話すと、主人が出版するといふので、翌日直ぐ千駄ケ

谷に出かけて行つた。甲武線の新宿停車場から、千駄ヶ谷の方に行き、直ぐ左に曲つて、水の綺麗な小さな流れに架した橋を渡つて、少し行つた所に住んでゐた。家の背後は草原で、その端は線路に續いてゐた。門の前、かなり廣い通りを隔てゝ右斜に向合つた產婆の家には、二三人の刑事がゐて、見張りをしてゐた。軒下の日蔭に床几を据えて、扇を使つてゐるものもあつた。秋水先生の許に出入する者は、その刑事から必らず姓名を聞かれた。私も歸りに名刺を渡した。

　秋水先生の家には、顔の圓い、話のたびに上か下かの歯莖のあらはれる若い女が同居してゐた。夫れが菅野菅子であつた。他に六つ位になる男の兒を連れた女中がゐた。「僕の所には、コブ付の女中がゐる。」と秋水先生が嶺雲先生の所で話した事があつた。その亭主なるものは飲酒家で、だらしが無いので、夫婦別れをして女中に來てゐるものであつたが、時とすると、その亭主が、酔拂つて、赤い顔をして、子供を見に來る時があるとも云つた。

　狹い古い建物の家で、夏草の生へるにまかした荒れた内庭があつた。ひよろ〱した松の木も一二本あつたやうに思つてゐる。前の住居人が自殺した家とかで長く借手が無くて空いてゐたのを借りたものである。菅野は、見付の座敷から鍵の手のやうに折れ曲つた玄關の右側の四疊半ばかりの所にゐた。前の住居人の自殺した所は、その室であつた。「私のゐる所ですつて、」と菅野が笑つて話した事があつた。秋水先生は、見付の玄關とも三間になつてゐる座敷の奥にゐた。八疊位あつたと思はれる。窓に寄つた方に、テーブルを据えて、椅子も二つばかり置いてあつた。床には巢鴨で見た事のある中江兆民筆の軸がかゝつてゐた。玄關には、石盤畫らしい西洋人の肖像畫が懸つてゐた。秋水先生も菅野も肺が惡るかつた。殊に秋水先生の方は一層病氣が進んでゐたらしい、何時も力なささうに横になつてゐた。座つたり、椅子に腰をかけてゐた事は、滅多になかつた。わけて雨の日などは、起き上がるのが苦しいと話してゐた。

二三度通つて、原稿料の交渉もほゞ纏つた。原稿には、佛蘭西革命前二世紀事、民約論の漢譯にしたもの、他は新聞の論說などであつた。「兆民文集」といふ名も出來た。秋水先生の紹介で、根岸にゐた兆民未亡人

にも會つた。未亡人は痩せた意志の强さうな老婆であつた。「幸德さんも衰くなりました。」と未亡人は云つた。原稿料授受の日は、秋水先生の所へ來てゐた。

「兆民文集」の序文は、匿名で秋水先生が書いた。日ならずして、その本は出來上つた。私の足は、次第に千駄ヶ谷に向かはないやうになつた

未だ「兆民文集」の校正の頃であつた。千駄ヶ谷へ行つて、秋水先生と話してゐると、「僕はキリストの事を書きたいと思つてゐる。僕に云はすると、十字架は生殖器の變形したものだ。」と云つた。私は非常に面白いと思つたので、歸つて主人に話したが、主人は冗談にして相手にしなかつた。夫れが秋水先生の最後の文章にして、生前の遺稿となつた「基督抹殺論」の腹案であつたらしい。

七

「兆民文集」が出來上つて間もなく、私は書肆の主人と衝突して編輯員をよした。私は又下宿料にまごつかねばならなかつた。その時、私の身を心配してくれた先輩が三人あつた。一人は小山六之助君、一人は桂月先生、一人は秋水先生であつた。もと私と主人との衝突の原因は、小山君の獄中生活を書いた原稿を買取る買取らないと云ふことであつたので、先づ小山君が氣の毒がつて、「米は故鄕(くに)から送つてくるから、君が來ても大丈夫だ。夜具だけ持つて來給へ。」と云つてくれた。次に秋水先生が、「君一人位ゐても好いから、困るなら來給へ。」と云つてくれた。二人の話を桂月先生にすると、「人の世話にならないでも、仕事を拵えてやるから、仕事をし給へ。」と云つてくれるので、その儘、下宿にゐて、桂月先生の仕事をするやうになつたが、その方が非常にせはしいので、自然と秋水先生の許へも行かないやうになつた。

嶺雲先生は、その中に西大久保へ移り、奧宮先生も、中澁谷の方へ移つた。奧宮先生の所へは、その前より非常に無沙汰をしてゐたので、無理に暇を拵へて、久しぶりで訪問した。その時は四十三年の正月で、次に行つたのは春の末であつた。

竹の藪垣のある所で、車井戸の水を二三軒で汲み合ふ古い小さな住居であつた。次に行つた時には、髯の長い、長谷川とか云ふ客が來てゐたが、私が行くと歸つて行つた。

「君は近頃何をしてゐるかね、」と奧宮先生が聞いてくれた。私の身の上を案じてくれての言葉である。「今に少し金が這入るから、這入れば雜誌をやる事になつてゐるから、君に來てもらつても好い。」とも云つてくれた。

我子のやうに私の身の上を案じてくれる先輩に對しては、私は心から感謝せずにはゐられなかつた。細君も到つて世話好の女で、未だ水道町にゐる時分、夫れは夏であつたが、行つて話してゐる内に雨が降り出した。私は一張羅の單羽織を着てゐた。歸らうとすると、「この降るのに、羽織を着てゐらしては駄目ですよ、お脱ぎなさい。」と云つて無理に脱がして、疊んで風呂敷に包んでくれたりもした。私は母のやうな氣のする細君を今でも忘れる事が出來ない。

その日は、何時になく長居をした。朝から行つて夕方に歸つた。お午には私の爲めに蕎麥を取つてくれた。貧しいモリ二つのもてなしも、私には嬉しかつた。

歸る時、奥宮先生は、玄關口に私を送つてくれて、「雜誌が定まれば、葉書をやる。」と云つたが、その雜誌は永久に出來なかつた。

その日が奥宮先生の見納めであつた。

八

四十三年に這入つてから、政府の社會主義者に加へる厭迫が猛烈になつた。秋水先生の家の背後の草原には、刑事が天幕を張つて見張りをするやうになつたと新聞に出たりしたが、夫れが間もなく、ばたり音が無くなつた。

後で聞いてみると、秋水先生は、その時家を疊んで湯ヶ原へ湯治に行つたものらしい。五月の初めであつた。ある日、嶺雲先生の所へ行つてみると、「昨日、幸德君が菅野を連れて湯ヶ原から來て、一晩泊つて行つた。」と云つて、開け放してある緣側の竹竿にかけた手拭に眼を遣つて、「あの手拭をくれて行つた。温泉で染めたもんだ。」白地の手拭へ、木の葉を叩きつけて、その液汁をうけ、夫れを温泉につけて染めたものである。手拭は風に動いてゐた。「僕も近い中に行くつもりだ。」

その時分、私は故鄕(くに)から來た苦學生を嶺雲先生の許に賴んであつたので、嶺雲先生は、その書生と、一人の女中とを留守居にして置いて、自分は曾て日光に連れて行つてゐた女中を連れて、間もなく湯ヶ原に行つた。

湯ヶ原は、左右に草の峰の重なり重なりした谷間の温泉場で、嶺雲先生の行つたのは、一番奥の方にある天野屋といふ温泉宿であつた。門の前を澄み切つた谷川の水が流れてゐた。其所には既に秋水先生がゐて、靜に「基督抹殺論」に筆を執つてゐた。菅野は東京に歸つてゐたらしかつた。

五月二十五日頃になつて、世間を驚倒さすやうな一大事件が突發した。大陰謀事件の發覺である。長野縣大林區署明科製材所の職工の一人が、爆裂彈を製造してゐる所を捕縛せられたのであつた。

同志のものは、續々捕縛せられはじめた。何も知らない私は、秋水先生がそんな事に係添へせられはしないかとさへ案じた事もあつた、秋水先生がその巨魁であると知つて、私は茫然として了つた。

六月二日になつて、果して秋水先生も捕縛せられた。その日の事は、「基督抹殺論」の序文にする積りで書いた嶺雲先生の文章に精しく出てゐる。

六月二日は、初夏の麗かな日であつた。渠は東京に行くとて七時頃宿を立つた。其前日浴槽での話に、基督抹殺論もあと十四五枚も書けば脱手するとの事であつたから、僕は東京行きは、序に脱稿してからにした方が宜さゝうに思はれて、何故だか此書の成行きが氣遣はれた。渠が最早小田原へ着く時分だとおもふ頃、突然宿の主人が來て、渠が湯河原停車場で東京から來た判檢事に、上車間際を抑留せられて、駐在所へ引戻されたといふ渠が乘つて往つた車夫の話を齎らした。宿の主人が未だ立去らぬ中に、駐在所の巡査が僕に會ひに來たといふ。巡査は神奈川縣の警部と一處に來た。僕に一寸駐在所まで來て吳れろといふ。足の利かぬ病體に迷惑至極であるが、兎に角車で駐在所に往く、臺所口から入れられて臺所へ上ると、奧の細長い間に、正服巡査に衞られて渠が居るのが譯る。巡査の好意で布いてくれた蒲團に身を横たへて、言ふまゝに待つて居る。午寂にして外には蜂の唸りが聞える。懐にしてをつた琵琶記を讀みながら茶にも煙草にも喫み飽いたが、未だ何の調も無い。秋水ゝ默然として兀座してゐるらしい。脚が冷へるので膝掛を宿へとりにやつた下女の歸つての注進で、自分の部屋が判檢事等の搜索を受けつゝある事が譯つた。午過ぎになつてやつと一行六七人の裁判官が引上げて來た。秋水の同主義者の事につきて、二三件問はれたが、僕は秋水自からと識る以外に、渠が同主義者の何人とも一面識も無いので答ふべき事が無い。待つ間の長かつたに比し、調べは十分許の間に濟んで直ちに歸ることを釋された。歸らうと座を起つたとき、渠が障子を隔てゝ左樣ならと聲をかけた。此の左樣ならが永遠の左樣ならとならうとは、其時は夢にもおもはなかつた。

信濃で渠の同主義者が、爆裂彈製造中を捕縛せられたとの新聞記事を見た際、困つた事をしてくれたといつた一言より推して、僕は渠が此事件と直接の關係が無いものと信じて居たし、又よし關係があつても爆裂彈取締規則違犯位の事であらうと高を括つて居たから、刑法第七三條に斷罪せられて、此の『左樣なら』を斷金十五年の交の最後の『左樣なら』―渠の口より再び聞く可からざる最後の訣別の辭―であらうとは決して決して思ひも寄ら無かつた。渠の銹びた底力のある聲は今に耳に在る。便所へ往く僕と顏を見合せて、微笑んだ渠の面影は、猶眼に在る。而かも嗚呼、運命は既に決せられて、刑臺の繩が彼の首に纏ふべき日に近い。之を想ふて其日の別れを追懷すれば、今更のやうに當時の狀が歷々と眼に浮ぶを覺える。

九

奥宮先生の拘引せられた日は思ひ出せないが、秋水先生よりは早かつたやうに記憶してゐる。ある日、奥宮先生と同村の友人が來て、昨日奥宮先生も拘引せられたと云ふので、驚いて澁谷へ驅けつけた。

細君は病氣だと云つて寢てゐた。枕許には、中野次

郎三郎の細君になる老婆がゐた。名は糸といつて、中野が靜岡事件で北海道の監獄にゐる間、自分も北海道に行つて、髮結をしながら、いつも面會に行つて、獄中の夫を慰めたといふ女傑である。その老婆が、何くれと細君の世話をしてゐた。

細君の病氣は、肝臟癌であつた。癌のやうなものが、腹の中にあつて、上へあがつたり、下へさがつたりするといつた。奧宮先生の拘引せられた見舞を云ふと、「昨日の朝、起きたばかりの所へ、刑事が二人來てね、便所へも一人で遣らないやうに張り番して、すこし遲くなるかも分らないからつて、連れて行つたんですよ。御飯も出來てゐなかつたから、妾の牛乳を飲ましてね、」と云ひさして、細君は胸のあたりに置いた右の手を、さも懶るさうに疊の上に落して、「今度歸つて來たら、社會主義のシャの字も云つてもらひますまいよ。」

話は、細君と老婆との間に換されはじめた。細君はその前日の思出を語つた。「貴女の所から、南瓜の苗を貰つて來て、垣根の所に植えて、妾が此所に寢てゐるのに、おかまひなしに糞汁をかけるんですもの、妾がさんざ小言を言つてゐると、上つて來て、妾の足下の方でグン／＼睡るんですよ。ほんとに我夫は呑氣よ。」

なるほど庭前の垣根の所を見ると、初夏のはなやかな日の射した所に、南瓜の苗らしいものが五六本萎れて見えた。細君は又新聞記者が度々來て煩さいとも云つた。「妾に感想を云へとか何とか云ふ新聞屋もあるんですよ、」と淋しさうに笑ひながら、右の手で、胸から腹にかけて撫で下ろした。

二時間ばかりもゐて私は歸つた。歸る時、「何か御用があれば、電報なり端書なり下さい。」と云つて置いたが、何とも云つて來なかつた。夫れに陰謀事件に對する世評が次第に激しくなつて來たので、濟まない濟まないと思ひながら、見舞に行くことが憚かられて、その儘になつてゐると、八月近くなつて、小山六之助君から、奧宮の細君が病死したといふ知らせがあつた。私は小山君に手紙を出して、行く事は又見合はした。

私は母のやうに思つてゐる人の葬儀に列(つらな)れなかつたのを心から殘念に思つた。

十

八月の末になつて、私の生活は一變した國の親元に放りッぱなしにしてあつた妻が、五つになる女の兒を連れて上京した。私は下宿を出て先づ錦町の警察署近くのある家の二階を借りたが、この時分から日本橋本石町のさる書肆の編輯員となつて、日々出勤しはじめた。

陰謀事件の世評は高まるばかりであつた。私はどの新聞も見落すまいとして、手當り次第に新聞を讀んだ。「基督抹殺論」の噂も盛に傳つた。「鳩鳥喚晴烟樹昏。愁聽點滴欲消魂。風風雨雨家山夕。七十阿孃泣倚門」といふ詩も傳へられた。

十一月には、秋水先生の母堂が郷里の幡多郡中村町からはる〲と面會に來たといふ新聞の記事もあつた。十二月になつてその母堂が、郷里で病死したとも傳へられた。

秋水先生には、一人の細君があつた。私は無論知らなかつたけれども離別になつて名古屋あたりの生家に歸つてゐて、本姓に復して、師岡千代と呼んでゐた。師岡千代、その當時の新聞は、獄中の秋水先生の消息と共に、能くその名を傳へた。「兆民文集」の事で、私が未だ千駄ケ谷に往來してゐる時であつた。「僕はこんな、餘命幾何もない身體だし、妻もリウマチスで、到底夫婦になつてゐられないから、双方とも得心づくで別れてしまつた。」と秋水先生が云つたのを覺えてゐる。その日秋水先生は熱があると云つて、白い毛布をかけた敷蒲團の上に、横に寢てゐて、時々咳をした。

十一

陰謀事件がやかしくなるに連れて、私の所へも警察から人が來はじめた。私が「兆民文集」のことで、秋水先生の所へ出入する時に、家の前に張り番してゐる刑事に、二三度名刺を渡してあるからだ。

十一月になつて、私が箱根に旅行してゐる桂月先生の跡を追つて、書肆の主人と共に箱根に行つた留守などは、一日に三回もやつて來て、未だ歸らないか歸らないかと云つたと云つて、宿の主人も、娘も、田舍者の妻は、別けてビク〲してゐた。

箱根には五日ばかりゐて歸つたが、その歸つた晩、八時頃になつて、又警察からだと云つて刑事が來た。痩せて背の高い男であつた。二階の居間へ上げて、茶をすゝめてゐると、刑事はジロ〲室內を見廻はした。

やがて刑事は、懷中から小さな手帳を取出して、縱にして何かさら〲書いた。何をするであらうと思つてゐると、その手帳を私の眼の前に突きつけながら、「これを知つてをりますか、」

私は夫れに眼を遣つた。「幸德傳次郎」と鉛筆で走り書きをしてある。「知つてをります。」と云つて私は微笑した。刑事は眞面目な顏をしてゐる。

「どうした關係がありますか。」

「國の先報です。」

「その外に、」

「出版の用で、度々行つたんです。」

「何の出版ですか、」

「「兆民文集」といふものを出版する時に、僕がその原稿の交渉に行つたんです。」

「何處で出版しました。」

「本郷湯島の日高有倫堂、」

刑事は手帳を持ち直して、私の言葉を記入しはじめた。私はそろ／＼話して遣つた。刑事はくどく、根堀り葉堀り聞いた。最後に、「貴君の主義は、」と來た。

「僕は、そんな窮い人間ぢやないんです。」

「何かお有りでせう。」

「所がないんです。有ると云へば、毎日朝早くから本屋へ行つて、仕事をするが私の主義ですね、」

「箱根へ行らつしやつたさうですが、もう紅葉は好いんでせうね、」

「丁度今が好い所ですね。然し本屋のお供ぢや仕方がないんです。」

「さうでも無いでせう。――その本屋といふのは何處ですか、」

私は包まず話してやつた。そして警察から度々來られては、家の人が恐れるから、度々來ないやうに、必要な事は、今晩一度に聞いてくれと云つた。刑事はもうこれからは、度々來ないと約束して歸つた。

翌日、出勤して三階の編輯室にゐると、神田警察からだと云つて、電話がかゝつて來た。出てみると、件の刑事で、「兆民文集」の出版の署名人は何人か數へてくれとの事であつたから、夫れは中江兆民の子息であると云つて遣つた。

それからも、一二度電話がかゝつたが、宿へは來ないやうになつた。そのかはり、日本橋の警察から、書肆の方へ來だした。その時私と一所にゐたのは、松本道別君で、これは電車焼打事件に座して、二年六ケ月の處刑を受けて、その九月に出獄して來たばかしである。書肆の主人はビク／＼してゐる。三度目に來た時には、三階にあげて、二人の遣つてゐる仕事を見せて遣つた。

私はその時、日本政記を和譯してゐた。「さア見て下さい、かう云ふものを遣つてゐるんです。」と私は机を警官の方に押し遣つた。

「忠君愛國の仕事ですよ、」と道別君は皮肉に笑つて、校訂しかけてゐた日本外史の朱點の這入つたのを差出した。

その日限り、私は警察の眼から離れた。

十二

秋水先生の「基督抹殺論」は、十一月頃市ケ谷監獄の中で脱稿した。高島米峰がその出版を引受けた。

明けて四十四年一月十八日には、無政府主義者二十四人に對する死刑の宣告が下った。私はその記事の載つた新聞の號外を本石町の電車停留場で買つて、一目見て立ち縮んだ。

その翌日は、共犯者十二名が減刑の恩典を受けた。

越えて二十四日には、逆徒十二名が、市ヶ谷監獄の絞首臺上の露と消えた。私はその記事を讀んで泣いた。私は奧宮先生から、「東陲民權史」を借りて、その儘になつてゐた。

秋水先生、奧宮先生の二人は、天地に容られざる逆徒となつて刑死した。殘つたのは、嶺雲先生一人であるが、その嶺雲先生の命も、既に二人の後に接してゐた。嶺雲先生は。「基督抹殺論」の序文の結末に、「想ふに病臥既に三年、僕の餘命も幾何もあるまい。願くば地獄で會はう。」と書いてあつた。秋水先生が未來を信ずる人であつたら、大正元年九月七日午前三時四十五分、嶺雲先生と地下で會つたであらうが、秋水先生の靈と肉は、皆元素に歸つてしまつた。

十三

嶺雲先生が湯ヶ原から歸つたのは、私が箱根から歸つた直ぐあとであつた。歸つて來ると、今度は中野に移つた。甲武線の電車で柏木驛で下りて、直ぐ近くにある線路の上に架した橋を渡つて行くと、割竹の垣根をめぐらした家で、庭には櫻の老木が二三本あつた。沈丁子のある所では、毎日隣家から遊びに來る犬が、戯れてゐた。嶺雲先生は、その犬にビスケツトを投げて遣つたり、お菜(かず)の餘りを遣らしたりした。犬は緣側に兩肢をかけて、嶺雲先生の顔を見上げて吠えてゐる時もあつた。

私はその時、嶺雲先生の遣つてゐた漢文和譯物の中の或る一つを受持つたので、谷中にゐた時ほどではないが、夫れでも可成り足繁く行つた。秋水先生の捕縛せられた日の事も精しく聞いた。漢文和譯はその歲の暮になつてほゞ出來上つた。嶺雲先生の著書は、思想に危險分子があるとかで、大半は發賣禁止になつたものだが、さすがに漢文和譯物だけは、何の事もなかつた。大久保にゐる時にも、「病中放浪」、といふ文集を出したが、夫れも發賣禁止の運命は免がれなかつた。その原稿を纒める時危險のないやうな奴を見てくれたまへ、」と云はれて、行李の中にゴタ〳〵入れてあつた新聞雜誌の切拔を選んだが、その甲斐がなかつた。新聞で發賣禁止の事を知つて、大久保に行つてみると、「やつぱり根本が惡いらしいね、」と云つて嶺雲先生が笑つた。

中野に移つてから、病氣は次第に惡い方へ傾いた。熱も度々出た。脊髓も時々痛んだ。痛む時には、意地も張りもなくなつて、子供のやうにヒイ〳〵泣いた。傍で見てはゐられなかつた。牛乳でも飲みかけると、咳が咽喉につかへて、呼吸がつまるやうに白眼をかへして悶へた。胸も疊も牛乳だらけになる時があつた。病氣の爲めに小便も締り無く出た。そんな時に行きあはしてゐると、女中に手を貸して、汚れた着物を脱がせ

てやつた。見るから痩せて骨ばかりになつた身體が痛々しかつた。その時嶺雲先生の家には、二人の女中と、私の賴んである書生とがゐたが、夫れでも手が廻りかねてゐた。身體が苦しくなると、女中でも書生でも叱り飛ばした。私も時折は、そのとばしりを喰つて面くらつた。夫れでも病氣の收まつてゐる時には、優しい好く氣のつく人であつた。後ち嶺雲先生が日光で亡くなつた時には、「さんざお叱りになつてゐるかと思ふと、乃公はどうも短氣でいけない。まア〳〵こんな所へ來合はしたのも、何かの因緣づくだと諦めてくれと仰つしやいました。」と云つて、女中どもは云ひ云ひして泣いた。夫れに非常に禮儀の正しい人で、小使まで心付をしてやつてゐる書生でさへも、食事の時には床前に据ゑて、自分は夫れに向つて食事を執るといふやうな人であつた。

當年の風流兒嶺雲先生も、不具の病人となつてからは、食物の外に樂みは無いらしかつた。話のたびには、何時も食物の話が出た。土佐の料理に用ゐる糖味噌の事を言ひ出して、「あれで松魚のあらを煮て喫つて見たいが、君とこの細君は、拵らへる事を知つてゐるかね。」と云つたりした事もあつた。

一度嶺雲先生の熱のある時に行くと、「僕ももう、いよ〳〵長い事はない。」と云つて冷たい笑顔をした事があつた。夫れでも心地の好い、日の光の和らかな時には、杖に縋つて、家の前の畑の傍をトボ〳〵歩いてゐた。疲れると書生の肩にかゝつた。

時とすると、机にすがつて、膝掛を膝にかけて、原稿を書いてゐる事もあつた。「數奇傳」の原稿は、寢椅子の上に仰向けになつて、卷紙に長く長く書いた。中央公論の締切が切迫した時には、夜、車で、私が持つて行つた事もあつた。

「數奇傳」に付いては、何時か嶺雲先生がかう云つて笑つた事があつた。「自叙傳となると、どうも書きにくい、たとへば、女に關係した事でも、自分で女に迷つてゐたといふ風に書きたくない。矢張り自分は知つてゐて、馬鹿になつてゐたといふ風にするからね。」その

意味に置いて、數奇傳は、自叙傳といふよりも、寧ろ創作物であると思つてゐる。

十四

嶺雲先生は、中野に春までゐて、庭の櫻の花の散りかゝるのを見て、小石川の茗荷谷に移つた。熊本縣の寄宿舍「有斐學舍」と斜に向合つた所で、奥に深く引込んだ家であつた。

移轉の通知があつたので、早速行つてみた。その時「數奇傳」は完結して、一册に纒められるはこびになり、中央公論へは補遺を書いてゐた。「いばらき新聞」をよして東京に歸つてゐた當時の生活の一部分を私に書けと云ふので、私はその枕許に坐つて、要領を聞取つた。吉原に居殘りをして、金の工面に行つた友人の歸るのを待つてゐたが、どうも歸つて來ないので、車夫に二通の手紙を持たして、金を借りに遣つた。一方は駄目であつたが、一方は五圓貸してくれた。その貸してくれたのが高濱虛子であつた。私の書くを頼まれたのは、その前後の事であつた。

私は直ぐに筆を執つたが、自分の事でないから、氣分と筆とが一致しない。一二枚は書いてみたが、どうしても筆が進まない。その中に嶺雲先生は、又日光に出かける事になつた。私が頼んであつた書生は、故郷から學資が來るやうになつて、その前月あたりから神田の方へ行つて自炊生活をやつてゐた。

日光に出かけて行つた日は、七月二十二日であつた例によつて通知があつてゐたので、その前日、茗荷谷へ行つてゐると、白河鯉洋が來て話してゐた。續いて笹川臨風が來た。入違へに私が歸らうとすると、「まア好いぢやないか、飯を喫つて行きたまへ、」と嶺雲先生が云つたが、先輩の中へ這入つて、窮屈な思をするのが厭であつたから、その儘歸つて、翌日、上野の停車場まで見送りに行つた。その日は、うす曇のした蒸し暑い日で、不忍池の蓮の花の咲いたのに、怪しい雲の影を落して、蓮の葉蔭の水は、鼠色にどよんで見えた。私は往復ともに觀月橋を渡つた。他にも五六人の見送人が來てゐた。白河鯉洋、笹川臨風、嶺雲先生の仲

兄木村久壽彌太の細君といふ婦人、貝塚松太郎などいふ人々であつた。貝塚君と嶺雲先生の關係は知らないが、いつも嶺雲先生の家へ來てゐて、兄弟のやうにして、嶺雲先生の面倒を見てゐた。脊の高い、黒眼鏡をかけた人で、その子息の少年が、何時も嶺雲先生の爲めに走つてゐた。「新ちやん、新ちやん、」と云つて、何事にもこの少年を驅使してゐた。女中にストライキを喫つた時などは、一番にこの少年が驅けつけた。

嶺雲先生に付添うて行つたものは、三人の女中と、山本といふ門下生であつた。茗荷谷の家は疊んで、一切の荷物は、山本君の許へ置いてあつた。

「まるでお大名だね、」と何人かが言つて行つた。

嶺雲先生は女中に助けられて一等室の腰掛けに横になつてゐた。

二三日して、日光の板挽町から端書が來た。續いて嶺雲先生を送り屆けた山本君も、日光から歸つて來た。金助町にゐた私の家と、山本君の家は近かつたので、行つて聞いてみると、嶺雲先生の病氣がどうも怪しいと云ふので、その中、暇を見て日光に行かうと思つてゐると八月の末になつた、明治天皇崩御と共に、明治は大正と改元した。嶺雲先生の病氣は、益々惡いといふものがある。嶺雲先生が津山の教員時代に、さる女に生ませた男の子が、日光の寓居で、夫れとなく引逢はされたといふ噂も傳はつた。九月に這入ると、嶺雲先生の病氣危篤の報が二三の新聞に掲げられた。私はいよ／＼出かける積りで、山本君の所へ行つてみた。山本君は嶺雲先生に呼び寄せられて日光に行つてゐたが、大分病氣が收まつたので、昨夜歸つたといふ所であつた。丁度取急いだ仕事に着手してゐた時ではあるし、夫れを聞くと私も安心して、又日光行を延ばしたが、それから三日ばかりして、八日の新聞に、嶺雲先生の逝去の訃報が出た。私は驚いて、その儘、日光に驅けつけた。雨の土沙降りのする日で、上野發の汽車の窓は、ふりそゝぐ初秋の雨に、濛々と烟つて見えた。

雨は宇都宮の手前から晴れた。佗しい日の光を雲の隙間から平野の上に落したのも、ほんの僅の間で、直

ぐ淋しい夜が來た。私は日光の停車場口から電車に乘つた。爪先上りの日光の町の燈火を眺めながら、大谷川に架した橋も渡つて、やがて板挽町に著いた。暗い水のじめ／＼した路の上を田岡の姓を尋ね尋ねして行つた。最後に提灯を點けて來た二人連の男に聞くと、はじめは分らなかつたが、「東京から來てゐる方で、一昨夜あたり亡くなつた筈だ。」と云ふと、「それぢや、この先の右側に火の見えてゐる所だ。」と云つた。

敎へられた通り、大谷川の岸に向つてダラ／＼下りの河原石を疊んだ路を探り探り行くと、その路は岸に添うた路と一所になつた。嶺雲先生の借りてゐた家は、その路の角になつた二階家であつた。這入つてみると、山本君と、大阪から來た少年と、三人の女中とがチョロ／＼燃える爐の火を圍んで、淋しさうに話してゐた。嶺雲先生の遺骸は、その日、鳴蟲山のほとりに送つて、茶毘に附してあるから、翌朝はその骨を拾ひに行くことになつてゐるとの事であつた。

二階に上つてゐると、いつも嶺雲先生の身體を橫たへてゐた籐の寢椅子が、白木の臺の上に燭つたカハラケの火にほつかり照されて、森としてゐた。大谷川の水音が耳についた。

その夜私は、旅館に行くも面倒であつたから、其所に一泊することにしたが、夜具が尠いので、嶺雲先生の用ゐてゐた夜具に包まつて寢たが、何だか厭な匂があるやうで、氣持ちが惡かつた。

朝は霧とも雨ともつかぬものが降つて、陰欝で、その上、寒かつた。大谷川は直ぐ前を流れてゐた。嶺雲先生の長兄田岡典章、中兄木村久壽彌太の兩君と、白河鯉洋とが、一人のおんぼうを連れて、鉢石の旅館から來た。白河君の方は知つてゐるので、先づ挨拶すると、「お互に殘念だが仕方がない。」と云つた。白河君は當時大阪の新聞社にゐたが、電報に依つて前日遣つて來て、既に死骸となつてゐた知己と最後の訣別をしてゐるものであつた。

私もその一行に加はつて、骨を拾ひに行つた。大谷川の假橋を渡つて、含滿ヶ淵の上、鳴蟲山の麓に行つ

た。霧のやうな雨は晴れない。路のふちには、大きな犬蓼の薄赤い花が咲いてゐた。

火葬場と云つても、ほんの名ばかりの火葬場は、山の麓の一角の雜木を薙いで、土を堀り、小石を置いて竈を造つてあつた。竈の中には、未だ火が赤く消え殘つてゐた。おんぼうが青竹を切つて箸を拵へると、手に手に受取つて、灰の中に差込んで、離れ離れになつてゐる骨を挾んで、山本君の持つて來た晒木綿の中に包んだ箱の中の壺に入れた。「君も拾つて遣つてくれたまへ。」と白河君が云ふので、私も二つ三つ挾んだ。「これは前歯だ。」と云つて典章君が小さなものを挾んだ。

骨は箱に一杯になつたが、未だあとに殘つてゐるので、殘りの分は、嶺雲先生のゐた家の傍にある淨光寺といふ寺に骨分するといふので、おんぼうに賴んで、後から拾つて來さすやうにして、一行は歸つた。

歸ると淨光寺に交渉して、白河君と山本君と世話人と夫れから私の四人で、墓地の選定に行つた。痩せて薄よごれた老僧が出て來て、大きな杉の生へた墓地へ四人を導いたが、やがて無緣らしい石碑のゴタ〳〵並んだ所に行つて、一つの石碑を指さして、「これを退けて、こゝへ遣つたら好いだらう。」と云つた。亂暴な僧である。

「その調子で、今度のも遣られては困るが、」と白河君が冗談のやうに云ふと、僧は極り惡さうな苦笑をして、何かグッ〳〵と云ひ譯をしたが、好くは聞えなかつた

歸つて私が墨を磨ると、白河君が筆を執つて、四角な標木に、「嶺雲處士分骨之標」と書いた。茶色の洋服を着て居た白河君は、その標木を跨いで、力を籠めて文字を造つた。典章久壽彌太の兩君は、既に旅館に引上げてゐた。文字が出來上ると、白河君も引上げて行つた。私は二階にあがつて、油紙に入れたおんぼうの持つて來た骨を一つ一つ指に撮んで壺に入れた。水に濡れて氷のやうに冷めたかつた。これが嶺雲先生であらうかと、私は幾度も幾度も考へてみた。そして何だか夢を見てゐる時のやうな氣になつてゐた。

骨を納め了ると、山本君がその壺を入れた四角な箱

を持ち、私が標木を擔いで墓地に行つた。夫婦者らしい男女の人夫が、既に無緣の石碑を片寄せて、その跡に河原から砂を運んでゐる所であつた。穴も堀つてあつた。水の多い山寺の境内は、清水が穴の半ばまで湧いてゐた。

箱を埋め、標木をたてると、私は草花を供へる積りで、其所此所と探した。「先生は百合が好きであつたから、百合があるといゝなア」と山本君が云つたが、百百はもとより、犬蓼の花より外には何も無かつた。男の方の人夫が氣を利かして、寺の花畑に行つて、雞頭や向日葵などを貰つて來てくれたのだ、夫れを供へて山本君と私は、ジメ〱した土の上に膝をついて禮拜した。瀨の音が侘しさうに響く。

終つて、跡始末の爲めに未だ一泊するといふ山本君と分れて、獨りで停車場に歸つて、汽車を待つてゐると、鉢石の旅館から遺骨を携へた一行が引上げて來た。私も夫れと一所になつて汽車に乘つた。

上野に歸つた時は。可成り夜が更けてゐた。プラツトホームには、澤山の出迎人があつた。停車場の出口には、遺骨を載せる爲めの黑塗の馬車も來てゐた。典章久壽彌太の兩君は、やがてその馬車に乘つた。

翌日は、谷中の齋場で、祭典があつた。神官は、「佐代治の尊(みこと)」と云つて誄詞を讀んだ。私の耳には不思議な言葉として聞えた。私は齋場の入口で、受付に立つても見た。

やがて嶺雲先生の墓は、土佐郡旭村にある田岡家の墓域に建てられたといふ事を、國の友人から聞いた。そして秋水先生の墓は、幡多郡中村町に、奧宮先生のは、染井の墓地に建てられたとも聞いたが、夫れははつきりしない。

かうして私の先輩は、皆逝つて了つた。

ロンドンより

法學博士 河上肇

私はベルリンには少くとも一ヶ年近く居る積りでしたから、貴誌には「伯林より、其一」と題して、パリで見た鸚鵡のことなど書いて送り、それから其二其三と段々に續けて約十回に及び、全體をば自ら纏つたものにしたいと思つて居ましたが、今回計らずも大戰の起るに逢ふて、急にドイツを引揚げましたので、「伯林より」の續稿は自ら書けなくなつて仕舞ひました。今又「倫敦より」と題しはしたものゝ、何時復た玆を逃げ出すことか分らぬので、續稿は書く積りでも「其二」は略して置きます。

「倫敦より」とはしましたが、今私の居る所が果して、ロンドンであるかどうか、確には分りません。郵便事務の上ではロンドン西區となつて居ますが、町（シチー）へ出掛ける時は、宿の人がロンドンへ行くかと申します。ロンドンはイギリス文明の象徴です。英國文明の眞相が理解し難いと同じやうに、ロンドンは實に分り難い都會です。現に私は今ロンドンに來て居ながら、果してロンドンに居るのかどうか自分ながら分らずに居る譯です。

兎も角、英蘭銀行の最寄の停車場で三片半の三等切符を買ひ、昇降機（リフト）に乘つたり動く梯子段（エスカレーダー）に乘せられたりして、所によつては地下百八十呎の底になるといふプラットフォームに降り、間違へずに西行きの汽車に乘ると、約半時間して私の下宿に近い停車場に着きます。此邊一帶にチジックと申します。昔は勿論ロンドン市外の一小村落であつたに相違ないが、今は凡て街續きになつて居て、少くとも郵便事務の上ではロンドンの西區となつて居ます。下宿を出て二三町南に行く

とテームス河に出ます。河岸を傳ふて一町も歩くと、そこに灰色の石造の寺の塔が見えます。それがチジック、パリッシユ、チャーチで、其の寺の壁には千六百何十年に何某といふ人が何磅の寄附をしたなぞと云ふ記錄のある所を見ると、相應に古い寺だと見えます。寺の前には、二階の床あたりの所へ可なり大きな木材の使つてある古風の低い建物があります。窓ガラスにはアフターヌーン、チー(午後の茶)と書き出してありますが、如何にも不潔らしくて入つて見る氣になりません。數百年前の家屋だと申します。恐らくお寺詣りをした紳士淑女が昔は此所で茶を飲んだ者でしやう。

寺は題分古いもの丶やうですが、墓地にはあまり古い墓はありません。パリのルユクサンヴールの美術館に母と題する油繪があります。如何にも善い兒を育てるらしい落付いたお母さんなので、未だ眼に殘つて居ます。日本に居る時も雜誌の口繪か何かで旣に見たことがあると思ひますが、あの繪をかいたホイスラーの墓が目立つて居るのみで、あとは大概名のない人の墓ばかりです。

名は無くとも、大概は新しい墓なので、故人を慕ふ血緣の者があると見え、何れも皆奇麗に掃除してあります。墓は大部分石造の十字架か長方角の薄い石板で多くは白色の大理石です。墓標の前には疊一枚大の土地が仕切りされて居て、其所には色々の艸花が植ゑてあります。能く手入れが行屆いて居るので、枯艸もなければ萎んだ花もありません。

獨りで散歩する時は、私は何時も此の墓場へ杖を曳きます。門を入ると數株の大きな艸花の鉢植があります。多分墓地の共同の裝飾にしてあるのでしやう。道はセメントのたゝきです。普通の往來と違つて馬車が通らぬから、風が吹いても馬糞が飛ぶやうな事はありません。道の兩側は青々とした芝草が奇麗に刈り込んであり、其に續いては、花に飾られた墓場が隙間なく左右に並んで居ります。墓地共同の使用人があると見えて、何時も鳥打帽を冠つた勞働者が、芝草を刈つたり枯れた花を摘んだりして居ります。杖を曳きながら緩

歩して近づくと、其等の勞働者は帽子に一寸手をかけて今日はと挨拶致します。恐らくイギリス人位國民的の誇を持つて居る者はありますまいが、さすが商業立國の國柄たけあつて國民が凡て商賣的外交的に訓練されて居ますので、吾々の如き東亞の異人種に對しても、日本人が支那人に對する時のやうな輕蔑の表情は少しもしません。墓場で人に逢つてさへ誠に氣持が善いです。

それでベルリンの公園を散歩するのとは全く別の氣持で、私は何時も此の墓場に散歩します。天氣の好い日には、何時行つて見ても、花を持つて墓場の掃除に來て居る人が、四組か五組あります。中には小さな鋏を取出して、斬髮でもするやうに、入念に芝草を剪んで居る人があります。色々な草花を持つて來て、彼是と趣向を凝らしながら模樣式に其を栽ゑ附けて居る人もあります。まだ墓標の出來ないもの又は貧乏人で墓標を拵へ得ない者の墓場は、土を長方形に盛つただけですが、其の土饅頭は芝草で奇麗に縁をとり、中には色々の花が植ゑてあります。ブリキ製の花瓶や壜詰罐詰のあき空(から)に折花を盛つたのもあります。參つた人は其に新しい水を入れ新しい花を活け、あたりを奇麗に掃除する爲めに、なか／＼時間を費して居ます。

石燈籠やガス燈こそなけれ、草花は實に澤山栽ゑ込んであつて掃除も能く行き屆いて居ますから、日本の盆の墓場よりも一層奇麗に美麗に見へます。或日のこと、夫婦が小供を三人連れて墓參して居るのを見受けましたが、草花の手入が濟むと、今度は手巾を出して頻りに墓石を掃き込んで居ます。あんなに鄭寧に手入する所を見ると、之はきつと自分の小供を亡くした人であらうと思つて、後から墓標を覗いて見ると、それは八十三歳で亡くなつた老人の墓でした。故人を懷ふの情は日本人とさして變りは無いやうです。否な日本人よりも遙に痛切かと思ひます。否な／＼日本人とは餘程趣の違ふ所があると云ふのが、一番適切かも知れません。其點をお話したい爲めに實は此の文章を書き始めたのです。これから其を段々に申して見ましやう。

墓參者のあるのは、どうも新しい墓ばかりのやうです。總じて此所には古い墓がありませんが、それでも探して見ると千七百年代の末に出來たのもあります。併しそんな墓になると、誰も參る人は無いと見えて、多くは半ば傾いて草花も勿論栽ゑてはありません。ロンドンに三代續く家なしと云ふ諺がありますが、地下百何十呎の所を汽車で走つたり、地下に茶屋を設けて往來の人の靴跡の響く天井窓の下に椅子を並べて茶を喫するやうな生活をして居ては、實際死に絶ゆる家族も多いことでありましやう。現に此所にある墓標を見ても其が分ります。大概一家族の墓標は一に限られて居て、死人のある毎に同じ所へ葬つて、同じ墓石の上へ段々に死者の名を刻するやうに爲つて居りますが、其を見るに、何代も續いて居る家族は絶對にないやうです。夫の墓とか妻の墓とか子の墓とか云ふのが大部分で、夫婦の名に其の子供の名が一緒に書いてあるのは寧ろ稀な位です。それ位まで來ると、後は死に絶えて仕舞ふのかも知れません。併し祖先なくして人間のある筈は無いのですから、偶まには先祖代々の墓と云ふものが有つても善ささうなものですが、そんなものは絶えてありません。そこらから考へて見ると、祭るべき子孫は居ても、古い墓になると、參る人が無くなるのだらうと思はれます。

私の家には幸にして過去六十餘年の間一度も葬式を出したことがありません。それで私は私の家族の死者の中には、生時直接に愛撫の恩を受けた者は一人も無いのですが、それでも歸省の度毎必ず墓參を致して居ります。昨年末洋行する折も墓參して國を立ちました。併し私が若し西洋人であつたならば、顔さへ見たこともない者の墓に參ると云ふ事は恐らくあるまいと考へます。

此方の人の墓參は、生時恩愛の關係のあつた者に限るらしく見えます。それも恭敬の心を以て參るのでは無くて、愛執の念にほだされて參るのだと思ひます。謝恩の義務ありと考ふるが爲めでは無くて、恩愛の情自然に忘れ難きが爲めだと考へます。參ると云ふ氣持

ではなくて、見舞ふと云ふ位の氣分でしやう。

こんな事を思ひながら、墓銘を見ますと、何某の墓とあるべきところが、多くは

in loving memory of.......

としてあります。直譯すれば何某の愛すべき紀念となり、意譯すれば只だ何某の墓とする外はないのでしやうが、何れにしても本當の心持は現はれません。直譯も意譯も出來ぬところに、自ら死者に對する心持の差異も在る譯なのでしやう。

段々見て行く中には

in ever loving memory of my dear husband ....

（私の親愛なる夫何某の永久に愛すべき紀念として）

to the dear memory of my beloved wife ....

（余の愛する妻何某の親愛なる紀念に）

fond and dear memory of my much beloved and devoted husband.......

（私が非常に愛し又た私を非常に愛して呉れた私の夫何某の可愛ゆく且ついとしき紀念）

などと書いたのもあるし、更に人名の下へ

beloved by all who knew him.......

（知つてる人には皆な可愛がられた）

we shall meet again ....

（吾々は復た會ふであらう）

などと書き添へてあるのもある。夫婦が一緒に散歩してさへ何かと噂の種子になる日本で、こんな文句の墓を建てたらさぞ冷かされる事だらうと思ひます。中に男の手と女の手と握手して居る所を牌面に彫刻してあるのもあります。

此方の墓場では悽い感じが起りません。何だか色氣が漂つて居るやうに感ぜられます。墓標を見ても、冷たい石の死といふ感じよりも、溫い肉の生きた香を覺えます。梻の枯れ殘れる代りに、紅白の草花の咲き驕れる場所です。

日本では人前で夫婦が仲能くするものはない云ふ習慣があります。しかし少くとも人前では仲能くして居

なければ見つともないと云ふのが、西洋人の考らしく思はれます。夫が妻を愛し妻が夫を慕ふのは、日本で云へば親が子を愛し子が親に孝行するのと、恰も同じことで、人に憚るべき節のことではありません。だから墓標にも吾が愛する妻とか夫とか云ふ文句が、憚るところなく記入してあります。日本で云へば孝子何某建之といふのと甚しい差がある譯でもありますまい。

だから「私が非常に愛し又た私を非常に愛して呉れた私の夫何某の可愛ゆく且ついとしき紀念」といふやうな文句が刻してあつても、其の英語を直譯して吾々が感ずる意味合と、此方の人が英語そのもので感ずる情緒とには、必ず多少の相違があるだらうと思ひます。店へ何か買ひに行つた時、其の品物が無ければ、店の人はアイ、アム、ソーリーと挨拶します。之を直譯すると、私は悲しうムいますと云ふことになるが、實際は悲しいのでも何んでもない、只だお氣の毒様と云ふ位の意味に過ぎないのでじやう。併し日本ではお氣の毒様と先方のことを主眼にするに反し、此方では私は悲しうムいますと自分のことを云つて居る所に、自ら國民性の差が現はれて居る譯でもありましやう。何某の愛すべき紀念にと云ふのは、日本で何某の墓といふのと同じと云へば同じだが、併し同じ中に意味合の自ら異る所もなければ爲りますまい。

夫婦同志で愛したとか愛されたとか云ふのを見ると多少妙に感じますが、親の墓を子が建てたり、子の墓を親が建てたりして居るのは、吾々が見ても誠に心持が宜しうムいます。例へば母の墓に

our darling mother, a beloved woman as spoken of in life must be angel up in heaven.

(吾々のいとしきお母さん、生きて居る時愛すべき女とされて居たからには、天に昇つて必ず天使とならるゝであらう)

とあつたり、父の墓に

his memory will live for ever in our hearts.

(彼の記憶は永遠に吾等の心の中に生く)

と書いてあるのなどが其です。殊に親の建てた小供の

墓には、あはれを催すものが多いと思ひます。例へば十ヶ月で死んだ小供の石碑に

"Dear Dorries"
sleep baby, sleep.

可愛いのドリース、ねんねしな〳〵とあるのは、簡單ですが親の情が能く現はれて居ます。又た十歳の子供の墓に

A light is from our household gone,
A voice we loved is stilled,
A place is vacant in our home,
Which never can be filled.

（光は吾等の家より消え失せ、
吾等の愛せし聲は聞えずなり、
吾等の家庭に空しき席殘り、
そは永へに充されず）

と書き附けてあつたり、五歳の子供の墓に

A father's pet,
A mother's dear,
A little darling,
Slumbers here.

（父の愛子、
母の寵兒、
可愛いの子供、
此所に眠る）

とあるなぞは、見て居ると涙を催します。

日本では可愛い小供が死んでも、生きて居た時の名は呼ばず、六かしい漢字で法名を附け、別の世界に葬つて仕舞つて、諦め忘れることを急ぎますが、此方では死者と生者との間に溫な連絡が維持されて居るやうに思ひます。顏も知らぬ祖先の墓は顧みぬ代りに、夫婦親子の情合は「死」に依りて斷絕さるることを欲しないものと見えます。諦めると云ふことが殆ど無い。それが所謂 germanische Hinausstreben ins Grenzenlose（チユートン人種の無限の貪望）なるものでしやう。此の人種的特質に依つて、今日のヨーロッパに科學が發達し、機械が發明され、物質的文明が進步したとチエン

バレーンは申しますが、或はさうかも知れません。

昨日私が散歩に行つた時には、眼を泣き腫らした五十前後の婦人が居ました。立つて居る前の墓石を見ると、白い石が大分灰色になつて居るので、何れにしても五六年前に死に分れた多分は其女の夫の墓だらうと思ひました。見て居ると、跪て胸に十字を描き、指を口唇に當てゝキッスを送りながら立ち去りました。斯様な景色の中に、私は杖をついて停立しながら、様々の感想に耽るのであります。杖は黒柿で「玉簫吹徹洞龍眠」といふ王陽明の句が彫つてあります。郷里出發の折停車場で岳父より貰ひ受けた物、早く歸つて之を墳墓の地に杖づきたいと思つて居ります。(大正三年十月初一)

美人通信(其二)

東京日日新聞記者　小野賢一郎

漂泊せる美人

(上)　旅役者の妻

私は今年になつて四度家を移した。芝愛宕町二丁目十四番地にゐる頃「文章世界」に二丁目一番地と誤植して住所録に出された。郵便物がいつも迷つてゐたが、妙なもので夫れから二三ヶ月經つて引越した家が偶然

にも二丁目一番地であつた、だから郵便は近頃迷はずにくる。

隨分妙な郵便がくる、株式仲買の廣告郵便位ならまだしも、芝居の総見勸誘やら、原稿のたゞとりのづるい葉書やら、中には結婚媒介所の廣告まで飛び込んでくるから恐れる。——ところが或る日珍らしい手紙がきた。近頃飼ひ初めた小鳥、相思鳥や瑠璃鳥や朝鮮駒鳥と云つたやうな、小鳥の趣味としては極めて低い初心な處の鳥許りだが、それでも私は一生懸命になつて水を浴びせたり餌を磨つたりしてゐる處へ符箋のついた手紙が舞ひ込んだ。

一、役者の手紙

その手紙は骨張つた字で書いてあつた。發信地は朝鮮の仁川で、例の俳優孤影からの便りであつた。

誠にお久しうございます。貴方と私とには最も思ひ出の深い仁川へ私は八年振に又參りました。舊知の皆様の御發展はたいしたものでございますが、私は相變らず國劇旗下の一兵卒で自ら省みて誠に忸怩たるの外はございません。

仁川もあの頃とはまるで見違へる位さびれました、とてもあの頃の仁川は思ひ出せぬ位の淋しさです。それに最も親しうお願ひしました貴方のゐらつしやらないことは何だかやる瀬のない淋しさを感じます。貴方はいよ〳〵お盛んでございませう、昨年の一月東北から名古屋へ參ります途中、最初お訪ねしたく存じましたが年末の急ぎの旅でございましたから殘り惜しいことに其儘で打過ぎました。私もあの後色々の波瀾のある生を營んで參りました。秋田に居ります頃そんな事を手紙の端に書て申上げましたが、私は以前朝鮮でお別れ申しまして、臺灣から内地へとまでは北村さんと一緒でございましたが、其後此商賣が厭になりまして郷里に歸りました。ソレあの貴方が堺の例の家にお訪ね下さいましたあの頃の事でございます。兄は丁度十數萬の負債にどうにも整理のつかない時で、私もそこに飛込んだのですが大渦になつて隨分奮闘もしてみました。ですが、とう〳〵祖先の家を維持する事が出來ないで只今は一寸逼塞の形でございます、お出で下さいましたあの家も只今はございません。其後自分に一座を作つても見ましたが堅實な計畫を致しませんかつたものですから、見事に失敗しました其頃からもう何だか世の中が厭になりまして、生きてゐるのがいよいよ望みが少くなるやうな心地になりましたものですから、或る女と大森の海に情死をはかりましたが、不思議な事に船頭に助けられまして命拾ひを致しました。それから間もなくの事なんです、單身飄然と奥州を志しましたのは。ところがそこでも赤芝居にあるやうな奇遇が出來ました、それは私が厭で〳〵たまらなくて、五年前に捨てました女

が、私の子を産みまして、その頃まで消息を知らずに居りましたのが私を訪ねて參つた事なのです。私は知らない間に四歳の子の父となつてゐたのでした。

やむを得ないので夫れを連れて再び四年ぶりに北村一座へ歸りました。其後も一度捨てましたがドウした深い惡縁か又歸らなければならぬ事情で只今も一緒に居ります。女房子をつれた旅役者、樂書の一ぱいしてある部屋に寢轉んで、多奇なる半生を顧みまするど、誠に感慨無量なものがございます。もう私も花やかな過去の幻影は皆消えて了ひまして愈々幻滅の悲哀に心を創られて許り居ります、鏡に映る自分の顏を白粉で彩り乍らも皮膚が乾いて皺の多くなつたのに一入哀しみの涙が湧きます。

思はずもお懷しさにいろんな自分の恥ばかり申上げました、どうか笑つて下さい。こゝまで書きますと何だか氣分が感傷的になつて參りまして、何とも云ひ知れぬ悲しい思ひが胸にこみあげて參りました。今は夜の一時半、曾て八年前に一度は貴方とお話を致しました部屋で此手紙を書きました。

孤影生

二、能代港の奇遇

餌の入つた鉢を置いて此手紙を讀んだ。さうかなアもう八年になるかなア、と思つた。さうすると私が十九歳の頃で彼はもう三十歳位だつたらう、堺の或る舊家の次男、それが俳優兼作者。私は朝鮮の一小新聞記者。坪内博士の「ロミオとヂュリエット」は此頃ふたりで讀んだかに覺えてゐる。寒い晩ふたりはよく温室(オンドロ)で語つたものだ、あれから八年にもなるかなア、としみ〳〵彼の事が思ひ出された。彼とは仁川で別れてから後、門司の稻荷座と博多の壽座であつたかに覺えてゐる。其後私は東京にきてから社の用事で大阪までいつた、夏の事で。彼からも便りがあつてゐたから堺のSといふ家を訪ねて行くと夫れは藝者屋であつた、その頃私は藝者のなまめかしい話聲を聞てすら慄へたものだが此家の暖簾を潜るには幾度か躊躇した。此手紙に堺の「ソレあの」と思ひ出したやうに書てあるのが此時の事である。それツきり私は彼に會はない。――

話は飛んで大正元年の事である。元年と云つてもまだ明治天皇の御惱が發表されぬ前の確か六月の事、私は秋田縣下を巡回した。私が秋田に深い馴染をもつたのは、確か明治四十二年の東京新聞雜誌記者團が、この縣下を巡遊した時からで、其後一度ぶらりと私ひとりで遊びにいつた事がある。その次の三度目の旅行は「大阪毎日」と「東京日日」お久しい前

から實行してゐる通俗教育普及といふ目的の「通俗講演會」と「通俗教育活動寫眞會」の用向であつた。「大阪毎日」と「日日」とは「大毎」の巡回病院や兩社の共同事業である日本沿海の海流調査や飛行練習生や海外留學生の養成や、聞いただけでは更に派手ではなく、新聞社の計畫としては寧ろ地味過る程の事を熱心に而も連續してやつてゐる。然し其效果は一時的の賑やがしの樂隊つきの催ふしなるものと同日に論ずべきでない。左樣な計畫の一つとして講演會と活動寫眞會を數年來一日も休まずにやつてゐる、學校や劇場、寺などの會場のない處は天幕をかけてまでやつてゐる――其用向で私は一ヶ月程秋田縣下を隅から隅まで巡つた。講演など大それた事はやれないが、通俗的な平易な話くらゐなら出來やうといふので、毎日毎夜しやべつた。院内を振出しに湯澤から横手、寄り道になるこま／＼した處まで入つて、遠く能代から小坂、歸りには土崎、秋田といふ順序で隨分よく細かく歩いた。この旅行の途中で意外な出來事があつた、トいふのは孤影の手紙にもある北村生駒一行と能代でパツタリ會つたのである。

三、大森海岸の心中

私が能代の町につくと辻に下つてゐるビラが不圖目についた。「國劇北村生駒」といふ大きな字はいかに私を驚かした事だらう、朝鮮や九州であつた人と此秋田の地で會はうとは全く夢にも思はなかつた。

その日の夕方北村と芝居小屋の近くの宿で會つた。私も二十貫からの體量になつてゐたし北村は依然として妻君と共に二十貫以上に肥つてゐた。合せて六七十貫の三人が鼎座して妻君の「まアまア」といふ感投辭を雨のふるやうに聞き乍ら昨を談じ今を語つた。

「この子、悧怜だつせ、それは／＼」と妻君は養つた子役を見せた。それに不思議な事は二十年來子がなかつたのに、こつちにきて出來ましたと布袋さんのやうな妻君は狸のやうな腹をしてゐた。臺灣と北海道ではだいぶん儲けたらしかつた、もうい丶加減に旅役者生活も打切にして、博多の千代の松原で旅舘でも初めやうと思ひますなど丶、暢氣さうな話をしてゐた。

一座の俳優の半ばは皆私の顏を覺えてゐた、代る代る私の處へ來て話をした。だが私は物足らなかつた、何だか物足らなかつた。孤影の顏の見えないのが物足らなかつた。

「孤影はんなア、あの人の事、あんた、お知んなはらんか」と妻君が云つた。私は知らないから知らないと

云つた。

「さうですか、だが東京の新聞に出てゐましたよ。あなたの處の新聞にも出てゐたぢやありませんか」と北村も云ふ。

「僕の處のに出てゐて僕が知らない筈はない、廣告の文句から相場欄まで讀んでゐるから知つてる。併し孤影の事は兎に角知らないよ」全くドウ思ひ出しても孤影の事は新聞に出てなかつたやうに思ふ。

「アヽさうや／＼本名で出てゐたさけに、知んなさらんのも尤もや」と妻君は上方辯や地方訛のごつちやな辯で斯う云つた。

北村の語る處に依ると大阪から孤影と若い藝者とは東海道を上つてきて、方々遊び歩いた末、心中といふ美くしい幕になつて大森の海岸から飛込んだ、處が水が淺かつた爲めにドウしても沈まない、ふたりで焦つてゐる處を羽田の漁師に助けられて品川署へ云々といふ記事であつた。

「アヽそれか、それなら見たとも、而も僕が其通信の原稿に筆を入れたやうに覺えてゐる、アヽそれか」と僕は息をはづませて云つた。

「今はどうしてゐますかね、何でも東北の方へ入込んでゐるらしいですが……、其相手の女は抱主の方へ引戻されましたから今は孤影ひとりですよ」――この北村の話があの手紙の「單身瓢然として奥州を志し」た處に當るのである。

能代での孤影の話はこれだけである、あとは私の心で彼の數奇を極めた生涯を思ふのみで、形に現はれた話はこれだけである。此夜から「日日」の講演會は俄かに會場を變更して小學校を斷はり米代座に改めた。一つは北村が私に對する好意で劇場を提供してくれたのと、一つは北村が私共の一行と同夜に開場しても人氣の立つてゐる私共の爲めに觀客を呼ぶ事が出來ないと思つたからである。

四、車から見た女

話は更にいつそく飛びに飛んで行く。

秋田の旅行を濟して東京へ歸ると、明治天皇御惱。――永い間は不眠

不休の活動、目の廻る程の忙しさ、宮内省で藪蚊に喰はれ乍ら夜を明す

宮城内の御濠の蓮が美くしう開いてゐる朝、宮内省の玄關先で秋田からの孤影の便りを讀んだ。能代の奇遇は北村から聞いた。自分は知らぬ間に人の父となつてゐた、と永々と運命論が繰返されてゐた。

大正元年の年暮、彼は名古屋へ飛んだ。これが手紙の中の「年末の急ぎの旅でございますから」彼は名古屋で正月興行をしようといふ北村一座へ彼の女と彼の子とを伴れて走せ加はつたのである。

翌年の二月、私は京都、大阪、奈良と極めて暢氣な旅をした。私の社では「見學」と解して「大毎」の記者は東京へ「日日」の記者は關西地方へ「見學」にやつてくれる規定がある。私は京大阪はゆつくり見物したことがない、奈良はまるで知らないので二週間許り暇を貰つて遊んだ、「見學」とも「出張」ともつかぬ旅であつた。

その途中、名古屋支局に寄つた序に北村の家を訪ねると、まだ寢てゐた。みんな吃驚したやうな顔をして私を迎へてくれた。私は孤影はドウしたと聞くと。

「昨夜逃げました、ドロンをきめて了ひました」と北村は困つたやうな顔をした。

私の「新聞記者の手帳」の第一集に次のやうな一節がある。

——美人の床山を伴れて第二の故郷のやうに馴染の多い名古屋にきた。彼を知つてゐる名古屋の讀者は彼をして家庭の主人たらしめない、誘惑の手は次第に迫つてくる。彼は一夜その美くしき女と子を打て捨て逃げて了つた、今では北陸の田舎を流れ歩いてゐるとやら——名古屋から京都に出るまでには菜の花が一ぱい咲いてゐる、彼は此菜畑の間をどんな見得を切つて逃げたのやら。——私のあたまには此筋書が色々の形に生きてくる。——

北村と妻君とは、秋田で生れたといふ健やかさうな子を私に見せて、いろ〳〵秋田の話やら孤影の女の話を聞かせてくれた。その女は秋田市の生れで此一座の床山として伴れて歩いてゐた、その間に孤影と出來たのであつた。

「そりや、ゑゝをなごだすせ、秋田式の顔だちでな、そりやゑゝをなごだつせ」と妻君は繰返していつた。

それにしても孤影に捨てられた女と子とはどうして口すぎをするだらうといふ心配もあつた。北村は私の爲めに姓名判斷をし乍ら斯う云つた

「しようがありませんよ、どうにかなりませう。困つたら又歸つてくるでせうからね、……その女もマアそれを待たせるだけですが、旅役者といふものは斯うしたものですよ。もう其女もくる頃ですよ、全くいゝ女ですよ。」

私はそれを待つてゐられなかつた。汽車の時間が迫つてゐた。急いで車を命じて貰つてこゝを出た。十四五間も來たかと思ふ頃、急ぎ足でくる女をちらと見た。これだッ！孤影の女は！と、ほんの行きずりの一瞬ではあつたが、私の眼にはまざ〳〵と其女の美貌は刻まれた。私は秋田の女の輪廓をよく知つてゐる、たいてい途中であつても秋田産の女は外

れッこないと思つてゐる、違はない、此女だッと車の上で膝をたゝいた。

秋田の女の如く美くしい顔をしてゐて、而も打算的な女はゐない。名古屋女は算盤を撥いて戀をする事に於て有名だが、その名古屋に秋田の女が生きてゐる事を面白くも思ひ、また餘りに劇的である此女の身の上を憐れにも思ふた。

――この間一年經ち申し候――

そして手紙がきた。仁川から長い〳〵こんな手紙がきた。彼は北村が云つた如く、困つて歸つてきたのかドゥか知らないが、又この女と子と一緒になつて旅から旅へと渡つてゐる。――あゝ何日、彼とめぐり合つて滑らかな口つきで語る彼の話を聞く事やら。――私は彼に何とか云つて返事をやらなければなるまいと今思つてゐる。

(中)「白鷺」の女

武藏野の名殘は郊外に出なければ見られない。三菱ケ原も中央停車場の開通と同時に大東京の中心となつて了ふし、洲崎を一すそれた處にいつても薊草はない、武藏野らしい土の臭ひも一株の草も大東京のうちでは見られなくなつた。

江戸女の面影はどこにあるか、新橋は名古屋女に征服され、葭町、柳橋も等しくオキヤアセ種に蠶食されて、純粹の江戸女の住むべき地や縋るべき草は、次第に恐ろしい時世の力に食まれつゝある。寂びた江戸の錦繪は光澤ある三色版に驅逐され千社札は石版で刷られやうとしてゐる。

昔は知らない、新橋のぽんたが全盛時代は云はずもがな、おゑんの目も今は見るによしなく、初代老松の名も今はオキャーセ種に蹂躙され、あゝ北洲が賣物の今日、ダイヤは見てのお歸り、ダイヤを見世物の今日會話術を心得ぬ今日、生き物の藝者が人形の藝者になつた今日、藝者屋に金庫の並ぶ今日。

或る魚河岸の舊家が滅びんとするのを惜しんで、進んで五萬圓の借金をし齡老けたる今日まで猶借財に苦しめられ乍らも、權現樣以來連綿として續いた看板を

女の力一つで盛り返させたといふを誇りの喜代次。さては或る大家の若様が誤つて牢獄の人となり、娑婆へ出ても身寄は家名を楯に監視を受くべき家を貸してくれないので、水商賣のこれが人氣に障つてもソコが女の意地と、自分の家に迎へて長火鉢の向ふに据らせ、ハイこゝで立派に監視は受けますと警入風を吹飛した壽滿子。これ等はちよつぴり都會に喰ひ餘された江戸藝者の名殘で、云はゞ一枚二枚とちらばら賣らるゝ錦繪の類のみ。他は滔々としてオキヤーセに就き贅六東漸、江戸西漸、今ぢや歌澤は大阪で流行ります。

下谷のおしゆんも老ひたり。會ては伯爵の猛さんと深編笠に赤襷のお約束、サヽホーカイの門付、時の宮内大臣土方伯の玄關先で法界屋の眞似をやつての惡戯土方久元、こゝな不屆者と鎗を捻って追拂ひにくる、逃る、また來てサヽ法界――お小使を貰ふまでは所謂伯父さんを弄つてゐた茶氣もあゝ今は失せたであらう。身あがりするといふ事を火の見にあがる位に心得てゐる今日だ。桂公が亡くなればお鯉は五萬圓の爲めに髮を剪る今日だ。それを蔭からつゝつく所謂江戸ッ子なるものゝゐる今日だ。

あゝ江戸の女は何處へ行つて終つたか。もう滅び盡して了つたか、黒襟や素足はあつても江戸の臭ひはせぬ、あゝ江戸の女はどこへいつた。――私は更にそれを知らない、たゞ私は玆に泉鏡花氏が書いた「白鷺」の女と樺太お玉だけを知つてゐる。

一、思ひがけぬ手紙

見ず知らずの人からよく手紙を貰ふことがある。私は興深く思ふ。つい十月の十四五日頃であつた、一通の手紙を受取つた、封筒は無名だつたが、中には身分も姓名も明かにしてあつた。

突然ですけれど旅の宿から此便りを差上げます。實は今朝食後に中央公論であなたの「戀の照葉」を讀んでひどく感じたのと、私にもあなたの力をかりたい一人があるのと、今日の仕事の競馬會には二三時間の餘裕がございますので。手取り早くかきます。あなたは泉さんの「白鷺」を記憶して御いでゞすか、そして時雨さんに紹介されたことのある其女主人公を御記憶ですか、その人が今どんなにして死の床についてゐるかを御存じですか。

悲慘など〻は言ひたくはありません、然し其人の不幸つゞきは「白鷺」のあとを惹て今につゞいてゐます。（中略）そこにあなたの「戀の照葉」を見たのです、私の及びがたい力よりもとあなたに手紙をあげて切めて滅ぶる江戸に涙がございましたら御筆をお借する事が出來やうかとも存じましたので。――「白鷺」の小篠のなれの姿は今銀座の四つ角に病みほうけてゐます、何れ散る身なら切めてその藝術だけでも遺さうとしてか、妹の――「白鷺」ではとしちやんになつてゐる櫻ン實(ぼ)の好きな――子に稽古をつける爲め淋しい聲音を張つて居ります。―（下略）

此手紙を讀むと私の興味はすつかり小篠の身の上に吸ひつけられて了つた。直ぐ返事を出すと福島にゐる此手紙の主――Sといふ人から原稿紙二十枚位にこま〱と小篠一家のことを書つけて來た。

「白鷺」は本になつても讀んだし、喜多村の芝居でも見たがモ一度讀返さうと思つて、古ぼけた本を取出した。――讀者の爲めにも極めて簡單に、この小說の筋だけを並べて置く必要があらう。

二、小說の筋書

文章は鏡花氏一流の妖艶な筆で書かれてある。小篠といふのが主人公、濱町の或る料理尾の娘だつたのが次第に零落して新橋代地に一家退轉、父の歿後、母は髮を切つて河岸の買出しから何から一人でやつて、今ぢや仕出し屋、小篠は待合などへ奉公した後新橋から藝者に出る。――五坂といふ狠やら、ぶく〱肥つてゐる於登利といふ待合の女將やらが壓迫を加へる、小篠には亡くなつた伊達先生といふ心に思ふ人がある、在世の時ついぞ思ひのたけを打明けた事もないが、今ぢや先生の影が心にさして、知らぬ人の爲めに千々に思ひを碎いてゐる。――その先生の弟子の稲木順一と先生の三回忌の頃から知つて、順一に會ふのが先生を拜むやうな氣がして、ふたりの間にいろ〱美くしい幕がつながれる。江戸の女のいきもはりも隨所に現はれる。小篠の妹の年ちやんといふのがある、櫻ンぼうの好きな子である、その頃、小篠の家は年ちやんに櫻ンぼうを買つてやるのに困る位、勝手向が惡かつた。それに小篠は隨分人の爲めにペタ〱捺してやつた印があつた、其印の口にも苛められてゐた。

とう〱小篠は狠の五坂の爲めに、大勢に圍まれて

むりむたいに責めぬかれたが、死んだ——五坂が大悦喜で歸つた後——懷中の、爪こすり、小刀など七つ道具の小さな萬能鋏の尖の鋭いので咽喉を搔き切つて死んだ。懷中かゞみの中へ、五十錢銀貨を鼻紙に包んで「年ちやん、さくらんぼを買つておあがんなさい」と書いてあつた。

以上、ほんの摘むだ筋だけであるが、順一とお篠との間に江戸ッ子が目を細うして嬉しがるやうな文句やいきはりの筋があるが、それは實話のなかへ入れる。

それとモ一つ讀んで置かねばならぬのは長谷川時雨氏の「明治美人傳」中の「白鷺の小篠」である。——白鷺の小篠とは作者鏡花氏が其作物の面影を彷彿させようとして考へてつけた名ではない、其作の命のお富さんを現はすためのお富さんに代へた假名である、それがまあ、實によく其女の姿と氣質とを言盡した名となつた。——浮世の苦勞にやゝ薄くなつた生際、目千兩の張のある目つき、眉は此人としては優し過る程のんびりと長く、地味好みの江戸前仕立、低い藝者島田に水のたれるやうな笄一本、とは云へ御酒をのんでたんかをきる時の氣負さ、藝者としては賣れなかつた、此お富さんに小篠の名をつけた人の爲めに、小篠は一入脊せた程の苦勞もしたのである。——こんな意味の文句もあつた。

三、小篠の家

小篠は生きてゐる、小說では自殺してゐるが生きてゐる、生きてはゐるが、苦しみあがき乍ら生きてゐる

これから福島のS氏の手記をくる。

一、小篠の家は銀座尾張町新地十七番地にあります。尾張町の角、八十四銀行から數寄屋橋の方に名を忘れましたが隣りに印判屋があつて、その次が國光生命といふ順、そして裏通り新道がある、その印判屋と國光生命との間の露路を入るか、新道の支那料理の隣りの貸本屋と稻荷さんのある間を入るかすると、直ぐ文明軒といふさゝやかな西洋料理がある、其前の家の東側に陶器の表札に「杉本」と書いてあるのが小篠の家。先頃少しく修繕を加へた——それも熱い涙で買はれた——ので店の方が少し新しい許り。階下が四疊半に八疊の店、二階も同じ二間、いろ〳〵と料理の器具がある。二階の八疊が小篠の間と云つてもよい。そこで三

味線が鳴る、長唄が唄はれる。

一、家族は六十近い驚くべく美くしい母親と、小篠、卽ち二黑巳の三十四になるお富さん。妹のよつちやん(よし)確か年は十一、それに女中の出前持がひとり。弟の信太郎といふのは日本橋邊に奉公してゐる筈。お富さんには此外に二人の弟があつた。庄二郎(一八)勝三郎(一六)——庄ちやんは飛行機狂と云つてもよい位、模型を拵へては築地の水の上や日比谷や月島の廣場で飛ばしたもの、勝ちやんは文才があつて、多摩川在の親戚の葬式にいつた時の便りは私を驚かした位、番町の先生(鏡花氏)に八犬傳を買つて貰つて喜んだものだ。この兄弟は泰明小學の秀才で妹のよつちやんも此學校で級長をやつてゐる。「白鷺」で梗ンぼうを好く年ちやんは此子である。——處が今年の二月勝ちやんが死んだ、つゞいて三月には庄ちやんが死んだ、男の子ふたりつゞいて死んだ、この悲劇も「白鷺」以後の事である。

一、こゝの家號は小說では「辰巳屋」になつてゐるが實は「遠州屋」。六年前に父なる人は死んだ、死ぬまで酒を戀しがつてゐた、天金と清新軒の先代とは飲み仲間であつたさうな、この父なる人は力士を隨分世話したもので小說でも鳳月堂の二階で關取が順一を押出さうとする時「辰巳家の小篠だよ」と透きとほる聲で云ふと、關取が俄かにぺこ〳〵する條がある、實は遠州屋のお篠さんと云へば力士社會には聞えたものだから左もあらうと思はれる。

四、哀れ二年の命

同じく手記のつゞき。

一、そこでモデル詮議に移ると、伊達先生といふのが尾崎紅葉山人、それから稻木順一といふのが鏡花氏自身、紅葉館の三回忌といふのが第三回紅葉祭で、順一の祝賀の會といふのが鏡花會、その會に津川といつて出てくるのが柳川春葉氏だと思ふ。小說では順一の鏡花氏と、お篠のお富さんとが活躍してゐて、紅葉山人の伊達先生はいつも影になつて働かせられてゐる。

一、昔からいろんな人が出入する。しかし鏡花會と、お富さんが「白鷺」のモデルになつてから、更にそれが芝居になつてから、愈々出入する人が變つてきた。いつたい鏡花といふ人は自分の小說が芝居になる事を嫌がる、丁度「白鷺」の舞臺稽古の時にも、喜多村の懇望によつて番町の先生は人の後に小さくなつて見てゐた、そしてお篠のつくりが派手過ると云つて小言をくわせた。先生の註文を隨分聞いたつもりの喜多村のお篠を見て「もつと地味でなければいけない、その女はそんな派手好みの女ぢやないから」と云ふ、喜多村は「この上地味にしては芝居にして見られない」といふ、先生は「だから始めから余り贊成しなかつたンだ」と云ふやうな挨拶だつたといふ事を聞いた。これはお篠——お富さんの人柄を語つてゐると思ふ。

一、かういふ關係から遠州屋に時たま訪ねてくる人は菊五郎、長谷川時雨さん、鏡花氏夫妻、よく手紙を寄せるのが京都にゐる喜多村のいゝ人、喜多村緑郎、池田輝方、蕉園お夫婦、鏑木清方さんなど。畫家のパ

ン屋木村屋の娘さんは喜多村最負から此家に遊びに來てはお富さんの面倒を見てゐる。

一、お富さんの病氣は日本人で罹つた第二度目だといふ、聞き誤りかも知れないがお母さんは「パセ通し」とか云つてゐた。尾張町の先生がラヂウムを咽喉に卷いてくれるがお富さんの命を支え得る事やら、その醫者は昨年中氣の再だが二年位よりもつまい」と云つたとやら。……それでも時雨さんの狂言座の第一回興行によつちやんが初めて舞臺をふむ事になつた時、舞臺ではあの人魚の舞を苦もなくやりのけたが、夫れは苦勞を知らぬよつちやんの話、母さんやお富さんの苦勞は並たいていではなかつた。お富さんは病みの身でゐながら、箱根までいつて節付をしなければならなかつた、お富さんは藝と思ふ人の爲めに生きてゐるのだものお富さんは十五六の頃から紅葉館にゐた、だから藝も其頃からしつかりしてゐた、忘れぬうちに云つて置くが、お富さんが紅葉館を出て、新地の家に隱れた時には、鏡花氏は銀座とうろ覺えに聞いたのをたよりに一軒毎に聞いて廻つて三月かゝつた、迚も駄目と觀念した日、死んだ圧ちやんに道をきいたのだつた、といふ事も聞いた。

五、重なる不運

手記のつゞき

一、お父さんが亡くなつてから、お母さんは小說の文句にもある通り「見やう見眞似の御新姐料理で、間に合はせの仕出しなんぞ」して樂はふつつり切り。自分で魚河岸まで買出しにいつて、仕出し屋。そして多くの子供と病人を抱えて、お父さんが病みの頃からの借金、而も面倒な借金に苦しめられてゐる。債鬼は始めは赤坂溜池の某から八百圓、これを拂ふ爲めに女の腕で三十圓宛毎月拂はねばならぬ、翌春に書かへ、二人の子は死ぬる、お富さんは病氣、後には其債權が芝區濱松町の東京便利興信所といふに讓渡されて督促が嚴重になつた。私はこの間を辯護士川島仟司氏やら泉々生やら電氣局の佐久間さんやらへ相談にいつた。

一、それに店の南の八疊は先頃まで天ぷら屋夫婦に貸して置いた處が其女房が滅法邪險で同情どころか差押の時など近所を觸れ廻つた、そして立退く時に遠州屋のお得意を皆もつていつて了つた。——私が五月福島に立つ時にお母さんが云つた。「愈々駄目となりましたら、およしは時雨さんの處へ頼むつもり、お富は深川の知合ひの處へ頼みますが（と聲をひくめ）お富がイザといふ時に、みてやる者もない樣では困りますから……私は池上の本門寺にでもいつてはゐますけど……併しお富は諦めてゐますよ、たゞおよしが可愛いぢやありませんか、こんな場合になつても學校の事とお稽古の事は忘れないのですよ」—— こんな際にも小說の中にある「姉弟でもきれうよし」の年ちやんの此よつちやんを狙つてゐる惡魔がゐた。私はぞつとした。

一、「白鷺」の中の五坂といふイヤな奴、小篠を手籠めにし常も順一を口惜しがらせた奴は日本橋か南傳馬町邊にゐて、「お爲ごかしを云つては遠州屋に近づかうとしてゐる、それを石を噛るとも受けまいとお富さんが泣いてゐる。

一、私がいよ／＼東京を去るといふ五月四日の晩、私が挨拶に行くと

お母さんがわざ〳〵他家から親子をとつて振舞つてくれた。別れの爲めに二階に上ると、お富さんは寢てゐたが、お餞別に何もないからと四五すの鮑をくれた。それが今どんなにか私の役に立つてゐる事か。

以上が手記の骨である、あとはS氏とこの家との關係が細かに書いてあるが略す。そして美くしい文章て、江戸の名殘を語るかにお富さんの三味が咽ぶ、その感想が認めてあつた。

六、意外な鏡花會員

私はこの手記と「白鷺」とを讀んで、いろ〳〵に結びつけて考へてみたが、「白鷺」の小篠の身の上は分つてゐるが、お富といふ女の事は少しもはつきりしなかつた、又Sといふ人も委しく知らぬらしい、兎に角これだけに私が見た遠州屋と、私の聞いた事だけを加へて此原稿を結ばうかと實は思つてゐた。ところが、たいへんよい人に會つた、而も突然の事で、日も十月の三十一日、天長祝日の夜の事。

私の知つてゐる或る官吏が、海外へ赴任するので其送別の意をかねて新橋の或る旗亭に酒を酌んだ。話は靑島の事から、外交上のその人專門の事から、不圖、こん度の美人通信は何を書くかい」と聞かれたので「もう書あげさうだ、鏡花の白鷺に因んだもので……」といふと、その座にゐたAといふ藝者が目をみはつて「泉先生の！あの先生の白鷺がドウしまして？」と聞く。

私も意外に思つて、ドウして「白鷺」の事を氣にするかと訊ねると、彼は「私は泉先生の妹分になつてゐます。それに鏡花會の會員で、實は築地の濱松で私どもが開いたのがそも〳〵ですから」と云ふ。

その藝者の名は出さないといふ事になつてゐるからAといふ頭字だけを使つて置くが、此藝者は私の質問の總てに驚いた。私も亦人が惡かつた、S氏の手記そのまゝを自分のものとして彼に話すと、彼は餘りに私が事情に通じてゐるので目を瞠つて驚いてゐた。

「ほんとうに書いて下さい、それはいろ〳〵込み込つた事がありますの、私の事も書いて下さい、こゝでは話せませんが……お宅へ伺ひませう、江戸の女の名殘と云ひますか、ほんに行先の短いお富さんの爲めに同

情して下さい。」彼は目を落した。

「お富さんは可愛さうに、もう惡いのですよ、目が飛出したやうになつてますの、寢てゐても目が出てゐますからね……あの美くしい人が、あの美くしい人が、病氣の爲めにあんなになつてますからね。」

Aは、毎日遠州屋へ行き、遠州屋の借財の中にも入つて色々心配してゐるらしかつた。泉先生の爲めにも妹分であるが、お富さんにも妹分になると親身のやうに云つてゐた。私は「白鷺」といふ小說と此「杉本一家」とは別物にして見たい、私はS氏の如く「白鷺」のモデルは誰々なりと、はつきり定めて了ひたくはない、「白鷺」は「白鷺」――「お富さん」は「お富さん」としてみたい。

そんな事もAに云つた。

余り遲くなるので其夜は別れた。Aは斯く原稿を書いてゐる今朝――十一月二日の朝私の家へ來てくれる事になつてゐた。

七、電話の聽取書

私はいろ〳〵お富さんの數奇を極めた生涯をAの口から聞ける事を待つてゐた處が、昨日の夕方電話が掛つてきた。Aの聲で

「ほんとに濟みません、大變な事が出來ましたの、私は少し體が惡いけれども、少々の事はお富さんの爲めに我慢してお伺ひしようと思つてましたの、ところが私の實家の方に大變な事が出來ましたから昨夜からこつちに來てゐます。そのわけは何れお目にかゝる折があつたら申し上げますが……それであなたの方もお急ぎでせうから電話で御返事の出來るだけは今こゝで致しますが……」と如何にもあわてゝゐた。

十日や二十日は新橋の方にも歸れさうもないといふので私は電話て話をきいた。しかし先方は人前があるのか、返事は餘り突込んだものではなかつた、私の方が餘計に口數を費さねばならなかつた。こんな返答がある。

「泉先生の方もどんな御都合か、近頃は余り面倒をみて下さらないやうです。今までお富さんも先生のお宅

には出入してたんですが、……それといふのも何か先生に怒られるやうな事があつたかも知れません……」

「お富さんは十六の時紅葉館にいつたのです、きれいはよし長唄はうまし、一時大變な評判だつたんですよそれから家へ歸つて神奈川から藝者に出ました、神奈川から又横濱にいつて女中奉公をしたものです。その次が築地の濱松に女中にゐて鏡花會などがあるといふ段取になりました、新橋から藝者に出た時に——高丸さんの家から藝者に出た時に小說にあつたやうな事があつたのでせう。紅葉館に二度目に出ましたが出て家にかへる時はモウ散々でした」

「紅葉先生は知らないでせう、お富さんは……」

「泉先生もおかしかつたでせうよ。自働電話をお富さんの處へ掛けられると出る時に戸が閉つて出られないドウしても開かないのでバタ〳〵叩かれたが駄目、そこへ助けの神様で開けてくれたのが先生の幼友達、而も先生の初戀の女をおかみさんにしてゐる人で、今たいへん困つてゐるといふ話をする。それを聞いて先生がお富さんにやる爲めに持つてゐられた五十圓の札を分けてやらうかと思はれたが、お富さん一家の事を考へられるとさうもならず其儘別れられた、そしてお富さんに此事を話されるとお富さんが云つた言葉が確か小說にあります。そこを讀んで下さい、お富さんといふ人はそんな人なんですから……」

電話は切れた。Aとは當分語る事が出來ない、今Aが云つた處を開いて見ると斯う書いてある。

「家内と云つて下すつたお禮に、私や貴下を男にしたい。まあ、偉らいふと、差出がましいやうだけれど、何うぞ、この、私が頂いた此のお金子は、その、本鄕で、西洋料理の屋臺を出してる御夫婦に立替へて上げて下さいまし。……聞けば其の御新姐は五ツになる男の兒の手を曳て、乳呑兒を抱いて居なさるツていふぢやありませんか——而して迎へに出た主人の方も、路頭にうろ〳〵してるでせう……その御新姐が義理知らずで、あなたを棄てたのなら猶更ですわ。私のやうな意氣地なしが、言はれた義理ぢやありません。實際欲しい。父親は内に大病だし、私は體に借金ばかり、成らう事なら、小指を切つても取替へたいお金だけれど……又それだけのお金ですから其人たちに上げるのに都合があるぢやありませんか。先方が不實なら不實だ

け、――そんな時には氣前を見せるもんですよ。……何のために江戸兒の情夫がついてゐます。」

私の書きたい事は、もうないやうだが、モ一つ加へたい。それは時雨氏の「美人傳」中に「小篠についてモウ一つロマンチックな物語がある」と書いてゐる事である。

鏡花會の發起人で「神田の金さん」と書いてあるが田島といふ人、逸事に富んだ人だが、今は布哇にいつてゐる。そして時々金を無名でお富さんの處へ送つてくる、正金銀行まで受取に行くのは大變だらうといふ心盡しから現金で送つてくる。

この人は「小篠に三年越の戀をして打明けずに失戀して、そして小篠と其戀人の爲に爲よかれと、今でも影身になつて心配してゐる」さうである。この人が苦しい思ひを打明けなかつたのは、小篠が眞砂にゐた頃丸髷に結つてゐたから、心で戀して口には言ひ出さなかつたさうだ。うれしい話ではないか。

こゝまで書いてくると、ばアやがあわたゞしく襖を開けて「死にました」といふ。きのふから瑠璃鳥と駒鳥が死にかゝつてゐたが……あゝとうとう死んで了つた。美くしい聲音を張らずに死んだこの二羽の小鳥を私はドコに埋めやう。――

(下) 樺太お玉

芝二本榎の五人殺しは珍らしい刑事事件として天下を騷がせた、引つゞいて三人殺し、都合八人殺した犯人は、鳶の者荒内錘太郎といふ事が判つた。

その日、私の「日日」では直ぐ電報で家族五人を殺された在函館の上川丸船長工藤嘉三郎氏に宛てゝ、犯人就縛の事と犯人の姓名等を知らせてやつた。すると折返して工藤氏から「ゴコウイヲカンシヤス」といふ返電がきた。――その夜、私は樺太お玉に會つたのである。

それは葭町の百尺だつたと思ふ。二三人で會飲してゐたので、話は其日の大きい出來事として、犯人就縛の事から昔に遡つて、五人殺し當時の事、親子地藏の事まで夫れからそれへとはづんだ。

「私も親子地藏へ昨日おまゐりしましたの、少し心願の筋がありましてね」とお玉がいふ。――お玉といふのは藝名ではない本名、色の淺黑い目のつれた、脊の高い女。――その心願の筋を聞かうと一座の者は囃し立てたがお玉は何とも云はなかつた。

其後二三年經つてから私はひよつこり向島の土手で

彼に逢つた。そして彼の今の生活を知ると共に芝居の總見の義理やら、松茸めしのをごりつこやら、私の友達やらお玉の友人が交際にからんで話が賑やかになつた。斷はつて置くが次の話は私が聞き蒐めた彼の半生涯の筋書だけである。

芝で生れて神田で育ち――彼は柳橋で半玉となつて出た。その時には實の父母はなかつた、戸籍謄本をその時始めて見て養女となつてゐることを知つた。後になつて實の弟が淺草橋のほとりで小間物店を開いてゐたので、實の親は芝で鰹節屋をやつてゐたといふ事を朧氣に知つた位である。

柳橋で札ッぴらを切つては藝者を玩具にする客がむやみに癪に障つて、自分へ魔手が及ぼうとした時に、痰痾を切つたのが病みつき、まだ十八のやつと一本になりたてのほや／＼が、一つは面あてに、一つは美しい戀ごゝろに向河岸の吉ちやんに逢引いたのが原因で横濱へすみ替へるやうになつた。これが江戸を離れて樺太三界まで流れ歩く振出しであつた。

それから淺草にゐる養父母のところへ歸つてきた。母親はごもくのお師匠さん――ごもくといふのは御承知でもあらうが、唄なら何でも一寸間に合ふやうに教へる師匠の事です――横濱で身うけを去る貿易商にされはされたが、東京の生活が戀しうて淺草に歸つてぶら／＼遊んでゐた。もう其頃の彼の味覺は鋭利になつてゐた、東京以外の土地の鹽加減は彼の舌には合はなかつた、甘いものでも他所の毒々しい甘いものは彼の舌を喜ばせなかつた。――彼は東京へ歸るが否や、舌を喜ばせる事と肌を喜ばせる事を忘れなかつた。氣に入つたものを着た、同じ柔かいものでも自分の目に親しみのある柄の方が肌につけ心地がよかつた。彼は何も彼も忘れてふら／＼遊び歩いた、芝居といふ芝居は見て歩いた。そして借金――とう／＼仙臺へ落ることになつた。

「食ひしんぼう、この舌一枚のために又都落か」と何だか自分で自分の身が憐れまれたが、まゝよ浮世は三ぶん五りん、仙臺では自暴も手傳つたが隨分世間にす

れてゐた。抱主の萬屋といふ藝者屋の息子が手を出したのがもつけの幸ひ、ぷいとドロンを極めて函館へ渡つて了つた。もう彼は渡り鳥の呼吸を覺えてかゝつた。

函館でも又舌の爲めに苦勞をした。東京の空氣に觸れたさに隨分無理な事もした。とう／＼西券から宇多子といふ名で出た。

「この頃の事ですよ、上川丸の船長さんを知つたのは工藤さん、あの方をね」

役者買ひ、情夫、いろ／＼道樂を覺えた、併しいつも／＼東京の憧れはあつた。さうした道樂にも江戸氣質ともいふべきものが附き纒つてゐた。

また函館落、二年と經たない間に借金をして自分が主人の藝者屋もたゝみ、そつと夜逃げをした。函館から船に乗つては追手が掛るといふので小樽まで汽車、懐ろにはモウ幾らもない。樺太の漁場にゐるあまい客から旅費をせしめて東京へ歸らうといふ寸法。

「そこへ都合のいゝ事には上川丸が樺太へ出帆するといふぢやありませんか、渡りに船とはこの事、早速工藤さんに頼んで特別に乗せて貰ふ事にしましたの」

船には時の平岡長官の一行が乗つてゐた。その一行の中にSいふ事務官がゐたが此人の肌合ひがさつぱりして氣に入つて了つた。

「船に醉ふてうん／＼呻き乍らも人に惚れる事は忘れませんからね、それに其Sといふ人が馬鹿に親切にしてくれるでせう、變な氣にもならうぢやありませんか」

眞岡着、それから志すテイヤといふ漁場までいつた。途中で親切さうなお婆さんに話しかけられて、うつかり此家に寄ると大きな遊女屋で「お前さんも一つ稼いでは」などゝ凄く出られて逃出したなどの道草もあつた。

テイヤといふ漁場に三井といふ旦那をたづねていつた。ロシヤ人が經營してゐた處なので總てがロシヤ式家から器具までさうであつた。ところが三井の處には

自分より先にひとりの女がいつてゐた、山縣かねといふ函館で有名な高等内侍で凄い程美くしい女だつた、少し若白髮があつたが、夫れを染めて化粧をすると女でも見惚れる程美くしかつた。

其お兼はお玉を見るとイヤな顏をして毎日辛くあたり出した。鰊を干すやら、數を讀むやら、女ふたりも漁場の手傳ひをしてゐたが、ふたりは事毎に衝突した。

「そこで私も云つたンですよ、ねエお兼さん、私だつて江戸の者だ。さつぱり言つて了ひますがね、お前さんはこゝへ慾で來てるの、それとも色氣で來てるの、一寸私に聞かせておくんな。私は何も色の戀のといつて來たンぢやないから、お前さんの氣さへ知れたら、きれいさつぱり讓りますよ、とかう云つてやると面白いぢやありませんか、其女もね、さうさつぱり出られると私も言つて了ひますが、實は少し金が欲しいものだからと本音を吹いて了つたのです。それなら夫れのやうに何とか早く片付けやうぢやないか、今年は鰊も不漁のやうだから案外アテが外れるかも知れないよ、といふ事になつて了ひました」

愈々ふたりとも逃げ出すといふ事になつて、金庫から印紙を二百圓許り引出して、窓からそつと外へ出ると月夜で雪がぎら／＼光つてゐる。ふたりは逃げた、雪の上を逃げた、三里の間、雪の上をふたりは無散に逃げた。

漸う眞岡へ辿りついて、それから大泊へ船でいつた。お兼は印紙を賣つて函館へかへる、お玉は豐原にいつた、それは船で會つたS事務官を思ひ出したので。宿から使を出すとSがきた。十日二十日とぐづ／＼してゐる間に遊んでゐても退屈だからといふので又藝者に出た。江戸藝者の評判は高くなつた、それにお玉のさつぱりした氣前と齒切れのいゝ言葉とは、山師の多い樺太では喜ばれた。「ハレー彗星」といふ渾名が彼の爲めに出來た。彼は彗星の如く出沒して、氣の向いた座敷でなければ決して出なかつた。

日本水産會社の樺太出張所の或る男に身うけされた。それから捕鯨船に乘せられた。

「ねエ、振つてるぢやありませんか、捕鯨船に乘つて海の上で毎日暮すなんテ、變れば變るものだと自分で自分の身が面白くなつて來ましたよ。船には諾威人が砲手で乘つてゐましたが、私は始めのうちは鯨を射擊(うつ)ごとにびく／＼しましたが、それでも後には馴れて平氣で追分を唄ふやうになりました。荒海で向ふに鯨の浮き沈みするのを見乍ら哥澤でもありますまい、やつぱり海の上では追分ですよ、私は毎晩追分を唄つては皆を喜ばせてやりました」

暗轉(ダークチエンヂ)。——

「考へてみれば馬鹿々々しい、東京、東京に限ります矢も楯も堪らなくなつて、船が函館に入るが否や、すたこら／＼東京へ歸つてきましたよ。その身うけしてくれた人も船のりですからね、腹は大きいから安心なものです」

　そして彼は東京に歸つて、相變らず味覺の滿足を得た後は、葭町から左褄。

「私も親子地藏へ參りましたの、心願の筋がありましてね」と、あの夜、百尺で私に云つた心願の筋は、この筋書の通り、彼は樺太へ渡して貰つた工藤氏の恩を忘れずに、親子地藏の冥福を祈るものと知るべし。

　向島で私が會つた頃から、母親ゆづりのごもくの師匠——本場で鍛へたゞけに、追分はお弟子に喜ばれるさうです。

　火事の晩、私が通りかゝつて飛込むと荷物は運び出して空地に積み、お玉はその番人、姉さん被(かぶ)りをしてゐるから「ごたいさうな風だね」と聞けば「江戸の女は火の粉で髮を燒かぬものです」とさ。後に聞いた話だがお玉の家の方へ火の手が廻らなくなつたと見るや彼はもういゝ氣になつて覺えず端唄を小聲に唄ひ出したら、隣りにゐたお婆さんに暢氣過ぎると怒られたさうである。

　樺太お玉とは誰がつけた異名やら、葭町あたりや淺草界隈では知る人ぞ知る。襟足の美くしいすつきりし

たゞお玉の姿が見たいなら、毎朝、六時から七時の間、雨が降つても日が照つても、待乳山の聖天様へお參りをしてゐますから。

これが江戸から追出されて、味覺の爲めに又江戸に吸ひ寄せられた二十八、丑年の女。――隨分逢引やら江戸前の嬉しい話はあるが、それは後日を期したい。「美人通信」も、こゝで活動寫眞なら鷄が出るところ。

――(完)――

問題の人・噂の人

鐵拳禪

▼言論尊重と學閥打破の兩天秤で、天下の青年を煙に捲いて居た大隈重信伯も、近來燒きが廻つたと見えて、事毎に味噌が附き、ケチが附き、高尚な理想通りには行かないやうだ。斯うなると、在野當時の國寶も、在朝の今日は疫病神のやうに、小豆飯を炊いて送られるだらう。

▼大隈內閣破壞の運動は、軍國議會の前後に火の手を擧げたが、政友會の最高幹部が餘り乘氣にならないので、兎も角表面は無事に收まつた。が、內部には運動の火の手が夫れから夫れへと燃え移つて、地下室の小火見たやうに底の方で煙が渦卷いて居た。夫れが政治季節に入つたので再び焔の舌が表面に現はれて、恰度政界の一階目位の處で煙を噴いてゐる。

▼獨逸軍には放火隊と云ふのが有つて、白耳義の市街を燒拂つたさうだが、我が政界にも之に類した者がある。勿論獨逸軍の放火隊のやうな組織ではないが、自個の勢力圈を侵されるとか、自個の野心を逞しうする事が出來ないと、諸方から火を放つて內閣を破壞しようとする。つまり內閣の燒打だが、夫れを最も巧みに行らうとする一隊なのだ。大隈內閣も亦、此の政界の放火隊から睨まれて、危殆に瀕してるやうだ。

▼其の張本人の何人であるかは暫く措き、赤い舌を出して居るのは、長閥とか官僚系とか稱される方面だ。軍國議會の當時は、伊東巳代治子の禿頭が杉山茂丸君の邸に見えたり、後藤新平男の鼻眼鏡が寺內正毅伯の尖頭を仰視したりして居た。而して夫れ等の人々の忙しく驅摺廻つてゐる

る舞臺裏には、寺内系第一の智嚢と稱される徳富蘇峰君の獨降頭なども見えた。淸浦流産内閣の弔合戰でも無からうと思つて居ると、案外にも其の鬱念を晴らす意味もあるらしく、外交失敗の攻撃で、一氣に寄倒さうと試みたのだ。

▼政友會の最低幹部邊の者が、積極的擧國一致杯と鼻蠢かして居たが、尠からず官僚派の煙に捲かれて居たやうであつた。政友會の多數は××開戰を喜ばず、何とか他に取るべき萬善の策がなかつたらうかと云つた樣な調子で、現内閣を非難して居た。唯彼等は場合が場合なので、眞正面から外交上の攻撃をせず、側面から揚足を取るやうな態度に出でたのだ。けれども、官僚系の人々と策應して、大隈内閣を破壞する事が出來れば、破壞しようとの心算であつたらしい。

▼大隈首相の、擧國一致を强ふるものでないとか何とか云つた兩尻を提へて、中村代議士が失言呼はりをしたのも、破壞運動の火の手らしく見えた。此の際に於ける政友會の活劇と云つたら大したもので、一同豫算委員會を引揚げて政友會本部に集り、各州會を開いて決議をするやら、卓を擊つて悲歌慷慨をするやら、床板を踏鳴して現内閣斃さざる可からずと絶叫するやら、意氣冲天の槪があつた。處が翌日になると、最高幹部の水が向けられたと見えて、さしも熾んなる火の手も一時に消えて了つた。

▼政友會でも、官僚派でも、大隈内閣を破壞しようとする事は一日も忘れないが、公然一致の行動を取る事だけは無さ相だ。政友會は現内閣を倒しても政友會自身で内閣を乘取る事が出來ず、寺内内閣と妥協する位が關の山だと云ふ腹がある。官僚派の面々は政黨内閣を喜ばないから是が非でも超然内閣を組織しようとするに相違ない。政友會總裁の原敬君なども、近來寺内伯や後藤男に流眄してる所を見ると、滿更色氣のない譯でも無いやうだ。

▼後藤男が同志會脱黨以來、乾兒に對する待遇が急變したので、彼れは政界に意を絶つたのだと推測する者もあつたが、彼れは死ぬまで政治的功名を思ひ切る事の出來ない性分だ。一たびは政友會に走らうとするかに見えたが、一政黨嫌ひの杉山君と兄弟分であるだけ、官僚系と緣が斷れず寺内親分を擔いで、内閣乘取の筋書を書くのは捷徑だと思つたらしい。一時寺内伯などは迚も政界に打つて出られまいと思はれだが、大隈伯の事毎に失敗するので、一彼等に再起の機會を與へたのだ。

▼政友會の連中は、何でも難かしい事は現内閣に行らせるが可い、後で引受けた時都合が好いから杯と笑つて居る。大隈伯は其の計略にはまつたのでもあるまいが、前代の官僚内閣ですらも敢てしなかつた、非立憲的、武斷的な事を行つてゐる。外務省令第一號を發布して新聞記者に轡を箝めたり、朝鮮總督に出兵要求權を與へて來るべき媾和の萬一に備へたり、箝口と武裝とに日も是れ足らざるの有樣を見ては、言論尊重の誠意の奈邊にあるかを疑はざるを得ない。

▼傳染病研究所や、水産講習所の管轄換も、行政整理の結果で、前内閣の行り得ない所を行つたのだと自慢して居るさうだが、其の手際が拙い

ので、惡太郎が蜂の巢を突いたと同樣な騷ぎを惹起した。現內閣が眞に行政整理をやらうとするなら、此の二所の管轄換を決行すのみならず、陸軍地方幼年學校、其他改廢すべきものが尠くない。彼等の所謂學制統一上から見ても、亦同時に斷行すべきものなのだ。斯う云ふ片手落の處置は、誠意ある政治家の爲すべき事でない。

▼偏頗な處置と云へば、其の例が幾らもあるが、仙石鐵總裁が三十幾つかの雜誌社から鐵道二等乘車劵を取上げたのも、其の一例であらう。一體此の乘車劵は鐵道院の廣告と交換する意味で、雜誌社に交附して居たのだ。然るに、行政整理を名をして、特權を停止して了つた。若し行政整理上からなれば、代議士の一等乘車劵は勿論、官吏若くは新聞社、通信社の夫れも停止すべきである。或は弊害が伴ふからと云ふ理由ならば獨り雜誌社に限らず、新聞社、通信社とても同然であらう。又、代議士は旅費を支給されながら乘車劵まで持つて居るのではあり、雜誌社のは廣告と交換するのであれば、行政整理の斧を孰れに揮ふべきかは、自ら明かなることとだらう。

▼傳染病研究所問題で、滿天下の同情を得たのは北里柴三郞博士で、何程か信望を失したのは靑山胤通博士だ。靑山博士は東大の醫科大學長で醫界に於ける學問の頭領と云ふ地位に在る所から、澤山な乾兒を養つて氣儘な振舞の無いでもない。北里博士は又民間派の親分株で、學閥に拮抗して下らない程の勢力を持つてゐる所から、靑山博士は政治家肌な男だけに、其の地盤を叩き潰さうと畫策して居た。夫れが大隈伯と云ふ知己を得て、宿志を達したのだと云ふが、是れも博士の診察と同じく餘り當にならない話だ。

▼政治家肌と云ふ點は、靑山博士も北里博士も略伯仲する。但し人氣を取ることの上手な點は北里博士が勝れ、巧みに權勢に慇懃る點は靑山博士が優るかも知れぬ。親分としては、無論北里博士が大きいであらう。一は役人根性で小策を弄する嫌はあるが、一は山師氣質で懷が廣いやうだ。何れも金放れの奇麗だと云ふ保證は出來ないが、乾兒を作るには財布の口ばかり締めても居られまいから、多少鼻藥の盛り方ぐらゐは心得てるだらう。

▼傳染病研究所の發達も、細菌學の進步も、北里博士に負ふ所あるには相違ないが、彼れの名譽も、彼れの富も亦此處に得たのは爭ふべからざる事實である。で、此の研究所は北里博士の研究所で、殆んど內務省管轄の下にある帝國の研究所だと云ふ事を知らぬ者さへある位に、彼れの勢力は緊張して居たのだ。歷代の內相も、北里博士の勢力圈に一指を染める事が出來なかつたから、彼れも隨分我儘勝手な事もやり、又夫れを默許されて居た。若し研究所に秘密が潜んでるとすれば、夫れは北里博士の扶植した黴菌であるのだ。早晩傳染病研究所は廓淸さるべき運命を持つて居たのだから、今次の問題が起らなかつたなら、北里博士も今日の如き信望を持續し得なかつたであらう。

▼さう思ふと、北里博士は幸運な男だ。彼れは常に『名は世界的だが、實は之に副はない』とか、『細菌よりも相撲の研究に熱心だ』とか、色ん

な非難が附き纏うて居た。青山博士の學殖や、技倆に對しても疑問點を打つ者があるが、學問のお蔭て無理が通つて居た。今回端なく非難の焦點となつたが、年來築き上げた勢力の上から墜落するやうな事もなく、例の倨傲尊大な態度を持して行くだらう。北里博士の同情は何日(いつ)まで持續するか知れぬが、私立研究所を設立して、杏林に雄視するであらう。

▼北里博士と聯袂辭職した宮崎幹之助、梅野信吉、照内豐、秦佐八郎、草間滋、北島多一、志賀潔の諸博士の後任に擧げられたのは、横手千代之助、林春雄、長與又郎、二木謙三の四博士と、西澤行藏、八木澤正雄、城井尚義の三軍醫と、東大助教授の石原喜久太郎君と、新歸朝者の芳賀石雄君とである。前任者に較べると、餘り目鼻の附いた顔觸でもないが新進の人物であるだけ夫れだけ、將來に望を囑することが出來る。大學教授や軍醫の兼任では、思ふ樣に研究が出來まいとの懸念もあるが、經費や何かの點に就ては、北里博士の時代よりも非常に減少すべきは言ふ迄もない。

▼三軍醫は、曾て陸軍の委託學生として、研究所に二年程學んだから、手心は能く分つてゐる。之を推薦したのは、森林太郎博士なさうだが、ちよつと皮肉な遣り口だ。更に長與博士を東大の若手から拔いたのは、何等か意味がありさうだ。彼れの先代が衞生局長の時に北里博士が洋行し、又彼れは幼時から北里博士の邸に出入して居たので、兩家は格別親交の間柄である。夫れが敵味方と云ふではないが、官私兩方に別れて研究の鎬を削るのは、學界の觀目を惹くに足るべき活劇だ。

▼二木博士は駒込病院副院長で、多年細菌學の研究を積み、赤痢及び狂犬病の專門家だ。が、彼れは任所が任所なので、傳染病臨床とか、腹式呼吸とか云ふ方面でのみ知られてゐる。赤痢菌の研究では志賀博士の爲めに、光が薄いやうに感ぜられるが、志賀博士より以上の發見をして居る事は、學界の等しく認める所だ。日本の赤痢菌の大部分を占める駒込A菌、駒込B菌などは、皆彼れの發見に係るものだ。

▼彼れは漢法醫の伜で、藥草の裡から生れたやうなものだ。幼時身體が虚弱なので、漢法を學んだり、禪に參したりして、心身を鍛錬する工夫をした。追々と普通以上の體格となつて、獨逸までも押渡つて、醫學を研究することが出來た。留學の際は、グルーバーに愛せられて、師弟相助けて研究の便宜を得たさうだ。人物もシツカリして居るから將來は研究所の中心人物になるだらうとの評判がある。

▼東京市の助役問題も久しいものだが、宮川鐵次郎君だけは再選するとか何とか、今以て落著しないやうだ。田川大吉郎君や、原田十衞君は代議士ではあり、政黨關係の者を擧げないと云ふ方針に違ふとの事で、毛頭再選される氣使はない。市長の阪谷芳郎男は森久保派全盛時代に擧げられた人だが、今日では富豪派の傀儡になつてるやうだ。夫れに敵本主義で、電燈料輕減などを騷ぎ立てる一派もあるので、市長も浮(うつ)かり手を出せないのだ。

▼田川君は一見無愛想な顔をしてゐるので、ひよつと誤解されるが、なか〳〵情義に厚い、親切な人だ。さうして多方面に行き渡つて、何問題

について も意見を持つてゐる。世人は餘り注意しないやうだが、『都新聞』に出る彼れの文は、彼れ一流の筆で淡々と叙し去るが、觀察が精到で、ふつくらとした味を持つてゐる。政界では秋山定輔君と新運動を試みようとした時代もあるやうだが、秋山君のやうな策士ではない。一方の謀士となれば相應に仕事も行れさうだが、意見を持つてるだけに、政界の群衆と雷同することが出來まい。參與官の運動を試みたやうな噂もあるが、自ら運動する程それを有難がつてゐるとは思はれぬ。當分の中光榮ある孤立は彼れが言論の生彩を増す所以であらう。

ワルデックとなつて觀たる 青島要塞戰の批判

山中未成

我が主宰せし青島要塞の陷落に就いて日本人の殆ど全體は、各自の意識を悉く超絶するほどに神速であつたと、誇がましく自ら全く驚嘆し且つ躍々と恐悅してゐるのらしい。我輩も竊かに斯うした日本人の愕と悅とを、的確に想像してゐた。

十一月五日午前十時に我輩はケシンゲル陸軍中佐及びハス海軍中佐を始め、各級の幕僚を集めて、事既に茲に至つて、(堡壘、砲臺は日本軍の無慮百門の重砲、約六萬の砲彈の爲に、剩す所なきまでに崩壞し盡されてゐた)尚抵抗を持續すべきか、或は殊に市民人命の保全の爲めに、寧ろ容易く開城と謂ふのでは無しに全要塞を日本軍の手に委して、日本軍の名を全くせしむべきかに就いて、最後の幕僚會議を開かした。

我輩も幕僚達も、最初から日本並びに日本人に對しては、決して憎惡の觀念を有つてゐなかつた。(英國に對しては、英國兵の二個大隊が日本軍に參加してゐたといふ他に、青島要塞戰とは問題が自ら別である。英國に對しては我輩は姑く緘默する)其の日本軍――眞の讃嘆すべき實戰振りを、初めて最も痛切に味つてみた――の上に、是れ以上の損傷を與へやうとする、所謂

敵愾心が我輩にも幕僚達にも衷心からは熾烈に起生してゐなかつた。而して又、日本軍の攻城重砲の六日間に亙る集中砲擊に因つて、我が砲臺と堡壘とには、已に日本步兵から占領されない前に、既に最う最後の時期が臨てゐたことも爭はれない事實であつた。從つて何等の宿恨なき日本の軍隊に對して、如上の殆ど無戰鬪力なる殘骸に等しき孤城を提げ、空しく日本軍の重砲彈の下に、全く手を束ねて、敵の成すがまゝに拋棄するの餘儀なき『無抵抗の抵抗』を試みやうといふ決議を、我輩を始め列席幕僚が、定めやうとしても、事實は既に何とも仕やうが無かつた。況や、拒絕すべかりし（是は前に豫め即坐に決議して置いた）開城勸告の軍使を、終に送つて來なかつた如き、誼ある神尾中將に對し、同じく、十分有効の射擊距離を有つてゐながら靑島市街には然のみ多くの砲彈を送らざりし彼の情に對し、既に異常の快感を與へられてゐた、我輩は、あの市街を其のまゝ、愛すべき日本軍及び名譽ある神尾司令官に委すべきことをも、我輩は其の時の決議の最後に加へた。幕僚達の悉皆が喝采して、我輩の此の發議を收れた。然し、苟くも戰鬪力ある無用のものを、敵に讓與するのは、方式に適ふた仕方ではない。惜しむべきカイゼリン、エリサベス號を先に爆沈させた。又地點と備砲のうへから、餘り功績の無かつた臺西鎭を後に明六日爆發さすことに決した。而して、最も効果の有つた飛行機には、吾が陛下カイザアに奉呈すべき、戰鬪詳報と將來に關する意見とを主にした一切の書類を委托して、支那中立地帶の適宜の地點に降下すべきことを命じた。我輩は袁總統の意中を忖度してみた。日英國の支障に會ふこと無く、或は佛露國に妨害せらるゝこと無く、彼が熟知する最も巧捷なる方法を以て、袁總統は必ず彼の書類を、先づ伯林の參謀本部に、確實に送達すべきことを、我輩は現在も竊かに信じてゐる。

斯の我輩の生涯に紀念すべき十一月五日の幕僚會議が終つた刹那に、我輩は前回に第三攻擊陣地を占めて近く逼迫してゐる日本軍の參謀本部、陸軍省、乃至は

所謂元老、軍事參議官、新聞記者――全國民の愕と悅とを的確に想像して、そゞろに微笑を禁じ得なかつた。それは、日本人には旅順要塞戰に對する十年前の印象が、現在も尚心髓にまで悉く浸刻してゐることを、我輩は知つてゐたからである。

愕き悅びし愛すべき日本人よ！　卿等は我が歐洲獨逸軍が、佛蘭西のヴエルダン以北の諸要塞を、如何なる速度を以て、攻陷し得たかを聯想せよ。卿等は或は其處に佛國諸要塞の存在をも識らぬ程ではなからうか？　更に我輩は、旅順と佛蘭西の以上の諸要塞と及び青島との防備と守備兵とに就いて彼此比較せんことを希ふ。然らば卿等の愕と悅とは好し。但し、偶々日本國民の軍事的知識に關する素養の貧弱を、愕と悅とに依つて、發露するものでは無かつたらうか？

我輩は此の機會に於て、猶暫く青島要塞戰の過程に就いて、極はめて概略の意見を吐露したいと思ふ。其の詳細に至つて發表することは、中央公論記者ヘル、テ、タキタから與へられた面會時間が許さないからである。

今、ヘル、テ、タキタから聞く所に依ると、日本軍の十月卅一日總擊開始以前に於て、我が砲臺が餘りに多くの射彈を發射したことが、日本の諸新聞に依つて、或は陸軍の專門家からも、少からず批難を受けたやうである。加之、甚しきは我輩が開城の口實を作僞するために、斯くの如き所謂愚擧を敢てしたやうに、推斷されたやうである。然しながら反對に我輩から此の說を評するならば、寧ろ、より以上の愚論であると諸卿の言說を駁せざるを得ない。論者よ、試みに思へ。我が青島諸砲臺の重砲は守城重砲が六十門あとは小口徑の加農砲四十門で、且つ新式にして安全なるものばかりでは、決して無い、寧ろ其に乏しき程のものである。此の戰闘力を以て、二倍乃至三倍の然も最新式にして精銳無比なる日本軍重砲と、砲戰を交へて縱ひ永久的築城に據つて、我が重砲が掩護されてゐるとは言ひながら、そこに幾何の成果を齎し得べきかを豫測せよ。況や、我が永久築城なるものは、我輩の先輩たるベルンハーヂー騎兵大將が論じたやうに『青島の防備は其の要塞も、守兵も共に十分のものでは無い。たゞ一時的の防禦をも成し得ぬのであらう』といふ程のものに過ぎない。故に、日本軍の重砲裝備の完了は、即ち青島の命運の將滅を語るものであることを我輩は疾く八月十六日以來自知してゐた。然らば、凡そ要塞の陷落は單に時日の問題である以上は、述ぶる如き青島要塞の防備に於て、我軍が諸砲臺の主砲擊の時期を日本重砲据着の準備の際に選定したのが、我が要塞の陷落期を成るべく久しく保有するために、果して失當であつたらうか？　抑々要塞の攻圍軍が最も苦心經營す

るところは、重砲裝備間の時期である。彼等は此の期間に於ては、一時全く守勢の位置に立つものであり、然も攻圍軍には未だ備ふるに至らざる重砲を以て要塞から射擊されるからである。從つて此の間は攻圍軍の苦心期であると同時に、危險期でもある。然らば、一旦砲擊を開始されたならば、既に攻略せられたものと考へなければ成らぬ青島要塞に於て、我輩が全力を舉げて指導した守城砲擊戰が、それとも開城の口實の爲であつたらうか？ 敗軍の將と成れは、眞に慮外千萬なことを、聞くものである！

我輩の企てた小規模の夜襲が、戰術上甚だ不可解であるほどに、全く無意味なものとして、批判されたと、ヘル、テ、タキタは更に言ふ。如何に日本の新聞記者諸賢及び之に語れる所謂某參謀或は何々某なる專門家が、孤城を守る要塞司令官としての我輩の胸裡を推想する程度の淺薄なることよ！ 試みに思へ、青島要塞守備軍の兵力を較量し、日本軍の前哨に對し、我輩の掌裡を脫離せしめて、遠く幾何の人員を割愛し得べきかを察せよ。更に思へ、既に悉く要塞内に退嬰するの餘儀なきに至れる我が守兵が、苟くも日本軍を逆襲し得たることに因つて、全守備兵に賦與する精神上の效果が、如何に少からざりしかを察せよ。眞實に精良なる日本軍は其の最も前方を守備する小哨の位置に於て、我が夜襲を美しく擊退した。然し、我輩も日本軍の周到なの前哨配備から推想して我が夜襲が多大なる現實上の打擊を與へ得べしとは、勿論豫期してはゐなかつた。たゞ、我が全軍の上に贏ち得たる形而上の收得を思ふときに、あの夜襲も亦、批判される如き愚策では、必ずしも無かつたと自信し、こゝに公言することが能きる。

次に、我軍の士氣の沮喪を云爲してゐたものも有ると、ヘル、テ、タキタは敢て言ふ。是に就いては、我輩は斯く答へる。『青島要塞軍は、常に歐洲戰に於ける吾が祖國軍の捷利をのみ、傳遞せられ、且つ彼等は之を確信し、是が捷利に因る歐洲戰局の迅速なる終決までに、我が最愛なる部下は青島要塞の命脈を、「或は一縷なりとも存續せしめんことを考へつゝありし』と。それは猥りに遁竄を企て、或は開城說を、若くは非戰論の擅恣なる藉口を敢て試みた二三の者も、無論ゐる。我輩は是等を處するに死刑を以てして、「軍紀の振肅に資した。然し其の人員は極めて少數であつた。斯くて我軍の士氣は總體に於て斷じて萎縮してゐなかつた。

我輩の自殺或は暗殺が傳へられたと、ヘル、テ、タキタは我輩を晛む。然り、武士道！ 光榮ある武士道よ。然し更に希くば諒せよ。我輩は嘗てトラツペル大將（當時の中將）の後繼者として、總督の榮職を授けられたるの寵遇を辱うし、今回勇敢比びなき日本軍の攻圍を受けたるに際しては、『朕は爾等が一大難戰を遂行せんとするに當り、爾等を記憶して忘れず』との優渥なる詔書を奉戴してゐる。想ふに、武士道に於て說

くならば、我輩は一死以て君國に報い奉るべきで有らうが、我輩自身に於ては、却つて斯かる殊恩に浴してゐるだけに、武士道とは反對は、我か一身が國步艱難なる將來に對して盡瘁すべき期待の方が、更に重大である。山東の一岬角、殊に青島要塞と運命に與にすべく、我輩は我輩を猶少し高く評價してゐる。即ち、我輩が山東の殖民地に於て自殺するならば必然に全く死砕の是こそ最大の愚擧であり、同時に君恩に應へ奉るべき道でも無いと信じてゐる。若し夫れ暗殺云々の如き盲說に至つては、我輩未だ非德なりと雖も、聊かワルデックを知られざるの憾なきに非ず。我輩は暗殺よりは又少し高き輿望を擔つてゐたつもりである。我輩は微官たりとも、日本と交戰したる獨軍の司令官であつた。我輩に就いて、日本國民が最少し善く識つてゐたことであらうと判斷してゐた。

要するに、我輩は許し得る限りの兵力を使用し、成し得る限りの防備材料を利用し、最善の方法を盡して、防戰した。十一月の五日は、乃ち最も激烈に、幕僚會議後の、最終の抵抗を一時試みてみた。我輩の斯の防戰に對して、五分間に二百三十發の重砲の砲彈を、的確に命中させ、ビスマルクの砲臺に致命傷を負はせ、悉く遺憾なく、我が堡壘と砲臺とを徹底するまで制壓しつくした日本軍の威力に對して、我輩は中央公論を介して、絕大の敬意を拂ふべく毫も躊躇しない。

浮山高地脈に對する拂曉攻擊の果斷にして捷巧なる及び堡壘線に對する逼迫作業の堅忍にして周匝なる、日本軍の步兵及び工兵が我輩に提供した敎訓は、特に其の絕對に旺盛なる攻擊精神と共に、我輩が永く感銘すべきものである。他日、我輩が吾が陛下カイザーに拜謁する曉には、確かに此の感銘を、闕下に伏奏しやうと思つてゐる。

又若し日本軍の步工兵が、我が堡壘に對する攻擊の爲に、幾何かの少からざる損害を犧牲にしたとするならば、それは却つて、日本軍の武を瀆すものであつたらう。日本軍の損傷の少かつたのは、即ち日本軍の精鋭なることを、最も的確に裏書するものであつた。

然り、日本軍の重砲の裝備完了は、我等の死命を制した。然らば、何故に浮山高地脈を確守して、攻圍戰の進捗を遲延させなかつたか。と、ヘル、テ、タキタは問ふ。言ふことを休めよ。彼の高地脈が有する正面の幅に對して、守備兵の數量の不足が許さぬではないか。殊に砲臺との距離が遠きに過ぎて、有利なる砲戰の援助を期待することも許されないではないか。

此の點に於て、我輩自身も彼の砲臺の位置に對する不服と不平とを、竊かに抱懷してゐる一人である。然かし、是は我輩の罪過では無い。若し假りに我輩をして、スチスセル將軍たらしめば、現在斯くして、ヘルテ、タキタの質問に應じてゐる如きことは無かつたであらう。

中央堡壘が就中餘りに容易に、日本軍の占領を受けたと言ふのか。花崗片麻岩の地質は、壕の幅深を强大にすることを許さなかつた。また、少くとも我輩は未だ曾て、膠州灣をキール港に比し、或は難攻不落など、、口外した記憶を有つてゐない。

我輩の妻は、北京で愕き悲むで、將に卒倒した。彼女は、我輩が最善の方法を盡して、防戰すべきことを信じてゐたからである。彼女の信頼に我輩は十分報いた。然し、彼女には軍事的智識の素養が缺如してゐた爲に、彼女は意表外の陷落に痛く愕き悲しむだ。日本全國は愕き悅むだ。悲と悅とは、敵と味方との相對である。たゞ、愕いたことによつて確かに同一である——

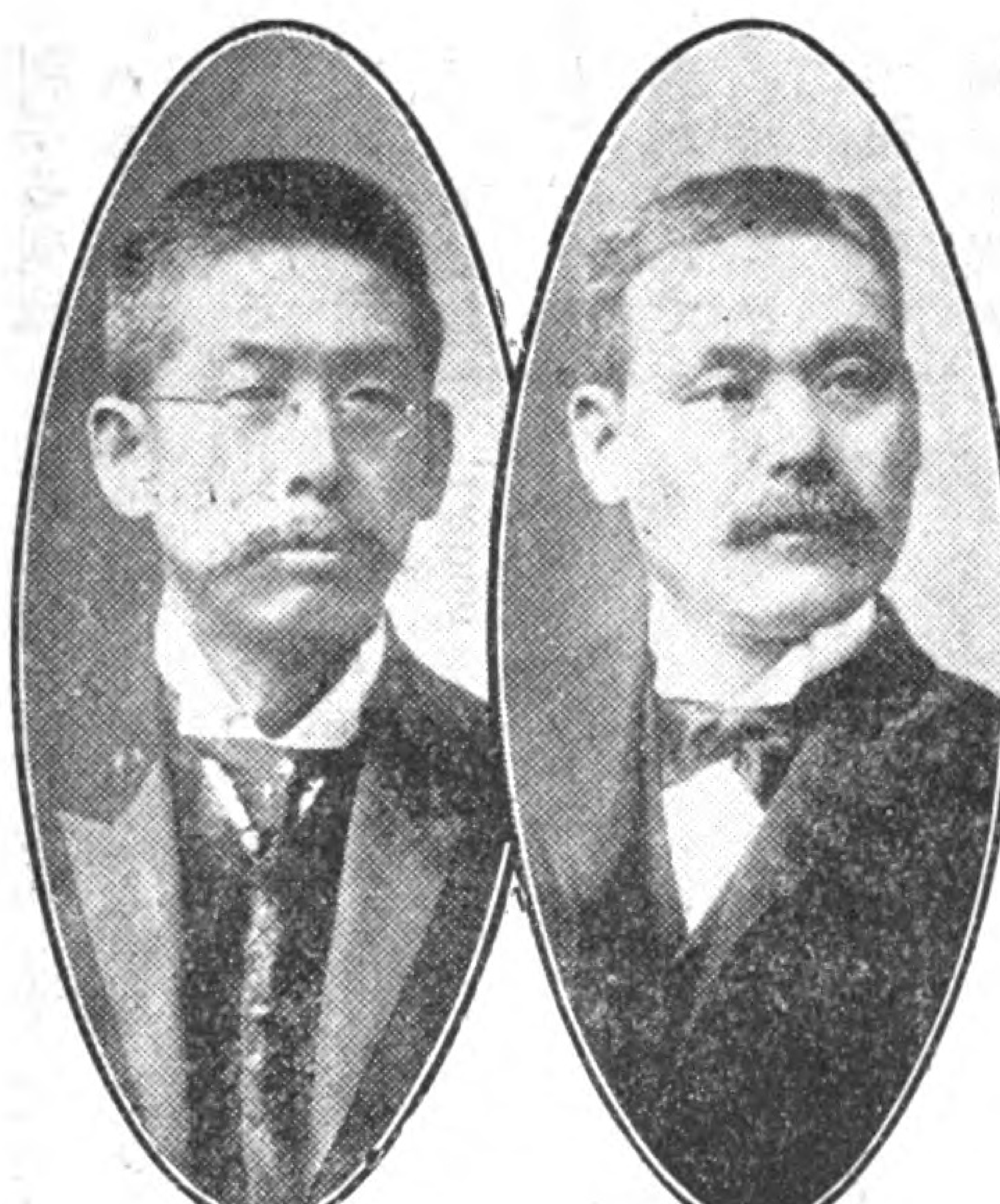
ヘル、テ、タキタ！　限定の面會時間が來たやうである。

Leben Sie wohl！

人物評論（五十五）

鎌田塾長と高田學長

鎌田塾長と高田學長



安部磯雄

慶應義塾の歴史には何時までも福澤先生の名が光を放つてあらうが如くに、早稲田大學のあらん限り大

隈伯の名は其保護者として永久に記憶せらるゝであらうと思ふ。然し鎌田塾長の福澤先生に對する關係と、高田學長の大隈伯に對する關係とは決して世人の想像して居るが如くに同一のものではない。早稻田大學は大隈伯の學校であるが如くに言はれて居るけれども、これは決して慶應義塾が福澤先生の學校であつたと同一の意味ではない。慶應義塾は實に福澤先生を中心人物として居たのみでなく、先生親しく其經營にも教育にも當つたのである。別言すれば福澤先生が慶應義塾といふものを築き上げたのである。今の鎌田塾長は先生の後を繼いだので、恰も親が苦心して積立てた身代を其まゝ相續した息子の様なものだ。或は親族會議で定めた養子と見ることも出來る。これが世人の噂さする如く、鎌田塾長が親類筋の者や小姑などに惱まされる原因であるかも知れない。これに比すれば高田學長の位置は實に自由であり安全である。學長は決して築き上げられたる早稻田を大隈伯より受取つたのではなくて、大隈伯と共に自らこれを創設したのである。言はゞ高田、天野、坪内の三人兄弟が大隈伯の援助によりて今日の早稻田大學を築き上げたのである。大隈伯は決して親權を振り廻はす様なことをしない。唯親切な親父さんとして今日も多少の相談に與つて居る位のことだ。天野、坪内の二博士にしても高田學長を助けこそすれ、少しでも其行動を牽制するが如きことをする人ではないから、學長は名實共に早稻田の首腦である。私は今二私立大學――否私立大學全體の代表的人物を月旦する前に兩者の位地に上記の如き相違のあることを陳べて置く必要を感ずる。何となれば二大學の上に現はれた經營振りの差異は多く此理由に基くものと信ずるからである。

鎌田塾長も高田學長も日本人として普通以上に脊高く、先づ堂々たる容貌と形容することが出來よう。塾長は身長の高きに加へてガッシリした骨格を具へて居る。漆黑なる頭髪と、青黑き然も少しく赤味を帶びたる顏色は如何にも其壯健らしき所を現はして居る。之に反して學長はスラリとした體格を具へて居るが肉附が充分でない。且つ顏色も白いのであるから、蒲柳の質とまでは行かないが、餘り壯健らしくも見えない。これは先づ體貌上に現はれたる對照であるが、今序に私の眼に映じたる對照を陳べて見たい。塾長は何人も親しみ易い性格を有して居るに反し、學長には多少近づきにくい所がある。勿論學長に接近して居るものは打解けて何等の墻壁をも感じないけれども、初對面の者は多くそういふ様に感ずるらしい。畢竟するに學長は塾長程に交際的でない様に思はれる。塾長は諸種の集會に出席する。演説會にも出れば、學生の催ふす各種の集會にも出る。外國から野球團が來れば其歡迎會にも出席する。これは塾長が體格に於て學長に優つて居るのにも因るのであらうが、其重なる理由は塾長が學長に比して一層交際的であるといふことに歸着する。

以上陳べた所は實に小事である。然し其重要なる點に於て私は兩者の間に共通せる所の少なくないことを見る。塾長も學長も特色ある雄辯家である。勿論兩者共慷慨悲憤案を打つて叫ぶといふが如き熱血的演説家ではない。然し塾長が常識的に諸問題を論じ去る所何人もこれに傾聴せ

ざるを得ないのである。學長の演說は條理極めて明晰であるから、聽衆は容易にこれを領解する事が出來る。學長が每年早稻田大學卒業式に於て爲す學事報告演說は天下一品と言はれて居る。グラッドストーンが豫算案に就て說明を爲す時には無味乾燥なる數字も彼の舌頭に活躍して興味津々たるものがあつたと聞いて居るが、學長の學事報告演說にもこれと同一の特徵が現はれて居る。

然し私が塾長や學長の演說を推賞するのは勿論雄辯術といふが如き末枝に就てゞはない。此二敎育家が異彩を放つて居るのは實に思想の點にある。文部省の統一主義が跋扈したる結果として、官立學校の敎師が官吏の取扱を受けて居る結果として、敎育家は事每に控目になり、碌に其思ふ所さへ陳ぶることが出來なくなつた。私は今日の敎育家の議論位貧弱なものはないと思ふて居る。これは必ずしも彼等に思想がないのではなくて、大膽に公表することが出來ないからだ。然るに塾長や學長は私立大學に身を置いて居るのであるから、文部省などに對して何の考慮する所はない。私は演說や新聞に現はるゝ塾長と學長との說を見聞して何時も痛快に感じて居る。自尊は慶應の標語、學問の獨立は早稻田の旗幟である。塾長と學長が獨立不羈の言論を爲すのは蓋し當然の事と言ふべきである。

數年前國民敎育の年限を延長して六年となすの可否が頻りに論ぜられた時或集會に於て鎌田塾長はこんなことを云ふた。『義務敎育の年限は餘り重要な問題ではない。今日の小學敎育は我國の兒童には少し荷が勝ち過ぎて居る。慶應義塾の幼稚舍に於ける兒童の體量は夏休暇後に於て著しく增加する。是れ今日の敎育が過重であることを證して居るではないか。若し一日の授業時間を大に減ずることが出來れば敎育年限の延長は國民にとりて左程の苦痛ではない。殊に十二三歲位から小兒を勞働せしむるの必要を感ずる田舍に於ては授業時間の短縮が必要である。若し每日一二時間づゝ授業するのであれば小兒の勞働に左程の妨害を來さないのであるから、義務年限を延長して十年となし十五年となすも敢て差支はない。』私は塾長の意見が如何にも理想的であるのに感服した。實際人間は生涯敎育を怠るべきものでないから、大人でも每日職業を始むる前若くは仕事を終りたる後に於て一時間づゝ位學校に通ふ樣にしたいものだ。塾長は亦今度の水產講習所移管問題に就ても某新聞に於て文部省の統一主義を痛快に攻擊して居る。私は平常文部省の統一主義を敎育界に於ける最大禍根であると信じて居るためでもあらうが、塾長の口よりこれを聽くに及んで一層の愉快を感ずる。

高田學長も官學の弊を指摘し、私立學校の爲に氣焰を吐く點に於て少しも劣る所はない。『封建時代に於ては所々に關門を設けて人々の交通を妨害して居たが、今日の敎育界にも入學試驗といふ幾多の關門がある。これは學生を入學せしむるための試驗ではなくて拒絕するための試驗である。然も多數の學生は此變則なる入學試驗制度を普通の事と考へ、却て早稻田大學の如く無試驗入學を許すことを以て變則であると思ふて居る。誤解も亦甚しと言ふべしである。』『世人は官立大學のみが基礎學問

にして、私立大學は概して不完全なるが如く考ふれども、事實は全く正反對である。官立大學は毎年其入費を議會の決議に待たざるべからざるに反し、私立大學は其性質として一定の基本財産を所有し、其利子によりて經營せらるべきものである。議會に頭を下げる必要も何もない。私立大學の中央には黄金の大黒柱が立つて居るのである。』といふ樣な氣焔は私共が度々學長の口より聽いた所のものである。

塾長も學長も教育家であるが、同時に政治に對して深き趣味を有して居る。塾長は貴族院に議席を有して居るから、號議政壇上に立つて雄辯を揮ふことが出來る。學長は今や全く政治界と關係を斷つて居るけれども、改進黨時代に於ては衆議院議員として大々的に活躍を試みたのである。兎に角其專門とする學問が政治學であるために、今日倘ほ政治趣味の去らないのは寧ろ當然といふべきであらう。塾長といひ學長といひ其識見と手腕に加ふるに政治的經驗があるのだから、若し文部大臣に推薦せらるゝが如きことあつても充分に其職務を果すことが出來ると思ふ。大學長の椅子と大臣の椅子と何れが貴いかは全く別問題である。私が塾長や學長が比較的永久的である教育家の位地を棄てゝ一時的なる大臣の椅子を擇ぶが如きことは斷然ないと信ずるけれども、若し假りに兩者が文部大臣の職に就いたとしたならば、私は兩者が菊池大麓氏や濱尾新氏などよりも遙に技倆のある大臣であらうと信ずる。若し高田學長が現内閣組織の當時洋行の途に上つて居なかつたならば必ず文部大臣に推されたに相違ないと言つた人があるが、或は左樣であつたかも知れない。

慶應早稻田の二大學が學問の獨立を標榜して教師に自由の行動を許して居ることは殊に注意すべきことである。昨年の憲政擁護運動には慶應よりは林毅陸君、早稻田よりは副島浮田の二君が馳せ參じて大に活動した。若しこれが官立大學であつたならば、彼の日露戰爭當時に於ける七博士の運動に對するが如く何等かの壓迫が來つたに相違ない。慶應早稻田の教師が自由を得て居るのは單に政治に關することのみでなく、何事に關しても殆んど絶對的自由を與へられて居る。慶應の福田德三君の如き、學者としては實に立派なる人であるが、隨分我儘な性格の人であると聞いて居る。向軍治君も『八つ當り集』といふ書物を著はす程の氣焔家で文部省などは殆んど目の敵の樣に思ふてゐる人である。然も塾長はよく此兩者の長所を認めて、これを包容するだけの度量を有して居る。兎に角私立大學は教師の爲に住心地よき樂園である。自由に考へ、自由に行動することが出來て何等の束縛をも感じない。

私は塾長と學長の學識、人格、技倆といふ點に於て優劣を認むることが出來ぬ。兩者共經營の才に富み、常識の發達したる教育家である。然も慶應早稻田二大學の現狀に就て見れば、後者は其歴史の比較的短きに拘はらず、學生を吸引する力に於て遙に前者に優つて居る。これは果して何の爲であらうか。私は其重なる原因が早稻田大學の若々しい、そして何等の拘束をも受けない機敏なる活動に在ると信ずる。早稻田が大學の名稱を掲げ、時勢の趨く所を察して先づ商科を設け、次で最も費用を要する理工科を設立するに至りたる其徑路を想へば、何人も其抱負の大

にして、其行動の神速なるを認めざるを得まい。而して斯の如き機敏なる行動を爲し得る高田學長は慥に鎌田學長に比して有利なる位地に立つて居る。八釜敷親類もなければ、うるさい小姑もない。自分の經綸は何の故障もなくこれを實行することが出來る。高田學長は實に幸運の人である。

△二人者の人物性行の對照

笑生

一

◎鎌田塾長と高田學長との比較評は近頃面白い問題である。三田と早稻田、福澤翁と大隈伯、政友會と同志會、海軍派と陸軍派、此等の間に纒綿せる事情に思ひ及ぼせば、塾長と學長との比較評は、此際是非試みなければならぬ好題目だ。

◎福澤翁は薩長政府に大不平を持つて居た人で、勝海舟を目して劣等な人物となし、榎本武揚や大鳥圭介などを腰拔けの義理知らずと罵倒した人である。されば一生仕官を求めずして三田の塾にたてこもり、國家を根本より改革しやうと企てた。

◎大隈伯は薩長と衝突して廟堂を逐はれ、一方に政黨を創め、一方に學校を設け、捲土重來以て薩長に當らんと計畫した。此の點から見れば、慶應義塾と早稻田專門學校とは從兄弟の間柄である。

◎併し其の親達――福澤翁と大隈伯――は腹違ひの兄弟で、性質が全然相反して居る。福澤翁は徹頭徹尾平民主義で押通したのに反し、大隈伯は大の貴族好きである。福澤翁は堅實であつたが、大隈伯は華美である。福澤翁は常識主義であつたが、大隈伯は英雄主義である。福澤翁は言ふことよりも爲すことが多かつたが、大隈伯は爲すことよりも言ふことが多い。

◎誰だ腹違ひでも兄弟と云ふ因緣で、伯と翁とは國會速開の申合をなし先づ手始めに三田の卒業生を官吏に採用しやうと云ふ段取りとなり、犬養毅君と波多野承五郎君とを統計院に入れやうと云ふことに定まつたが、波多野君は小役人などは嫌やだと言つて承けなかつたので、尾崎行雄君に持つて行つたのであつた。而して此他尙ほ三田から官吏になつたものが尠なくなつた。

◎所が國會速開の議は薩長に容れられず、大隈は民間の福澤諭吉など申す輩と結托して、容易ならざる企てを爲しつゝあるなど〻陛下に彈劾せられ、遂に大隈伯は依願免官と云ふ形式で實は追放せられ、同時に大隈系統と福澤系統の奏任以上の官吏は、閣から棒に悉く免黜せられた。是れが所謂明治十四年の政變である。

◎其の結果として改進黨と專門學校とは生れたのである。大隈伯も自ら子を生んで見れば、もう三田の甥などのことは心配して居られぬ、我子の行末が大事である。是に於てか三田と早稻田は自然絶緣となり次で睨み合ひとなり、三田は後藤象次郎伯にたより、或は三井にたよつて、以

て實業界に基礎を築いたのである。

◎後藤象次郎伯は元來自由黨に入るべき筋の人であつたけれども、板垣伯と兩雄並び立たずして、之れを傚擬して居たが、其の大同團結を提唱するに及んでは、矢張り自由黨を基礎とした。而して改進黨中の三田出身たる犬養君などは之れに趣いたけれども、矢野君などの中堅は例の屯田持久說で動かなかつた。三田出身の井上角五郎君などは後藤伯の有力なる幕僚として當時大に奮闘したものだ。

◎大正劈頭の大政變は三田と政友會とから起つた。大正元年十二月五日、二師團增設問題で西園寺內閣が辭表を提出するや、超えて十二月七日福澤桃介等の三田組は交詢社に、政友會の有志は三緣亭に會合し、共に藩閥打破の盟約を結んだが、是れ實に期せずして一致したのであつた。

◎是より先き早稻田の方では大隈伯が屢々田中軍務局長などを引見して、盛んに陸軍の提灯を持ち、桂公の同志會を組織するや、公は伯の衣鉢を受くと稱し、伯は公に滿腹の同情を寄せ、早稻田出身者の多くが蟠居せる國民黨の地盤は大部分同志會のものとなつた。

◎今や早稻田では二師團增設案を出さうと云ふ大隈伯に對し、後援會など云ふものを設けて氣勢を添へて居るが、三田派は既に增師反對の烽火を擧げた。兩者の對照は實に面白いではないか。

二

◎坪內博士の小說『書生氣質』に小町田粲二と云ふ男が居る、美少年で感情家で、田の次とか云ふ藝妓と相愛に落つると云ふ筋であるが、此の小町田こそ今の早稻田大學長法學博士高田早苗君其の人をモデルにしたものであると云ふことは、當時の大評判であつた。

◎明治七年、黑熊の子のやうな少年が、紀州の山間から飛び出して來て、三田の塾に笈を下ろし、稜々の鐵骨、以てハイカラな塾生を驚かし、二年の後ちには塾の敎授となつた。此の少年こそ今の塾長貴族院議員鎌田榮吉君其の人である。

◎高田君は色が白いが鎌田君は黑い。高田君は肉が薄いが鎌田君は厚い。高田君は骨格が纖弱であるが鎌田君は逞ましい。高田君の音聲は細く咽喉から出るが鎌田君のは太く腹から出る。高田君の辯は流暢華麗であるが、鎌田のは莊重質實である。

◎高田君は感情に富み、文學の趣味を有し、批評に長じ、鎌田君は理智に富み、理財に趣味を有し、實行を主とする。高田君は典雅にして殿上人の如く、鎌田君は堅實にして野武士の風がある。

◎兩君共に英國を宗とする人であるが、典雅の方面は高田君が之れを代表し、堅實の方面は鎌田君が之れを代表して居ると見て可からう。但だ高田君の典雅や、英國人の其れに比して、餘りに女性的であり、餘りに纖細である。鎌田君の男性的にして莊重なるに比し、大に見劣りがするやうだ。

◎其の經歴を見ても、高田君は埼玉に生れて東京で育つた都人士で、明治十五年、有賀長雄、山田一郞、天野爲之の諸君と同時に大學の政治理財科を出で、直ちに早稻田の敎授となり、學監となり、學長となり、法

學博士となつた人であるが、鎌田君は和歌山の田舍漢で、三田の敎師より鹿兒島造士館敎頭となり、地方の師範學校長となり、中學校長となり、洋行し、塾長となつた人だ。要するに高田君は單調、鎌田君は複雜である。夫れだけ人間の練れ工合に差があるやうに見受けられるのは是非もない。

○尤も其の間に高田君は政黨に加はり、明治廿三年から三十年の解散まで、引續き衆議院に席を有し、卅一年の憲政黨内閣には、文相犬養君の下に十一月一日になつてから參與官に任ぜられたが、同月八日には内閣總辭職となり、高田君は同月廿四日に罷めた。

◎併し衆議院議員としては、高田君は適任でなかつた。寧ろ鎌田君か衆議院に出て、高田君は貴族院に入れば各々其の處を得ると云ふものだ。

◎高田君も可なりの雄辯家として政論家として、一時は頗る振つたものだが、文學趣味に富むだけに膽玉は夥たゞしく小さい。或日の演說で自由黨壯士の怒りを買ひ、歸途に彼等の襲ふ所となつて目を廻はしてから、スッカリ政治を諦めて敎育界に籠城したと云ふのは、流石に自己を知れりと云ふべしである。

○今となつては一個の愛嬌話だが、當時壯士の斬り付けた刄先は、人力車のホロに止まつて、先生の身には一寸かすり傷が出來た位であつたが、それでも先生はテッキリ殺されたものと思ひ迯ひ、腰を拔かし、眼を白黒して動くことが出來なかつたもので、流石獰猛の壯士もそゞろに哀憐の情が起り、二の太刀を下ろさないで引き上げたと、其の當人が話して居たのを聞いたことがある。

◎其處に行くと鎌田君は頗る圖太い。由來和歌山人は謀反氣の强いものが多い。由井正雪の當時から、紀州侯の謀反氣と言へば江戶町人までの評判であつたさうだが、明治には陸奥宗光、岡本柳之助などを筆頭に、大小の謀反人を出した。

◎陸奥が各藩に率先して和歌山に英語學校を設立し、星亨と云ふ大謀反人を敎頭に押し立てゝ、大に爲すあらんとしたる如き、西南戰爭に乘じて乾坤一擲の政治的大賭博を打たんとしたる如き、議會開設後、和歌山七人組を結束して、一方に長州政府を脅迫し、一方に自由黨を操縱したる如き、以て和歌山人の意氣を見るべしである。

◎岡崎邦輔君なども事大主義のやうな行動をして居るけれども、根は謀反趣味に富んだ男で、例の憲政擁護騷ぎの時は、犬養君に說き尾崎君を煽動し、大得意で飛躍を試みた。鎌田君も亦た彼れの相棒となつて交詢社に出馬しては弟子共を督勵したものだ。

◎鎌田君が原敬内相の選擧法改正案に贊成し、貴族院に於て故穗積八束博士と論戰した時の如き、貴族院にも亦た此の如き皮肉な大膽な討論家が居るかと驚いたものもあつたが、而かも是れ彼れが場所柄を考へて、餘程手控した演說であつたのである。

三

◎感情に富み、文學の趣味を有し、批評に長ずる高田君の門下から、小說家を出し新聞記者を出すのは偶然ではない。

○理智に富み、理財に趣味を有し、實行を主とする鎌田君の門下から、實業家を出し堅實な紳士を出すのは偶然ではない。

○早稻田の學風は高田君の風采の如く頗るヘデであるが、三田の學風は鎌田君の容貌の如く甚だジミである。早稻田の學風は高田君の肉の如く薄き嫌ひがあるが、三田の學風は鎌田君の肉の如く頗る厚い。早稻田の學風は高田君の音聲の如くウワヅ調子で、三田の學風は鎌田君の音聲の如く底力がある。

○福澤翁と大隈伯、鎌田君と高田君、此の二對を比較して見るゝ直ちに三田學風と早稻田學風との相違を了解することが出來るだらう。イヤ早稻田に學風なるものがあるか何うかゞ疑問である。若しありとすれば人格などには重きを置かぬ學風である。

○忌憚なく言へば、大隈伯は元來教育家ではない、一種の學校屋である。寄附金を集めて學校を擴張し、巧みに學生を吸收する手際は實にアザヤカなもので、實に感服するより外はない。

○斯くして伯は色々の小物識りを拵らへ、色々の藝人を造つて社會に供給するが、遂に人格は之れを作ることが出來ない。

○そんな學校なら金さへあれば誰れでも設立することが出來る。渡邊裁縫女學校やシンガーミシン學校は隨分繁昌して居ると云ふことだ。

○高田君は此の大なる――實に偉大なる學校屋の番頭と云ふ格ではあるまいか。彼れは人格の人ではなくして才の人である。教育家と云はんよりも寧ろ學校經營家と云ふのが適當である。

○三田では假令學力に多少の缺點があるとも、成るべく塾の出身者を教授にして、福澤宗を基礎とする人格の養成に努力して居るが、早稻田では汲々として人氣ある學者を羅致せんとし、帝大其他よりの掛け持ちが多い。

○私立學校に妙味のある點は、設立者の人格の感化にあると吾輩は信ずる。政治は今日結果を見なければならぬが、教育は其の功を十年五十年百年の後ちに期するのである。政黨は今日多數を包容するの必要があるけれども、一人でも宜いから立派な人格を出す私立學校が欲しいものである。

◎早稻田大學は學界の政友會である。人格の感化がないと云ふ點が學生を多からしむる所以であらう。舊進步黨は主義や理想に拘泥した結果、遂に大を爲すことが出來なかつたが政友會は今日の最寄を爲すと云ふ方針で以て大をなした。

◎吾輩は大隈伯が政黨に對する所を以て學校に臨み、學校に對する所を以て政黨に臨まんことを希ふや久しかつたのである。曾て同校の先輩に語るに此事を以てした所が、其の人は一笑して『大隈宗では學生も寄附金も集まらぬ、八宗九宗悉く集まるやうにするから繁昌になつて行くのだ』と言つた。

◎吾輩は大隈宗で學生が集まらぬ位ならば學校を廢したが可い、三井なり三菱なりに後事を托して退隱するが可いと言つてやりたい。但し文部省の經費が不足で學校を建て得ないから、寄附金を集めて國家に御奉公

するのだと言へば夫れまでのことで、又た大に感謝する理由も其處に充分あると思ふ。

○人格問題は暫く措き、國家は小說家をも要求し、實業家をも要求し、批評家をも要求し、實際家をも要求し、敢て其の間に輕重の差はないと信ずるが故に、吾輩は兩君が各自益々其の特徵を發揮して、人材を作ることに努力せられんことを希望するのである。（完）

△高田學長と鎌田塾長

野村胡堂

▲第五議會の頃、當時代議士として相當に鳴して居た高田早苗が、神樂坂で壯遊舍の壯士に斬られた事があつた、血だらけになつたのを自宅に擔ぎ込むと、其晩大熱を發して切りに譫言を言ふ、それが又悉く天下國家の問題だ、折から看護して居た岳父の前島密が、大に感服して仕舞つて、『俺は立派な聟を持つたぞ』と嬉しがつたと云ふ。一寸見は解らないが、高田早苗には一體此うしたところがあるらしい。

▲鎌田榮吉は、師範學校の校長から延し上げた程だけあつて、より立志傳的でより實際的だ、現今の地位を贏ち得たのは、勿論常識的な才幹と、危な氣のない風格とにもよるが、一つは持つて生れた事務的な才能のお蔭であつた、扨て塾長の椅子に着いて見ると、人格的な故小幡篤次郎などゝ比べて、事務や經營の才ばかりでは何うも物足りない、人物の高下は別問題として、學長として据ゑて見ると、何うも損な性分だ。

▲早稻田と三田は互に競ひ進み乍らも、漸次其特長を交換して、益々學風が背馳して行く形がある、前者は米國式に傾き後者は英國式に趨り、一方が間口主義になれば、他の一方は奥行主義になる、六つかしく言へば、早稻田は著しき進步主義になつて、三田は恐ろしく保守主義に固まつて來た、此差異は軈て又高田學長と鎌田塾長との、性格の反影とも見る可きものだ。

▲高田は人付きも軟かで、肌合も一寸詩人的なところがある、口を開けば常に『日本の政治家は文學的素養が無いからいかん』と云ふ、本人も亦、ピーコンスフイルドやミルトンに傾倒して、出來るか出來ないかは問題としても、幾分か其風格に接近せんとする努力の跡は見える。其處へ行くと鎌田は思想も意見も悉く實際的だ、塾の發展策は勿論、基本金募集あどに至るまで、自ら起つてエライ腕を振ふ。

▲兩者共、內外に多少の批難はあるが、天秤に掛けたら、鎌田の方が少し計り割が惡いかも知れぬ。其原因は高田の側には天野、坪內、市島など云ふ元老株が光つて居て、學長と云つたところで、敎授會の決議を經た上でなければ、高田一存では何事も出來ないが、鎌田は全くの獨り天下で思ふ存分な仕事が出來る、加之に常識的に打算的にビシ〳〵、やつて退けるので、何うも諸方から煙たがられ勝だ。

▲高田に對する批難の火元は、頭からアノ取すました態度に蟲鍫をする連中の惡口と、日頃給料の少ないのに不平を抱く一部の講師位のもの

だ、從來屢々早稲田の內部に起つた悶着は、高田の調和的な手で、ボヤの內に揉み消して來たのも少くないと云ふことだから、批難する方にも少しは勝手がある。

▲兩者の政治的野心はどんなものか、之は面白いが併し六つかしい問題だ、早稲田あたりには『鎌田が上院議員で高田が無官の大夫では釣合が取れない』と云ふ人もあるらしいが、貴族院議員が必ずしも高田を大ならしむる所以でもあるまいから、先づ改めて問題とする程の事では無い、高田にしたところで、そんな事は念頭にも置いては居まい――と我輩は買つて見たい。

▲併し高田も早稲田の一角に引籠つて以來、政治的野心などは噯にも出さずに居るが、內々は髀肉の嘆と云つた心持が無いでもなからう、――丁度こんな例がある、日頃高田は早稲田の學生が政治問題や社會問題に關係するのを非常に嫌がるので、或人試みに『あなたも若い時分には盛んにやつたぢやありませんか』と皮肉を云ふと、高田學長喟然として『若い時分にあんな事をしなければ、私ももつと成効して居る筈です、今時分早稲田の一隅に引込では居ません』と、決して色氣の無い口調ぢや無い。

▲近頃高田は歐行して歸つた、某氏曰く『高田は歐洲から歸つて、或はその生活を一變するかもしれぬ、彼は恐らく、本職の大學教育よりも、政治上の事を熱心に視察して來るに相違あるまい』と、某氏とは同じ早稲田の有力な一敎授だ。

▲之に反して鎌田の政治上の活動、特に政友會に接近せんとしつゝある表現は、蔽ふ可からざる程明かなものだ、併し一ツは寶盤玉から嚙き出したお付合で、本人は案外高田程の感興は持つて居ないかも知れぬ、憲政擁護の時分にも一寸顏を出して『お座なり』を云つたが、別に世の中で注目する程の事ではなかつた、比春の議會には紀州侯まで引摺込んで、政友會案に贊成したとかせぬとか、ヒドク一部の人に腹を立てさしたが、之も鎌田としては、拔差のならん破目に陷つたものと、同情して見てやつて差支はあるまい、鎌田は終に常識肌な事務家だ、同じ常識肌にしても、『高田には氣障つ氣もあれば可愛氣もある、繰り返して云へば、兩者性格の差異は、軈て早稲田と三田の學風を支配せんとしつゝある。

△予の知れる高田君

法學博士　浮田和民

鎌田君と高田君との評騭といふことではあるが、私は鎌田君とも面識はあり演說又は意見を聽いて常に敬服してをるけれとも、品評を下す程にないから、玆では氏に就いて言ふを歇めて高田君に就いてのみ私の考を述べてみようと思ふ。

私と高田君とは明治三十年以來相識の間柄である。それ以前は知らない。三十年に私が上京して早稲田に入つた頃には已に高田君は天下の名士として知られてをつた。明治十四年に大隈伯が野に下つて、一方には政黨を組織し、又一方には學校經營の計畫を立てらるゝや、それが十五年東京專門學校となつて生れてより以來高田君は天野坪內其他の諸氏と

共に熱心專門學校の教育に從事し、傍ら少壯政治家として政治上の運動に携つて名を擧げた人である。或は憲法雜誌の編輯者として、或は讀賣新聞の主筆として、或は代議士として立憲政治の爲めに心血を注いだ人であつて、其功勞は今更言ふを俟たない所である。であるから東京專門學校から早稻田大學設立運動の時までは、高田君は一方學校と密接な關係を有し諸事萬端の畫策に當つてをつた傍ら、政治上の運動にも關係を保つてをつたのである。然るに早稻田大學組織の新計畫を立てゝ以來――之を立てたのも無論高田君であるが――其目的成就の爲めに君は遂に政治界と絕つて玆に專ら早稻田大學の爲めに全力を注ぐに至つたのである。乃ち早稻田大學の新運動開始以來、高田君は早稻田大學專有の人物となつたのである。從つて大學の成功は一面高田學長の成功とも謂ふことが出來る。素より今日早稻田大學の成功するに至つたのは種々の人物の協力が與つてをるので、高田君一人の力ではない。天野坪內兩博士が高田君の助力者として陰に陽に、高田君をして十分に其手腕を揮はしめた雅量も亦た早稻田大學が今日の大を成した所以である。元來友人同志といふものは誠に骨肉の間柄のやうに親しくして喜ばしいものではあるが、餘りに懇親の間柄といふものはお互の短所弱點を知過ぎてをるが爲めに、共同事業を爲すといふ場合には往々にして協力の出來難いことがある。然るに早稻田大學の幹部たる高田天野坪內市島田原の諸氏は皆青年時代からの學友である。其親しさは同胞の如く、互の短所弱點を知悉した間柄で、嘗て一度も葛藤紛議を生ぜしめたことはない。早稻田大學をして今日の大をなすに至らしめた同志の協力は實に同大學の歷史上最も美談として傳ふべきものである。固より今日早稻田大學の大をなしたのは、斯くの如き多くの人々の協同助力の外に創立者並に總長としての大隈伯を戴いて來たことが全局に於いて成功した大原因であることは言ふまでもないが、其の諸原因中に高田といふ人が居らなかつたなら、以上の諸勞力を集中して大目的に向つて進行するといふ今日の進步及速力を見ることは出來なかつたであらうと思ふ。

高田君は學識もあり手腕もあり、如何なる事業に就いても必ず成功する人である、併し乍ら其趣味は學問にあり其志は政治にあるところからして今日の高田君となつた譯である。其才能から言ふと誠に圓滿なる人であつて、學者たらんと欲すれば學者たり、官吏たらんと欲すれば官吏たり、外交家たらんと欲すれば外交家たり、實業家たらんと欲すれば實業家たり得る人である。才は頗る圓滿なる上に頭腦は明晰にして、一の事務を與ふれば直ちに之を處理し、一個の人物に接すれば必ず其人を知り、其才を知り、且つ適才を適所に用ひ得るの明ある人である。但し趣味が學問的で政治に志あり、殊に英國的立憲政治の理想を我國に實現せんことを期待し、三十餘年一日の如く今日に至り嘗て其主義方針を曲げたことがない。斯く理想の人であるが決して空想に誤まらるゝ人でない。何事も實際を離れず極端に走らず現在若しくは近き將來に於て達し得らるゝ見込のない事には手を着けぬ丈の正確なる判斷力を有する人である。其の聰明にして意志の堅固なること以て知るべきである。

如斯く君は主義主張ある人格を作り成した處から、才は圓滿、頭腦は明晰、如何なる事業に當つても可ならざるなき人であるけれども、遂に敎育界の人と成り、今日世間に在りて物質的に或は名譽的に種々の成功をなしつゝある輩に比すれば頗る狷介の人と謂はなければならぬ。自らも亦狷介を以て任じてをるのである。然し乍ら早稻田大學の學長として高田君だけの成功をなし得る人は少くとも其才能が圓滿、其手腕が敏活にして優に國務大臣たるの資格ある事を證明したと言つて差支なからう。實は早稻田大學の如き私立大學の長として成功するは國務大臣以上の手腕を要するものである。一省の長官として事務を行ふだけならば、必ずしも非凡の才を要しない。然し乍ら私立大學の學長として今日迄の經營論策及其成功を見る迄には非凡な常識と努力とを要した次第である。第一早稻田の如き私立大學の學長として事業を成すには帝國大學の總長たるが如き安樂な仕事ではない。帝國大學の總長ならば兎に角一通りの學識に、多少の名望があり、事務の才があれば容易に出來るとである。豫算に政府から與へられた所の資金を巧く運轉すればよいのである。然るに早稻田大學の如き私立大學の經營者は先づ我文部省の敎育方針を參考し官立敎育の不備を補ふ爲めにあらゆる設備をなさなければならぬ。而して其設備をなすに當つても、學科規則だけ完全に出來ても何の役にも立たぬ。先づ財源から拵へる計畫をせねばならぬ。經常費だけは學生の授業料で補ふとしても、其設備をなすには大資本を要するのである。而て其資本は之を學校の内外から集めて來ねばならぬ。早稻田は校友頗る多數であるけれど、從來力を多く政治經濟及文學の方面に注いだが故に其校友の多くは未だ實業界に雄飛して居らぬ、從つて慶應義塾の如く醵金を單に校友の範圍に訴ふるのみでは足らない。校友を一方の根據となし、同時に社會一般の同情に訴へなければならぬ。これには大隈伯といふ大人物を戴いてをるから都合が良いやうではあるが、從來伯は野に在つて政權に遠ざかり、頗る不遇の位置に居られたのであるから、紹介だけは十分に出來ても實際募金の運動を爲す上には少からぬ困難があつた。即ち早稻田大學の學長としては内は諸敎員及學生の信望を繫き、外は社會の同情に訴へて其助力を求め、其寄附を仰がねばならぬからして亦外交家たるの才能を要し、而して學校の資本を最も有利に運轉し設備並に維持の財源となさねばならぬ。此場合に於ては亦實業家たるの眼識と手腕とを要するのである。そこで早稻田大學の如き私立大學の學長となるには實は國務大臣以上の才能手腕を要する次第である。斯くの如き才能及手腕を有する大學總長を要する所は世界中米國が最も其著名なる處である。日本の如きは全國官立學校のみで學問の統一を計つてをるから米國の諸大學に見るが如き學識と實務の才とを兼ね備へた大學總長を見ることは出來ない。唯私立大學に於てのみ之を見ることが出來るのである。今日米國の大統領は元來プリンストン大學敎授として成功し、次に大學總長となつた人であるが、米國諸大學の總長中には斯くの如き人物は決して少くない。ハーバード大學の名譽總長エリオツト氏の如きは人物としては米國第一の人で、其人格及才能二つながら如何なる大統領にも劣らぬ人である。實に私立大學の學長として成功する人が國務大臣たるは

容易な事であるといふことが出來る。

今回高田學長が歐米視察の途に上つたのは將來大に早稻田大學の敎育發展を計る必要から出たものであると同時に、多年大學經營の爲めに心身を勞し頗る健康を害してをるから實は旅行の結果靜養の一端にもしたいといふ校友の希望から出たものである。然るに出發の際に內閣の變動あり、續いて大隈內閣組織の端を啓いたが爲めに早稻田大學に種々なる難問出で來り、心配を後にして君が豫定の行に上つたのは頗る氣の毒なことであつた。而してまた歐洲大陸を視察し終らざるに歐州の大戰亂起り、辛うじて歐米諸大學の敎育を視察し戰亂を後にして今回歸朝するに至つたのは一方から言へば甚だ遺憾の事ではあるが、又一方から言へば千歲一遇に際して世界の大勢を目擊し、得易からざる經驗を爲したことであるから、高田學長にして身體の健康さへ續けば必ず今後に於て從前以上の經綸を立て我國敎育界の爲めに貢獻する處あるであらうと思ふ。

有體に言へば、予は今日日本の文部大臣として囑望してをる者唯二人あるのみである。一人は澤柳政太郎氏、一人は即ち高田博士である。澤柳氏は元來官界に於て成功し能吏の才あることは世人の均しく認識する處である。氏の人物は官僚式であつて、其言ふ處は頗る保守的であるけれども、頭腦は明晰、手腕は敏活であるから行ふ處は却つて進步的である。若し官僚系中から適當な文部大臣を求めるならば彼に如く者は無からう。但最早官僚式の遣方では京都大學の總長としてさへ失敗する世の中であるから、澤柳氏が果して今後國民の輿望に副ふ文部大臣たり得るや否やは疑問である。高田君は即ち然らず。彼は所謂國民的敎育家であつて、國民の現在及將來に適合する敎育制度の改善を計るには最も適當な文部大臣候補者である。澤柳氏が官僚式の文部大臣として最も適任者でありとするならば高田君は立憲的又國民的文部大臣として優に我敎育界の改善を爲し得る人であると思ふ。唯だ今日我國の政府部內には種々なる勢力蟠りて澤柳氏すら失意の人となつて居るから高田君の如き進步的又た立憲的識見ある人を文相に戴くことは容易の事でなからう。併し我國の敎育界は斯くの如き文部大臣を必要とする場合となつてをる。

今や官立大學の發展も政府の財政上出來るだけの事をなし此上如何ともなす能はざる狀態に達してゐるのである。又我國の私立學校も從來の如く政府が之を冷遇し又虐待する方針の下に在つては今日以上社會の同情を得て發展する事は困難である。而て社會文化の發展に從ひ國民敎育の欲望は日に月に增長し、年々高等學校に入り大學に進まんと欲する學生の數は最早一萬人以上に垂々としてをる。而て之を高等學校に收容し得る數は二千人に足らぬのである。即ち國家が國民の要求する敎育の設備を爲さんとするには今より五倍以上の資本と機關とを要する。此不足を補充する爲めに租稅に依賴することは最早出來ない。されぱと言つて從來の方針では之を私立大學に倚賴することも出來ぬ。而して現在の官立私立共に文部規定の時勢に合はぬ敎育制度に拘束せられてをるから、我國の敎育制度は其機關に於て非常の設備不足あるのみならず、其敎育制度の內容に至つては文明世界の最劣等に屬するものであらうと思はれ

る程である。第一大學及高等學校が今日より五倍の設備がなくては國民の要求に應ずることは出來ぬ。そこで大學以下の國家教育機關は下級の學校より進入し來らんとする學生を拒絶する爲めに要辣なる競爭試驗の難關を設け、辛うじて高等教育を維持してをるのである。今日の如き官私立學校制度では教育は注入主義となり、試驗教育となつて、人材を養成するどころか却て人材を撲滅し、人格を破壞する制度となつてをると云ふべき狀態である。今日は日本の教育制度を根本より改革すべき時機に際會してをる。今日教育調査會が査定したる方針の如きは實に區々たる彌縫策であつて、殆ど實際の用に立つべきものでない。斯かる小刀細工の姑息なる改革は中止した方が得策であるかも分らぬ。それに倚つて我國教育の進歩改善を冀ふが如きは誤れるの甚だしきものと謂はなければならぬ。事態今日の如くになつては全く我教育制度を根本から改革する必要がある、先づ此の根本的改革の見識と手腕とある文部大臣を得るまで教育調査會などは閉鎖した方が可なりと思ふ。何となれば教育調査會は烏合の衆であつて極端なる保守論者もあれば急進主義者もあつて氷炭相容れぬ人々もある。此くの如き調査會の中から出で來る査定案は極めて無意義なるものであつて兎ても教育制度の根本的改革を期することは出來ぬ。現今注入主義、試驗制度の弊害を受けたる我教育界を革新するには形式上のみならず、事實上に於て官私立の別を一掃し官民協力して數多の大學及び高等專門學校を設立し下級學校より進み來る學生を試驗の難關にて途中に抑留することなく、大學及び高等教育機關の門戸を公開して教育上の閉塞を切開せねばならぬ。斯くすれば漸次注入試驗主義の學風を一變して開發活動主義の教育制度を實現せしむることが出來るであらう。併し乍ら此の如き効果を收めんことは官僚式でなく、寧ろ私立大學の學長たり得る資格を有する文部大臣を見るまで我が國民の期待す可からざる所であらう。

△今後の舞臺になくてならぬ人物

女子大學校長　成瀨仁藏

高田君と鎌田君とは、一言にして之を評すると素より其性格に於て相異なるところのあるは云ふまでもないが、兩君共に理想家と言ふよりも實際家と言ふことに於て一致してゐる。何れも相當の批評眼を備へ、物の眞相を把握する洞察力に富んでゐる。從つて時代の趨勢を見遁すやうなことはなく、其進歩と要求とに應じて進んで行く力を有つてゐる。

殊に兩君は從來私立大學の經營者として充分の力量を表した人であつて、我れも人も共に其成功者を以て目する處であるが、今後は今一歩進んで、兩君のやうな人が政治的方面に其才能を發揮するやうに時勢の要求がおこりつゝあるやうに思はれる。又現今教育界に其人を求むれば、兩君の如きは確かに其長所を有せらるゝと思ふのである。

一體今後の政治家は其資格として先づ第一にエンライツンマインドでなければならぬ。明確な觀察力洞察力を具へた者でなくてはならない。

第二に時代は最早頑老な頭の政治家を要せなくなつた。少壯有爲の政治家で無くては時代に適合した國民的教育を施すことは出來ない。從つて次に青年の指導者でなくてはならないといふことが第三の條件になつて來る。第四には政治は從來の如く權謀術數の力に依つて行はるべきものではない。必ずや人格の力即人心の調和力を有つた政治家でなくてはならぬ。第五には政治も一種のビジネスであつて、空論ではない。從て經營畫策の力を要する。それ等の諸要素を具備した人が最も理想的の政治家であり、現代の要求する政治家である。社會は今や斯くの如き人物を覓むることに汲々としてをる。若し此等の理想に該當する人物があるならば社會は必ずそれを政治的指導者として尊敬し、歡んで其人の施政に從はんを欲してをるのである。而て現代の社會に於て斯くの如き人物を選擇したならば、先づ高田君などが屈指の中に數へらるべき有數な人物であらうかと思ふ。

然らば鎌田君は何うかといふに、今擧げた諸要素を具備してをる人であるのみならず、物も觀えるし遣る力も具へてをる。唯一歩進んで、たとひ冒險をしてでも政事に全力をコンセントレートして君の能力を遺憾なく發揮して貰ひ度いものだと思ふ。滿を持して伺動かぬのは時機未だ至らずとしてゐるのであらうか。今一層の活動が望ましいと思ふのである。要するに此兩君の如きは教育界にも又政治界にも活動すべき人物であつて、また我々の衷心期待して止まない所である。少くとも今後の教壇には無くてならぬ須要な人物であることは疑ひない。それと同時に社會も亦、相當に其人の力量を認めたならば、其人の活動に便ぜしめるやうにせねばならぬ。我國では有爲の人物に乏しいことを歎ずる聲が所々に聞かれるけれど、一面に於て社會は人物を作ることに冷淡でありはしないか。或は時にそを妨げるやうなことさへありはしないか。斯くの如くにして傑出した人材を得んとするが如きは素より至難である。

終りに同じく一私學の經營者としての予の立場から兩君に希望したいことは、執る所の手段方法に於てこそ異れ、我々の行かんとする目的並に理想に於ては等しい筈のものである。であるから其一致せる目的に向つて互に協力して共同的に進つて貰ひたいといふことである。然らば予は今後私學の前途は勿論、教育界並に政治界の刷新は此等兩君に負ふ所決して鮮少ならざるを信ずるものである。

△常識家としての兩君

文部次官　福原鐐二郎

生きた人物を批評するといふことは、吾輩主義として感心しない。その長所美點を稱揚しても、それが阿諛諂佞とも解られるし、その缺點短所を擧げたところで必ずしも曲邪醜惡を是正するの力ありや否やを怪しむからである。

高田君にしても鎌田君にしても共に吾輩の敬服する人物であつて、寧ろ常に畏敬する所である。鎌田君とは能く知らぬが、高田君は曾て吾輩

の上官であつた事もあり、今日尙親灸する所である。兩君共に今日の日本に於て顯著な又有力な教育家であることは言を俟たない。教育家であると同時に又經營家である。常識家である。常識家と言へば高田君の如きは最も圓滿に常識の發達した人と言ふことが出來ると思ふ。

今日でこそ日本に於ける私學の對立者として重きを爲してをるが、今日迄の徑路には種々樣々の困難もあつたのであらう。それでもまだ慶應の方は福澤小幡などいふ人々が土臺を築いておいて吳れたから鎌田君にとつてはさう難事でなかつたかも知れぬが、早稻田の方に至つては大隈伯にしろ鳩山學長にしろ看板に過ぎなかつた傾があるのだから其間に立つた高田君は隨分苦勞をした事だらうと思ふ。從つて今日では慶應は總てジミであるが、早稻田は今日尙創業的の奮鬪を續けてゐる。

玆で概括的に私學といふものに對する吾輩の希望を述べようと言つても、文部省直轄の學校に於てさへも多くの不滿を認めてゐる吾等に、全然希望がない譯では勿論無いが、それは要するに財政の問題で、其根本の問題が解決されねば其他の事はいくら足搔いても如何とも詮方が無い。其點になると私學の經營者には全く同情を表する譯で、少々不備の處があつたにしても、今の場合それは仕方がないと諦めるより外はない。今後日本の社會が發達するにつれて、それらの問題も自ら解決される日が來るであらうと思ふからである。唯如何にしても今日私學の勢力は大したもので、吾輩は常に、私學六分、官學四分の勢力と認めてゐる。吾輩は今日の如き教育方針では今後益々此傾向を助長しはしないかと思ふのである。大學の學生は遂に使はるゝに便利なる人間のみによつて滿される事になりはしないか。それが一朝地位を顚倒して人を使ふ場合に立つたなら其人間は何うか。其等の問題は尙澤山我々の研究に殘されてゐる。而も此際學制改革案が調査會に於て行惱んでゐるなどは決して欣ぶべき事ではなからう。此お話は此位にして、今後いつか機を見て、我輩は大に「私立大學論」を遣つて見ようと思ふ。

△一は古武士的、一は當世紳士風

無何有鄕人

○細かい事は別として、先づ大摑みに一口に評して了ふと、鎌田と高田では、人物が大分違ふ。そりや鎌田の方がずつと大きい。鎌田と云ふ男は餘程不思議な男だ。一寸見には如何にもボウとして不得要領な男らしく見えるが、あれでゐて何にでも要領を得る男だ。磊落な、鷹揚な人と云ふものは、一方から云へば、粗大な、間の拔けた事の多いものであるが、鎌田は磊落で、鷹揚なやうでありながら、よく細い所にも氣が附くし、又表も裏もよく見て居る。常識が非常に發達して居つて、且つ各方面の事柄に相當の趣味と智識を有つて居るんだから、どんな問題に對しても必らず意見がある。教育上の事は固より軍事でも、財政でも、外交でもなか〳〵意見の多い男だ。又平常から新聞雜誌や新刊書籍などもよく讀んでゐるし又後輩の意見などもよく注意して聞いて、決して時勢に

後れまいとする心掛けが一通りでない。何處までも進歩主義、自由主義であるが、其態度が堅實で、少しも輕佻浮華な所がない。どこか根抵に古武士的の風格を備へて居るやうな氣がする。

◎鎌田に古武士的の風格があるとすれば、高田にはどうも當世紳士風の面影がある。なか〳〵才氣があつて、よく物も分るし、仕事もよく出來るのであるが、人物に重味がない。學問は鎌田よりも有るに違ひないが然し今日では學者として世に立つことは勿論出來まい。大學を出た頃は何人も秀才を以て目したもので、學才、文才、辯才共に儕輩を抽んでだかの觀があつたが、早熟の性質(たち)であつたものか、其後割合に發達しないで了つた。どつちかと云へば事務家、行政官と云ふに適任であつて、大學の學長としては鎌田に比して劣るやうだ。

◎尤も二人が學長として優劣のあるのは、二人の人物手腕にもよると同時に、二人の立場の相違にも因る。鎌田は慶應義塾の塾長である以上は何處までも福澤流にやらなければならぬことは無論であるが、只抽象的に福澤流、福澤宗と云ふものがある丈けで、其外の事は何等の拘束が無い一切の事は殆んど大抵鎌田の自由判斷によつて裁決することが出來る。之に反して高田には其後ろに大隈と云ふ守本尊が附いて居る。大體の事は此大隈の意思に從つてやらなければならぬので、或意味に於ては高田は大隈の意見の執行者の如き形がある。例へば此前憲政擁護の運動があつて時分に、大隈が頻りに桂などを褒めたので、學生が不平を起して騷いだ事がある。斯う云ふやうな場合にも、學長たる彼は、彼の意思の那邊にあるに拘らず、學生の鎭撫役を勤めて、大隈に忠義立をせなければならぬと云ふ破目に陷る。之は一例であるが、自己の意思によつて學生を指導するの自由は鎌田にあつて高田に無い。

◎鎌田が郡制廢止案などについて活動した頃は、大いに政治界に野心でもあるものゝやうに噂されたが自分の見る所では、鎌田が今の地位を拾てゝ政治界に出やうなどゝ云ふ考は毫頭ないやうだ。今の地位に落附いて一生の仕事とする積らしく思はるゝ。曾て一部の教員などから鎌田排斥の聲が起つた事があつたが、當時鎌田に代り得るものを求めて、時の東京市長尾崎の外になかつたやうだ。然し鎌田と尾崎とどつちが塾長として適任かと云へば勿論鎌田の方が遙かに優つて居る。以て鎌田位の塾長が容易に得られない事を知るに足ると思ふ。

◎高田は政治上の野心を絶つたやうに云ふものがあるが、私は却て反對に政治上の野心がまだなか〳〵あると思ふ。又私は高田の爲めに計つて政治上に乘り出すの機會を覗つて居た方がよいと思ふ。今の早稻田大學の學長も大隈伯と云ふものがあればこそ高田にも安全に勤まるのであるが、伯が萬一の事があつた場合に、果して今迄通りにやつて行けるかどうか疑問である。それよりも彼が官界に打つて出て、文部大臣にでもなつたら、それこそ立派な文部大臣で、今の一木などよりは遙かによいと思ふ。相當に時勢を見るの明もあるし、事務は執れるし、先づ歴代の文相中出色の文相であらうと思ふ。私は寧ろ高田の爲めに計れば今から官界に眼をつけて置くが得策と信じて居る。

◎學長とか塾長とか云ふものは、學問があるとか、才氣があるとか、仕事が出來るとか云ふものでなくして、矢張り學問の獨立思想の自由の爲めに貢献すべき責務を有つて居るものとすれば、高田よりも鎌田の方を適任者と許せざるを得ざると同時に、高田をして行政官としての手腕を揮はしむるは適才を適所に置く所以なりと信ずるを以て、或機會に於て氏の文相の地位に就くあらんことを希望する。

ロンブロオゾオ著
辻潤先生譯

植竹文庫第二編

新刊

縮刷 天才論 全譯

■新形総布装製極美本
■三百數十頁
■一頁千余字詰
■寫眞數十個
■定價金九十五錢 郵税八錢
■製本既成■

期待せられたる天才研究の最大權威現はる。凡て天才を論してかくまで該博精緻なる科學的研究の根據に立脚し、而も興味湧くが如きものは蓋し空前なり取材の豊富なるは更にも云はず、引照せられたる幾多の詩歌文章また一種獨特の文學を構成す。この書の基調たる天才と狂者の複雜微妙なる關係は狂者、犯罪者、癲癇病者等の辛辣なる心理的解剖となり乘て精神病院内に於ける奇拔なる文學藝術の例證となつて現はる、科學書にして科學書に非ず、文學書にして文學書に非ず、心理學？生理學？形貌學？否、否、否、是等の全てなり。近代文藝を根底より理解せんと欲する人々は云ふまでもなく凡て天才の眞に如何なるものなるかを知らんと欲する人々は先づこの書を讀め！天才はこの書に由つて愈々自己の天才を意識すべく、凡人は天才の眞相に接し驚嘆戰慄せん。譯文また的確明快眞に全譯の名に背かず。挿入せる天才の風貌また大に讀者の感興を助くるものあるべし、敢て大方の耽讀を乞ふ。

■日本に唯一の全譯也 他にも本書の飜譯ありと雖皆抄譯にして全譯にあらず（原稿紙九百枚の大作）

再版

植竹文庫第一編

縮刷 サニン 全譯

アルツィバシェヴ作
武林無想庵譯
定價九十錢
郵税八錢

近刊 植竹文庫第三編

全譯 罪と罰

ドストイエフスキー作
生田長江
生田春月 共譯
（原稿紙壹千四百餘頁の大作を六號活字五百餘頁に縮刷す）
定價壹圓廿錢
郵税八錢

發行所 神田區佐久間町四ノ二十三（振替東京一二九五三 電話下谷三四一九）植竹書院

（中付二の一）

文學博士 谷本　富先生序
醫學博士 松下禎二先生序

醫學士 渡邊喜三著

菊判總布製箱入、定價金壹圓廿錢送料十二錢

最新刊

人生二百年

卅萬年の昔話より此人類が外圍に對する防禦機關と疾病に對する免疫性に依り遂に今日迄進化し來れる經過を詳説し生命の起原と活力の根本と死の觀念とを研究し更に不老不死の理法と生物人類の壽命を論定し結局大隈伯の誇言百廿五歳説を超越して人生二百年の結論に到達す全篇の結構は純科學的生物學的にして其行文は全然詩的文學的なり

發行所 東京市麹町平河町五ノ卅六 振替口座東京二〇九一四番 洛陽堂 電話番町四二五八番

(中付二の二)

伯爵後藤象二郎

苦心五年

菊判 **極美裝** 口繪三色版一 コロタイプ三 挿畫寫眞版二百餘 **特價金貳圓** 正價金貳圓五拾錢 郵税内地金十二錢

『西郷隆盛は日に十五里歩むと言へば十五里は間違なし後藤象二郎は日に廿里歩むと言ひて其實十六里歩む、掛直あるも結局西郷よりは一里多し』とは當年の豪傑中岡愼太郎が烱眼を以て看破せる所『政治家中余は後藤伯が**大の贔負也**』とは福澤諭吉翁が誠意を以て敬服せる所、岩崎彌太郎男伯の傳を立てんとし、未成らずして逝き、其嗣小彌太男其遺志を繼ぎ、坂崎紫瀾、安岡雄吉、福地櫻癡等の諸文豪前後稿を起し終に大町桂月先生に至りて成れり。先生託を容るゝや蹶然起つて俗塵を避け、新たに稿を起し、**苦心五年**今夏始めて脱稿す。結構**雄大、文章靈妙**實に先生**一代の大傑作也。奔放自在**にして而かも**詩趣に富める**筆致史傳界の舊套を破り、幕末以來の史實を遠き背景とし、土佐の活動を近き背景とし、巨大漢の後藤伯を最も明かに描出す。**主人公と著者と相俟つて、文壇の壯觀**を極む。殊に世間に得難き寫眞筆蹟の饒多、一見人を駭かす。其他有ゆる點に於て善を盡し美を盡し、燦たり爛たり、**大正の世の文華の粹鍾まつて此一書に在りと**いふも過言に非ず、古の山陽と雖も恐らく**は之に加ふる能はざるべし。**請ふ速に座右に備へて**此偉大なる兩個の人格と文章とに**接せよ。

大町桂月先生一代の大傑作！

(中付二の三)

發行所 東京神田 振替五一〇番 電本一四〇三 一三〇六 合資會社 富山房

(大正四年度用)

實業之日本社の日記は「嶄然類書に冠絶す」

重寶日記

▢德用優美なる實用日記（殘部僅少、至急お求めあれ）

▲趣味と實益とを兼ぬる本書は益々改善を加へ「日記界の覇王」たる聲價を完全に實現せり。
△日記欄の完備せるは勿論、會計欄その他の諸項は萬人日常の顧問として年中の重寶なり。

定價四十錢
郵稅 內地八錢 支韓樺臺十錢

‖特色數項‖
△紙質精良
△記入至便
△印刷鮮明
△製本堅緻
△體裁優雅
△兩曆對照
△附錄澤山
△價格低廉

●歐洲戰爭の爲に用紙クロース等逼迫、戰亂前同一の物は重版不可能につき斷じて再版せず。に仕入れたる材料による本製品との

婦人日記

中版上製
總布美本
價卅八錢
郵稅各地二錢

懷中ノート

日記を兼ぬる高雅袖珍手帳
△携帶至便▽

上製
總布表裝美本
定價十八錢
郵稅各地二錢

特製
總革天金美本
定價參拾錢
郵稅各地二錢

發行 實業之日本社
東京京橋南紺屋町・振替東京三二六

(中付二の四)

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

評論

文藝時評

思想藝術の超然性

中澤臨川

忌憚なく言へば、明治初年から今日までに至るわが邦の文壇は泰西の模倣といふよりほかには多くの意味がなかつたやうだ。勿論、その間には二三の獨創的な作家なり思想家なりが現はれぬではなかつた。然かし、大體から言へば「模倣」の二字が凡てを蔽ひ盡してゐたかのやうに見える。そこで最近二三年來の傾向として、自我本位の生活を力說し、凡ての權威の源を自我に置かうとする思想が稱へられるやうになつた。淺薄な模倣時代に次ぐ一種の反抗として、之は當然に起りうべき顯象であらう。なほ之にはイブセンやトルストイやニーチェの强烈な個人主義的思想、そのニヒリスチックな破壞が大きな影響を與へてゐると思ふ。たゞ、かやうな思想は其過渡的特性として、建設の伴はない破壞を急ぐところから、其基礎に客觀的實證的の分子を缺き、impressionistic haste and plebeian looseness に陷る弊がある。從つてその根底に深い誠實と、天才的輝光を藏くさない限り、所謂安價な告白に終る場合が多い。

かやうな反抗的傾向は、圖らずも本年中頃から勃發した歐洲大禍亂の影響をうけて、一轉して國民的自覺を促す聲として現はれた。早く歐洲文明の淺薄無自覺な模倣から醒めて幾千年來自國民が作り上げた文明を土臺とした獨特固有な哲學なり藝術なりを建設せよと叫ぶ聲が聞へる。これは一應も二應も尤な說である。何

れの國民も皆なかうした覺醒期を閲みして來てゐる。歐洲での後進國なる獨逸や露西亞では最近にかやうな時代があつた。たゞ茲に一言注意したいのは、國民的特性の表現といふ事を餘り外面的に見るとの宜しくないとともに、所謂模倣ヶ、論者の一も二もなく卑下す如く、如かく無價値なものでないといふことである。寬大な心で思ふ存分に、撰り好みせずに、あらゆる異文明を採り入れられる包容力が貴くないであらうか。世界でもスラブ民族ほど模倣好きな國民はないと言はれてゐる。この邦では所謂思想は羽が生えて飛ぶ。その國民は何にかまはず新らしい物、珍らしい物とさへ言へば、最先に之を鵜呑にする。然かしまた一方から言へば、露西亞國民ほど獨創に富んだ國民はないとも言はれる。模倣と外面的無獨創の奥に、至て深く隱れて彼等の獨創が潛んでゐる。日本人が例の偏狹な、他人を容れない心から、愛國心といふ美名のもとに、此度の戰亂で急に思ひ附いたやうに、模倣を斥け國民的自覺を促すのだとすれば、その聲には我等は左袒しにくい。立派に他國民の文明長所を採り容れ、之を模倣して我が有となしうる包容力があるならば、それは一國民の大切な獨創と言つてよい。偏狹な排他心は、國民の自負的短所に投じ易いだけそれだけ、最も忌むべき「獨創」である。

然かし模倣の時代から自覺の時代に入るといふ顯象は、何れの國民ヶ幾たびか越さなければならない歷史上當然の過程である。それは廣い文明の流が世界に瀰漫しようとするに當り、牽いては斥け、斥けては引く力に從ふ潮のみちひにほかならぬ。かやうな意味に於て我等は今日の思想界の顯象を必然の出來事と見做す。

さて模倣の囚ばれから脫却したあとは何處へ行く？我等は飽くまでも自我を我執し、國民性に執着すべきであらうか。自我を貴び愛するはよいが、それが甘い母親の私愛に陷つてはならぬ。眞に深く自我を愛し、國民を愛する者は、必ずその缺點を視る。自己を知るといふことはその缺點を知悉するとてあらねばならぬ。

缺點を知悉するからには之を超越すべく努力せねばならぬ。小自我を超越し、國民性を超越することが、即ち思想家の努力である。今一歩進んでは、彼は時代をも超越せねばならぬ。更に「人間」をも超越せねばならぬ。人間を苦みぬいた揚句、彼は初めて『宇宙の市民』としてその籍を置くであらう。小自我を離れ、民族を離れ、時代を離れ、人間を離れた永久不異の都こそ、思想家や藝術家の理想郷であらう。

淺薄な模倣が不見識であるやうに、固陋な我執は一種の盲目である。前者は一轉して救はるべきプロバビリチーを有してゐるが、後者の道は進めば進むほど狹められ暗められる。之を光明に導く爲めには、彼の方向を全然反逆して、もと來た道を家路に辿り、再びその發程を新たにする必要がある。元來、自我や國民性は敎へずとも奬めずとも、われ等の一擧一動に附き纒つてゐる。なぜなら、それは永い年代の遺傳と因習の結果であるから。その最も良き特性でさへが我等を囚へる。て、思想家や藝術家は、先づ之等の我執や遺傳から超越した「自由人」であらねばならぬ。

あらゆる思想なり藝術なりは凡そ三つの分子から成立する。第一は表現の努力に附き纒つて現はれる作家の個性で第二は時代の要求を孕含んだその様式、第三はこれ等の外裝につゝまれた內部の本質即ち眞である。そのうち、第一第二は主觀的分子であるが、第三は客觀的分子で萬人に共通して居り、思想藝術の到達しようと努める最後の目的その物である。

思ふに、我等と自然との間には厚い不透明な幕が下されてゐる。我等の知覺や理智や感情やは行爲のために汚されて、直接自然と接觸する能力を失つて來た。固陋な遺傳と習慣とが自我とか國民性とか時代とかいふ障壁を我等の爲に作つてゐる。即ち、凡そ人間の有する弱點といふ弱點が寄り集まつて、厚い黑い幕を自然と我等との間に張りつめた。若し、或る人があつて、自由にこの幕を透視しうるとすれば、彼は何物にも囚はれない、完全な意味での「自由人」で、彼はその時在の儘の純潔な姿に於ける自然と接するとが能きる。

然かし、かゝるは現在の狀態にての人間に望むとは不可能てある。いかなる天才にしてからが、その幕の一部を上げるにさへ、多大の努力を要する。その努力は即ちいろ〳〵の因習や障害に打克つための努力てある。人間を超越する爲めの努力てある。この努力の有樣が、思想家や藝術家の表現に於ける樣式または個性として現はれる。然かし、彼等の眞の目的はこれ等の努力の外形の奥にかくれた眞その物てあらねばならぬ。眞はあらゆる我執と時代とを超越した永遠の形てある。自我や國民性の上に築かれた眞のあらう筈はない。

十九世紀は懷疑と破壞の時代てあつた。舊い眞理と道德と信仰とを振り棄てて、之に代る新しいものを造り上げる爲めに、各人各國民が荷ひきれないほどの努力を負はされた時代てあつた。かやうな過渡の時代に努力その物の過重視せられたことには充分の理由がある。然かし、努力その物が最終の目的ではないのてある。幸に今日は積極的建設の時代に這入らうとしてゐる。我等は先代の超人的努力に感謝するとともに、その盲目性、執着性、早急性をば棄てねばならぬ。そして眞の意味に於ける自由人として、未來の「宇宙の市民」の住む永遠の都を築き上げねばならぬ。

新刊批評數十項は頁數超過の爲め之を總て次號に讓れり。乞ふ之を諒せられんことを



おとき

久保田萬太郎

五番地の家から、いつも六時には平吉は歸へつてくる。幾ら遲くなつても六時半にはもうまちがひなく歸つてくる。――それはかた〲おそのから始終言はれてゐるから。

それが今朝は七時になつても歸つて來ない。七時すぎてもかへつて來ない。――愚圖〱してゐるともう見世はご飯になる。

「おつぎ、お前ご苦勞だけれど、その佛樣のご飯をつけてしまつたら、一寸五番地へ行つて平吉を見て來てお呉れでないか。」とおそのが云つた。

夜中にまた急におときの工合がどうにかなつて。――おそのは考へた。――しかし昨夜宵に行つて見たときにはそんな模樣はなんにも見えなかつた。――「有難う、今夜はおかげでたいへん心もちが好くなつてね。」と、床の上に起き直つておときはお茶を飲んでゐた。

「あの、今朝は五番地へご飯を持つてまゐるんでせうか。」とおつぎが云つた。
「さうだね。――昨夜のがまだまるつきり殘つてゐるかも知れないから、今朝は持つて行かなくつてもいゝよ。――どうせ煮返すんだから。」とおそのが云つた。
「おやあ味噌汁だけ持つてまゐりませう。」
「あゝさうしてお呉れ。」
おつぎはいつもの三德をだして岡持のなかへ入れて、
「もうお見世へ聲をおかけなすつて宜しうございますから。」
「あゝいゝよ。――何をしてゐるのか知らないけれど、とにかく平吉をすぐ歸して寄越してお呉れ。」
「かしこまゐりました。」
おつぎは出て行つた。――通りの方から當り前に行くと、五番地まで半町ばかりまはらなければならないけれど、煎餅屋の路次を拔けるとすぐ五番地の家の前へ出られる。――木戸があつて、とにかく拔けられないことになつてゐるのだけれど、近いからおつぎや平吉や藤田の家のものには始終もうみんな其處を拔ける。
おつぎが出て行つて、おそのが「お見世でご飯にしてもいゝよ。」と見世へ聲をかけてゐるところへ「只今」と平吉が臺所からぼんやりかへつて來た。
「あ、お前おつぎに逢はなかつたかい。」とおそのが云つた。
「いま其處で木戸のところで逢ひました。」と平吉が云つた。

「今まであお前何をしてゐたんだね。——あんまり遲いからいまおつぎを見せにやつたんだよ。」
「今朝四時ごろから、おばあさんが胸がまたすこし痛みはじめたもんですから。」と平吉が云つた。
「胸が——。」
「なんだかたいへん苦しいやうですから、それから今まで側にゐて、——いま富さんのところのおかみさんが來て、「私がゐてあげるから」と云ふんで歸つてまゐりました。」
「さうかい。」とおそのが云つた。——何故だか解らないけれど、おそのはなんだか酷く心配が考へられた。
「平吉、お前ご飯をお喰べよ。」
「有難うございます。——昨夜の風呂敷を此處へ置きます。」
昨夜平吉が行くとき、宵におときが水物か何か喰べたいといふやうなことを言つたから梨を二つ三つ持たしてやつた。——その風呂敷。
「今日はたしか藥をとりに行く日だつたねえ。」とおそのが云つた。
「えゝ、さうでございます。」
「ぢやあねえ、今日はお前塚本さんへ行つたら、昨夜また胸が痛んだといふことをよくさう云つてお呉れ。——藥をまた加減して下さるかも知れないから。」
見世のご飯の一と立て濟んだ時分に、土藏のうしろの座敷から、若い夫婦も起きて來た。

仲の間にはもうお膳の仕度が出來てゐる。――要三は顔を洗ふとすぐとにかく帳場へ座つた。――一と通りきのふの帳面を調べる。

お千代はおそのに挨拶して火鉢の前へ座つた。

「おかみさん一寸。」と其處へおつぎが歸つて來た。

「なあに――私かい。」とお千代が振り向いた。

「いゝえ、大きなおかみさんに一寸。」とおつぎが云つた。

「あつ母さん、おつぎが何んですか――」

おそのは土藏のなかへ何か取りに行つてゐた。

「おつぎ歸つて來たかい。」と火鉢の前へ來て、「どんな工合なんだい。」

「一寸あとで行つてごらんなすつて下さいまし。――なんだかどうもお苦しいやうですから。」とおつぎが云つた。

おそのはふとある事を考へた。

「あゝさうかい、有難う。」と云つた。「いまあとで行つて見よう。――何かい、富さんところのおかみさんがゐて呉れるのかい。」

「えゝ、――それからいま富さんも一寸見えました。」

「五番地のおばあさんまた何うかなすつたんですか。」とお千代がおそのの顏を見た。

「いゝえね、今朝がたからまた胸が痛みだしたとかなんだとか云ふんだよ。」

「まあ」
「厄介な婆さんさね。」とおそのは笑つて見せた。
「ですけど、――それぢやあ早く行つて見てあげたらいゝでせう、おつ母さん。」とお千代が云つた。
「なあにべつに大したことはないんだらうから。」
「それでもおつ母さん。――また胸がなんだつていふのぢやあございませんか。」
「おつ母さん、きのふ何か二圓ばかり奥で買物をしたものはありませんかしら。」と見世から要三が帳面を持つてはいつて來た。
「二圓ばかり。」おそのは要三の顏を見た。――考へて。「さうだねえ。私はきのふは朝伊勢福が來たとき十圓出したきりだけれど。」
「二圓四十錢張屋がついてをりませうか。」とお千代が云つた。
「張屋。」要三は帳面を一寸開けてみて、「あゝそれがついてゐないんだ。」
「そりや濟みません。――つひ夕方およねさんが來たりなんかしてごた〳〵してゐたもんですから。」
要三はお膳の前へ座つた。おそのは味噌汁のお椀を要三の前へ置いた。
「どうもこれは濟みません。」
「その茄子はよく漬いてるよ。」とおそのが云つた。
「おつ母さんも一しよに喰つておしまひになつたらいゝでせう。」とお千代が云つた。
「いゝよ、私はあとでお前と一しよに喰べるから。」

「ですけど、早く喰つて五番地へ行つてご覧になつたら。――五番地のおばあさんがまた今朝がたから胸がいけないんださうです。」とお千代が要三にさう云つた。

要三は箸を休めて、「そりやあいけない。――誰れか行つてるんですか。」

「いまおつぎに行つて貰つたんだけれど、富さんところの夫婦できてゐて呉れるさうだから。」

「だけどそれはあなたが行かないんぢやあ。――ご飯を喰つてすぐに行つて見てお上げなさい。」と要三が勧めた。

「だけどね、毎度の事だからね。」とおそのは箸箱から箸をだしながらからう云つてまた笑つて見せた。

「義理」といふこと。――お千代はふとおそのの心もちを考へた。

「ぢやあ一寸行つて見てくる。」と云つておそのは見世へ出た。

「平吉は何處かへ行つたかい。」

「平吉は一寸いま郵便局までまゐりました。」と帳場のところから新吉が云つた。

「それぢやお幾でもいゝ。――私と一しよに五番地まで來てお呉れ。」

格子をあけて、暖簾のそとへ出ると、――暖簾のそとには其處には九時前の日光が濃くあかるくながれてゐた。

眞靑に空が晴れてゐる。――おそのは今日はまた暑くなるのだらうと考へた。

「一寸塚本さんに電話をかけて下さい。」

いま出て行つたかと思つた幾次郎が歸つて來てから云つた。
「塚本さんへ。――何んと云つて。」と要三が云つた。
「すぐに先生に來て頂くやうに。」
「なんだ。そんなに工合が惡いのか。」
「なんだかたいへんにお惡いやうなんで――。」
「新吉、お前塚本さんへ電話をかけて。」と要三が新吉に云つた。
新吉が電話をかけると、「承知した、すぐに行く。」といふことだつた。
「塚本さんはすぐ來て下さるさうだから。――それからお前はまた何か用があるといけないから、歸つて來なくつていゝから。」と要三は幾次郎に云つた。
幾次郎はすぐにまた格子を出て行つた。
「おばあさんは惡いやうなんですか。」と仲の間からお千代が出て來た。
「とにかく塚本さんをよぶくらゐだから。――お前一寸行つて見て來てご覽。」
「えゝ。」
お晝の仕度にかゝるのにはまだ間がある。――お千代は要三に云はれなくつても行つて見たい考へだつた。
「とにかくまう一度また午後にうかゞひますから。」と云つて塚本さんは歸つた。

要三は平吉を呼んで、おそのに一寸用があるから歸つて來て呉れるやうに五番地へさう云つてやることにした。
「あのね、若いおかみさんが彼方へ行つてるからね。――一寸旦那が、大きなおかみさんに歸つて來て頂きたいと云つたと、若いおかみさんにさう云つた方がいゝ。」
「若いおかみさんにさう云つて頂くんでございますか。」
「あゝさうだ。――その方がいゝから。」
平吉は出て行つた。
要三はなんとはなしにおそのの暗い生涯が深く考へられた。義理と苦勞に揉まれて〳〵揉まれぬいた暗い生涯。――それはおそのは十五の年齡になるまでに、父親にもわかれゝば母親にも死に別れた。この世の中に親身と云つたら、おそのは眞實におときが一人ゐるだけ。――母方のはうの親類か何か殘つてゐるといふのだけれど、もう二十年といふもの音信がないんだから、何處にゐるんだか解らない。おときの爲めにはおそのは隨分じぶんの心もちを殺してゐる。隨分肩身の狹い思ひをしてゐる。――しかしいまおときにもしものことがあるやうな事があつたら。
今年になつてから、何うしたんだか目に見えて衰へて來たおそのが要三の胸のなかに浮んだ。
平吉と一しよに見世からおそのが歸つて來た。
「どんな鹽梅です。」と要三がおそのの顏を見て云つた。
「あゝ有難う。疲れたと見えていますこしうと〳〵してゐる。」とおそのが云つた。

「さうですか。眠れゝばまた痛みがすこしは紛れるでせうから。」

「いつそもう惡くなるものなら思ひ切り惡くなつてしまつて呉れた方が始末がいゝんだけれど。」

おそのはある心もちを強く抑へてゐた。

「それでね、おつ母さん。」と要三が改まつて云つた。「實はいま塚本さんが歸りに此方へ寄つて下すたんですがね。」

「あゝさうかい。」とおそのが云つた。

「しかしなんにもお聞きになりませんでしたか。」

「なんにも別に聞かない。――たゞお晝すぎにまた來ると云つてお歸りになつたきりだから。」

「實はね。」要三はおそのの顔をまた見て「おばあさんの容態がすこし心配になるんだと云ふんですけれど。」

「さうかい。」とおそのは何んの事もないやうに云つた。

「とにかく昨日今日の惡いんでないんで。――なんにしても今まで藥で責めてゐた身體だけに一つまちがふと人の一倍衰弱がはげしいと塚本さんがまあ云ふんですけれど。」

「これでいけなくなつて呉れゝば、私はどの位助かるか解らない。」

「しかしおつ母さん。」と要三が云つた。「しかしお晝すぎに來て見た工合で、何ういふことになるかまで解らないんですから。――たゞ塚本さんが一寸その事をあなたに耳うちして置いて呉れと云つたんで、それで何したんですから。――別に何なんですから氣を落さないやうにね。」

「有難う。いゝえね、私は病人のことよりお前やお千代にいろ〳〵心配させるのが濟まなくつてね。」とおそのが云つた。――聲音は強く明斷してゐたけれど、おそのゝ眼のなかには泪が浮いてゐた。

「濟むも濟まないも、――おつ母さん、そんなことがあるもんですか。」と要三は笑つて、「私もいまお千代がかへつて來たら、あとで一寸行つて見ます。――まだ富のところの何はゐるんですか。」

先刻お千代が考へた義理といふことを要三も考へた。

「あゝ今朝からまだゐて呉れる。――それからいま途中で平吉に聞いたと云つて、富士横町のお師匠さん――お勢さんが來て呉れてね。」

「さうですか。――あゝそれから今日はべつに見世に用がありませんから、錢を彼方へお置きになつて構ひませんから。――何んだつたらあとでおつぎを一度上げます。」

飴屋の太鼓の音と三味線の音とが、急に四邊に聞えて來た。――「いろ〳〵有難う。」とおそのはぢきに立上つた。

「ぢやあ、いまお千代はすぐ歸して寄越すから。」

「濟みませんが何卒。」と要三も立上つた。

おそのは急いでまた出て行つた。

お千代はすぐに歸つて來た。「一寸私も見て來るから。」と云つて入れちがひに要三が何年にも足踏をしたことのない五番地の家へ見世を出た。

何年にも足踏をしたことのないといつて。――何ういふものだか要三は今までおときにある親しみを持つことが出來なかつた。それにおときの身體の惡くならない前には、始終おそのと一しよに要三はおときを芝居や寄席へ連れて行つた。毎年一度づゝ要三は成田へ行く。――そのときにもおそのが行くときには、始終やつぱり要三はおときを誘つて連れて行つた。――身體が惡くなつてからでも、一日おき二日おきに夕がたおときは風呂へはいりに來た。――歸るときには、「まあ、おばさん、何んにもないけれどご飯を――」と無理にも要三は一しよに食事をして行くやうにおときを引きとめた。――始終要三はおときを前に置いて「晩酌」の盃をとり上げた。

だから誰れも要三の胸のなかは深く解らなかつた。お千代にも解らなかつた。――しかし要三はおときの前へ出ると、全くある重い暗い心もちのなかへ沈むことが何うにも救ふことが出來なかつた。

おそのもゐなければ、お千代も其處にゐないところでおときに逢ふ。――要三は考へることさへ出來なかつた。義理が惡い。――おそのの手前、とき／＼は見廻はらなければ義理が惡いと思ひながら、要三は七年あまりの間とう／＼門口まで行くことさへ一度もしなかつた。

要三は今更のやうにそれが考へられた。

と「私はね、ほかになんにものぞみはないけれど、たゞ五番地の姉を見送つてから引取られたいと思つてね。――もう私が方がさきに行くやうなことがあつたら、私はとても行くところへ行けやしない。」とおそのが始終云つてゐる。――要三はいつになくこのおそのゝ心もちがしみ／＼と考へられた。

「とにかく何うにかしたい。——何うにかしなければならない。」

眞靑に空はいよ／＼濃くあかるく晴れてゐた。——要三は藍蠟屋の路次へはいつた。

塚本さんの來たのは夕方だつた。——五番地へ行つて、かへりに塚本さんが來たときには、とにかく見世にはもう燈火がついてゐた。

要三とお千代と三人、土藏のうしろの座敷へ行つたかと思ふと、すぐにまた見世へ出て來て、塚本さんは急いで俥へ乘つて歸つて行つた。

要三はじぶんで電話口へ立つて、何かしきりに藥研堀の病院の電話をかけた。

「いかゞでございませう、老先生のご都合は——。」

帳場にゐた新吉は思はず直吉と顏を見合はした。

その間にお千代は、

「お前濟まないけれどねえ、お香の物が出たらすぐご飯にしてやつて呉れないか。——私一寸五番地へ行つて來なければならないから。」とおつぎに云つて、いそいそ裏から出て行つた。

臺所に丁度お膳の仕度が出來たところへ、幾次郎が五番地から歸つて來た。新吉や直吉や平吉は幾次郎を取卷いて、各自「五番地」のおばあさんの容態をいろ／＼に聽かうとした。

藥研堀の病院から老先生が八時に來るといふので、要三は夕飯を食べるとすぐ五番地へ出かけた。お

千代と入れ替りになつて、お千代はすぐに見世へ歸つて來た。
十時すぎに要三はかへつて來た。——丁度仲の間にはお勢さんが義理の妹のお秀さんを連れて、お湯にはいりかたがた遊びに來てゐた。
「藥研堀の先生が來て——どんなやうな鹽梅なんです。」とお千代が要三の顏を見ながら云つた。
「塚本さんの見立てと同なしでね。」と要三が云つた。「とにかく今夜一と晩越して見なければなんとも云へないさうだ。」
「熱は何うなんです。」
「退かない。——熱の退かないのはまあ仕方がないとして、とにかく病人の衰弱してゐることが何より危險なんださうだがね。」
「困りましたわねえ。」とお千代が云つた。
「ご心配でいらつしやいますねえ。」とお勢さんが要三に云つた。
「有難うございます。——とにかく何うも年齡が年齡ですからねえ。」と要三は云ひかけて、「あゝさうさう、お勢さん今朝はまた早速お見舞下すつて有難うございました。」
「何ういたしまして。」とお勢さんが云つた。「いゝえね、一寸今朝雷門まで買物にまゐつた途中で不どんにお目にかゝりましてね。——何んの氣なしに五番地のご隱居さんはどんなご樣子ですと伺ふと、今朝からまたたいへんにお惡いといふやうなお話でしたから、實に驚いて歸りに一寸お寄り申したのでございます。——しかしお年齡がお年齡と云つても、まだそんなに何ではいらつしやらないんでございませ

う。」

「九ですの。」とお千代が云つた。

「まあ、九でいらつしやいますか。――ぢやあお秀さんのおつ母さんの方が一つ姉さんでございますよ。」とお勢さんはうしろにゐるお秀の方を一寸振向いた。――お秀は蔽戸のかげの暗いところに身體をかくしてゐた。

「お秀さん、なんだつてそんなところにゐるんです。もつと此方へ出て來たらいゝぢやありませんか。」と要三が云つた。

「眞實にお秀さん、もつと此方へいらつしやいましよ。」とお千代が云つた。

「まだ年齢がいかないもんでございますから、明るいところへ出るのがキマリが惡いんでございませう。」とお勢さんが笑つた。

「ぢやあお秀さんのおつ母さんは丁度でいらつしやるんですか。」とお千代が云つた。

「さうでございますのですよ。」

「それにしては隨分しつかりしていらつしやいますわねえ。」とお千代が云つた。「私はまだ五か六ぐらゐだらうと思つてをりましたよ。」

「どうもねえ、あんまりしつかりしすぎてゐるんで困ります。」とお勢さんはお秀の方を見て笑つた。

「丁度つて云ふと、なんぢやありませんか、寅ぢやありませんか。」とお千代が指を折つて考へた。

「えゝ、寅でございます。」

「すると、こちのおつ母さんと同なしですのね。」

「まあ、さうでございますか。」とお勢さんが云つた。「おんなし寅なら、すこしは此方の大きなおかみさんに似てもよさゝうなもんでございますが。」

「しかしね、阿母もあれで隨分强いところがありますからね。」と要三が口を挾んだ。

「こんなことを申しちやあ何んですが、しかし此方の大きなおかみさんほどよくいろんなことにお氣のつく、思ひやりの深い方は一寸珍らしいと存じます。——やつぱりいろ〳〵ご苦勞をなすつたからでもいらつしやいませうが。」

お勢さんの云ふのはお世辭ではなかつた。

「それがね、側へ寄らなければこれは解らないけれど、隨分あれはじぶんを殺してゐるのでしてね。」

「そりやあねえ、考へると淚の零れるほど始終義理といふやうなことばかりを考へてゐるんですよ。」とお千代が云つた。

「とにかく五番地といふものを抱へてゐますからねえ。」と要三が云つた。

「大きに、——そりやねえ。」とお勢さんが頷いた。

「此處だけの話。——そりやあね、快くなるものなら快くしたいと思ひますけどね、もうこのまんまいけなくなるんだとしたら、どの位阿母は肩がぬけて樂になれるか解りません。」

「助からないでせうか。」とお千代が云つた。

「どうも六かしいらしいよ。」と要三が云つた。

お千代はお勢さんと顔を見合はした。

露に濡れた空氣が、庭の方からしづかに暗く動いて來た。

「たいへん涼しくなつた。」とお千代は浴衣の襟へ手を當てた。

「あゝもう十一時でございますよ。」とお勢さんは時計を見て、「お秀さん、お暇しようね。」

お秀が「えゝ。」

「お秀さんの新橋の方の話は何うなりました。」と要三が云つた。

「どうもまだ定まらないんで困つてしまひます。――いゝ鹽梅に此間、下谷の方なら世話をしてもいゝと云つて下すつた方があつたんですけれど、おつ母さんが今度出るなら何んでも新橋でなければいけないと剛情を語るんで、とう／＼そのまゝて話は毀れてしまひました。――解らないところへいろ／＼側から智惠を養はれるんでございますから仕様がございません。」

お秀はこの間まで公園で藝妓をしてゐた。――しかし公園は思はしくないから今度は何處かほかから出ようといふのでしばらく病氣といふことにして商賣を休んでゐる。

「一寸五番地へお寄りいたしたいと存じますが、もう遲うございますから。」とお勢さんが云つた。

「どうせ今夜は寢られやしません。――もう遲いからと云つて何するのが眞實かも知れないが、もうなんだつたら一寸寄つてお出でなすつて下さい。」と要三が云つた。

「私ももう一度行つて來ようかしら。」とお千代が云つた。

「行くなら行つといで。」

「ぢやあお勢さんと一しよに行きませうか。」

「もう路次は木戸がしまつたから、通りを廻らなければ行けないぜ。」と要三が云ふのを後ろにきゝながら三人は見世のくゞりを開けて外へ出た。

外は何かのやうにあかるい月夜だつた。

「まあ、いゝ月だこと。」とお千代が云ふのが聞えた。

とにかく不安な一夜だつた。

いま表の戸をたゝかれるか、――いま迎ひが來るかと思つた、三時うつまでお千代はまんじりともすることが出來なかつた。要三も眠れなかつたと見えて、とき／＼眼をさましては枕もとの時計を見てゐた。

四時うつのを聞いて、二人はやうやくうと／＼した。

二人が眞實に眼を覺ましたときには、葭戸を洩れてあかるい日が蚊帳の裾に匍つてゐた。――お千代は今朝はおそのがゐないのに遲くなつたと思つておどろいて起きた。

それでも何時もより早かつた。――七時だつた。

要三もあとからすぐ起きた。

「平吉。ゆふべはどんな鹽梅だつたい。」と要三は訊いた。――要三が見世へ出ると、平吉は朝飯を喰べ

に五番地から歸つてゐた。

要三は平吉の顔になんにも疲れたやうな色の見えないことが考へられた。

「へえ、昨晩はすや／＼とよくおやすみになりました。」と平吉が云つた。

「それで今朝は。」

「今朝はいな眼をおさましになつて、粉藥をお飲みになりました。」

「熱は。」

「まだ胸が今朝も痛いと云つてお出でになりますが、熱はすこし下りました。」

要三は食事を濟ますとすぐ下駄を穿いて外へ出た。

平吉の云ふのでは解らない。じぶんに行つて見た様子で早速今朝塚本さんへ電話をかけなければならない。――様子によつては早速知らせるところへ知らさなければならない。――かう考へながら要三は藍蠟屋の路次へはいつた。

「だけど結句また助かるのぢやあないかしら。」

眞靑に空はきのふと同じやうに晴れてゐた。(三年十月)



花曇遠唄聲（一幕喜劇 一名 花見曾我）

木下杢太郎

人物

田島屋悟舟（二十五歳）

その妻おるん（十九歳）

老父加右衛門

その妻おかよ

悟舟弟源七

十郎祐成
五郎時致
朝比奈三郎
悟舟の三人の友の假稱

女中おすみ

時

徳川末

所

江戸角田川に臨める質店田島屋の奥座敷

(因に曰ふ。この戯曲は、主として唯、何となく氣をそそる花時の曇りの日の午後の心持を現はさむとしたるばかりなれば、風俗言語、時代相等必しも深く穿鑿考證するところあらず。曲中の音曲歌謡の如きも、亦時に臨み更に適切なるものを以て之に代ふるも妨げず。偏へに全局の情調を完からしむべきなり。唯舞臺には木匡を用ゐ、其遠近法は概ね洋風に倣ひ、なる可く舊劇的の約束を排して、觀者の幻覺を全くせむことを期す。即ち背景、家屋等の材料は舊劇の常套を襲ふものなれども、其表出の仕方は油繪風にてありたきなり。科白亦之に準ず。)

舞臺、上手によりて閑靜なる新築の小座敷。床、書院、窓、柱、緣側の設へより、書棚、茶簞笥、火鉢、文机、三味線立などの道具に至るまで凡て數奇を凝せり。手水鉢、踏脱、軒の鳥籠、また袖垣、木戸なども一種の情趣を見せる。萱葺門には「春曙庵」といふ額を懸けてあり。

前栽には木立、燈籠、庭石、芭蕉などの配置宜しく、少しく花を附けたる一株の櫻樹あり。

下手柴折戸を出づれば、裏の水門に出づる道ありて、岸に下る石段より忍返見え、やや古りたる海鼠壁の間に大川の一部覗はる。總じてじつとりとしたる春の曇り日の午すぎの心持にて、時々遠方の河の面を通ふ船の賑な噪も聞える。

第一節

しんみりとしたる音樂にて幕あくと、この家の若主人悟舟(幼名千吉)羽織を脫ぎたる外所行の小袖の膝より三味線を滑らし根締めを緩めて疊の上に置き、その後ろの障子へ倚りかかる。妻おるん。背すらりとして肉締り、りきみある姿なれども、まだ遠慮がちなる風もあり。藍お納戸茶の紬に萌黄の糸眞田の紐のつきたる前垂をかけ、甲斐々々しき風俗にて、悟舟の羽織を疊み、火熨斗をかけて居る。

おるん。まだこんなに濡れて居ますよ。

悟舟。そりやその筈さ。嚮き兩國の橋のとこで到頭雨にやられたからさ。是はしまつたと思つたが、鍛冶町と一緒だから、まさか懷ろへも入れられまいからさ。大ぶ濡れたかの。

おるん。いいえ、そんなでも御座いません。明日お天氣になつたら乾しませう。

悟舟。何だかまたから、いやに曇つて來たぜ。折角の花だから雨にやしたくねえものさ。あれ御覽よ、此處にかうして居ても手に取るやうに見えるわ

さ。豪儀だぜ、三艘揃つて行くよ。橋の上は黒山のやうな人立さ。(默つて考へ込む。)

おるん。(私かに悟舟の顔を見上げ、意味ありげな目付をしたが、また直ぐ下を向く。)

河の上の歌少時盛になる。

悟舟。(立ち上り椽側に出て川の方を眺める。)おやおや大道具小道具、鳴物一切を積み込んで、大仕掛の茶番で漕いでゆくよ。

おるん。旦那、あんたも偶には花見でもなさるが可うございますよ。――おおさうさう、忘れて居ましたが、今日午前濱口屋から使が來て、是非お出で下さいと言つてよこしました。

悟舟。そりや聞いたが、濱口屋と一緒ぢや碌なことは無いから行くまいよ。何さ、花見なざあ面白えものぢや無いわさ。ああ有頂天になつて騒いで居るのを見ると、何だか馬鹿々々しくなつて、おらも舊はあんな眞似をしたもんかと思つて、いけ恥しくなるのさ。つきりや茶屋小屋にしけ込んで二日醉といふ奴さ。――それよりや今度木挽町で白猿の景清が評判だから、うち中擧つて見ようよ。鶯や一家擧つて飯時分て俳諧もあるが、親身同志一緒に樂しむのが何よりさ。

おるん。ほんにあんたも大へん堅氣になんなさんしたなあ。

悟舟。そりやさうよ。何時までも吳下の阿蒙ぢや仕方がねえわさ。それにしても弟の源七めも早く目を醒まして歸つてくればいいのに。親の心子知らずたあ、善く言つたもんさ。おらもやつと今になつて分つたのさ。

おるん。(嬉しき樣子にてそわそわしながら。)ほんに源さんはどうしていらつしやる事やら。お袋さんがあんなに心配してゐることも御存知はなさるめえ。

悟舟。親不孝者さ。

おるん。さう言へば、あんただつて――おつかさんが――私がまだこの家へ來た當座は――あんたの事

ぢやどんなに心配して居なさんしたかを御存知なさるまいな。

悟舟。あやまる。あやまる。もう言ふなお前にも腹を立てさしたな。もうあんな馬鹿は爲はしねえわさ。

おるん。去年の秋死んでしまつた方がよかつたと思ひましたよ。

悟舟。縁喜でもねえ。茜屋の文句ぢやありめえし、廢しねえよ。

おるん。ほんにあんたはそんなお心におなりか。

悟舟。いやだよ、お前は、昔は昔、今は今さ。かうさつぱりしたもんさ。そりやお前がこの家へ來た當座には、友達の附合上さう急にも足は洗えねわさ。偶に大磯へ行つたのも、あれはさ、こつちの負を見せめえと云ふ魂膽で、まじめになる一世一代にして見せたのさ。な、早え話が、着物を皺にして返えす女郎と、火のしを懸けて置く女房と、金を遣はせる嘘と、商賣を勸める誠とはどつちが取りもんだらうつてなあ知れ切つて居るぢやねえか。勿論つき合もさつぱり廢めて、庸俗人になる了簡で、もうこの春からは、酒も斷つ積りさ。

おるん。何もそんなに、お酒まで斷たないつて可うございますよ。

悟舟。何酒も斷つわさ。——内でかうやつて、お前を相手に歌でも彈いて居りや何よりさ。何だつけなあ、今の流行の歌は。(と三味線を取り上げる。)

江戸節。はかなき身にもことしぞと、春知りそむる鶯の……。

おるん。もしえ、三をお上げな。

悟舟。どうも行かねえ、簪を貸しな。(と取つて三味線のかり駒にして、またも調子を合はせる。)ええい、じれつてえ。それよりこの方が可いよ。

二上り。おまへばかりに苦勞をさせてわしは苦勞をせぬかいな。

それぢやほんに浮ぶ瀨がないよ。

おるん。(畳みたる羽織を持つて立ち上り、さもさも嬉しさうににつこりと笑ひながら。) ほんにさうだと、わたしやどんなに嬉しう御座んせうねえ。(行きかける。)

悟舟。 おるん、まあ、來な。

おるん。(後ろを振り向く。)

悟舟。 それなら明日ほんとうに。

おるん。 ええ、明日、何をえ。

悟舟。 明日みんな揃つて芝居へ行かうつて事さ。

おるん。 ほんに、さうしませう。(去らむとする。)

女中出づ。

女中。(障子を開けて。)もし御新造さんえ、酒屋がまゐりました。

おるん。 おや、さうかえ、今日は別に……(ふと後ろを向き悟舟の顔を見ながら。) お待ちよ、むすみ、あの釼菱を一升取つて置きな。

女中。 はい、かしこまりました。(障子を閉めて去る。)

おるん。(後ろを向き、につこりと笑ひて去る。)

悟舟。(跡を見送つて、小聲に。)ほんに可哀いやつさ。(大きく二つ嚔する。) ええ、風を引いたかの。

間。

河の方にてまたしむみりとしたる唄聲聞える。その聲遠かる。

悟舟。(縁側に立つて、懐手したるまま、夢みるやうな眼をして、うつとりと、遠く河の方を見てゐる。)ちえ、忌々しい。何だか胸もとをそそるわい。(舌打してまた座に戻る。)

第二節

奥の老母おかよ入り來る。心善く口まめなる女。耳遠き爲めに聲高なり。

老母。 千ちやんや。千ちやんや。……あんちやんは居ないかの。あんちやんは。(と言ひながら障子を開けて出づ。)おや千ちやんお前そこにか。千ちやんや、あのな、お父様が何ぞお前に用事があるというて呼んで御座つたぞ。一寸まあお店の方へ往つて見ておくれな。

おるん。（少し急きたるさまに出て來る。）おつ母さんえ。居りませんかえ。

老母。いや、居たよ。千ちやんは。なあ、おるさんお前は氣分は直つたかえ。春先は誰も氣分は好いものぢや無えが、況して身持は、から氣が重えものさ。

おるん。まあ、おつ母さん、私やまだ…おほほほほ。

老母。何、そんなに氣を靡むこたあ無え。誰もする女の役だわさ。何よりも養生が肝腎だがなあ、千ちやん、お前も知つてなさる通り石町の油屋さんは利勘の男だから、日を遲らせると、どうまた話が變るか分つたものぢやあ無えのよ。それで、とつ様が四日市の地面の事も今日中に片を付けてえと言つて居なさるが、今日は朝から何だか鬱陶しいお天氣でまた持病の疝氣が良くねえから、御苦勞だが是非一つお前に往つて貰つて話を極めて來て貰えてえと言ふことだよ。

悟舟。父様は、お店にお出てかの。

老母。お店で勘定して御座るよ。何もこの寒い日にあのお年をしてお店で働いて居さつしやらねえでも可いのだか、それも是れも皆わが子の事を考へて、少しでも身代を餘計にして殘してやりてえといふ有り難てえ了簡だわさ。

悟舟。（臆劫に立ち上りながら。）やれやれ、また石町まで行くたあ、大儀の事だなあ。（去る。）

老母。（しけじけと悟舟の後姿を見送りて歎息をつきながら。）あれもまあ大人らしくなつたことぢや。父様の若い時にそのままぢや。なあ、おるさん、お前にも一時いろんな苦勞を掛けたが、近頃の樣子ぢやどうやら千も腰が据つたやうだもし、是かほんに雨降つて地固まると云ふことだわさ。是で子供でも出來て御覽じろ、結ぶ四海の浪風も治まる家で豐なるといふものさ。この間松風呂に行つたときにも濱口屋のおつ母さんが言ふにや、おかよさん、お

前は仕合せもんだ。嫁御はずんと氣立が善いお子だし、また千さんは一遍道樂をして、固まつた人だけに至極分つておるさんも勸めいいわけだから家中和合するからさと言つて居たがの、滿更お世辭ばつかりぢやあ無えのよ。だつてお前、あすこの樂さんはいまだに野良が休まねえで親達も困り切つて居さつしやるから、つひさう人を羨む氣にもなりなさるのさ。そしてな、おるさんも常の體ぢや無えやうだから、そりやお前さんて人が附いて居なさるから、如才もあるめえけれど、一そ毒だてに氣を附けるが可いと心配して居たよ。ほんに氣の善いおつ母さんさ。五月過ぎれば何を食べても當りやしねえが、それでも鱏だけは決して食べちや可けねえといふことだ。乳にさはるからだとさ。お前さんも子を持たしつた人だから、知つてなさるだらうが、實母散、婦王散は妊娠中は缺かされねえ藥さ。それに照降町の足袋屋で賣る血の道の藥が大へん善く利くと、自分の親類の家の評判までして居たつさわさ。お前にもよろしくといふ言傳だから、今度會つたら、忘れねえで丁寧に禮をしなせえ。

おるん。（顏を赤くしながら。）ほんにまあ、あのをばさんは、何にでも氣の付く方で御座んすねえ。樂さんはやつぱり道樂がやみなさらねえので御座いますかねえ。

老母。親の心子知らずさ。（帯の間から紙切を出して。）さあ是れが子安のお守だよ。しまつて置きな。

おるん。（恥らひて。）まあ、おつ母さん。

老母。何でも早くつから仕度をして置くに限るわさ。むかあし、むかあし、貰つた花染がちやんと簞笥へしまつてある筈だから今度出して置いてあげようの。物といふものは、何時役に立つものか分らねえものさ。—なあ、おるさん、わしも何時かお前にさう言ひたい、さう言ひたいと思ひなが

ら、到頭今日まで默つてしまつたが、今思へばお前にはいかい心配をかけたの。ありやみんな年寄の取越苦勞から出たことだから勘忍さつし。千の身持の直つたのも皆お前ゆゑさ。今ぢや心の中で手を合はして拜んで居るのだわさ。

おるん。（感激して涙ぐみしみじみとしたる調子にて。）いえ、いえ、おつ母さん、わたしこそおつ母さんのお陰で……。

老母。まあから謝つて心がせいせいした。この上あの源七が魂を入れかへて呉れれば、可いのだがなあ……。

おるん。源さんも今に直りますよ。根が善い人で御座んすもの。

第三節

（倍母と老父加右衞門と打ち連れ立ちて店の方より來る。）

老父。（紙子の袖無羽織。）ぢや油屋へ行つたら、今おらが言うたことを、とつくりと向ふの腑に落ちるやうに言ふのだぞよ。たとへ一貫でも金のうちさ。五匁、七匁にしたところで、丈量の間違は丈量の間違さ。

老母。（加右衞門に。）とつさん、用事は濟んだかえ。

老父。是れから千に石町まで往つて貰ふのさ。

老母。うんにや、その方で無えわさ。昨夜夜中に話した事さ。

老父。やかましいわえ。急く事あ無えわさ。

老母。何、善は急げと言うわよ。今話してしめえねえ。

老父。うるせえから默つてろと云ふのよ。

老母。とつさん、お前は知るめえが、おるさんにお目出度が有るよ。

老父。何だと。そりや耳よりだあ。

老母。だからさ、お前も氣を柔かにしねえと言ふのさ。おるさんがどうやら唯の體ぢや無えやうだわ

さ。

老父。ふむ。唯の體ぢやねえつて、はてね、病氣かの。

老母。お前も餘程氣の廻らねえ朴念仁だよ。

老父。お前は一そ廻り過ぎる鼠花火だわさ。おるんはどうしたと言ふのよ。

老母。懷姙のやうだと言ふのさ。

老父。(異常なる歡喜の有様にて。)そりや本まかの、本まかの。

老母。わし達もこの年になつて、やつと初孫の顏を見られるといふものさ。

老父。そりやほんまかの。ほんまかの。何より目出てえ事だあ。

老母。だからお前もへえ我を折んなさんしと言ふのさ。とつさん、私達あどうしたもんか、一緒になつてからも久しく子供が出來ねえで、いろいろと信心してやつと出來たのが千吉さ。初產が遲かつたから、孫の出來るのが待遠しかつたわさ。とつさん、お前もへえ樂をしな。一そ今日中にあの話もした方が可いよ。

老父。(考へ込む。)さうさなあ。

老母。ええ、じれつてえ爺さまだ。お前が言はなけりや、わしが口を切るぜ。

老父。まあ舍さねえ。急しねえ人だ。

老母。千、千、ちよつとお出で。おるさん、お前も來な。

これまで悟舟、おるん氣まり惡るさうに、後ろの方にてまじまじと偲て居る。

悟舟。何さ。おつ母さん。

老母。なあ、千、お前も知つてなさらうが……。

老父。まあ、ばあさん、お前は默て居な。(調子を改め)千。—おるんお前も來て、そこへ座つて良く聞いてな。—ばあさん、お前も立つてねえで、凝つとして座つて居なせえ。千。おるん。わしも何時かは

お前達に話さうと思つさた事だ。な、千、おれ達もへえ年が寄つた。おりや六十五で、ばあさんは六十四だ。何時死に神さまがやつて御座らうか分らねえ體さ。あらが親父さんはおらが二十二の時だから、ええと、かうと、五十五歳の時に、おらに身上を渡されたから、おらは十年丈餘計にこの家の番人をしたわけ合さ、何時かおらもこの家督を、お前達に渡して樂隱居になりてえと思つて居てもわりやあの通りちつとも尻が落ち付かねえで家に居たことは無しよ。總領がその通りだから、舍弟は舍弟で好い氣になりやがつて、野良をする。是ぢや息子に家督を讓つて上方の寺廻りでもしようつて言つたつて出來やしねえわの。そんなら一その事皆久離切つて勘當して、夫婦養子でもして他人に死水を取つて貰はうかと、なあばあさん、二人でそんな話を爲たこともあるのさ。

老母。　とつさん。そんな事はどうでも可いよ。

老父。　まあ、舊いことあ言はねえ積りだがの。是も元を正せば、汝がおるんに添はれねえと云ふことから、來て居るから、彌兵衛さんを說き伏せて、おるんも家の人になるやうになつたのさ。その上道樂しちや、親父さんの位牌にも、おるんの親達にも濟まねおわけさ。それでわれが身持が直るかと思へば却つて道樂が募るばかりぢやねえかよ。ばあさん、是れぢやいよいよ勘當だと決心を附けて見たが、われも總領ぢやあるし、ばあさんもいろいろと謝るし、また仲人が口を利くしするからわれへの見せしめに舍弟の源七を勘當したのさ。

悟舟うなだれて聽いて居る。おるん眼に一杯涙をためて居る。

老母。　とつさん。もうそんな舊いことあ言ひつこなしだよ。おるさん、勘忍しな。おお、おお、とつさんが、あまり氣が强えからなあ。

老父。　だからおらもへえ、舊いことあ言はねえ積りさ。何も舊い、過ぎ去つたことを持ち出して、お

互に氣まづい顔をするかも無えわさ。われも二十五にもなり分別も附かうつていふものだ。おらの心が分らねえでもあんめえし。可いか。われがしつかりして性根を入りけえりや、見様見まねで、源七だつて目が覺めらあな。何も腹から悄いぢやねえ、話にも云ふ通り、罪を惜んで人を惡まずだから、さうなりや、行々は今度の四日市の地面所をあれに遣つても可いのさ、なあ、千、さう云ふ譯合だから、われも腹を極めて掛つて貰はなけりや、ほんとに困るわな。

悟舟。（大に感激して。）とつさん、ほんとに濟まなかつたの。いろいろの御教訓でとくと合點が行きました。今思へば若氣の過でいろんな御心配をかけて濟みません。

おるん。（堪らなくなつて面を伏す。）

老母。まあ可い。へえ、可い。さあ、それで可いわさ。お前達の心柄が分ればそれで可いのよ。

老父。（打つて變りたる調子になり。）まあ、是丈言つてしまつておらの胸も晴ばれとした。どりや、それぢやあとで金を渡さう。三拾二兩と二分一厘入つて居るから、確に油屋に渡して受取を取つて來なよ。

老母。何だ、おるさん、お前は泣えて居なさるぢやねえか。えゝ、まあ、何て氣立の優しい子だ。お、泣くな、泣くな。臺所に饅頭があるから往つておあがり。今千が石町まで往つて來るから、歸つたら家の仲間で酒盛をしよう。それぢや千ちやん御苦勞だが一走り往つて來ておくれな。おるさん、お前はその間に臺所で仕度をして置きな。

老父。ぢや千、一寸來な、お持佛さんの下の押入に財布を入れて置いたから、も一度勘定しなをして見よう。（去る）

老母。千ちやん、羽織をしつかけて行きな。おるさん、羽織はどうしたえ。そして、今丁度お八つだ

から、—腹がすくと可けねえ—握飯でも食べて往きな。

悟舟。　おるん。それぢやまた羽織を出して置きなせえ。(去る。)

おるん。　畏しこまりました。(去る。)

老母。　(人々の後を見送りながら、嬉しさうな顔をして何か獨語をいふ。)　是れで源七の方が極まれや、わたしやどんなに嬉しいか知れやしないよ。(椽側に出て、庭の方へ呼びかける。)　左次さん、左次さん、お前さんもまあ休みなせえ。お陰さまで大ぶ庭が綺麗になつたの。

植木屋の聲。　へえ、有りたう御座えやす。

老母。　なあ、左次さん。今夜は雨が降るかの。

植木屋の聲。　さあ、でえぶ曇つてめえりやしたな。

老母。　雨にやしたくねえもんさ。見なせい、河の方ぢや豪勢なもんだぜ。

植木屋の聲。　ほんに氣が浮れ出しやすよ。今下の方から曾我の狂言て趣向で船がやつて來やすぜ。中々しやれた衆で御座えさあ。

老母。　成程、船が見えるね。賑な囃だよ。さあ、お前さんも下りてお茶でも飲みなせえ。

悟舟。　(再び入り來る。)　おつ母さん、土藏でとつさんが呼んで居なさるよ。

老母。　さうかな。どれ。(去る。)

悟舟。　(小さい聲で。)　おるさん、おるさん。はて居ねえのかな。(悟舟立ち去らむとする。ふと物聲に驚いて庭の方を向く。)

第四節

源七、木戸口よりそつと忍び込み、庭の袖垣の後ろに潜み咳拂す。著古したる棧留縞東綿の細入、素足に草履といふ見すぼらしき風をし、手拭を被つて居る。)

源七。　(微かな聲にて。)　あんちや。あんちや。あんちや。あんちや。

悟舟。　(訝しげに四邊を見廻はす。)

源七。　あんちや、あんちや。

悟舟。おや、まあ、誰だと思つた。源七かえ。

源七。しつ、あんちや、靜に。

悟舟。どうしたのだえ、お前は。

源七。（臆病に四邊を覗ひながら。）あんちや。今日は濟まないが、些とお願えに出やした。ちえ、見てくだつし、こんな體たらくさ。實あ、昨夜やぶれかぶれに帶までぶつて、粹でもねえ紙子姿さ。（きよときよとしながら。）えゝ、わけを話しや手間を取る。あんちや、膽斗あ要らねえ、是れだけで可い。是れだけで。（二本指を出す。）

悟舟。二分か、二分か。—だかなあ源七。

源七。（手水鉢の陰へ隱れながら。）二兩だ。二兩だ。たつた二兩だ。

おるん登場。

おるん。あのう。お茶漬が出來ました。

悟舟。今直ぐ行く。金盥へお湯を取つて置いておくれ。

おるん。それぢや、お早く。（去る。）

悟舟。（金を紙に包みて。）そおれ、源七。

源七。（手水鉢の陰から顏を出し、緣側の上の紙包を見ながら。）二分ぢやねえ、二兩だ。たつた二兩だ。

悟舟。馬鹿な、二兩はやられねえ。そりやな源七、われが心を入れけえて、しやんとしたなりで、來りや、二兩は愚、百兩千兩でもやるわさ。家藏に地所も附けてやるわ。勿體ねえ、とつさん、かゝ樣がえらい心配だぞよ。

源七。分つた、分つた。だが今日二兩なけりや。心を入れけえるどころか、高飛をせざあならねえといふわけだあ。

悟舟。われが心を入れけえて歸つてくれれば、石町の方へ店も出してやるといふのだ。

源七。聞いた、聞いた。それならその四分一でも可いから、今が今現金でくんな。

悟舟。馬鹿を言ふな。

源七。あんちや、今日は、おとなしく二兩出してくだつし。さうすりや好い事を聞かしてやらあ。お前の喜ぶことを。

悟舟。ほんに、何ていふ風體だ。案山子が暴雨にあつたつて、そんなぢや無えわな。なあ源七、物にや切り上げどきがある。

源七。それだから、世間が笑ふのさ。

悟舟。何だと。

源七。世間が惡口を言ふのだわ。

悟舟。惡口だと。何の惡口さ。

源七。お前のさ。

悟舟。ふむ、おれのだと。

源七。田島屋の悟舟は風上に置けねえ男だ。

悟舟。何だと誰が言うた。

源七。さあ、それを言ふから二兩くだつし。

悟舟。（懐中から小判二兩出して源七にやる。）さあ誰が言うた。

源七。あんちや、濟まねえが、も一兩くんな。

悟舟。いんねえ、早く言ひな。

源七。實あな、あんちや、今日は大事の言傳をも持つて來てやつたのだから十兩でも安いぜ。なあ、あんちや、だから五兩くんな。今日五兩無えと浮ばれねえわけがあるのさ。ほんとうだ。拜むぜ。この通り拜むわな。——あんちや、それで世間ぢやお前のことで大きな評判を立てゝ居るぜ。

悟舟。大きい評判だと。馬鹿な。おらは何も評判を立てられるわけやあ無え。

源七。少將のことでもかえ。

悟舟。（少し不安心さうに。）少將たあ何だ。

源七。大磯の少將さ。花鶴のことさ。

悟舟。（ぎくつとする。）花鶴だと。

源七。へえ、あんちや知らねえのかん。扇屋の花鶴のことさ。

（奥にて人の呼ぶ聲。）

悟舟。（奥の方を見ながら縁側に出る。）あい、あい、今直ぐ行くわな。大きい騒ぎやうだ。——源七何だと、も一遍言つて見ろ。

源七。それだから田鶴屋の悟舟は情知らずのうつけ者だと人が笑ふのさ。

悟舟。情知らずだと。ええい、何を抜かすのだ。

源七。扇屋の花鶴が上方の大盡に引かされるといふことを聞かねえのかえ。

悟舟。（色を變へる。）

源七。それだから、五兩くだつし。

悟舟。うるせえ奴だ。（と言ひながら自分の紙入を渡す。）

源七。あんちや、それぢや借りとくよ。その代り之をやらあ。（と言ひながら、女の文を悟舟に渡す。）

悟舟。（手早くそれを受取り、始めの一二行を讀む。内にて人の聲。）ええい、今行くぞい。今行くぞい。

源七。田島屋の悟舟は、あれほどの花鶴をまんまと人手に渡すのは、粋も情も辨へぬ男ぢやげなと言つてらあな。大方起請で紙よりを拵へて燈盞皿の心にして、海底苔や襁褓の世話で日を送つてゐるだらうだとさ。ほんに口さがねえ世間だわさ。——今日は濱口屋の樂さんだの、新堀の藤さんだのが、取巻きを連れて大浮れさ。兎角金は持ちてえもんだなあ。——あんちや、さよなら、また來るぜ。（と云ふ臺辭を殘して、木戸口より立ち去る。）

悟舟。（惘然としてゐる。それから立ち上つて、殘念さうな顏をして遠く、河の方を見詰めて居る。）

川の方の囃が段々賑かになり、人の心を浮き立たせて來る。

加右衛門奥から出て來る。

老父。さあ、千吉や、何をぐづぐづ爲て居るのだえ大丈夫かえ、金は持つたかえ。

悟舟。今直ぐ出かける所です。（懐の帛紗を見せる。）

老父。今誰か來はしなかつたかの。

悟舟。いや誰も。

老父。それでも人の話聲が聞えたやうだつたがの。

悟舟。ありや植木屋です。

老父。おや、さうかの、今石段を下つて行くのは、ありや誰だえ。源によく似た男だ。

悟舟。どれな。さてな。

老父。おや立ち止まつて、懐ろから財布を出して見て居るぞよ。

悟舟。とつさんは鳥目(とりめ)だから、さう見えるのさ。あれやつぱり、植木屋でさあ。

老父。さうかの。おらは年は寄つても眼(め)は確かな積りだがの。

おるん。（畳んだ羽織を持つて出て來る。） あのう、もしえ、早く御飯をおわがんな。

悟舟。どりや。

三人打ち連れ奥へ去る。

第五節

暗く素舞臺。

この間後ろにて極めて美しき聲にて獨吟を聞かせる。それから崩れて、賑なる出のさわぎになり、それが突然やむと、ありや、ありや、どつけいの聲よろしくあつて、後ろの水門の方より三人の男が出て來る。濱口屋樂右衞門（渾名小林朝比奈、鶴の丸の繡衣裳、丸ぐけ。）酒屋藤兵衞（同、十郎祐成、千鳥の長上下の袴をまくる、小さ刀。）大阪屋半七（同、五郎時致蝶の長上下、小さ刀、同じく袴をまくる。）孰れも曾我物語のおのが渾名に因みたる異裝をなし、顔を塗つて居る。皆々花見の船より上り來りたるところなり。

三人萱葺門の所に達して、互に先を讓り合ふ。

五郎。朝比奈どん、お前先(めえさき)へ行きな。

朝比奈。おらいやだ。お前こそ先(さき)へ行きな。

五郎。おらもいやだ。

朝比奈。そんなら十郎に往つて貰ふべえ。

十郎。朝比奈が先(さき)に立つなあ昔(むかし)から極まつてるわな。お前が引立役だもの。

朝比奈。ええい、やかましい。おれが行かあ。（聲色(こわいろ)にて）〽是なる二人(ふたり)は祐經殿へ此朝比奈が豫ねてより頼んでここへ連れて來たのだ。

三人前栽の内に入る。

朝比奈。物もう、物もう案内もう。（小さい聲で。）肝腎の祐經どんは今日は留守かの。おるさんも居ねえやうだが、ちと具合が惡いて。

おるん。（奥から出て來てちよつと、たじろく。）

五郎。（小さい聲にて。）すこし氣の利かねえ虎御前だの。

朝比奈。おるさん、わしでさあ。お久し振りで御座えす。濱口屋で御座えやす。

十郎。わつちは、十郎……新堀の藤兵衛で御座す。

五郎。こちらは、大阪屋で御座ります。てえへん御無沙汰つかまつりました。

おるん。まあ、皆さん、是れはお揃ひで好うこそ。大きに御無沙汰を致しました。

朝比奈。今日は同勢にて聊か花見と洒落れ込みやして、丁度お宅の下を通りやしたからお寄り申しやした。

おるん。今朝ほどはまた態々御使を有り難う御座います。あのう、家が晝前から用事で出て居りましたもので御座いますから、つひお伺ひすることも出來ませんで御座いました。

朝比奈。時に若旦那は御宅で御座えすかえ。

おるん。いえ……いえ、あの……。

朝比奈。お留守かの。

おるん。いえ、あの……。

朝比奈。では御宅かの。

おるん。いえ、あの……只今ちよつと出かけるところで御座います。

朝比奈。（不興氣に。）是は惡い所へ參りやした。宜しく言うてくだせえ。どうりや十郎。歸らうか。

十郎。合點だ。

五郎。（小さい聲にて聲色ばり。）〽寶の山へ入りながら、手を空しく歸るのか兄者人。

十郎。（同じく。）〽弟

悟舟奥より來る。

悟舟。何ぢや、何ぢや、何ぢや、騒々しい事ぢや。(と言ひながら座敷へ出てびつくりし。) ほい〳〵、是れは。

朝比奈。小林朝比奈。

十郎。曾我十郎祐成。

五郎。同じ五郎時致で御座えす。

悟舟。ええ、ま、何かと思つたら濱口屋さんに藤さんに半七さんか。是れはこれはお珍しい。

五郎。田島屋の若旦那、お久しぶりで御座えす。

悟舟。是は皆さん、今日は豪勢な趣向だの。—まあ上らつし。おるん、お茶を持つて來な。

おるん。はい。(去る。)

朝比奈。(忌々しげなる眼付でおるんを見送つて。) いや、いや此處で、結構で御座えす。(椽側に腰をかけ、四邊を見廻はしながら。) 萱葺門に春曙庵、浮世離れた二人住み、是ぢや、世間の取沙汰の耳に入らねえのも無理はないわの。

悟舟。何をお言ひだ。

朝比奈。おるさんは、赤さんは何時生れるかの。

悟舟。おきやあがれ。

五郎。もう襁褓の仕度も爲ぢやなるまいがの。なあ、千さん、世の中ぁ變れば變るもんだの。

十郎。昨日の淵は今日の瀬となるといふ譬さ。

五郎。もう少將のことなざあ忘れたらうの。

悟舟。(好奇心動く。)

朝比奈。(それを尻眼に掛けながら。) 少將と言へば大評判さ。駒形は知つてかの。

悟舟。何さ。

朝比奈。最初から言はねえぢや分らねえ。まづ昨夜やあ、またしても何時もの大騒だつたと思ひねえ。抑もの發端はと言ふと、おらが新川の不通庵へ往つたのが間違えさ。五郎、十郎にそれから、梶原さ。後から葛西までも落合つたのさ。

五郎。から五郎がまづ序開きから筋を話さう。そこ

で梶原は丁贔負だからあつちに爲ろと言ふのだが、葛西が言ふにやあ、それよりや大磯にしろ。大磯は丁と逢つていけぞんざい大酒を飲むにや好い所さと言ふから、それで到頭相場が極つて、おれが畑へ種蒔かせに花水橋の鎌倉屋から乘り出して大川へ出ると、船頭が、もし何處へと聞くわさ。祐坊が右の方と言ふと、おれが勸めるには、雪の下の舞鶴屋のおまると云ふやつがとんだ、だんごく面白くつて出しものも可いから、今日はちつと河岸を變へて遊びねえと言ふと、皆もそれで可からうと一決して取楫となつたわけさ。まづ見返しへ上ると、おれは、お馴染と云ふもんだから、かの娘分のおまるが出てとつ付き、おや五郎さんお久しぶりだねえ、どなたも能ふお出でなせえした。おてんさんは、隣に出て居なせえすから借りにやりやせう。それから、朝さんはお虎が馴染だからそれも聞きにやりやせう。も一人の御方どうなせえやすえと言ふから、祐ぼうはこの里を知らねえから、少將がよからうと言ふと、おまるが少將たあ、あの花鶴のことかえ、それなら、かくかくの通りだといふので初めてそんな話を聞いたのさ。

朝比奈。 そこでおれも喫驚して、さうか、そりや悟舟も知るめえ、可哀さうに敎へてやらうと言へば、おまるが、朝さん、お舍きなせ、悟舟さんほど情の無え人は無え。あれほどの花鶴を人に取られて知らねえ顏をしてゐる。とそりやこの里で大きい評判さと言ふから、おれも乙な氣を出して、そりや悟舟がかわえさうだ。ありや何にも知らねえだあ。幸え明日あ皆で船を出すから、その時や悟舟をも誘つて來ると言ふと、おまるが、ほんにさうなら花鶴さんも喜びやせう。今朝直ぐ便りをしてやりやせうと言ふことで治まりが付いて、何でも美しいところを三まひ、揃へろと云ふことにわつ

ちが言つて、働いて來やせうとおまるが階子段を下りるのを、これ、勘吉と富次と富秀と勘五と、鬼入と市と見世太夫をと言ふを、若し無くばえと言ふならば誰をでもと聞かせにやつて、出來たらば少將をもと言ふとおまるが行つて大勢連れて來てそれから何時に無え騒ぎやうよ。

五郎。それから葛西と梶原と鮎さんは泊まつたが朝さんとおいら二人は歸つて、今日また新川で落ち合はうと云ふ相談でこの仕末さ。

鮎成。それでおいらは泊つたが、梶原は名代のしんぞうなれば紙雛を抱いた氣で好い氣になつてゐるがこつちやほんに飛んだ目に會つたわよ。

朝比奈。おきやがれ。のう鮎成、時に悟舟へ言傳があつたぢやねえか。

鮎成。さうよ。今朝、おいらが顔を洗つてゐると扇屋の便だつゝ云つて、これを悟舟さんに届けておくんなせえといつて文を寄越したから見るとこせん紙へ紅筆で花鶴まゐる悟舟さまえとあるぢやねえか。(懐ろから手紙を出して。)さあ、是さ、之を見ねえ。

五郎。少將の手は美しいの。

朝比奈。悟舟早くあけて見ねえ。

悟舟。うんねえ、おらは知らねえ。

朝比奈。それならおいらが開いても可いか。

悟舟。やあ、待ちねえ。きつい痛めやうだの。

朝比奈。どれ鮎どん、見せな。(手紙を取る。)

悟舟。まあ、休しな。(と手紙を奪ふ。一部分切れる。)

朝比奈。(あとの方を讀む。)何だか小せえ字で書いてあるぞ「追つて……「も一度……」何だと……「候へば御察し下されかし。またいろいろ御話申し上げたき事御座候へども、思へば思へば、いつまた再びお目もじかなひ候べき、覺束なく、悲しきかぎりに存じまゐらせ候。」悟舟おぬしも些と罪が深いぜ。

五郎。（讀み續ける。）へぜひぜひあすのうちに御やかたの首尾遊ばし候て必ずかならず御入り下されたく、これのみ偏へに神かけて祈り上げまゐらせ候。

監物。今夜か明日は大阪の衆が迎へに來ると言つたから定めしおれてゐることだらう。

悟舟。（自分の持つた手紙の切端を讀んでゐる。）

朝比奈。駒形、可哀さうだから一遍會つてやんな。首尾はおいらが附けて置くから後で船へ來なせえ。

悟舟。お主たちや、今夜また雪の下へ行くのか。

朝比奈。まづまあさう云ふとこが相場だ。

五郎。おいらも義理に絡まつて、折角これまで筋を運んでやつたのだから、無情えことを言はねえで、一緒に來さつし。

悟舟。（心動く。）

朝比奈。どうりや、五郎。

五郎。朝さん、何だえ。

朝比奈。空模様が面白くねえぞ。出懸けるとしようかの。

十郎。善い聲をさせて居るぜ。どこの船だらうの。

五郎。丸に酸漿草だあ。好い氣になつて居るぜ。

朝比奈。お丶、見えるぜ、見えるぜ。どうだえ、島ちりめんの揃えに帶が厚板だあ。野暮おやねえぜ。大方平清からでも上つて來たのだらう。それとも川長か。

五郎。善い日に生れて來た手合えだらう。持ちてえもなあ金さな。

十郎。聞きねえ、流行のめりやすだぜ。

（遠くにて船の唄。「なま中まみえ物思ふ。たとひせかれて程ふるとも縁と時節の末を待つ。……」）

五郎。兎角めりやすと云ふやつが浮氣にするやつさ。ええい、何やらむか／＼と謀反氣が涌いて來たわさ。どうりや、おいらも行くべえ。駒形は一體行かねえのか。

悟舟。（感深きものの如く、遠くの唄聲に聞き惚れて居る。）さあ。

五郎。さあ。行くのか、行かねえのか。

悟舟。（不決断に。）さあ、待つせえ。さう急かずとも可いわさ。

五郎。割前の心配なら無用だぜ。

悟舟。（懐ろを打つて。）憚りながら、馬鹿にしてくんなさんな。お前たちと倶一にされちやお蔭が無えわさ。

五郎。それなら一緒に行くかの。

悟舟。今日は交際の出來兼ねるわけがあるのさ。

五郎。家の顔世御前にあやかりてえのだらう。ちえ、流行に遅れた男だあ。

奥にて人の聲する。

老母の聲。千ちやんや。千ちやんや。

間

おるん出で來る。

おるん。（便りなげに笑顔をして。）あのう、もしえ。

悟舟。何だ。

おるん。とつさんが、呼んで居ります。

悟舟。今行くから、羽織を持つて來な。

おるん。はい。（去る。）

五郎。（朝比奈顔を見合はせる。）

五郎。（むつとして。）それぢや、兄ぢや人。出懸けるとせうぜ。

十郎。（五郎を目で制して、小さい聲で。）〽あゝ、これ、立ち騒いで尾籠次第。急いてはことに大事の身、唯何事も兄に任して。

五郎。〽でも。

十郎。〽じつと辛抱しやいのう。

五郎。〽いやだ、いやだ。堪忍袋の緒が切れた。

五郎立ちかける。

朝比奈。（五郎の腰を捕へ。）〽やれ、待て、兄い。早まるな。悪いことは言はねえから、うんと言つて留つてくれ。一番留つてくんさるなら、有りがた茄子の初夢だあもさ。

この間に彼方の唄聲は最も近くなり、それより段々と遠くなる。

唄の續き。〽はてなんとせう。たがひの心うち解けて、うはべは解けぬ五大力。さはさりながら更くるいろなきおん風情、やがてあほぞえ。語ろぞえ。惜しき筆とめ候かしく。

悟舟。（悄然と歌聲に聞きほれて居る。）おゝ、あの歌は。

朝比奈。言はずと知れた五大力。

悟舟。（或る決心の表情をして。）朝さん聞いたか、歌の文句ぢやなけれども、やがてあほぞえ。

朝比奈。語ろぞえ。えへん。

奥の方にて人のけはえ。

朝比奈。祐さん、友切丸が手に入つたから早く行かう。

十郎。どりや、それなら。五郎さん。

五郎。でも、寶の山へ入りながら手を空しく歸るのか、兄ぢや人。

十郎。ま、可いからさ。

五郎。ちえ、いまいましい。

朝比奈。（或ゝ目差しをして。）〽それぢや、悟舟。

悟舟。（懐から帛紗を出して見せて、小聲にて。）〽今は叶はぬ時節を待て。

五郎。〽時節を待てとは卑怯な祐經。

悟舟。〽いいや、卑怯にあらず、皐月下旬富士の御狩の惣奉行、役目終らぬその内は……。

五郎。〽むむ。

朝比奈。（思ひ入れあつて。）ああ、これ、時節を待てよと祐經どのの。

十郎。〽事を分けたるあの御詞。

朝比奈。〽もう一番おつ堪えろ。

おるん悟舟の羽織を持つて來る。

朝比奈。それぢや、おるさん、お騒申しました。さよなら、また參えりやす。

十郎。達者でおかせぎなせんやし。

朝比奈。〽それぢや悟舟。

悟舟。へ言ふにや及ぶ。

朝比奈。へまづ夫れまでは、

悟舟。へ祐成、時致。

十郎。へ工藤左衛門。

五郎十郎。へ祐經殿。

悟舟。へ裾野で逢はふ。さらば。

皆々。へさらば。

三人の男狂言ぶりにて木戸口より木門の方へ去る。

第六節

おるん。（悟舟に羽織を着せかける。）さあ羽織をお着な。

悟舟。（浮の空にて羽織を着る。）

加右衛門、おかよ、横の隙間より「そ」の方を覗ひ、まだ座敷へは入らずに話し合ふ。

老母。ほんにいけ好かない人達ぢや。

老父。とんちきな奴等さ。

老母。それでも家の千吉は安心さ。あれがほんとに雨降つて地固まると言ふのさ。

老父。賢いものには道樂も藥になることがある。どうぢや、皆はもう去つたかの。

老母。まだそこに居ませうよ。

後方にてまたも美しき吟聲。

悟舟。ええい、堪らぬ。（縁側の方へ出る。）

おるん。さうきつく引いては羽織が切れますよ。

悟舟。今夜大坂の大盡が……。堪まらぬ、堪まらぬ。

おるん。何がそんなに堪まらぬとお言ひだえ。

悟舟。（氣が付いて。）あの歌の節が面白うてたまらぬと言ふのさ。

おるん。まあ、あの衆たちが、まだ河岸からこつちを招いて居ますよ。

悟舟。（獨語）ええい、構ふことはない。（片足たびはだしとなる。）

おるん。まあ、旦那え。

悟舟。もう堪らぬ。堪らぬ。（無理に庭に下りしため、羽織

はおるんの手に残る。その時袂よりさきの文落ちる。惜舟足袋はだしにて、[illegible]の人々を追ひて、水門を下ってゆく。)

おるん。ええ、まあ家の人はどうしたことぞい。

加右衛門、おかよ出て来る。

老母。(周章して。)千ちやんや、千ちやんや。

老父。あのとんちきめ。どうしてくれやう。

おるん。(文を開き見て泣き出す。)まあ、家の人としたことが。(大声に啜り泣く。)

老父。(縁側に爪立しながら。)ええい、忌々しい。船に乗り居るわい。

老母。(おろおろしながら、大声にて。)千吉やあい。千吉やあい。

老父。大事の金を持つたままで行きおるな。(庭下駄を投せとも見出さず。つひ自分も足袋はだしとなる。)ええい、やるまいぞ、やるまいぞ。(去る。)

老母。とつさんや。とつさんや。

おるん。(大声に泣きながら。)くやしい、くやしい。

老母。(おるんをかばひながら。)ええ、くやしかろ、尤もぢや。尤もぢや。

後方、賑かに、滑稽なる囃一しきりあつて　幕。



紅葛

第一

泉　鏡　花

「はつ。」

ひと息怯えた返事して、運轉手は自働車を飜然と下りると、崖路の暗闇の中を一筋白群で流した、もの凄い光に射られて、蹟いて辷るが如く、慌しく背後を透かした。

其處へ、恰も大地獄から、硫黄の煙で吹上げられた幽靈のやうに、ふら〳〵と顯はれた、肩のさみしい影がある。

崖に生へた雑樹の根に、ぶら下りでもしたかと思ふ、腰はふら着くが、ひた〳〵と忙しい跫音、……路を上りざまに驅寄つた。

「何だ、何か用か、何ですか。」と運轉手は急込むで言ふ。

「助けて下さい、助けて下さい。」

然矣、此の聲の爲に、恁る夜の箱根の中を唯一人乘つて打つ車中の婦人が、

電光よりも眞白な指で、激しく硝子越に其の運轉手の背を敲いて、車の進行を停めたのであつた。

「助けて。」――

助けて、と云ふ聲よりも、婦人は彼を挽倒したと思つたらう。黒雲低き片岨の樹の根から、鳥が立つやうに衝と出て、殆ど自働車に縋着からうとしたのであるから……云ふまでもなく颯と切る轍とゝもに、恰もものゝ怪の消ゆるが如く取殘されて背後に消えたが。

「馬鹿野郎！」

運轉手は、峯から哄と、石も雨も卷いて落す風と一所に、罵る聲を投げ飛ばして、一捻り昂然と胸を反らしつゝ驅出す端を、颯と窓を打つて引留めたのであつた。……

「願ひます。」と切呼吸で、聲もやゝ震へたが、其の風體は、と見ると、縞柄は分らない、何處のか旅宿の貸廣袖めいたのに、青い浴衣を襲ねたのが吹降の雨に、した〳〵と濡被、で跣足と云ふので。

運轉手が一目見ると、

「何、何を助けろだい。」ともう一息、急込むだのは無理もない。

が、丁ど其の時、上り坂を崖へ寄つた、左の窓が、音もしないでスッと下りた。此の窓の開いたのは眞黒な大な廂が、四角な眼を睜いた風情である。そして、其處から覗いたのは、半輪の月かと思ふ、細面に鼻筋の透つて白菊のやうなのが、薄いショールを深々と掛けて、俯向く狀に、頤を襟に埋めた若い婦人。トきらりと電光が閃いて射て消えたのに、悽然とするほど美しい。

鈴を振るやうな聲が、風を拂つて、

「何うなすつたんです。」
「御婦人。」
と唯呼ぶ途端に、巓を破る雷の響。
これが四ッ五つめの激しいのであつたと聞く。
霜月の二十日前後、山は早や錦葉と云ふのに、――谿河に架けた橋に近い湯宿に居ても、雷の嫌ひなのが、あの、ごろ／＼と陰に響く車の音を、餘り氣にしないで可くらゐ、箱根は夏も雷鳴が少いと云ふのに、――其の夜は雨に風さへ激しく、殆ど天變であつたと言ふ。
天變と云へば人妖に庶幾からう。……江府津の會社が自働車をはじめてから、こんな時間に唯一人は……滊車を出ると、然も馴れた體に、澄まして、づゝと來て、
「宮の下まで。」
まだしも湯本と云へばだのに。

第　二

會社員が恭しく、
「御一名で？」
「はあ。」
一寸した信玄袋を持つたなりで、其の美しいのが、誰も居ず、すらりと彳む。
――いゝなさ參らう――と云ふ――古釘で祝ひましよ、と答ふる。手石浦の物語を思出す……風もいゝなさの、

時ならず生暖く、折から大粒なのが、ぽつ〳〵と來た頃であつた。　沖には難波船でもありさうな、浪は白く、樹は黒く、風の中空に鳴合ふ時。

薄紅梅の地に一重櫻の咲亂れた長襦袢の褄を、締めて捌いたと見ると、自働車の裡に姿を消した。

此處からは近田あらう、箱根路の眞中へ、雨を切つて、黒雲に乗つて行く……と思ふと、旅客に馴れた停車場の驛員等も怪しい音と凄い燈の、唸を生して、並木へ飛ぶのを、風に吹かれて見送つた。

剩へ、夜目に莫大な海月の泳ぐ暴風雨の山の、峯と峯とが、頂の石を摺り合はせて、火を切る如く、チカ〳〵と電光が頻であるから。

小田原はまだ宵なりしが、生蕎麥の行燈も、廓の電燈も、町の柳も、白壁も、たゞ波の如く搖るゝ中を、鐵の船に車輪の舞ふ通魔か、と軌つて通つて、風祭から湯本に行く間、渦卷く黒雲の双子を前途に、太閤の一夜城が高く鯨の背を浮かせて、海が一枚、青く颯と翻るのが窓に映るとゝもに、はじめて雷鳴が轟いのであつた。

「助けて下さい。」

其の事の起つたのは、塔の澤に、早や遠く、大平臺もまだ遙かな、上りの中途の、崖の樹の根の、破れた籬の中だつた。

「何うなさいました。」

「貴女、貴女。」と頰被りの腰を折る。

婦人は其の若才の怪しい風采を視て、一寸言葉を途切らしたが、窓に頰杖をせねばかり電光の又閃め

く影に、沈んだ落着いた様子である。

運轉手は腕を組んで、斜に肩を聳かす。

「お見掛け申してお願です、お願ひをします。」

「何うなすつたい？」

「御車にお乘せ下さい。」

と差寄せて面を上げた時、頬被をかなぐり取る、其の若才を熟と視る……婦人の瞳は電光に、漆なす山の形さへ大きく描かるゝやうであつた。

「お乘んなさいまし。」

「御免を！」

と忽ち威勢の可い事。

「お差支えございませんので？」

猶豫ひつゝ戸を開く、運轉手の注意には答へないで、

「宮の下へ行ぐんです、構ひませんか。」

「えゝ、地獄へでも。」と言つた。

山中には人も知つた、大湧谷、小湧谷、硫黄の地獄の名どころかある。其があるからまだしもであらう。蒼白い面影が裡へすつと隱れるに連れて、若才の頭は觔斗返る如く、足を宙に飛込むのを見て、激しい雷鳴とゝもに、運轉手は、フッと唾吐く如く禁壓の息を風のまゝに吹散らした。

「此方へお掛けなさいましな。」

若才が進路を逆に、向ふの隅へ小さく成るのを見て、婦人は姿を細うしつゝ、颯と薫る其の片袖を敷へたのである。

「決して、何うぞ。」

「否、一人だと腰が浮いて刎上げられさうで危くッて不可いの、丁ど可いのよ。」

と言も解けつゝ、

「附着いて居て頂戴な。」

聲が清く言ふ。

運轉手は、體を楔に、加しと乘つて、把手に手を掛けた。峯と峯とが谺を籠めて、風雨に雷火を取交はす……輝く草樹は白き骨の縺るゝ如く、谿川の暗闇は血潮の走る、暴風雨の山を、音のない大車輪は軋り行く。………

山姥の首途を送るか、さすがに燈火の店を開け連ねた、一路傍に、籬に、軒に、紅い花を撰つて植えた、大平臺を驅拔ける時は、ダリヤ、サルビヤの流るゝ紅が、爀と照つて、珊瑚の枝の亂るゝ中へ、藍碧の雨の淵の如く注ぐを視た。

第　三

「其の男は何うした。」

「まあ其の人には、私ども吃驚いてしまいましてでございますよ。……殿様、……自働車が入りましたから、

此方様がお着き遊ばした……」

宮の下、新屋の女中お民と云ふ、銀杏返しの膨りした中年増が、敷居越に膝を着いて、（此方様。）と云ふ、一人旅……箱根の夜道も旅である……若い婦人は、廻椽を硝子戸で取廻ました廣室の眞中に置いた卓子の前に、金茶の地に、花白く、蔓青く、葉を黒で鐵扇葛を刺繍した、恰も燻んだ黄金に、銀と烏金で象嵌をしたやうに見える、幽に輝く丸帯を、薄くお太鼓に占めた細腰。絹蒲團に無雑作に預けたが、黒地に雪輪崩しの大島お召、年の若さに派手な柄も、撫肩の姿をしめて、褄りして、八口を透く其の薄紅梅の、枝ならぬ花の袖に、はら〳〵と降積るか、と撓弱に見えて、嫋娜である。片肱を輕く卓子に掛けて、女中に見向いた顔は、花やかな電燈の下に、やゝ……蒼みを帯びた。

斜に向合つて、書架兼帯の白木の置棚を背にして、洋裝した榮花物語を讀さしたまゝ、頬杖ついた三十四五の、品よく眉の秀てたのか、溫泉の夜さり廣袖ともなく、平御召に卷着帯で、寛ぎながら威儀の正しい……即ち（殿様。）と呼はれたのである。

女中は支いた手を膝へ引き、

「……それお着き、と申しまして、何でございますよ。私ども番頭たち、ばら〳〵玄關へ、揃つてお出迎ひをいたしますと、丁どあの篠を突くとか申します大雨に又激しい電光でございまして、宛然あの（千筋の瀧。）が一齊に眞蒼に燃上りましたやうな中へ、（此方様。）がまぶしいやうに、お美しくお立出で遊ばします。……」

實際それは冷艶なものであつた。

「難有う。」と婦人は、やゝさました體に、一寸會釋しつゝ微笑んで云ふ。

「否、眞個でございます。然ういたしますと、殿様、其の直ぐ後へ、あの方でございませう。一所に鳴りました雷様の音よりか、皆が吃驚したではございませんか。轉がるやうに玄關へお驅込みなすつたと思ふと――何處か人の居る處はないか、大勢人の居る處はないか――ッて、私どもが、其處に居ります頭の上から、がらん堂のやうに、家中を胸して、突然、帳場前を横飛に、あの、門の傍に、……内へ入ります取着きに、駕籠屋ですの、車夫でございますの、出入のものゝ部屋がございます。」

「あゝ。」

と（殿。）は頷いて、をかしく聞惚れたらしく、頤に手を組添へる。

「ちやうど、篝のやうに、火鉢に火を焚いて居りました、其處へ驅込んで、駕籠舁たちの胡座の間へ、突伏してお了ひなすつたんでございます。すぐに、あゝ、雷様が嫌ひなんだ、と氣が着きましてございますけれども、どんなに驚きましてございませう。――何處か人の居る處はないか――もう、目が据つて、顔の色つたらないんでございますもの。」

「然うかい、變つてるね。」

と輕く卓子を指で敲いて、

「いや、變つてると云つては濟まないが、然うまで不自由でも氣の毒だね。きぬちやん。」

と婦人を見て、

「お前も餘り好きな方ではなかつたつけ。」

「でも、まさか。私は普通ですわ。」

「それだが顔の色が大相惡いよ。蒼いくらゐだよ。」

「夜汽車にめした上、山の中を、お一人で暴風雨にお逢ひ遊ばして、お身體に觸りましたのではございませんか。」

顔の曇りは薄舞の煙の香……黄金煙管を細く吸つて、

「否。」

第四

「唯、電光で顔を見たばかり、見ず知らずの人を、助けてくれ、と云つたんで自働車の中へ入れたは可いや。大分痩我慢の女俠だつけ……實は可恐かつたんだらう。何うかされやしないかと思つて。」

「何うするものですか、……又何うかしやうたつてさせやしないわ。第一そんな人相ぢやないんですもの、……でも凄かつたわ。眞蒼に成つて居て、雷樣が可恐いんだつて、事は、一目で知れてよ。……」

「貴女、お寒いのでございませんか。ばつたり雷樣が止みますと、急に冷く成つて參りましてございますから。……眞個お色艶が。」

「實際、蒼い。」

「大體が黒い處へ、電光の鍍金をかけた所爲でしやうよ。……崖椽の草と一所に身體へ浸透るほど光りましたもの。」

と空色鼠に藤の縫ある半襟に、掌を外らして當てゝ、俯向いて胸を見て、

「遙々推掛けて參つたのが、こんなので相濟みません。これでも湯に入れば玉のやうですつてさ。」
「ほんに、早速お召し遊ばしては如何でございます。お心持がさつはりとなさいましやう。」
「入つておいで。」
と卓子に腕を組直して、
「其の内に御馳走が整然と出來ます。」
「ですが、いまの人が來ます時、私が居ないぢや跋を惡かるでしやうから、お兄さんにお引合はせをして置いて、それからの事にしますわ。」
と言ふ、優しさが瞼に籠る。
「大きに然うだね。お民さん、……何うだい。」
「見て參りませう。松がお迎へに行きましたが、何うなさいました知ら。」
立たうとした時、廊下へ跫音。雷の後は、がらんとして一層響く。障子へ半身で、お民が覗いて、
「あゝ、お見えに成りました。貴方、此方。」
「これは、御苦勞です。」
と件の若才、前へ立つた島田髷に入交る、と其の女は、惡く濟まして一つお辭義をしながら、鳥が立つてばた／＼と引返す、笑を忍んで居たらしい。
「さあ、貴方、もうお待兼ねで入らつしやいますよ。」
此を聞くと然も附穗を得たらしく、

「それは何うも。」と元氣よく云つた。と向つて衣桁に掛つた、婦人の羽織を見て、其にも挨拶をしたさうに、目を配りつゝ襖際へ。

「失禮。」と、面を向ける。其處に、二人青疊に繪に描いたやうな對座を見て、不意を喰つたやうな、又心得たやうな、孰方附かずの敷居の上。廣袖の膝を眞四角に座る。

「申譯のない事をいたしました。」

「何ですね、言譯なんかなすつて。」

と玉が軌む、居座が一寸動いて、

「あの、此の方なんですよ。」と言ふ。

「はじめまして、途中御難儀をなすつたさうですね—誰しも嫌はあるものです。お察し申しますよ。しかし、最う此處へ入らつしやれば御安心です。それに、可鹽梅に、すつかり鎭まりました。」

若才は心から頭を下げた。

「お言葉で汗が出ます。生命とも何とも、夢中で御不禮をいたしました。眞個お庇で助りました。ですが、申譯がありません。」

「あゝ、お堅い。こんな場所で然う御慇懃では困ります。—お互に遠慮なしに……などと云つて、高い處で失禮ですね。さあ、づゝと寄つて、貴方もお敷き下さいませんか。」

座蒲團は、卓子に洲濱形の、彼のは其の洲に直してあつた。

「さあ、でないと窮屈で困ります。裸體でお附合をする處ですから。」

ふと婦人を見て莞爾して、

「おゝ、此に誰方かとおいでだつけ。」

「構ひませんわ。」

第五

女中が附いて、二人温泉に行く……跫音の通ふのを耳を澄まして聞くやうだつた、また其の時まで、席をも進めないで、畏つた此の若才の旅藝人、秋山錦介、と、それは彼が自から名告つた。

其の名告つた時、次の室に鐵瓶の下へ炭を繼いで居た女中が、旅藝人と聞くと、振向いて、濃い眉毛を額へ離した。

「何をなさいます。」

殿か問ふと、……衣紋に、白いハート形の兩の腕で、艶々と前髮を斜に支えて、瞳を大く、打傾いて美人が見た時。若才は猶豫ひつゝ俯向いて、唯苦笑したのである。

「琵琶ですか。」

此の問は當を得たものと云つて可い。怪しげな廣袖に、襯衣を着込むで、紺木綿を尻帶びにして居るのであるから。

「そんな! そんな名のついた藝ぢやありません。さのさ節と阿保陀羅經です。」

女中が呆れた事。

「結構よ、御酒の時に聞かして下さい。……ぢや、お兄さん。……お湯へ。」

女中が、不斷の浴室は、男女兩方とも、晩方から、遠足の學生たち、四十人ばかりに貸切に成つて居る。平時に狹いのでお嫌ひだけれども、貸切の方へお召しを、と言つた。

「猿の湯だね。」

「へい。」

「何うして？」

「下階の突當りの、奥の一番隅。窓から赤い顏のものが覗くとさ。」

「可厭だ。……氣味の想い。」

「貴女嘘でございますよ。」

「でも、一人ぢや可厭、お兄さん、一所に行つて頂戴。」

紳士は爽に笑つた。

「其處を狙つて威したのさ。」

「何うせ、おのろけの維也納とやらの侯爵夫人のやうには參りませんよ。……珍らしくもない癖に。」

もう次の室の衣桁の前に、する〳〵と帶を解く、片端をお民の手に受けさせながら、

「秋山さん、御一所に入りませう。」

お民が三度吃驚した。

「飛でもない。」

「構ひませんよ。」とまた殿の心易さ。

「まだ、胸がどき〳〵します。雷も留みましたばかりの處、裸體で濕處ではないのですから。」
「餘程お嫌ね。」
「おやお心任せが可からう。」
で、誰も居なく成つた時、旅藝人―阿保陀羅經の秋山は、一人で、ぽかんとしたやうに起つて、
「はてな。」
獨言をつひ。次の室へ出ると、其の壁際と廊下の隅なる、鉢形の眞鍮の火鉢の前に、骨を拔いたらしく頽然と成つて、茶盆に半ば掛けた拭巾を捫らすと、吸子を取つたが一寸重い。
茶碗を仰向けて、打まける如く注いで、湯氣は白く、火は赤いのに、冷めたのを一呼吸に呻、と飲んだ。
吻と呼吸して、
「あゝ、助かつた。」
と目の覺めた體して、もの珍らしげに、澄透つた空の如き廣い座敷を眴した。衣桁に靡く月夜の虹。沈める黄金、浮出る紫。
「龍の如し。」
鋼と血の通つたらしい生氣着いた片頰に寂い微笑。懷中へ手を突込むと敷島の箱を出したが、殘つて四五本ある、一本拔いと、吸口の繼目が切れて、ぐんなり。次のも、次のも、折れて居たり、破れたり、暴雨に夢中だつた、しとりが透つて、ものゝ用には立つべくもなかりけり。

「ちよッ此方は蚯蚓だ。」

一摑みにして灰へ投げたが、掌を火に拂いた。

「召上りましな。」

お民が引返して入つて來ると、其處へ盆に、五個ばかり卷莨を積んだのを、卜片膝立てゝ熟と視て、

「姉さん、一體、誰方なんだい。」

お民は薄目で一寸見て、

「廣澤様、御華族樣。」

「然うか、貴族院の。伯爵廣澤賴基さん。」

「御存じでしやう。」

「名は知つてる。……御婦人は?」

「直接にお聞きなさいまし、おほゝゝ……貴方、御酒は召あがりますでしやうね。」

「飮んでも可いか知らん。」

「えゝ、ちやんと、然う御申着けに成りましたよ……」

第六

「これはお樂み最中。」

前後して湯殿から續いて歸る、伯と婦人に入交はつて、遁ぐるが如く入浴に出掛けた、自稱旅藝人の錦介が、頃刻にして濡手拭を提げて戻つて、大分落着いたらしく、其の手拭を硝子戶越の雲かと思ふ、

黒い明星ヶ嶽の頂に、青く星が見えるやうに成つたから、……怪しい龍は姿を消した、帶はもう其處には無い……衣桁の片端に掛けて、座敷へ入ると、前刻の榮花物語で、磨いた卓子の三分の一を仕切つて、對向ひで、小さなトランプを弄んで居た。

「食事を御一所にと思つてお待ちをする間に――」

然う云つて伯が、さら／＼と雪を散らすが如く骨牌を捌くのが、音のない、聲のない、歌のない、一種虞美人草の譜を手尖で巧に奏づるかと見える。記號の黒いのは、ちら／＼と、それは蕋である。紅なはる其の瓣である。○蕾である。そして、扱ふのが、撰るのでない、摘むのである。摘んで散らすのでない、解くのである、否、解くのでない、綴るのである。

唯、あの、二重に合はす吉野紙、湯上りの霞を籠めた兩の手に、ほんのりとした顔を載せて、若い婦人は熟と視ながら、フト忘れたやうにトランプの彼方此方に指さしをするのが、齊しく溫泉に霑つた唇の色が手に染んで、骨牌の記號の紅にこぼれて、囁いて搖れて、もの言ふやう。すると、黒い艶やかな點々は伯の清らかな瞳が、無言の聲に答へて動くやうであつた。

其の唇と瞳が、頸くらして見て取られて、骨牌の模樣は一絡めに重ると齊しく、婦人の伏せた掌の中へ隠れて、すぐに洋裝した榮花語物の中へ辷る。

「食事をはじめませう。」

伯は投げるやうに書棚へ納め、錦介に振返つて、

「さあ、此方へ。」

と輕く言つた。

「此處で結構です。」

と錦介は舊の座を、尙ほ一膝引たが、トランプの後を覗くやうにして、

「まるで素人には分りません。孰方がお勝ちです。」

伯は無邪氣な微笑で、

「戰と見えましたか。何、勝負ではありません。二人で話をして居たのです。」

「お話？」

「え丶、貴方のお噂を。」と莞爾する、婦人の唇はハートに似る。

「私の噂を。」

と、錦介が睜つた瞳は、疑に稜つて、可笑なクラブの形である。

「口で饒舌つて、湯へ入つて居らつしやるのに、噂をなすつて、風邪をめすと不可いと思ひましたから。」

「溫室の花の夢に、蝶がものを云ふのを聞いて居ますやうな心持です。トランプの記號でお話が出來るんですか。」

「あの、維也納とかで、侯爵夫人のお仕込みですとさ。私のは、ほんの、スペイトとハートの平假名、ダイヤとクラブの片假名まじりで、どれも、僅少のいろはなの……お兄さんの方は、此でどんな秘密な込入つた事でも、主人の居る前で、其の奥さんと、忍び場所の約束でも。國の事でも、お政事ごとでも。」

「お默り！……酒は何うしたい。」

「一寸お燗を直させました。」

其處へ、お民が、廊下は長いのに、悠緩と。

第七

「御辭退しないで推參します。」

錦介は赫と、ものゝ興奮した氣色で、づか〳〵と正面に直つて、まだ杯も手にしない、白面に色をのぼせて云つた。

「實は中學校の教師です。」

それは、いざ膳に着くやうに、伯と婦人に坐に請ぜられた時、錦介は敢て膝をも進めなかつた。……後である。……

「旅藝人の門附風情が御同席さへ。—此で、疊で結構です。」

「別にお座敷を言附けませうかね。」

錦介が頑として膝を疊に着けたのを視て、廣澤伯は婦人に言つた。

「然うね、慾かお構ひだてをして、お氣詰りだと不可ませんわ。」

伯が一寸向直つて、

「秋山さん——でしたね。」

「いや、石山でも、草山でも、兀山でも、そんな事は些とも構ひません。」

「お座敷を別に差上げませう。實は初めから其の方が御窮屈でなくつて可いかとも思つたのです、が、女がお伴ひ申したがけに、お隔てをするやうで厭ですから入込みに願ひました。――お民さん。しかしお近い處が可いね。」

「畏まりました。では、一寸お支度を。」と、錦介の傍に、つゐ居た女中は、膝を一つ摺らして起つ。

「相濟みません。」

錦介が會釋をする時、婦人が薄紅梅に、龍を雨の如く白で霞めた博多の達手巻で、すつと褄を深く素足で起つと、卓子の周圍をあの置棚へ。中の棚にあつた、蒔繪の硯箱に、用意がしてある紙包。蓋を裏返しにして、中に入れて、奇楠の薫、近々と伯の肩に引添ひながら、と膝を錦介に向けつゝ、斜めに胸を浮かすやうに、ついと出す。……中に据えた、其の包みに、此は伯の手で、(御酒。)としてあつたのである。

「ほんのお印までゞすよ。」

「實に輕少。」と伯が言ひたす。

錦介は目を瞬つた。

「失禮ですけれども、貴方、藝人衆でおいでなされば、お腹立ちもないでしやうと思つて……何うぞお納め下さいまし。あとで、阿保陀羅經を讀んで聞かして頂戴な。」と、笑が皓齒に細く透る。

「唯今、讀みます。後とは申さず……。」

實は旅藝人ではない、中學校の教師である、と則ち名告つた。――

で、當人は爾く興奮したらしい態度であつたが、伯と婦人は澄まして一寸頸き合つた。

「故とお褥を頂戴しませう。」

「勿論ですとも。」

「お序に、其方へ行つて下さいな。然うでないと、私がまた一廻りしなければ成りませんもの。……面倒ですから。」

早速に身近な蒲團へするりと。

「さあ、先生。前刻、貴方、自働車にめす時、一所に地獄へでもッておつしやたわね。」

「御免。」

撞ぐる腰に力を入れたが、膝は投げるやうに、へた〳〵と褥に着く、と床しくもある哉、奇楠の餘波が、絹より綿より柔い。錦介は宙に浮く、心を沈めるかに、確と額に手を當てつゝ、

「まだ夢を見て居るやうです。」

「今、お讀みなすつたのは、勸進帳と云ふ處で、大分苦しさうでしたな。」

「いや、實に阿保陀羅經です。が、決して、其の御包みは頂戴しません。其だけは、何うぞ、平に御容赦に預りたいんです。」

「でゝ、お兄いさんが折角……可ござんす、私が。」

と盃のを取る、蒔繪の萩の玉章を、忍ばす状に、襟の中へ。白紙の端は扨て逹手巻に媚めかしい。湯上りの髪は、早や何時か、櫛巻に解かれて居た。すなほに丈に餘るほど、散らすも、解くも、結ぶのも、綾ど

りの絲より早い、櫛の捌きが想はるゝ。

第八

杯は一順した。

廣澤伯は唯受けたばかりである。あひは二ッ三ッ婦人がする。酒を飲む男の猪口を手にしたのは、悄れた草の、甘く且つ芳しい露に蘇るが如きもので。分けて、溫泉を浴びて、意味ある美人に對したれば、月に向つて流るゝ光を、根に、莖に、颯と注がれたに異ならず、怪しく黑い花も咲きかねぬ。特に心細く膽の小さな男の、情の激した、病めるものゝ如き折の此の注射は、猶更である。錦介の態度は宛然此であつた。

「私なんぞは、事實此が旅藝人でありますよりか、尙ほ、さがつてるかも知れません？　敎師だつて……其がです。」

錦介は、追掛けの酌を、婦人のしなやかな手で受けて、

「……其の中學の學生に日の暮方の道を於へる、化けた案山子とも行かないので、實は圖書科のお庇、書の敎師なんてすよ。」

銚子を婦人が引寄せると一所に、伯の注意で、女中は席には置いてない。

「で、更まつて、申しますのも變ですし、恁うまで御迷惑を掛けますのに、まだ何か、貴方かたに、自分と云ふものを、此以上結びつけますやうで恐縮ですが、實は一度、以前に、お目に掛つた事があるやうに思はれます。今夜がはじめてとは思はれない氣がしますんですが。」

「二人ともにでしやう。」と伯は怪む色もなく、一寸箸を休めて笑つた。

婦人も此を待つたやうに、仇氣なく流眄して、

「先生、私が當てませうか。」

「えゝ。」

「近い事ね。向島の奥、白鬚の、もつと先。」

「何うして、貴方がた、」とやゝ狼狽へて、何方を見やうか迷つたらしい、左右の瞳を杯に注ぐ。ト恥ぢたる色して、

「失禮ながら、其の節顔は見られなかつたらうと思ひました。」

「お忍びで、先生、着流しで、頰被をなすつて、一寸意氣だつたわね、柄になく……。」

「馬鹿な。」

伯は故と調子高に、

「柄にないとは何だい。」

「だつて、繪を遊ばすんだつて、學校の先生だとおつしやるんぢやないの。」

錦介は又逆氣たらしく、肩を聳かした手を、膝に落したと思ふと、懐を狭く身を占めて、ぐたりとして首低れた。

「一言もありません。其の了見なればこそ、自分で門附だと言はなければ成らないやうな跌に立到りました次第なんです。(千三百石から馬追。)と言ひますが、こんな畫工から旅藝人ぢや、雀が箱根山で蛤で

す。孰方が下落だか分りません。鰻に成らない山の芋です。はじめから、目鼻の分らないやうな野郎を、しかし何うしてお見覺えがありました。」

伯は卓子の端を横手に仕切つて、輕く打つて、

「此女はね、目が凄い。露西亞あたりだと、貴族間の國事探偵でもしさうなんです。」

「酷い事、お兄さん。」

「其のかはり秘密はよく守る質です。……お見受けするのに、御樣子に何か隱れた仔細がおあんなさりさうです。……秘密は守ります。事情をお話しなさいませんか。……

私は些とも知りません、覺えても居なかつたんですが、此女はね、前刻、山の半腹で、電光でお顏を見る時から、多分向島の其の方だらうと思つたと言ひます。そして、トランプで話合つたのも、貴方のお身の上に就いて、其等の種々の事でしたよ。」

呀、知らず、星も、花も、目のあたり我を囁く。……風も、山も。……折から谷川の音が響いて、錦介は悚然とした。

「お惚氣なさいな、聞きたいわ。髯がないで。」

衝と銚子を向けた婦人の手も、月が送つた雁の雪の頭に似て、聲も朗かに鳥が物言ふ。

第九

「忘れもしません。あの晩は十五夜でした。が、當人血眼の大童と云ふので、自家廣告のペンキ塗、此に電燈を通はせて、上野の空へ、仁丹ぐらゐに顯はさうと、其の展覽會の額を、青やら赤やら七面鳥で

塗つてます最中。

隅田堤へ月見なぞと、そんな餘裕のあるのぢやありません。此の體裁で、それだけは憚りますから、名は申しませんが、故人に成りまし師匠の墓が、木母寺の傍にあるんです。道は遠し、所帶かまけで、御不沙汰勝の處を、苦しい時の神だのみで、其處へ墓參をしました歸途だつたんです。ですから、紋着の羽織を、勿論怪しげな。でも、倒子が五つで、月夜には目に立ちますから、貴方がたが月見をなすつた、あの紅夢園の萩の中へ忍ぶ……と粋です、潜込みました時は、引丸げて、帽子と一所に懐中へ捻込んで、頬被をしました、此が不心得だつたんです。惡く下町の人氣のよくない處で育つたもんですから、小雨の夜なぞ錢湯へ行くのに遣りつけて居ますので、一廉顔も隱したつもり。そして、あの時のは手拭ぢやありません、半巾でしたよ。

「いゝ月でしたな。」

錦介は背見らるゝ狀して廊下を覗いた。

「それ、そんなに星が出ました。―安心してお話し下さい。」

と伯が云つた。總硝子の連る戸は、星影に山を透かして、霧の幕が座敷を包む。遙かに湯殿に人聲の響くのが、大池に鷭の啼く氣勢。行く秋の夜が身に沁みる。

婦人も美しく猪口を含むだ。

「ぶら〱土手を行くと、道が橋か、橋が道かと云ふ、薄靄のかゝつた夕月。あの、白鬚橋を渡つて見やう。丁ど雨上りの水が眞白で、潮がたつ〱と滿ちて來る、それさへ明月を迎うるための流るゝ街道、橋

に乘つたら船のやうで、嘸ぞ……佳い景色だらうと思ひましたが、最う渡る、と橋場は町です。歸るに惜い。

で、土手には薄、田には蘆で明い欄干を着けた、月夜の橋かと思ふ畝道らしいのを歩行いて居ますと、ふと、足許の草の上へ、ひら〳〵と映る……映つた、と思ふと、薄へかゝつて、穗摺れに颯と薄墨を散らして、そして空へ消えて行く。五つ七つ、斜に連つた影があります。あゝ、雁が渡ると思つたんです。が、空を仰ぐと、高い樹も、遠くの森も何にもない。……其の啼く聲も聞えないで、却つて、鐘ヶ淵あたりのボーと云ふ滊笛の音が、苅田の水の響くんです。荻も蘆も、さら〳〵と戰いで、心細いつたらないんです。

ト又はらりと映りました。矢張り草に散つて、薄に亂れて、すつと消えます。其の影を辿つて、空を見れば月ばかり。ひら〳〵と直ぐ影が映します。つひ〳〵誘はれ誘はれて、紅夢園の門川まで行つて、あの、薄白い船の底を渡したやうな橋の上へ、其の影が、又はら〳〵と映つた時は、女の袖が六つ七つ月に描かれた風情でした。

最も、其處を紅夢園、とも貸席とも、お茶屋とも、別莊とも、大な植木屋の庭とも知らないんです。私は、はじめのやうに誘はれて、其の影の映りました小橋の中ほどへ……でも、戰々兢々、崖の鉤橋を踏んだ氣で立つたんです。

又映りました。今度は向ふの木戸の處。……袖が揃つて招くやうです。勿論、其の招くのは月でしやう。が、私は浮り渡りました。

一草が數へられます。三味線草も、犬蓼も、猫ぢやらしの穗も、裏へ銀を染めて、すつきりと露に伸ひて居ました。其の雜草の路が、やがて兩側の萩に代つて、其の花の中に門、葉がくれに扉がある。それが、開いて居たんです。

幽に木の葉、草の根を透かして、露に濡れた灯の影が遠くに見えると、萩の葉を渡つて、優しい鳥の歌ふと思ふ、若い女の聲がする。遙に、谺するやうに。

それが、唯、聞えるのに調子があつて、四五人で調子を取つて、唄を唄つてるらしい。と思ふと、輕く砧を打合はす足拍子が、近く白玉の露を轉ばす。

見たくつて成りません。素面です。怪しい支度です。右の面目もない半巾のすつとこ被。……自分申譯をすれば魔に魅されたものかも知れません。雁の影、袖の影は、もう其切。目に遮らなく成りました。が、當人は潛込んだ。樹よりも高い萩がある。時々、はつと顏に蓋して、驚かすのは大輪の芙蓉の花で、關守は皆優しい。大木の松が一株、月の築山の峠を越すと、蘆を透して池が見えて、蕭ひて居ました、碌青色の萍へ、鮒か水馬か、白い水足を引くたびに、月影が、處々眞青に結ばれるんです。眇と廣い。其の水の向ふに、霧を研澄したと云ふ燈の障子が長く、咲亂れた秋草を浮模樣に仄に裏透く。中を離れて、藤棚がありました。葉は落ちたが竹が明い。其の間を、汀へ掛けて、月を前にし、背後にし、影を透し、光を浴びて、同じくらゐな背格合、腰の細いのが、髮を黑く、爪尖を眞白に、庭下駄のなりで、すらりと七人、ものは知りませんが、袂を揃へて踊つて居ます。

此だ、此の影が、流るゝ白銀の糸のやうな月の光に誘はれて、雁かねの姿に、草に宿つて、荻、薄蘆

を渡つて靡いたのだらう。

私は見惚れながら、人の居ない、灯もない、一棟離坐敷の、開いたまゝの疉椽へ、腰を掛けて茫乎して視めて居たんです。

目の前に梅の樹があつて、仙人が杖を投げたやうな其の差出の枝に、武藏野を出づる明月は、掲々に、其處へ來て彳む。……蕚に成つた金色の薄雲は、枝に服紗を掛けて居る、ト向ふに踊る女たちは、袖の運びの一人々々、順に胸へ、影秘む乳へ、其月を抱くんです。縋るんです。招くんです。……あゝ、何の唄の戀であらう。恁うした時は遣瀬がなからう。春の花に結んだ心は、秋の月に解けて、白銀の光に流れて、膚も消えて、大空に魂ばかりあこがるゝ、其の魂が雁の影を遠くへ映して、あれ、あれ、萩よりも柔に、薄よりも細く靡く、帶ばかり、袖ばかり、衣服ばかりが踊ると見えるぞ。

風が吹いて、ふッと消えはしないだらうか。いや、然う云へば自分は何うした、夢を見ては居ないかと心着く。と枯枝の中に落葉を掛けた四阿が、草深い中に見えて、其處を池なりに廻つて、あの藤棚へ續くらしい、其の四阿の中にです。ふつと立つて、大き兎の影が見えたんです。

……私は吃驚したんです。」

「兎の影を……待つて頂戴。」

婦人は一寸言を入れつゝ、錦介に抔を。

第十

「あゝ、貴方。」

と向きかへて一膝寄つて、

「それは、四阿に洒落に置いてある、張子の大な招猫なんですわ。ねえ、お兄さん。」

「しかし、お話の様子だと、其が兎で、池の波を渡つても差支えないのです。——當夜の主人で、現に、其の藤棚の中に、一人で立つて視めて居た私ですが、今伺うと、何うか、其の時、月の中にでも入つて居たやうです。お庇で、おもしろい月見をさして頂く、貴方お杯を。」

「まるで召あからないやうですが。」

「少しも飲けません。が、杯を持つべき處です。きぬちやん酌をすべき處だらう。」

「はい、はい。……先生、それから。」

「いや、後は貴方がたで御存じの通りです。

突然、わつと云つて絶叫したものがある。私も驚いたが、先方は其處へ尻持をついた。慌てゝ遁げやうとすると、厥然立つて、や、此の泥棒—で獅噛着く。瘦せては居るが、逞い、背の高い爺樣で。」

「紅夢園の風呂番の嘉一爺や、夜巡りをした處、ほゝゝ。」と笑ふ。

「親爺は幽靈だと思つたさうですよ。」

「幽靈？……」と錦介は興覺めた顔をする。

言ひ掛けて伯は微笑んで、

「それはね、紅夢園がまだ現在の女主人の手に入らなかつた以前、ある人の別莊だつた頃。月のいゝ眺、秋草の中を二人で忍込んで、然も、あの亭の疊を裏返して、其處で情死をしたのがあります。爾時、—

お座敷を拝借する、相濟まない次第ながら、お庇で、いゝ心持に死ねます、舞臺の氣がする。蟲の聲は清元の出語りだ——つて意味の遺書を殘しましてね。情死は眞個にし了つたんです。

其ハ遺書が傳はつて居ますのを、今の女主人が悟つてるから、額にして、お亭に掛けて置きます。しかし女どもは薄氣味を惡がりますよ。

其處の椽に、貴方が月あかりで薄りと描いた袷のやうに‥などつて素人の癖に‥ですが、まあ袷のやうにです。蒼白く、そして薄黄色な寂しい輪廓で、胸を暗く腰を掛けておいでだつたさうで、的切、幽靈。」

「ぢや、立直つて組着いた時は狸だと見分けが着いた‥‥」

と錦介も苦笑して、

「二つ三つ揉む間もなく、頸首を壓へられて、椽の根へ膝を支いた時、いまの、あの兎の幻に、翻然と飜る女の姿。袖が、薄へ、雁の影。池を廻つて、驅出して來なすつた。其の時ちらりと見た顔は‥‥此方は、すぐに俯向いて了ひましたが、忘れはしません、此處においでの‥‥なんですよ。」

婦人の瞳は艶やかに輝いて、ふと伏目に成る錦介を見た。

「續いて—危いよ—危いよ—顫いた聲は、淸い、男の‥‥それは伯爵、貴方だつたと今思ふんです。心氣惑亂。‥‥ト腸に月の雫のしむやうな、爽に、うるほひある、優い言葉が、かゝつて、冷いが、輕く、もろい、霧の袂が、此の肩に。」と身をしめて、錦介はやり違ひに、しつかりと肩を厭へて上げた、坐つた丈も高く見えて、

「其の人の手に、ほんのりと籠の雪洞があるので、頰被の上へ、袖を被つて竦みました時——‥‥草の花

は咲きましても、月に枯野の一軒家、柴戸も結びませんから、道にお迷ひなすつたのです。出口をお知らせ申しませう。女郎花、苅萱も折添へて持ちません、風情のない、草苅女が、山路の御案内、さあ、おいでなさいまし。――

で、ひよろ〳〵と成る奴に、茂つた萩と、對丈の肩を貸して、支えるやうに引添つて、籠雪燈を褄搦れで、美しく露を別きながら、蜘蛛手の池の落口を月影に渡つて辿ると、入つた時より近路で、

――お靜に――

此方は、とぼ〳〵としながら、空の月より、蘆葉かくれの、雪燈を、拔出した自分の魂かと思ふ、振返り〳〵、……やがて一散に驅出して、白鬚橋の欄干に、どうと成ると大息を吐いたんです。

「否。」と細く煙管を膝へ、

矢張り、助けて下すつたのは貴方でせう。」

「口惜いけれども、其の立女形は私ぢやないの。……私の姉さん……。」

「紅夢園の女主人でしたつけ。」

「即ち……でせう。お兄さんのお氣に入り……。」

「きぬちやん、お默んなさい。あはてもの〳〵、お先ばしりて困ります。ですから、一はながけに亭へ驅出したのは此女でしたよ。」

「仕出しだわね、……最も、お月様に浮かれ出して、出たらめ踊の音頭取は私だつたの、なほ惡いのね。」と仇氣ない。

第十一

「一晩、死んだものゝやうに成つて寢ると、さあ、目が覺める。朝日と一所に、昨夜の雁が金色の翼を擴げて、引窓から飛込むばかり。

感興神來と云ふ勢です。……其の癖、商賣往來で、筋骨を刻込んで、序に女房の衣類を殺して、半年ばかりかゝつて居ました。もう出來上らうと云ふ、其の展覽會の畫が、忽に可厭に成つて、打棄つて、あの雁の影に誘はれて、女の魂が月に流れて、姿が冷かやな光に溶けて、氷蠶の錦、袖六尺。五つの木の薫を散らして、空蟬の衣ばかり、七ふり揃つて、花野の中に舞ふ處。天の意をうけたと思ふ、其が描きたくつて成りません。……

氣が違つたと、人には笑はれ、魔が魅した、と女房には泣かれながら、目を瞑つて遣直しの仕事にかゝつて、其のかはり、寢食も忘れました。お恥しいが、此は事實です。」

と冷く成つた猪口を嚙んで、撫然として、

「身も魂も、紫に赤く、血を白く青く注込で、前の試みは半年澁り滯つたのを、これはたゞ十日ぐらゐ。其處で描上げたんです。――今更其の畫も詰りませんが、口で言ふと尙ほ馬鹿々々しい。――手も足もない。衣類ばかりで七つ舞ふ。これを墨で淡く、月夜にひら〳〵と映る雁の羽が、舞踊る衣類の影に成る。此の影の方を、極彩色で、首は雪よりも白く、翼は虹よりも濃いのです。蒼空の月は、舞ふ女の戀です、愛です、憬憧です。薄雪の曖靆く、それら一つ一つ、女の七つの魂でした。……

空腹に杖を支いて、車のあとに引摺られて、ポンチですな、締切の日に持込む途中、雨に逢つたのが、暴

風雨のはじまり。いや、素晴しく落第です。

打棄つてくれるのが情だけれども、落第した絹地は會場の芥埃で、掃除をする小使が迷惑します。仕方なしに骨を拾つて、塔婆握りに上野の山から摑んで歸ると、女房は里へ逃げました。媒妁人と云ふ橋があれば、簞笥を提げても渡られます。仔細はない。最も、よく、それまで辛抱したと思ふくらゐ。」

「お小兒のは。」婦人が急に聞いた。

「僥倖にないのです。但し子がないからつて、別にお腹のたしには成らない。溫飩ばかりぢや凌げませんし、第一世間に面目なし、丁ど世話をするものがありましたから、其處で地方へ驅落です。敎師にお雇を被りましたのは、千葉縣の或中學校です。

――雁先生が粟を喰ひにござつた――

生徒が黑板に白墨で、れい〳〵と書いたもんです。

餘り馬鹿げた書だつたので、何か新聞でも、冷評したんでせう。風說はもう知れて居ました。……寧ろ名譽です！」

はツと呼吸をして、魂が拔けたらしく、落膽卓子に胸を折る。

「噫、口惜かつたでせうね。」

思ひきや！　銜と薄紅梅の、袖口が目を蔽ふて、雪なす頰が、半襟の藤に差俯向く。

思はず此方も、誘はれて、はら〳〵と落淚したが、やがて、膳を銜と除けて、

「何うなすつた！　何う？」

錦介は、自分では歸人の瞳を晴させ得ないで、顧みて伯に迫つた。

伯はそれでも微笑みながら、

「いや、お察し申します。それと一所にしては失禮かも知れませんが、此女もね。矢張、藝の事で舌を嚙切りたいくらゐ口惜い事があつたと云つて、それがために自棄半分に、此處へ飛出して來たんださうです。前刻トランプの前に、一寸愁歎場がありましたよ。……否、まあ、其は後で……

貴方は、で何うなすつたのです、廣袖の形で、箱根の夜道をなすつたと云ふのは？……」

第十二

實際彼は性の知れない、廣袖に三尺で居たのである。

「此は上强羅の丘の家……昔の建場と云つた宿で、借着をしたのを着遁をしました。勿論、洋服を着換へたのです。小田原へ出たら、古着の袷でも買込んで、そして、送返さうと思ひました。」錦介は然う言つた。

「實は學校の上級生が、此の箱根へ秋季の遠足、武裝して行軍と云ふに附いて參つたのです。今朝塔の澤を出發して、舊道を、づゝと……蘆の湖から、權現の御宮を廻つて、大涌谷を越えたのは午後二時頃でした。猛者も健兒も英雄も多い中に、私なんざ衞生隊です。左の腕へ靑い切を卷いて白十字をつけたんでしてね、同僚の會計が一人、學生の中から一人、と都合三人。大涌谷から先發して、晩の舍營を準備のために、すた〳〵岨路を故道づたひに、此の宮の下をさして下つて來ました。

山家二三軒、柿の色づいたのが霧の中に遠く山の端に見える、一箇所、路傍に古池を取卷いて、などへ

に滑こい柔かな窪地があります。いや、實に……其處の薄ほど美しいのを見た事はありません。白い膚が光ります。月の宮の藍の絹を、銀の梭で雪に織つた羅で。二本揃つたのがあります、一本分れたのがあり、三穂揩合つたのがあり、すら／＼と手許に靡く、ちら／＼と向ふに揺れる、揺れるのが、ものを言ふ、靡くのが歩行くらしい。……で、一つづゝ、活きて、呼吸して、豊艶したのが乳かと思へば、滑らかのが胸かと思へば、細りしたのは、咽喉です、頸です。長みを持つた圓い肩です。そして殘らず、顔です。皆裸體です。

中には白粉刷毛を持つたのがある、紫の花を翳したのがある、眞紅の玉を飾つたのがある。……いや、或は、手を組み、背を合はせ、抱合ふ、縋る、縺合ふ、離れて下草の石に伏して寢たのがある。追つかけるのがある。遁げるのがある。腰をついて蒼空の雲を見るのがある。瑠璃色の天に、折から薄曇つた白い一圑の雲は、此の女だちの影が倒に大きく空へ映つたやうです。

池の水を浴びるのでしやう。それへも、ちら／＼と姿が映つて、それは膚か、湯の煙か、冷い、薄い、霧が髣髴いて見えました。が、どの姿も濡れたとは見えず、涼い山氣と、透通つた空氣の中に、唯艶々としたものだつたのです。

―やあ、彼處に綺麗なものがある―私は思はず聲を出した。

會計と學生が引返しました。

其の池の縁に、薄の根に、いましがた何の胸を辷つたらうと思ふ、扱帶が一條。燃ゆる錦眞紅な蔓、池の影も紅を解く。

――やれ‥‥それを取つては成りましねえぞ――

谺かと思ふ大聲に呼掛けて、上の岨に肩を見せたが、背負階子の薪の山。

で、觀音經を手に讀みながら山男が顯はれたんです。

息杖をかつて、えんや、と仰向けに腰を伸すと、赤ら顏の口を開いて、‥‥。」

伯と婦人は言合せたやうに、目を注いで見た。錦介はやゝ醉つたらしい。

「其處で話した所說があります。其の親仁が、現に見て知つてるつて言ふのですよ――。」

第十三

「三年前の秋の末だと言ひます。同じ此の間道を、大涌谷の方へ、此は宮の下から駕籠で上る、五人連があつたさうです。‥‥

　其の三つめの、眞中の駕籠に、美い娘が乘つたが、石ころ路を仰向けに、眞俯けに、急な上り下りで駕籠が搖れるのに着崩れがしたか、斜違に雁に行く乘物を落ちて、緋縮緬に、白菊の縫模樣、長襦袢の片袖が、まるで、八つ口から辷つて、しつとりと、地摺れに薄を行き、木の葉を通ふ。

　人數は、しかし、汚い駕籠舁の揃へた十本の息杖は、たゞ一つ其片袖を漕いで、大空に行く櫂のやうで。親仁は、ともすれば、駕籠舁どもの肩に隱れ、毛脛に紛れる、其の美しい片翼に、頤で梶を取つて舁の下を伸ばして見ながら、ちやうど空身だつた足を爪立てゝ、うか／＼とついて行く。

と額へ打附りさうに、後の駕籠がストンと留る。前のも、其の前のも、順に留つたのださうなんです。

唯、少時すると、ひやつ！　わつ！　と云ふ、人聲。どや／＼と寄る人、立つ人、覗く人、緋の袖を包

むで重合つた。が、其の娘に別條があつたのぢやない。駕籠舁が一人千仭の斷崖へ落ちたのですつて。」

「え〻。」

「成程。」

「何と、それが、底も知れない、巖石磊々とした谷を、黑雲の空逆に、草鞋の裏で宙に浮いて、下へも落ちず、足場もなしに、切立の崖へ、横生へに成つた樫の樹の枝を掴んで、ぶらりと釣瓶で架つて居る。

娘を舁いて居た先棒で、元氣究强な若い者だつたさうです。

其の樫の樹に、細い蔦が、可愛く色を染めて、それは美しく搦んで居た。娘が、それを根ごと欲い、と云つたので、……おつとまかせ御意とあれば、で、右の先棒が、樹を抱いて、谷へ乘出して、枝に搦んだ梢を解ぐして、密と手繰り寄せた、までは可かつたのです。……無理に引張る、と根が切れさうな處から、樹の根を柱に、撞木乘で、草鞋をづい〳〵と踏んで、崖の縁から身體を離して、洞搜りに眞俯向けに根を掴んだ。やあ、危い、危い。……よして頂戴……と其の娘も云つたのに、こ〻を前途と矢表に立つた意氣組。まつたく――(生命を斷つ斧。)――でせうな。美しさに目が眩んで、もう一息と引く拍子に足が辷ると其の始末。然も幹を離れた枝に縋つてぶら下つて居るのですから、足は伸しても崖に屆かず、手は揺上げても本木は抱けない。……客は驚く、棒組は呆果てる。

助けてくれ、身體の重量で、腕が切れる、と喚くんでせう。……其の親仁も、出來ない相談に預つた、と言ひますか、如何とも手の施しやうが無かつたさうです。……

よく、其の瞬く間にも、白髮に成つて了はなかつたと思ふ。……蒼く成つた顏を颯と眞赤にすると、

先棒が、臨終の願望だ、何うか、お嬢さんの紐を解いて頂いて、その端を樹に結んで投げてくれ。……それに縋る、最も切れやう、助るまい。が、決して思ひ置く事はない。何うせ、ひと呼吸の間も堪らない腕が抜けて落ちる——と言ふ。

娘は帯を解いたんです。肩を辷つた緋縮緬に、其の白菊は、乳にも、腰にも。……棒組が、震へながら樹の幹へ、扱帯の端を結着けるのを、凝と視て、小塚山、金時、足柄を前に、神の山、大ヶ嶽を背後に、上强羅の崖に立ちましたつけ。娘は目に一杯涙をためて、

——切れて落ちたら、私も飛んで死んで上げます、駕籠屋さん、確乎おし——

風は燃ゆるやうな木の葉を揺つた。

駕籠舁は、無事に裟婆の端へ吸着いたんです。

驚くぢやありませんか。と肩を入れると、息杖を丁で、すた〳〵駕籠を舁き始めたつて言ふのですがね。

娘は、わがねて、白い両手に、血のやうに頂いて、あとの其の扱帯を同じ谷へ、風にまかせて投げたんですつて——」

第十四

「さあ、其の時は、赤い鳥が隠れるやうに、断崖の木の葉に消えたんださうですが、後で日を代へ、月を替へ、年を經、時を違へて、彼方、此方、處々、場所を定めず、其の下締を親仁も見掛ける。……

霞の中に山櫻の枝に掛る事もあり、紫の山藤と共に投垂るゝ折もあり、燃ゆる躑躅に色を焦せば、月の草清水に丈を冷す。解けて撫子と添伏せば、巖石の角に旭を結ぶ。山かつら、夕月夜。

風が乘せる時もあらう、水が誘ふ時もあらう、山鳥が尾に引いても行かう、兎が耳に掛けても飛ばう。一度なぞは、荷擔夫が二人連で通りかゝつて、つひ路傍の草に、同じ下締の落ちたのを見て、目の色を替へて拾ふと、小半町歩行いた時、ふと一人が聲を掛けて、有りさうにもない魂消た紐だ、怪しい禁厭であらうも知れぬぞ。其事……と吃驚して、手を拂いて、ふつと吹いて棄てゝ、あとをも見ないで過ぎたのを、樣子を知つた草苅の娘が見た、と言ひます。

一所に死なうと誓つた情で、其の美しい人が、義のために駕籠屋に棄てた、血です、眞紅の玉の緒です——。名所の魂です、山神の裝飾、女體の帶である。活きたる山の主である。

——むざと手を着けては成りましねえ——

此を……親仁が話しました。……

私は自分で、其の意味を其の時聞きながら思つたまゝに、いま受け繼いで申しますが、あの、背負階子で薪を背負つた、山袴の親仁が、もく／＼と日南で、其の絹糸の魂が女に代つて、ほろ／＼と白く、遊ぶ大勢の薄の前で、現に緋の紋の一條に向つて說いた時は、もつと強い、激しい感動を與へられたのです。ですもの、先鋒の一部隊、勝り拔いた健兒を、非職上りの陸軍中尉で、體育の教師の率ゐたのが、旋風の如く、黑く成つて、追着いて——何だ、何だ——

どや／＼と取卷いた時は、私は、眞直に突立つて、汗を流して、侵すべからず……遮つて留めました。親仁のには、あは、あは笑ひ、私のには、くす、くす笑つて聞いた。會計と、も一人の學生は、しかし何とも言はなかつたのですが。

―武士道のない國の話ぢや、俺が摑んで褌に締めたる！　小隊分捕れえ。――

五十ぐらゐで、まだ眞黒な髯が鼻の下に反返つて、針金のやうな白髮がバリ〳〵と交つた非職が喚くと、健兒が先を爭つて、靴を踏込んだものですから、私は仰向けに其の帶を背に敷いて踏反り返つた。

行軍ですから、皆、銃を持つて居ます、發火演習、裝藥がしてある。……此の一隊三十九人、將軍の命令で、伏擊に三十六挺、半圓を描いて、櫛の齒の如く銃口を揃へて私を狙つた。一齊射擊。

――擊ていー――

いや、（雁先生。）これには栗を喰ひましたよ。」

錦介は苦笑した。女中が膳を引いた。酒のみを彼に殘して。

第十五

「今しがた見て通つた、大地獄の煙の中に、わつと聲を揃へて笑つて、行進を續けて去つて了ふ。私は目を瞑いで居たんです……背に敷いた、帶と一所に、其の靑い池の水の底に落込むやうでした。

衍が留むだよりか寂莫する。はら〳〵と、絹が摺合ふ氣勢が其方此方。

――おほゝ。――

――擽ゆ――

少し離れた處で、しく〳〵と泣く聲がする。

――疼いかい、擦らうかい――

――誰かお逃げだよ――

白い背中が、すつと行く。

――まあ倒れてさ――

雪なす胸が、なよ〳〵と伏す。

――あゝ、煙かつた――

――お起きなさいな――

私は寒く成つて目を開けました。寢ながら見る、空の雲は、あの白いのが、大きく成つて、鷺の翼のやうに暗く覗く。

降つて來たやうに、ちら〳〵と穂が散ります。敷いてる帶が動くらしい……私は衝と立つて密と出ました。そして、一軒家の燈をちらりと見る心で其の赤い紐を一度見ながら、すた〳〵急いで。……急いで……と云つて、さて、行く處です。

私は、ふん反つた時、もう、其の、崖へ落ちて、奈落の中途にぶら下つた氣なんですから、駕籠屋のつもり。馬士、旅藝人、勝手次第だ、えゝ。

家はなし、しかも三男です。……何の彈る處もないが、學校の連中には顔を見られたくないのです。最う人間恁う成つちや極りが惡いも面目ないもありませんが、校紀振肅なんのッて、惡く捕虜にてもされて袋だゝきが可恐い。忍んで箱根を拔けやうとしましたんです。

が、(地獄へても。)と申しました。殺されるより怖い、いま時、雷が鳴らうとは思ひもかけず、元來、眞黑な山の頭が、青い火を噴くのに目が眩んで、三島へ越えて、すぐに東海道へ流れやうとする足許を

取違へて、塔の澤へ轉がりました次第なんです。

お庇で、空も晴れました。

一體、私が會計と今夜の旅宿を掛合ひに來た途中て、ぐれたんですから、學校の連中は、此の新屋か、底倉の蔦屋あたりか、まるで、其を知らないので、廊下も針の山でしたが、それも違つたのが分りました。大の字に一風呂浴びて、それから引下つて駕籠屋と寢ます。……御恩は忘れません。」

とハタと手を支いた、が、山氣冷かに肩寒く、廣袖の衣紋爽に、意氣頗る昂る。

婦人の眉は凜として、瞼が曇るかと瞳を濃く、且つ艶やかに彼を見た。

「此處の廊下に萩はないのよ。今夜は籠の雪洞でなんか送つて上げません。お約束の、私と地獄へ行く途中、あすは、其の薄原の扱帶を見せて下さいな。」

「願ひませうね。私も御一所だと可いが、實は、今日です。お話の道筋を一巡りして歸つたばかり。御覽なさい、澤山路草をしながら。」と云ふ。

床の花瓶に野菊、龍膽、此の貴公子の鳥兜、狩衣なるべし藤袴。

「駕籠舁と寢るなら私たちとねえ、きぬちやん。」

「串戯ではありません。……御厚意を刎返します力もないだけ、山巡りのお供と云つて、まだ駕籠は舁けません。あの、故道の石塊を、御婦人には歩行けますまい。」

「姉さん。」

婦人は笑ひながら、其處へ新しい煮花を運んだお民を呼んで、襟の、前刻の紙包みを解くと、

「これを細くして下さいな、銀貨。小さな金貨が交れば尚ほ結構よ。」

お民が妙な顔をした。大枚な紙幣てあつた。

「金米糖と薄荷をお茶うけに、寢るまで何かして遊びませうね。」

第十六

遊戯は古歌の六歌仙、六首かながき六角で、簪の耳ぐらゐ、象牙細工の小さな獨樂。

業平、小町、喜撰法師、其の六人を六つの札、おなじ象牙の彩色繪で、一組みに、女の中指を切つたほどな、白い小箱に紅枠で入つたのを、婦人は蝦夷錦の娘らしい紙入の中から出して、伯の枕頭に、一寸並べて、錦介と二人、それは褥で、晃々とした電燈の下。

それまでに三人が一度溫泉に沿した。伯は按摩を取つて、寢ながら對手に成ると云ふ。其の按摩が來て、搔卷越に、……成りたけ天井を睨み、專ら揉む。

婦人は最う寢着に着換へた……藍と茶の辨慶の縮緬浴衣を、透通る素肌に緩く、其の紅梅に朧の雨の逹手巻で、大島お召の羽織を掛けた。湯上りの色くつきりと、櫛巻の水際立つのが滴るばかり艶である。

其の膝へ、…いま獨樂を出す序に、紙入から、金米糖の小粒なのを十二三、ぱらりと置くと燦と輝く。…

「此の分は私のお菓子。」

伯は夜具の襟から腹這ひの顏を擡げて、「豪いな、きぬちやん。頂戴しやうか。」

「えゝ、成らば手柄に……だわ。ねえ、先生。」錦介は驚いて唯打傾く。

「泣くなよ。」

「何うせ、お兄さんに頂いたんだわ、いつか。……さあ、此も、……いま買つた金米糖と薄荷ですよ。等分に分けて――お兄さんのは、蒲團の上。」

「可。」

「貴方、疊に置くと汚れますから、此へ。」とて白紙を。

「廻りますよ……。」爪紅の尖は其の獨樂の核より華奢である。

「俺は坊主だ。」

錦介が、「小町でも可いでしやうか。」

「えゝ、御隨意。……私は業平……朝臣はいけない。大將、大將。」

夜は十二時を早ば過ぎた……獨樂は歌の班ある胡蝶の翼たゝくが如くに廻つて、はたと留まる。

「此は御馳走……」

「構うもんですか。」

「では私の分。」

「さあ、續いておいで。」

蝶の翼は、音もしないで、花片を吹動かす。

「按摩さん。」

婦人に唐突に呼ばれたので、「は。」と云つたが、密と覗込んだ顔を、著しく反方に向ける。

「按摩さん。」と見向きもしないで、獨樂を凝めながら、も一度呼ぶ。

「は、は。」膝を捻つて、突向けた顔が眞四角、への字なりの口の大い、目の圓い、垂眉毛ですへりとして、頭を角に苅つた奴ゞ。

「お前さん、見えるのね。」

「えゝ、僥倖と片目……へい……。」

「道理で、ぢろりと見た處が凄いわ。――あゝ今度は先生、坊さんだわね。」

「飛んでもない。へへへ。」と向ふ向きに背いて三ッ莞爾つて三つ頤を刻んで、三つ肩を搖つて、三つ膝頭を刻む。

「兄さん、私よ。金米糖。」

「差上げますよ。」

「按摩さん。」

「は。」

「名は？」

「あ？」と俯向いて聞返す。

「名は何て言ふのよ。」

「横淵元琢と云ふんでげして、へい。」

「立派ねへ。」

「えゝ、恐入ります。」

「さあ了つた。……これは弱つた。今度は大いよ。」
「運が向いて來ましたぜ、……御免。」と錦介は胡座に成る。
「油斷をしちや不可ませんよ。貴方は素人だから。……ですがね、按摩さんや、元琢さんは可いけれども、横淵は可厭ね、何だか岡引のやうだわ。」
「飛でもない、……御串戯、えへへ。」
「今度は。」
「小町よ。」
「さあ、持つておいでなさい。」
「矢張私が。」
「また、小町。」
「可。」
獨樂は飄々と唸を生じ、薄荷が金平糖を燦々と包むでは、さら〳〵と、卯の花に黄金の蕋の飜る如く、錦介の袖を包む。
「矢張、先生……勝。」
「可、みなに成つた。きぬちやん、私の紙入を。」
伯は獨樂を見ないのである。錦介には、迅くて獨樂が見えないのであつた。

第十七

「眞平御免を。」廊下づたひに、夜中、見廻りの弓張提灯、當旅館の番頭、及腰に座敷へ。

「唯今、御申着けでございました、二度目の其のお菓子でございます。‥‥帳場に用意のありましただけ、其の金米糖と薄荷をこれへ。」と金齒をちらり。

「さあ、御註文が來ましたよ。兄さん、兄さん、あら、お寢つちや不可い、兄さん。」

「代理を頼むよ。」

それも現で、伯は、もう、すや／＼と寢入つた。

「大分、おほぐれに成りましたで。」と言ひながら、元琢は、じろ／＼と錦介の膝を睨む。

番頭は首實驗の如く、提灯を眞正面に控へながら、

「御前は、今日は大分お草臥れ遊はしたらうでございます。」

「もう片附けませうよ。」

で、錦介が手で寄せると、さく／＼と音がする。其を聞くまいとか、元琢は獨で頻りに頭を掉つた。

「お待ちなさいな。起さなくつちや、お兄さん。」

横坐りの弱腰が伸びたと思ふと、逹手卷が颯と鳴るや、裳が揃ふと、飄然と宙へ浮くやうに見えて、棲は隱れた。媚めく肩が、白羽二重の搔卷の裏に辷つて、ト黑髮を上げた姿は、凄いまで美しい。

「兄さん。」

弟に添臥す如く、可懐げに、伯の優しい寢顏を覗いて、眉をすつきりと鼻筋の通る時、其のをくれ毛がはら／＼と成る。

（――あとで知れたが、仔細あつて、或座敷で伯の政敵の何某に、其の名取りの踊を、侮り嘲けられたゝめに、豫て姉への義理で、伯に我が思の叶はないのに、身をはかなんで居た折から、箱根へ死なうとして來たのであつた。――）

唯見ると臺の重いやうに、あのハート形の肱を白く、横顔を、やゝ蒼澄んで支へながら、がくりと、投げるやうに外した腕は、雪の如く錦介の前の獨樂に伸びた。

「さあ、確乎なさいよ、兄さんのかはりに取返す。」

「番頭さん、番頭さん。」

按摩が伸出して呼んだが、番頭は、前垂に行儀よく突膝の掌を組んだまゝ、大に拔衣紋で、額越に見惚れて居る。

「えゝ、番頭さん……」

「あ。」

「貴方も嫌ぢやがあせんな。……目の毒でげす。」

「いや、腹の毒です、冷えますからな。」と、たゞの夜番で寂しく出て行く。……

「あゝ。」

「やあ、何とも。」と元琢のひれ伏す途端に、婦人は衾の錦の森白羽二重の霞を拔けた。……次第に錦介の前に堆く成る菓子に惚けて、按摩の手が、伯を揉越して、柔かな肩に辷つたのであつた。

「御勘辨を願いますんで。えゝ、何とも早や……」

婦人は耳に掛ける様子もない。「まあ、口惜い、又……」

「來給へ、姉御。」

「姉御は酷いわ！」

時に療治を濟まして元琢は、三つぶる〳〵と手を握つて、居直つて、がつくりと成る。で、頰を横にして片目で見たが、凡そ堪らなく成つたらしい、じり〳〵と膝を寄せて、凝と撓めて獨樂を視た。

「まあ、貴方勝よ。」

「難有い。」

「こりや、無茶だ。こりや、無茶だ。……奥樣は、獨樂に構はず、たゞ此方の旦那に進げなさるんだね。」

錦介が、愕然として、夢のさめたやうに顔を上げた時、あらう事か、慌てゝ手の甲で遮る間もなく、金米糖と薄荷のために、木蓼の涎を垂々。

其が婦人の手に落ちた。

眞赤に成つて元琢が退いたあとで、婦人が艶麗に笑ひながら、

「もう一度湯に入りたい。……一所に來て頂戴、可恐いから。……否、金米糖は可いの、お兄さんと、トランプで相談濟みですわ。」

連立つて猿の湯へ。

第十八

廊下はづれに按摩が立つて、薄あかりに、顔ばかり、此方を振返つて變に笑つた、大な黒い唇を遠く、山の石段を傳ふやうに、間近な裏階子を下りる。……草履の爪尖は、月がさすかとちら〳〵と霜を散らして。

下口に、……來かゝつたお民が立つた。が、片除けつゝ待つて居た。

「姉さん、お銚子を……お香のもので可んです。」

「畏りました。」

浴室の道は遠くはないが、夜半の燈に、暗く且つ深かつた。……

婦人が一寸立停まる間、湯殿へは、一歩錦介が早かつた。

彼がさそくに廣袖を脱ぐ時。……提げた……褄に提げた手拭より、なよやかに入つて來たが、黒塗の衣桁の前。

横の壁に掛つた姿見を、ふと斜に視て、「色が黒いわね。……薄り寢白粉としませうかね。」

「赤い顔が見ゝすよ。」

「可厭！」

「あ、裸骸です。」

するッと肩を摺抜けて、うしろ向きに溫泉の中。颯と湯氣の靡く間があつて、

「先生。」

「お化け。」

「男だ。可恐いもんですか。」

「先生。」

「雷様でなくつちや――窓の外は月夜です。」

「否、薄のお化けに見えないこと？……」

はつと思ふと、白雪の皺を縢る紅調。一本薄にからる緋の葛。婦人は逵手巻の紅梅を、はらりと頸に掛け、腕に捲いて、片端を啣えて佇む。摸様の簾に、乳房が透る。

「私なのよ……駕籠屋に解いた下締は。」

玉は湯に溶けて滑らかに霞の脉に沁む……溢るゝ煙は婦人を誘うて、白い玉の緒の穂が揺れつゝ、流るゝ如く影を導く。

第十九

伯は、胸安らかに、すや〱と眠つて居る。夢は維也納の麗姫であらう。

「兄さん、唯今。」

婦人は跪いて、襟を叩いて、そして來た。……

別の座敷の、襖の隔てを左右に開いて、伯と枕合はせに、同じ衾が並んだのである。

二つばかり盃をやりとりして、更めて錦介が名を尋ねた時、婦人は被いだ掻巻を肩辷りに、片袖を取つて、ト横にした、小枕淺黄の盜面に、はらりと敷くと、右手に黄煙管の細いのを取つて、柔かに丁と上げた。氣は籠つて位を見せたが、葵の上の鐵杖に似て、あらず玉川の調布である。

嫣然として、

「砧。」

硝子戸越に、端山の雁がね。

婦人の名は砧であつた。

谿川の音もふと絶ゆると、七つの棟は皆眠つて、名が聞こゆる、名が聞こゆる、仙石の里の遠砧か、否。月は欠けつゝ、丑満時、宮ヶ嶽には神遊ぶ、谺を返す皷であらう。

「明日は彼處へ行きませうねえ。」

彼方の床なる烏兜を、藤袴を、其の龍膽を─其の狩衣や、紫に交る野菊の白さは、伯の寐顔を星に装ふ。

「何處へでも。」

「地獄へでも？……」

「お易い事。」

「崖の上へは？」

深い淵に臨むが如く、睡い下に酌を受けつゝ、

「勿論。」

「貴方、駕籠屋さんぢやなくつて？」

「せめて、旅藝人どころで、御容捨を……」

「まあ、私の云ふのは、其の時、崖へ落ちた駕籠屋の事なんですよ。」

「其の駕籠屋。」
「えゝ、現に此の新屋に居ますわ。前刻、貴方が驅込んでおいでなすつた、夕立に焚火をして居たつて、……門部屋の、あの彫間に居る筈よ。」
「や、其奴は。其奴は、それ以來、そして、平氣なんですか。」
「平氣處ですか、呑氣なものよ――最も、崖から上ると直ぐに、しやん〱と駕籠を昇いたくらゐですから然も其の日ぢやありませんか。大涌谷へかゝらうとする、巖の上で、銀の簪を拾つたの。其の先棒がですよ。然うすると後棒がね、

――媽々の若い奴は運が好いぜ。轉んでも唯は起きねえたア汝だ――

――難有え、其の通り。――

然うなんですもの。十八だつたわ、私、口惜かつたわ。私のために谷へ墜ちて――其の紐を解け、おもひ置く事はないッて――自分で言つては可笑いけれど。……何よ、もしか、それが切れて落ち了つたら、私、眞個に一所に飛込んで死んで遣るつもりだつたんですのに……ねえ……」

瞳の露は夢を見た、……あの、狩衣の俤を視た。

「女の心ッて徹らないものね。」
「眞個、死なうと思ひましたか。」
「えゝ、何時でも。」
「然う容易く?。」

「直ぐにでも。」

「其の時は……しかし。――不斷また何だつて、そんな突詰た氣に成ります。」

「何時か話しませう、明日は屹とよ？」

「何處へでも。」

「地獄へ――でも。」

「あら、其處の事よ。駕籠屋さんは口惜のッて云ふのは。成程、前刻はふッとした心の發奮で、女の心を、魂を、燃ゆる思を、緋の色を、身體で庇つて下すつたけれど、直きに、又忘れてお了ひなさるんでしやう。」

「砧さんのも發機と思ふ。」

「發機で死ぬのよ、色も發機だわ。でも忘れません。」

「私も忘れない。」

と、ふと目を外らすと、枕頭の二枚折、張交せに小野小町、芥川、淺妻船、名家の映寫の色紙に交つて短冊に（親和。）とある。

駒とめて袖打拂ふ陰もなし
佐野のわたりの雪の夕暮

錦介は思はず手酌して、杯の底に、谷を想ひ、山を想ひ、前途を想つた。

――完。）

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區尾張町	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	太華堂
仝　東區瓦町	東枝支店
京都市七條停車場前	三共社

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十五冊（本年度十六冊）分の割合なれば一ケ年分御註文の方は内國は金參圓七拾五錢（本年度金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度金五圓六十錢）拂込まるべし

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし

一郵便爲替　にて御送金の場合は本鄕西片町十番地中央公論社と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり

一郵券代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年十一月廿五日印刷納本
大正三年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話四下谷九一九九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

IADE IN JAPAN